福岡市早良区

三郎丸古墳群

福岡市埋蔵文化財調査報告書第495集

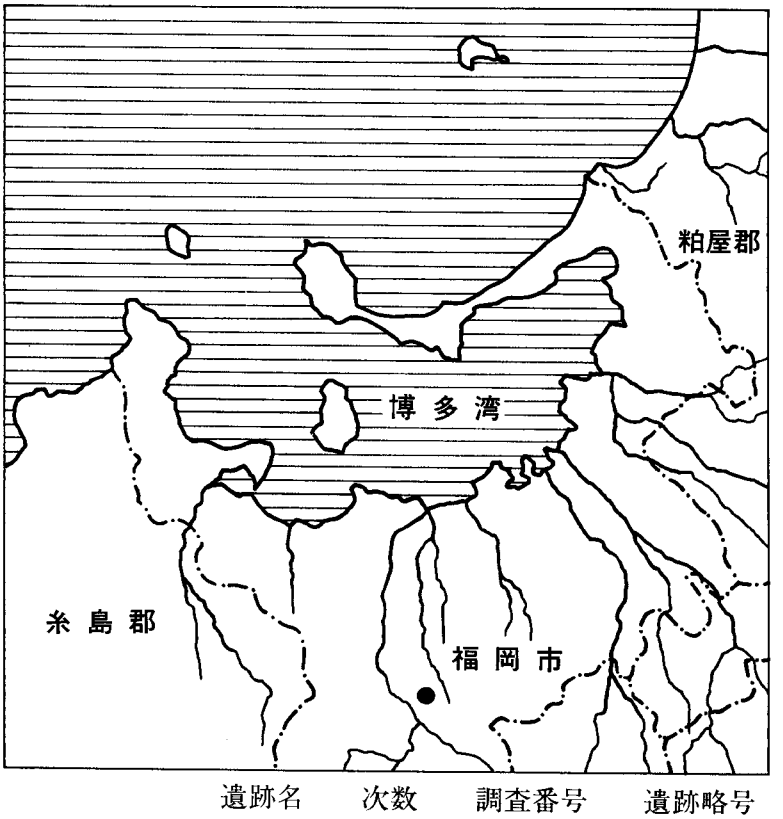
1996

福岡市教育委員会
三郎丸古墳群遺跡調査会

福岡市早良区

三郎丸古墳群

福岡市埋蔵文化財調査報告書第495集



遺跡名	次数	調査番号	遺跡略号
三郎丸古墳群1		8016	SRM—1

1996

福岡市教育委員会
三郎丸古墳群遺跡調査会

序

福岡市は、古代から文化・交易の拠点として栄えてきました。特に弥生時代から平安時代にかけて大陸との交易は非常に頻繁で、文物の交流が盛んに行われていました。

その結果、市域内には、数多くの歴史的遺産が残されています。これらを保存活用し後世へ伝えて行くことが、我々の責務であると考えます。

しかしながら都市化の進む福岡市域内では、開発によって失われる遺跡があります。福岡市教育委員会では、こうした遺跡について事前の調査を行い記録保存に努めています。

今回報告します遺跡は三郎丸古墳群遺跡調査会が、1980年に調査した福岡市早良区大字三郎丸に所在する15基から成る古墳時代後期古墳で、その内13基を調査した記録を報告するものです。

本書が埋蔵文化財への理解と認識を深める手助けとなり、また学術研究や学校、社会教育の分野において役立てていただければ幸いです。調査に際し、土地所有者の方、有益な御助言をいただいた先生方をはじめ参加御協力願った作業員のみなさまに、心より感謝申し上げる次第です。

平成８年12月26日

福岡市教育委員会

教育長　町　田　英　俊

例　　言

1．本書は西鉄不動産株式会社から委託を受け、早良区三郎丸地区における古墳時代後期の古墳群の調査を宅地造成等の開発事業に先行して行った発掘調査報告書である。

2．事業は三郎丸古墳群遺跡調査会が行った。発掘調査は柳沢一男・二宮忠司が担当し、九州大学の佐田茂氏の協力を得、また補助員として小林義彦・渡辺和子が加わった。資料整理・報告書は二宮と調査員の大庭友子が担当した。
遺構実測図は担当者が行い、遺物実測の内3号墳の一部と4号墳の遺物実測図は小林が担当した。他の遺物は大庭が行った。

3．遺構写真・遺物写真の焼き付けは石津満寿美・桑野正子・尾崎文枝・高橋知代子・牛尾美保子・海内美也子がおこなった。

4．本書の執筆のうち金属器は比佐陽一郎、他は二宮が1～9号墳まで、11～15号墳を大庭が行ない、遺物は大庭が行った。

5．挿図は大庭が担当した。遺構写真・遺物写真は二宮が行った。

6．本書の編集は二宮・大庭が行った。

7．発掘調査によって出土した遺物や図面・写真等の記録類は収蔵要項に基ずき整理し、埋蔵文化財センターに保管・管理する予定である。

8．挿図・図版内に記した番号は遺物登録番号を示す。又、写真図版内にある番号は遺物登録番号・挿図番号・写真番号である。古墳ごとに遺物登録番号（1号墳は01001から2号墳は02001）を付した。

9．使用した方位は磁北を用いており、真北は西偏6°21′である。

10．三郎丸古墳群にはA～D群があり、28基の円墳からなっている。今回調査したB群は、19基から成る群集墳で最も数の多い。代表的な意味もあって「三郎丸古墳群」とした。

都道府県番号	福岡市番号	分布地図番号	調査番号
40	02	0347	8016

本 文 目 次

第一章　はじめに …… 1

1．発掘調査に至る経過 …… 1

2．調査の組織と構成 …… 4

第二章　発掘調査の概要 …… 5

第三章　調査の記録 …… 7

第１号墳の調査 …… 7

第２号墳の調査 …… 13

第３号墳の調査 …… 20

第４号墳の調査 …… 30

第６号墳の調査 …… 36

第７号墳の調査 …… 44

第８号墳の調査 …… 50

第９号墳の調査 …… 57

第11号墳の調査 …… 62

第12号墳の調査 …… 67

第13号墳の調査 …… 73

第14号墳の調査 …… 80

第15号墳の調査 …… 86

第四章　三郎丸古墳群出土金属器 …… 92

第五章　調査のまとめ …… 94

挿　図　目　次

Fig. 1　三郎丸古墳群の位置図（縮尺1/50,000）……VI
Fig. 2　三郎丸古墳群位置図（縮尺1/4,000）……3
Fig. 3　三郎丸古墳群地形図（縮尺1/1,000）……6
Fig. 4　1号墳地形測量図（縮尺1/200）……8
Fig. 5　1号墳墳丘測量図（縮尺1/150）……9
Fig. 6　1号墳石室平面・断面図及び俯瞰図、土層断面図（縮尺1/60）……10
Fig. 7　1号墳出土遺物実測図（縮尺1/3）……11
Fig. 8　2・3・4号墳地形測量図（縮尺1/200）……14～15
Fig. 9　2号墳墳丘測量図、地山整形図（縮尺1/150）……16
Fig. 10　2号墳石室平面・断面図（縮尺1/40）……17
Fig. 11　2号墳土層断面図、土坑実測図（縮尺1/30，1/60）……19
Fig. 12　2号墳出土遺物実測図（縮尺1/3）……20
Fig. 13　3号墳墳丘測量図、地山整形図（縮尺1/150）……22
Fig. 14　3号墳石室平面・断面図（縮尺1/60）……23
Fig. 15　3号墳石室俯瞰図、閉塞施設実測図（縮尺1/60）……24
Fig. 16　3号墳土層断面図（縮尺1/80）……26
Fig. 17　3号墳出土遺物実測図－1（縮尺1/6）……27
Fig. 18　3号墳出土遺物実測図－2（縮尺1/3）……28
Fig. 19　4号墳墳丘測量図、地山整形図（縮尺1/150）……29
Fig. 20　4号墳石室平面・断面図、閉塞施設実測図（縮尺1/50）……31
Fig. 21　4号墳石室俯瞰図、土層断面図（縮尺1/60）……33
Fig. 22　4・6号墳出土遺物実測図（縮尺1/3）……34
Fig. 23　6・7号墳地形測量図（縮尺1/200）……35
Fig. 24　6号墳墳丘測量図、地山整形図（縮尺1/150）……37
Fig. 25　6号墳石室平面・断面図、閉塞施設実測図（縮尺1/50）……38
Fig. 26　6号墳石室俯瞰図、土層断面図（縮尺1/60）……39
Fig. 27　6号墳出土遺物実測図－1（縮尺1/3）……41
Fig. 28　6号墳出土遺物実測図－2（縮尺1/3，1/6）……43
Fig. 29　7号墳地山整形図、石室平面・断面図（縮尺1/50，1/150）……45
Fig. 30　7号墳石室俯瞰図、土層断面図、土坑実測図（縮尺1/40，1/60）……47
Fig. 31　7号墳出土遺物実測図（縮尺1/3）……48
Fig. 32　8・9号墳地形測量図（縮尺1/200）……49
Fig. 33　8号墳墳丘測量図、地山整形図（縮尺1/150）……51
Fig. 34　8号墳石室平面・断面図（縮尺1/80）……52
Fig. 35　8号墳石室・土層断面図、閉塞施設、土坑実測図（縮尺1/40，1/60）……54
Fig. 36　8号墳石室俯瞰図、石室平面図（縮尺1/20，1/60）……55
Fig. 37　8号墳出土遺物実測図（縮尺1/3）……56
Fig. 38　9号墳墳丘測量図、地山整形図（縮尺1/150）……58
Fig. 39　9号墳石室平面・断面図、閉塞施設実測図（縮尺1/50）……59
Fig. 40　9号墳石室俯瞰図、土層断面図（縮尺1/60）……60
Fig. 41　11・12号墳地形測量図（縮尺1/200）……63
Fig. 42　11号墳墳丘測量図、地山整形図（縮尺1/150）……64
Fig. 43　11号墳石室平面・断面図、閉塞施設実測図（縮尺1/50）……65
Fig. 44　11号墳石室俯瞰図、土層断面図（縮尺1/60）……66
Fig. 45　12号墳墳丘測量図、地山整形図（縮尺1/150）……69
Fig. 46　12号墳石室平面・断面図、閉塞施設実測図（縮尺1/50）……70

Fig. 47　12号墳石室俯瞰図、土層図、土坑実測図（縮尺1/40, 1/60）……71
Fig. 48　9・11～13号墳出土遺物実測図（縮尺1/3）……72
Fig. 49　13号墳地形測量図（縮尺1/200）……75
Fig. 50　13号墳墳丘測量図、地山整形図（縮尺1/150）……76
Fig. 51　13号墳石室平面・断面図、閉塞施設実測図（縮尺1/50）……77
Fig. 52　13号墳石室俯瞰図、土層断面図、土坑実測図（縮尺1/40, 1/60）……78
Fig. 53　14・15号墳地形測量図（縮尺1/200）……79
Fig. 54　14号墳墳丘測量図、地山整形図（縮尺1/150）……81
Fig. 55　14号墳石室平面・断面図、閉塞施設実測図（縮尺1/50）……82
Fig. 56　14号墳石室俯瞰図、土層断面図、土坑実測図（縮尺1/40, 1/60）……84
Fig. 57　15号墳墳丘測量図、地山整形図（縮尺1/150）……85
Fig. 58　15号墳石室平面・断面図、閉塞施設実測図（縮尺1/50）……87
Fig. 59　15号墳石室俯瞰図、土層断面図、土坑実測図（縮尺1/40, 1/60）……89
Fig. 60　14・15号墳出土遺物実測図（縮尺1/3）……90
Fig. 61　三郎丸古墳群出土金属器遺物実測図（縮尺1/2）……91
Fig. 62　三郎丸古墳群出土銅銭拓影図（縮尺1/1）……93

図版目次

PL. 1 ……1号墳の調査
PL. 2 ……2号墳の調査
PL. 3 ……2号墳の調査
PL. 4 ……3号墳の調査
PL. 5 ……3号墳の調査
PL. 6 ……4号墳の調査
PL. 7 ……6号墳の調査
PL. 8 ……6・7号墳の調査
PL. 9 ……8号墳の調査
PL. 10 ……8号墳の調査
PL. 11 ……9号墳の調査
PL. 12 ……9号墳の調査
PL. 13 ……11号墳の調査
PL. 14 ……12号墳の調査
PL. 15 ……13号墳の調査
PL. 16 ……14号墳の調査
PL. 17 ……15号墳の調査
PL. 18 ……出土遺物(土器)
PL. 19 ……出土遺物(土器)
PL. 20 ……出土遺物(土器)
PL. 21 ……出土遺物(金属器)

表目次

Tab. 1　三郎丸古墳群周辺古墳群一覧 ……1～2
Tab. 2　三郎丸古墳群出土金属器一覧 ……93
Tab. 3　三郎丸古墳群形態・法量等一覧 ……94

付図

付図－1　三郎丸古墳群墳丘位置図（縮尺1/2,000）

博多湾
今津湾
能古島
大浜
大波戸崎
白鳥崎
土手崎
城浦
浜崎
鵜来島
福
博
中央区
西区
東区
姪浜町
小浜町
西川原田
柳川原
南中
本津
大林
福重
小森
小町
橋本
有田
稲塚
梅林
東油山
西油山
羽根戸
吉武
建野
乙石
金武
西箇
三郎丸
中通
熊本
東
下水処理場
妙見岬
御膳立
元寇防塞
大濠公園
福岡大
福岡女大
九大教養
城西
今宿青木
生之松原
拾六町
広石
高石
建屋敷
大郎丸
西脇
土井
金山団地
美玉団地
昭和団地
福岡女大
福岡大
梅光園
別府
荒江
荒戸
大手門
唐人町
港
福浜
西公園
新
西南学院大
百道
元寇防塞
城西
相原
帝取
室見
室見橋
生之松原
今宿
城外園
久保
堤内
清地
橋本
見附
川原
本名
泉
飯盛
飯盛山
日向峠
西中
西久郎
中通
熊本
東
三郎丸
西油山
東油山
井手
浄水
大濠公園
護国神社
六本
鳥飼

第一章　は　じ　め　に

1．発掘調査に至る経過

昭和53年度に西鉄不動産株式会社より福岡市西区三郎丸地区にバスターミナル及び宅地造成計画の開発事前審査が提出された。申請地は国道265号線沿の重留と東入部の中間に位置し、国道沿をバスターミナル、東側に宅地造成を計画したもので、総面積20haである。

昭和54年に宅地造成地予定である山林部分の踏査を事前審査が行い古墳数基を確認したが、詳細には伐開した跡に再度踏査を行うこととし、古墳群があり、調査が必要であることを開発者に通達した。55年２月に伐開したとの知らせを受け、再度踏査を行い19基から成る古墳群を確認した。開発者に古墳の現状保存を要請したが、計画自体が進んでおり全体の保存は困難であるが公園敷地の変更及び緑地帯の変更によって一部保存する事が出来るとの回答を得た。バスターミナル部分については試掘調査を行なったが、遺跡は確認出来なかった。

調査は三郎丸古墳群遺跡調査会が昭和55年３月から開始し、同年12月の10カ月で終了した。

三郎丸古墳群Ｂ群の位置は国土地理院発行「福岡西南部」縮尺１/50,000の左上隅より下に32.5㎝、右に17.3㎝、座標では北緯30°30′10″～30°30′30″、東経130°20′40″～130°20′50″の間に位置している。

三郎丸古墳群Ｂ群は二基ないし三基単位からなり７群の19基で構成されていた。

この周辺には数多くの群集墳が確認されている。下記のTab.１はその一覧である。

Tab.１　三郎丸古墳群周辺古墳群一覧

通番号	分布地図番号	遺跡名	総数	依存状況 有	依存状況 消滅
1	0216	瀬戸口古墳群Ａ群	1	1	0
2	0260	干隈古墳群Ａ群	5	0	5
3	0261	干隈古墳群Ｂ群	4	2	2
4	0262	干隈古墳群Ｃ群	4	0	4
5	0263	干隈古墳群Ｄ群	1	1	0
6	0264	干隈古墳群Ｅ群	1	0	1
7	0265	干隈古墳群Ｆ群	1	0	1
8	0266	七隈古墳群Ａ群	8	0	8
9	0267	早苗田古墳群Ａ群	1	1	0
10	0270	西油山古墳群Ｃ群	2	1	1
11	0271	西油山古墳群Ｄ群	4	4	0
12	0272	西油山古墳群Ｅ群	6	6	0
13	0273	西油山古墳群Ｆ群	8	8	0
14	0274	西油山古墳群Ｇ群	11	11	0
15	0275	西油山古墳群Ｈ群	2	2	0
16	0276	影塚古墳群	2	1	1
17	0277	霧ヶ滝古墳群Ａ群	26	26	0
18	0278	霧ヶ滝古墳群Ｂ群	25	25	0
19	0279	霧ヶ滝古墳群Ｃ群	3	3	0
20	0280	駄ヶ原古墳群Ａ群	10	9	1
21	0281	駄ヶ原古墳群Ｂ群	4	4	0
22	0282	駄ヶ原古墳群Ｃ群	21	21	0
23	0283	駄ヶ原古墳群Ｄ群	4	4	0
24	0284	駄ヶ原古墳群Ｅ群	4	4	0
25	0285	駄ヶ原古墳群Ｅ群	8	8	0
26	0286	駄ヶ原古墳群Ｇ群	3	3	0
27	0287	駄ヶ原古墳群Ｈ群	1	1	0
28	0288	大谷古墳群	10	10	0
29	0289	倉瀬戸古墳群	16	6	10
30	0290	早苗田古墳群Ｂ群	2	2	0
31	0291	早苗田古墳群Ｃ群	3	0	3
32	0292	早苗田古墳群Ｄ群	11	10	1
33	0293	鳥越古墳群Ａ群	1	0	1
34	0294	鳥越古墳群Ｂ群	3	0	3
35	0295	鳥越古墳群Ｃ群	4	4	0
36	0296	鳥越古墳群Ｄ群	13	13	0
37	0297	鳥越古墳群Ｅ群	3	2	1
38	0298	鳥越古墳群Ｆ群	2	2	0
39	0300	西油山古墳群Ａ群	2	2	0
40	0301	西油山古墳群Ｂ群	3	3	0
41	0310	有田古墳群	3	1	2
42	0326	重留古墳群Ａ群	1	0	1
43	0327	重留古墳群Ｂ群	7	7	0
44	0328	重留古墳群Ｃ群	3	1	2
45	0329	重留古墳群Ｄ群	4	3	1
46	0330	重留古墳群Ｅ群	5	5	0
47	0331	重留古墳群Ｆ群	4	4	0
48	0332	山崎古墳群Ａ群	7	0	7
49	0333	山崎古墳群Ｂ群	3	0	3
50	0345	重留古墳群Ｇ群	4	3	1
51	0346	三郎丸古墳群Ａ群	1	1	0
52	0347	三郎丸古墳群Ｂ群	19	2	17
53	0351	三郎丸古墳群Ｃ群	4	4	0
54	0352	三郎丸古墳群Ｄ群	4	1	3
55	0353	荒平古墳群Ａ群	1	1	0
56	0354	荒平古墳群Ｂ群	1	1	0
57	0355	荒平古墳群Ｃ群	1	1	0
58	0356	荒平古墳群Ｄ群	3	3	0
59	0357	荒平古墳群Ｅ群	2	2	0
60	0358	荒平古墳群Ｆ群	1	1	0

通番号	分布地図番号	遺跡名	総数	依存状況 有	依存状況 消滅
61	0383	五島山古墳群	4	0	4
62	0427	飯盛古墳群A群	1	1	0
63	0428	飯盛古墳群B群	2	2	0
64	0429	金武古墳群吉武K群	12	9	3
65	0430	金武古墳群吉武L群	8	8	0
66	0453	金武古墳群乙石H群	2	2	0
67	0454	西山古墳群A群	1	1	0
68	0455	西山古墳群B群	2	0	2
69	0456	黒塔古墳群A群	4	4	0
70	0463	黒塔古墳群B群	5	5	0
71	0464	白塔古墳群A群	12	12	0
72	0465	白塔古墳群B群	7	7	0
73	0466	白塔古墳群C群	3	3	0
74	0467	長峰古墳群A群	15	15	0
75	0468	長峰古墳群B群	4	4	0
76	0509	長垂山古墳群	5	3	2
77	0510	草場古墳群	12	4	8
78	0511	草刈古墳群	6	0	6
79	0527	広石南古墳群A群	5	5	0
80	0528	広石南古墳群B群	2	0	2
81	0529	高崎古墳群	6	0	6
82	0530	広石古墳群Ⅰ群	1	0	1
83	0531	広石古墳群Ⅱ群	1	1	0
84	0532	広石古墳群Ⅲ群	2	0	2
85	0533	広石古墳群Ⅳ群	3	0	3
86	0534	広石古墳群Ⅴ群	2	1	1
87	0535	広石古墳群Ⅵ群	4	3	1
88	0536	宮の前遺跡１号墳	1	0	1
89	0537	コノリ古墳群A群	2	0	2
90	0538	コノリ古墳群B群	6	0	6
91	0547	野方勧進古墳群	1	0	1
92	0548	野方古墳群A群	3	0	3
93	0549	野方古墳群B群	13	0	13
94	0550	野方古墳群C群	2	2	0
95	0551	羽根戸古墳群A群	5	5	0
96	0552	羽根戸古墳群B群	7	5	2
97	0553	羽根戸古墳群C群	2	2	0
98	0554	羽根戸古墳群D群	12	12	0
99	0555	羽根戸古墳群E群	14	14	0
100	0556	羽根戸古墳群F群	4	4	0
101	0557	羽根戸古墳群G群	24	24	0
102	0558	羽根戸古墳群H群	3	3	0
103	0559	羽根戸古墳群Ⅰ群	3	0	3
104	0560	羽根戸古墳群J群	2	2	0
105	0561	羽根戸古墳群K群	4	2	2
106	0562	羽根戸古墳群L群	6	1	5
107	0563	羽根戸古墳群M群	22	22	0
108	0564	羽根戸古墳群N群	29	18	11
109	0565	羽根戸古墳群O群	2	2	0
110	0566	羽根戸古墳群P群	2	2	0
111	0567	羽根戸南古墳群A群	4	4	0
112	0568	羽根戸南古墳群C群	1	1	0
113	0569	羽根戸南古墳群D群	3	2	1
114	0575	羽根戸南古墳群D群	5	5	0
115	0576	羽根戸南古墳群E群	10	5	5
116	0577	羽根戸南古墳群F群	2	2	0
117	0578	飯盛古墳群C群	1	1	0
118	0579	飯盛古墳群D群	1	1	0
119	0580	金武古墳群吉武H群	10	10	0
120	0581	金武古墳群吉武M群	3	3	0
121	0582	金武古墳群吉武N群	3	3	0
122	0583	金武古墳群吉武O群	5	5	0
123	0584	金武古墳群吉武P群	10	10	0
124	0585	金武古墳群吉武Q群	2	0	2
125	0586	金武古墳群吉武R群	2	2	0
126	0594	金武古墳群吉武A群	5	5	0
127	0595	金武古墳群吉武B群	10	10	0
128	0596	金武古墳群吉武C群	7	4	3
129	0597	金武古墳群吉武D群	12	12	0
130	0598	金武古墳群吉武E群	5	2	3
131	0599	金武古墳群吉武F群	2	1	1
132	0600	金武古墳群吉武G群	4	4	0
133	0601	金武古墳群吉武Ⅰ群	6	2	4
134	0602	金武古墳群吉武J群	8	8	0
135	0603	金武古墳群乙石A群	3	3	0
136	0604	金武古墳群乙石B群	7	7	0
137	0605	金武古墳群乙石C群	3	2	1
138	0606	金武古墳群乙石D群	1	1	0
139	0607	金武古墳群乙石E群	4	4	0
140	0608	金武古墳群乙石F群	7	7	0
141	0609	金武古墳群乙石G群	3	0	3
142	0610	黒塚古墳群C群	2	1	1
143	0612	黒塚古墳群A群	1	1	0
144	0613	黒塚古墳群B群	1	1	0
145	0792	荒平古墳群G群	1	1	0
146	0793	荒平古墳群H群	5	4	1
147	0794	荒平古墳群Ⅰ群	3	3	0
148	0795	荒平古墳群J群	2	2	0
149	0796	荒平古墳群K群	9	9	0
150	0797	荒平古墳群L群	3	3	0
151	0857	京ノ隈古墳	1	0	1
152	0858	小袖古墳	1	1	0
153	0860	原２号墳	1	0	1
154	0861	原１号墳	1	0	1
155	0862	梅林八幡宮古墳	1	1	0
156	0864	小戸古墳群	7	7	0
157	0865	興雲寺古墳	1	1	0
158	0867	妙見崎古墳	1	0	1
159	0869	浅谷古墳	1	1	0
160	0870	岩名隈古墳	1	1	0
161	0883	榎木谷古墳	1	1	0
162	1237	飯倉古墳群１号墳	1	1	0
163	1238	飯倉古墳群２号墳	1	1	0
164	1239	飯倉古墳群３号墳	1	0	1
165	1240	飯倉古墳群４号墳	1	1	0
166	1241	飯倉古墳群５号墳	1	0	1
167	1243	飯倉古墳群７号墳	1	0	1
168	2417	飯倉古墳群８号墳	1	1	0
169	2418	飯倉古墳群９号墳	1	1	0
170	2419	飯倉古墳群10号墳	1	1	0
171	2420	飯倉古墳群11号墳	1	1	0
172	2421	飯倉古墳群12号墳	1	1	0
173	2424	七隈古墳群B群	2	2	0
174	2431	クエゾノ古墳群	5	0	5
175	2443	愛宕山古墳	1	0	1
176	2450	梅林古墳	1	1	0
177	2453	重留古墳群H群	1	0	1
178	2454	山崎古墳群C群	3	0	3
179	2477	金武古墳群吉武S群	1	0	1
180	2492	広石古墳群Ⅶ群	5	0	5
181	2498	広石古墳群Ⅷ群	1	0	1
182	2500	広石古墳群Ⅸ群	1	0	1
183	2513	笠間谷古墳群	4	0	4
184	2518	野方古墳群D群	2	0	2
185	2522	羽根戸古墳群Q群	5	2	3
186	2531	羽根戸南古墳群G群	4	4	0
187	K－1	梅林古墳	1	1	0
計			862	633	229

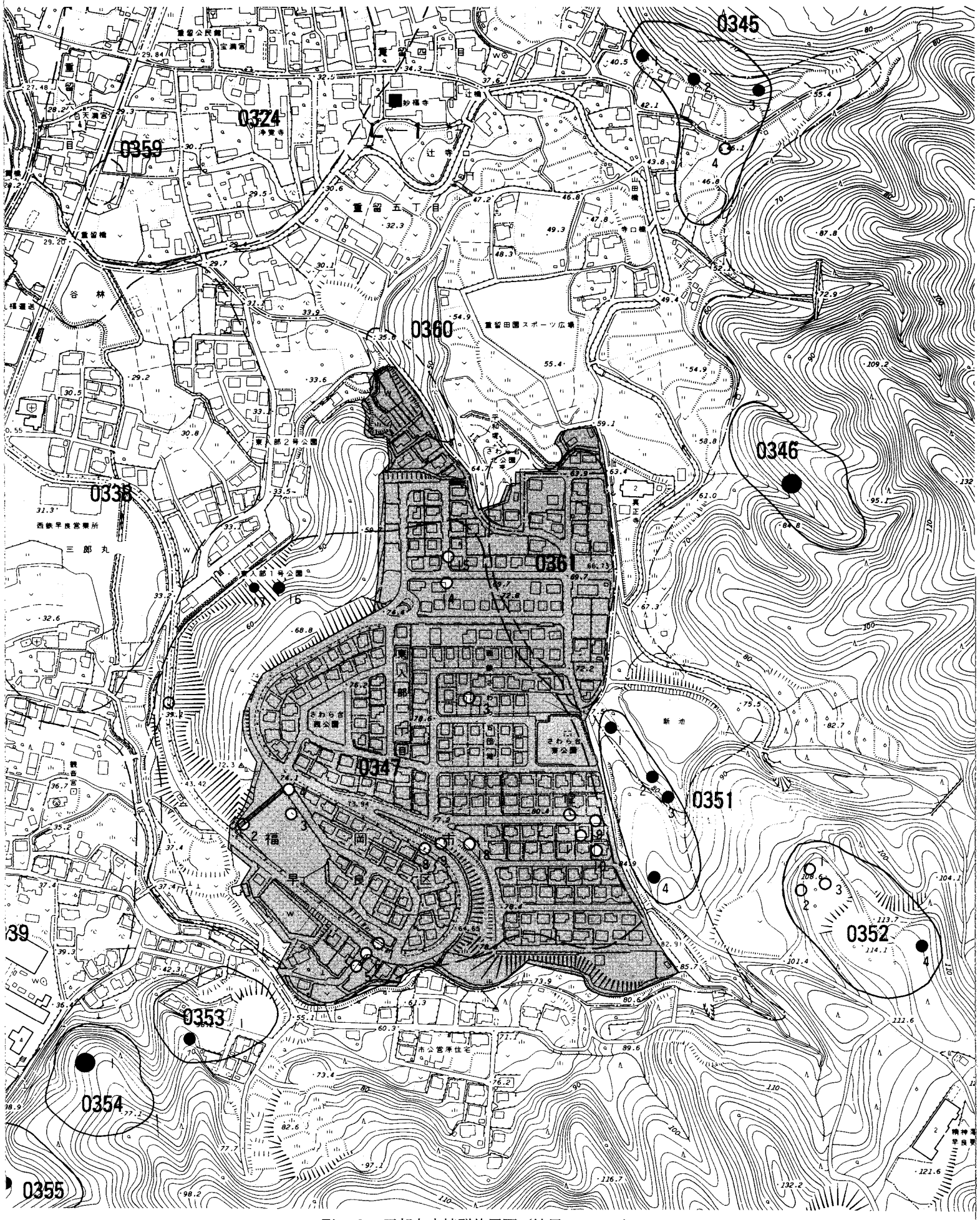


Fig. 2　三郎丸古墳群位置図（縮尺1/4,000）

2　調査の組織と構成

発掘調査から資料整理・報告書刊行に至るまで多くの人々の御協力を受けた。特に発掘調査から資料整理まで16年間の永きに渡り報告できなかったことは、諸般の事情と担当者の怠慢にほかならずここにようやく多くの人々の御協力を受け刊行するに至った。記して感謝申し上げます。

調査主体　三郎丸古墳群遺跡調査会

調査担当　佐田　茂（九州大学）　柳沢　一男　二宮　忠司　小林　義彦　渡辺　和子

資料担当　二宮　忠司　大庭　友子

資料整理　牛尾美保子　海内美也子　太田　昌子　平山　圓　皆元　幸子
尾崎　文枝　高橋知代子　石津満寿美　桑野　正子　木村　絹子
安部　宣子　山崎恵美子　石松　悦子

調査協力者　池　関次郎　尾崎　達也　牛尾　準一　榊　光雄　菰田　重美
尾崎　八重　金子ヨシ子　菊池　栄子　菊池　キミ　菊池ミツヨ
菰田オリエ　菰田　洋子　榊　ツイ　下郡フミ子　谷　ヒサヨ
谷　フミエ　野田部コト　又野　栄子　松隈ゆきの　真名子ゆきえ
真名子千恵子　結城キミエ

立地と環境については刊行されている山崎古墳群１・２、四箇遺跡、田村遺跡群、東入部遺跡群、吉武遺跡群等と数多くの報告書が記載しているため今回の報告書では割愛する。

第二章　発掘調査の概要

三郎丸古墳群Ｂ群は、昭和53年から行った分布地図作成のための調査で明らかになった古墳の数は19基で、すべて円墳によって構成されていたが、調査を開始した段階では５・10・18・19号墳は破壊され現存していなかった。古墳全体の基数及び群集墳の位置付けから号数はそのまま残し分布地図通りの番号を古墳に与えた。また16・17号墳については緑地公園として保存する事となったため調査対象から除外した。 最終的に調査を行った古墳は１～４、６～９、11～15号墳の13基である。三郎丸古墳群の位置は国土地理院発行「福岡西南部」縮尺１/50,000の左上隅より下に32.5㎝、右に17.3㎝、座標では北緯30°30′10″～30°30′30″、東経130°20′40″～130°20′50″の間に位置している。座標軸ＸＹ軸はそれぞれの古墳の地形図の隅に記載している。 三郎丸古墳は二基ないし三基単位からなり７群の19基で構成されていた。

三郎丸古墳の概要

１号墳　最も西に位置する古墳で、工事用道路及び土取りで石室半分から破壊されている。古墳群の中で最も標高の低い40～42m間に位置し、石室主軸はN-53°30′-Eの方向をとる。天井石、墓道、羨道部等は破壊されている。長さは長軸22.5m、短軸2.05m、面積4.61㎡を測る。

２～４号墳　大きな谷部の南側斜面に位置し、この斜面には３基の古墳（２～４号墳）があり、２号墳は最も西側に位置し、東に谷一つを挟んで３・４号墳がある。石室主軸はN-25°-Eをとり、南に開口している。長軸2.2m、短軸1.5m、奥壁幅1.15m、石室面積3.3㎡である。石室入り口部1.6m、羨道長1.4m、幅0.82mの菱形を呈する。

３号墳　南に開口する。石室はN-30°30′-Wに主軸を持ち、長軸2.7m、短軸2.35mのほぼ正方形を呈し、石室面積6.34㎡である。天井石が遺存するのは３号墳と８号墳だけである。

４号墳　南西に開口し、石室はN-35°30´-Eに主軸を持ち、長軸1.55m、短軸1.64mのほぼ正方形を呈し、石室面積2.55㎡である。

６・７号墳　８・９号墳と谷を挟んだ南側の尾根上に位置し、両古墳ともかなりの破壊を受けていた。しかしながら６号墳は出土遺物が豊富であった。６号墳は南東に開口し、石室はN-61°30´-Wに主軸を持ち、７号墳も南南東に開口し、石室はN-37°30´-Wに主軸を持つ。

８・９号墳　調査区の主尾根である平坦地の南側斜面に二基並んでいた。８号墳は天井石まである古墳で、南に開口していた。石室はN-30°-Eに主軸を持ち、長軸2.7m、短軸2.35mの長方形を呈し、石室面積6.34㎡である。９号墳は８号墳と同じように石室は南に開口していた。石室はN-10°-Eに主軸を持ち、長軸2.15m、短軸２mの正方形を呈し、石室面積4.3㎡である。

11・12号墳　８・９号墳の東尾根上の斜面に位置する。11号墳は東に開口していた。石室はS-80°-Wに主軸を持ち、長軸1.7m、短軸1.8mの正方形を呈し、石室面積3.06㎡である。

12号墳は東に開口していた。石室はS-80°-Wに主軸を持ち、長軸1.8m、短軸1.8mの正方形を呈し、石室面積3.24㎡である。

13号墳　１号墳と同じで１基単独の古墳である。石室の構造もこの古墳だけが片袖で、他は両袖型である。南東に開口していた。石室はN-54°30´-Wに主軸を持ち、長軸1.8m、短軸1.75mの正方形を呈し、石室面積3.24㎡である。

14・15号墳　調査区の北側に延びる尾根の斜面に位置する。14号墳は石室主軸をN-14°-Wにとり、南南東に開口する。玄室の長軸2.2m、短軸２m、石室面積4.4㎡で、不整形な方形を呈する。15号墳は石室主軸をN-3°20´-W、南南東に開口する。玄室の長軸2.2m、短軸2.15m、石室面積4.73㎡で、不整形な方形を呈する。

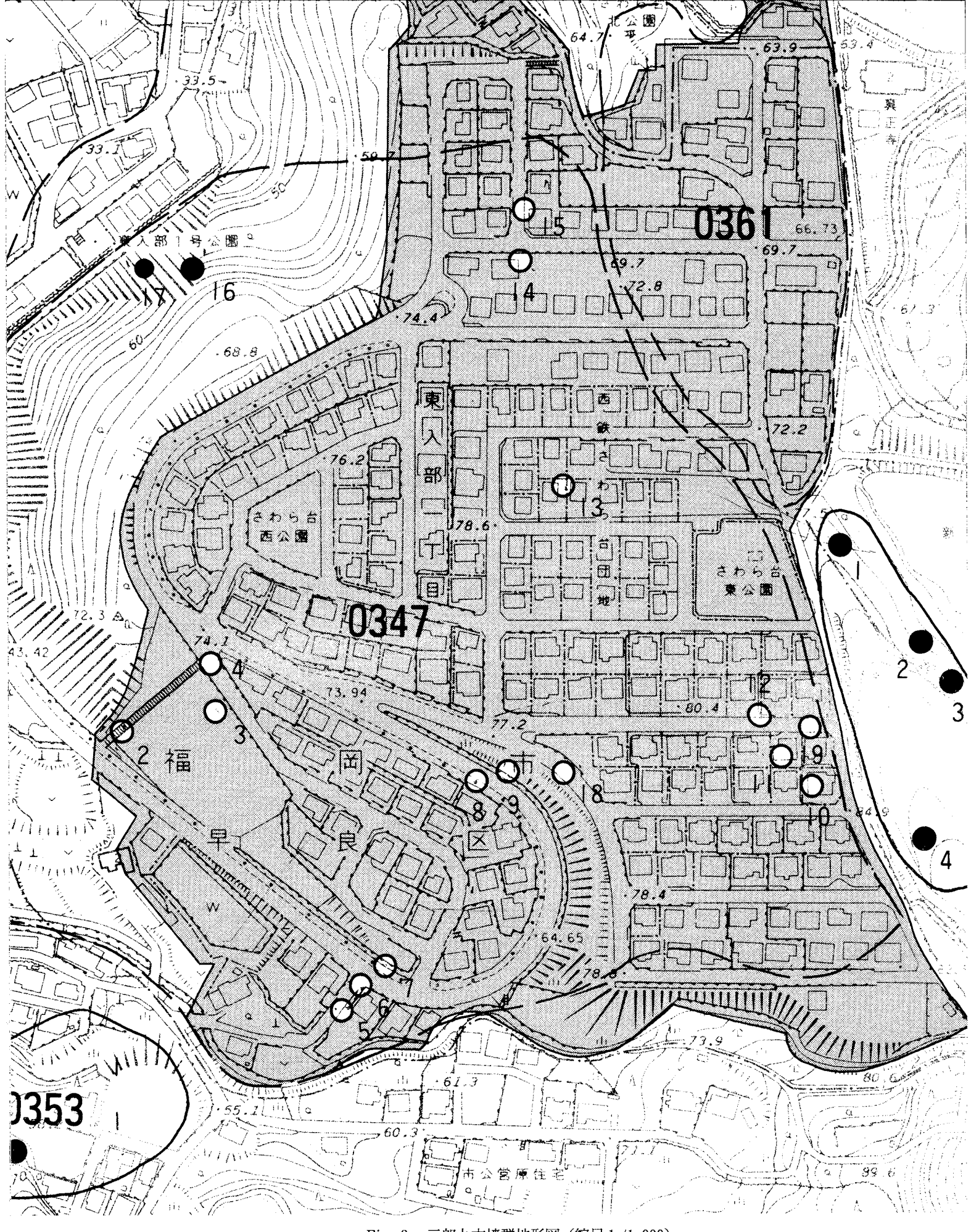


Fig. 3　三郎丸古墳群地形図（縮尺1/1,000）

第三章　調 査 の 記 録

三郎丸古墳群Ｂ群は、昭和53年から行った分布地図作成のための調査で明らかになった古墳の数は19基で、すべて円墳によって構成されていたが、調査を開始した段階では５・10・18・19号墳は破壊され現存していなかった。古墳全体の基数及び群集墳の位置付けから号数はそのまま残し分布地図通りの番号を古墳の与えた。また16・17号墳については緑地公園として保存する事となったため調査対象から除外した。

最終的に調査を行った古墳は１～４、６～９、11～15号墳の13基である。

第１号墳の調査

位置と現状（Fig.４～６　PL.１）

最も西に位置する古墳で、工事用道路及び土取りで石室半分から破壊されている。古墳群の中で最も標高の低い40～42m間に位置し、石室主軸はN-53°30′-Eの方向をとる。南側斜面の急勾配のわずかなテラス部分に石室を配置している。現状は奥壁の腰石二枚と両側壁の腰石だけが残存するだけで天井石、墓道、羨道部等は破壊されている。

墳　丘（Fig.４・５　PL.１）

墳丘は石室上にはほとんどなく、わずかに奥壁側に見られる程度でその殆どが破壊され、石室前方部分はまつたく認められない。現在崖面となっているところから、マサ土の掘削が行われていたものと考えられる。Ｂトレンチの土層から馬蹄形の周溝を有していたものと考えられる。石室全体が破壊されているため、墳丘自体の規模は不明であるが、石材・石室の幅から長さ2.5m、幅２m程度の石室で、馬蹄形周溝から８mの墳丘を有する古墳と思われる。

地山整形（Fig.５　PL.１）

古墳は斜面変換線を直角に石室を構築している。標高41～42m部分のテラス部分に二段の掘り込みを行い上段に馬蹄形溝を巡らし、下段は石室構築のために上段より約1.35m、溝上段から2.1mの掘り込みを行っている。

石室構築面は平坦で、奥壁腰石と地山整形面との間は８㎝しかない。横断面の掘り方では右側辺部が浅く、左側辺部が深い。斜面の傾斜によることが要因とも考えられるが配置した石の形状によることも考えられる。この古墳の腰石は長軸を横に配する形態を有する。現存する石室掘り方は8.5㎡である。

石　室（Fig.６　PL.１）

石室は奥壁から右側辺部一石、左側辺部二石で他は破壊されている。奥壁は二石からなり、やや左奥壁が内に入る形態をとる。石材はすべて花崗岩円礫で面取り等は行っていない。現存する長さは長軸2.25m、短軸2.05m、面積4.61㎡を測り、床面は張床が施されその厚さは８㎝程度である。裏込石は人頭大の石を腰石の下に数多く配置している。

土　層（Fig.６　PL.１）

土層はＡ・Ｃトレンチが設定できずＢトレンチの土層だけである。地山整形によって造り出した平坦面の端部より1.5mから上に立ち上がる土層が確認できた。この部分から墳丘盛土が始まると考えられる。平坦面と地山整形端が溝と考えられ、土層の堆積からも溝であったことが窺える。

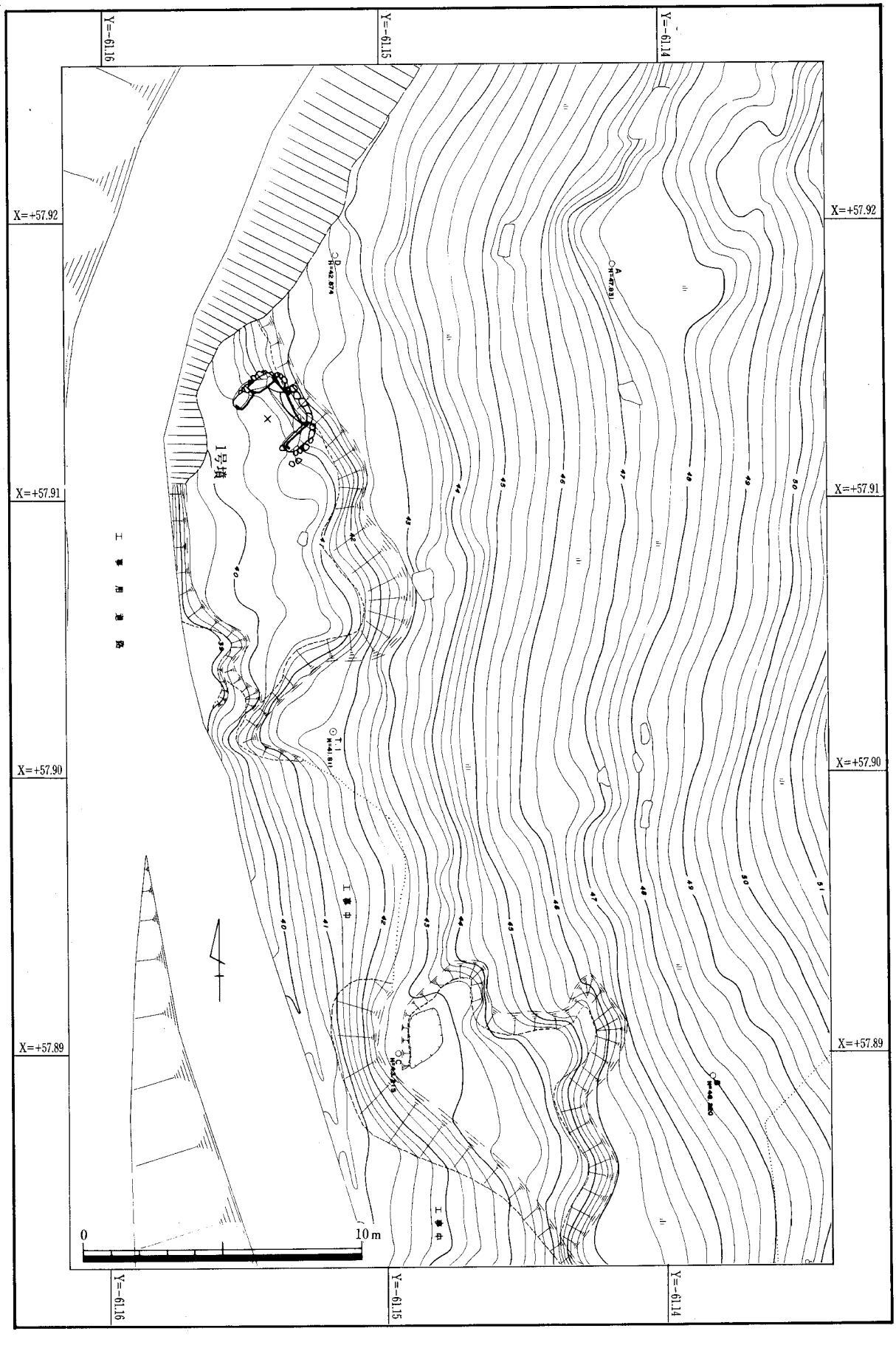


Fig. 4　１号墳地形測量図（縮尺１/200）

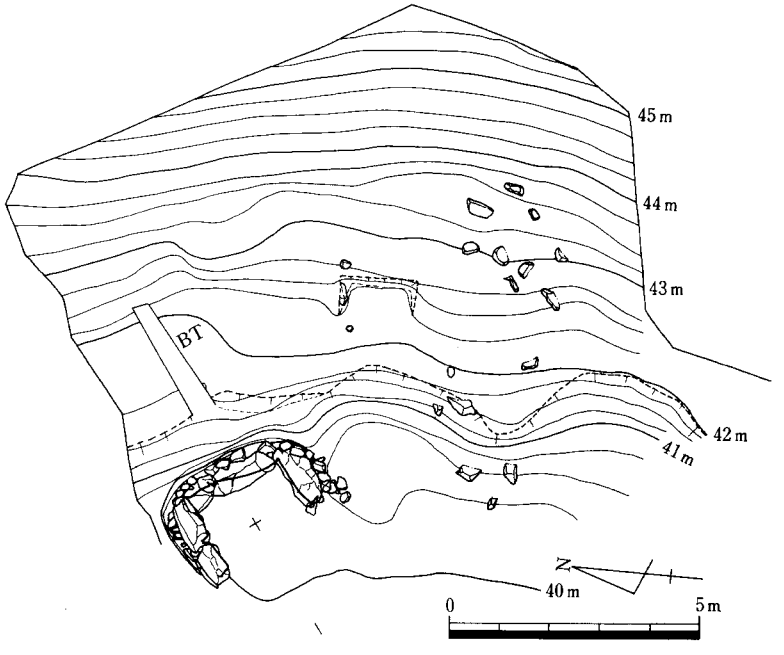


Fig. 5　1号墳墳丘測量図（縮尺1/150）

第Ⅰ層から第Ⅲ層が溝の土層で、第Ⅰ層が黒褐色土、第Ⅱ層が茶褐色土、第Ⅲ層が暗黒褐色土である。第Ⅳ層からⅥ層までが墳丘盛土で、第Ⅳ層が明褐色土、第Ⅴ層が褐色土、第Ⅵ層が奥壁腰石まで固められた淡褐色粘質土である。

出土遺物（Fig.7　PL.1・18）

出土遺物は石室自体が破壊を受けているにもかかわらず15点出土した。しかしながらその殆どが墳丘盛土内と墳丘内の表採等が主である。鉄製品も1点出土したが、これも墳丘盛土内からの出土である。

須恵器（Fig.7-1・2　PL.18）

須恵器は二点出土した。杯の蓋と身のセットで、1は口径9.5cm、器高5.3cmのロクロ回転が逆時計廻りの杯蓋である。受部が高く、端部が鋭利に仕上げられている。天井部1/4に篦削りが認められ、他は内外とも回転ナデを施している。2は胴部中央部に沈線を一条巡らす口径8.2cm、器高4.1cmで、底部は丸底に近い平底で、篦削りによって仕上げている。1・2とも墳丘盛土から出土した。色調は1が暗灰褐色、2が暗灰色を呈する。

土師器（Fig.7-3～7　PL.18）

3・4は土師皿である。3は口径16cm、底径8.2cmで、底部に板目痕が残る。4は口径16.4cm、器高2.4cm、底径10.2cmを測る。底部にはヘラ記号「井」がある。内外面ともナデ仕上げであるが、底部に板目痕が残る。色調は1・2とも赤褐色を呈する。

5・6は古式土師器である。5は丸底の底部を有する甕形土器である。口径11.8cm、器高10cm、色調は暗褐色を呈する。丸底の底部からやや外反しながら立ち上がり、胴部では上に引き上げられ口縁部端で外に開き、端部を丸く納めている。肉厚で重量感のある土器である。内面は篦削り・指引きが行われ、口縁部付近だけナデ仕上げを行っている。外面は荒い縦方向の篦削りの後ナデ仕上げである。6は長胴形の甕形土器で、底部は欠損してないが、おそらく丸底に近い平底と考えられる。口径14cmを

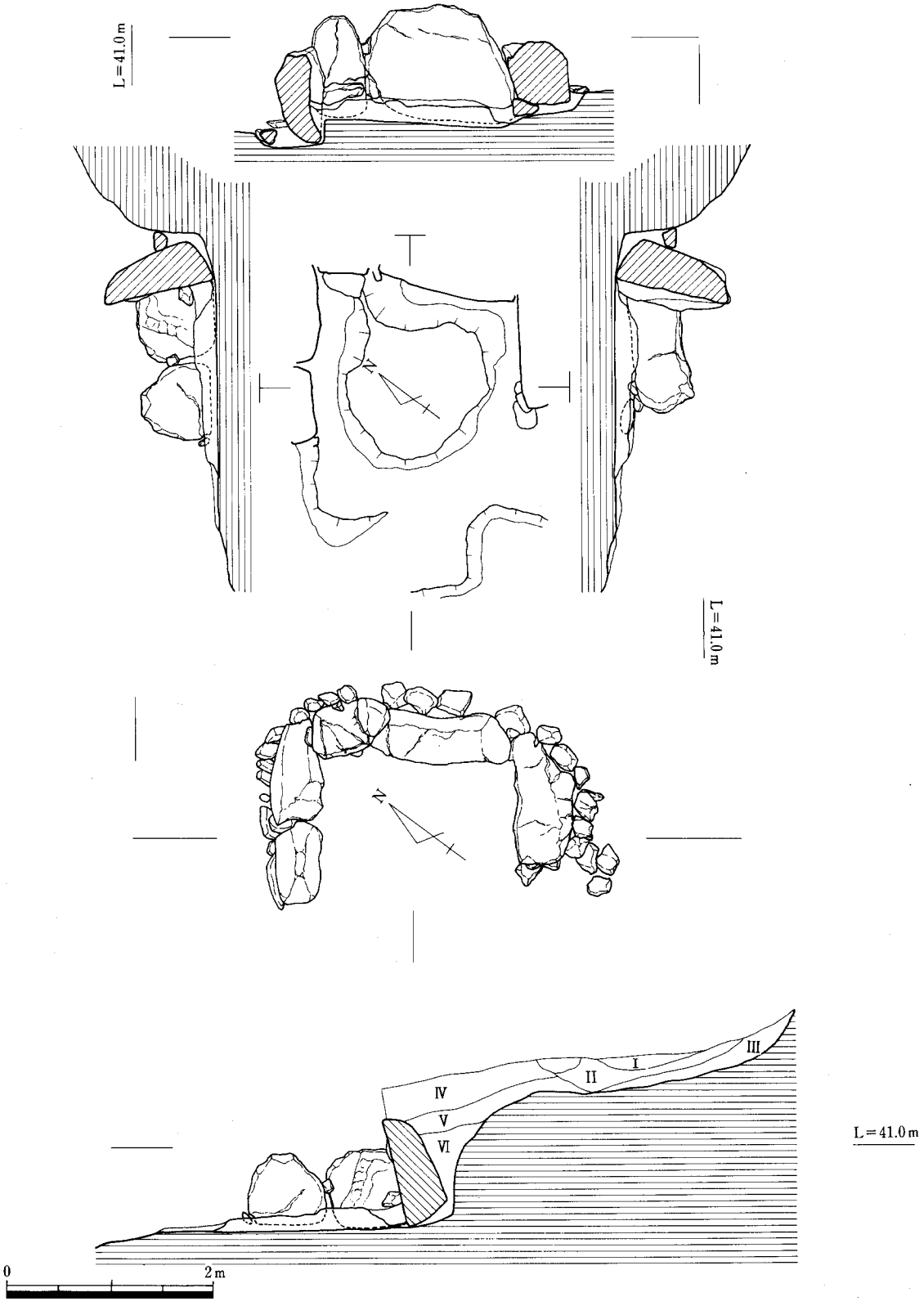


Fig. 6　１号墳石室平面・断面図及び俯瞰図、土層断面図（縮尺１/60）

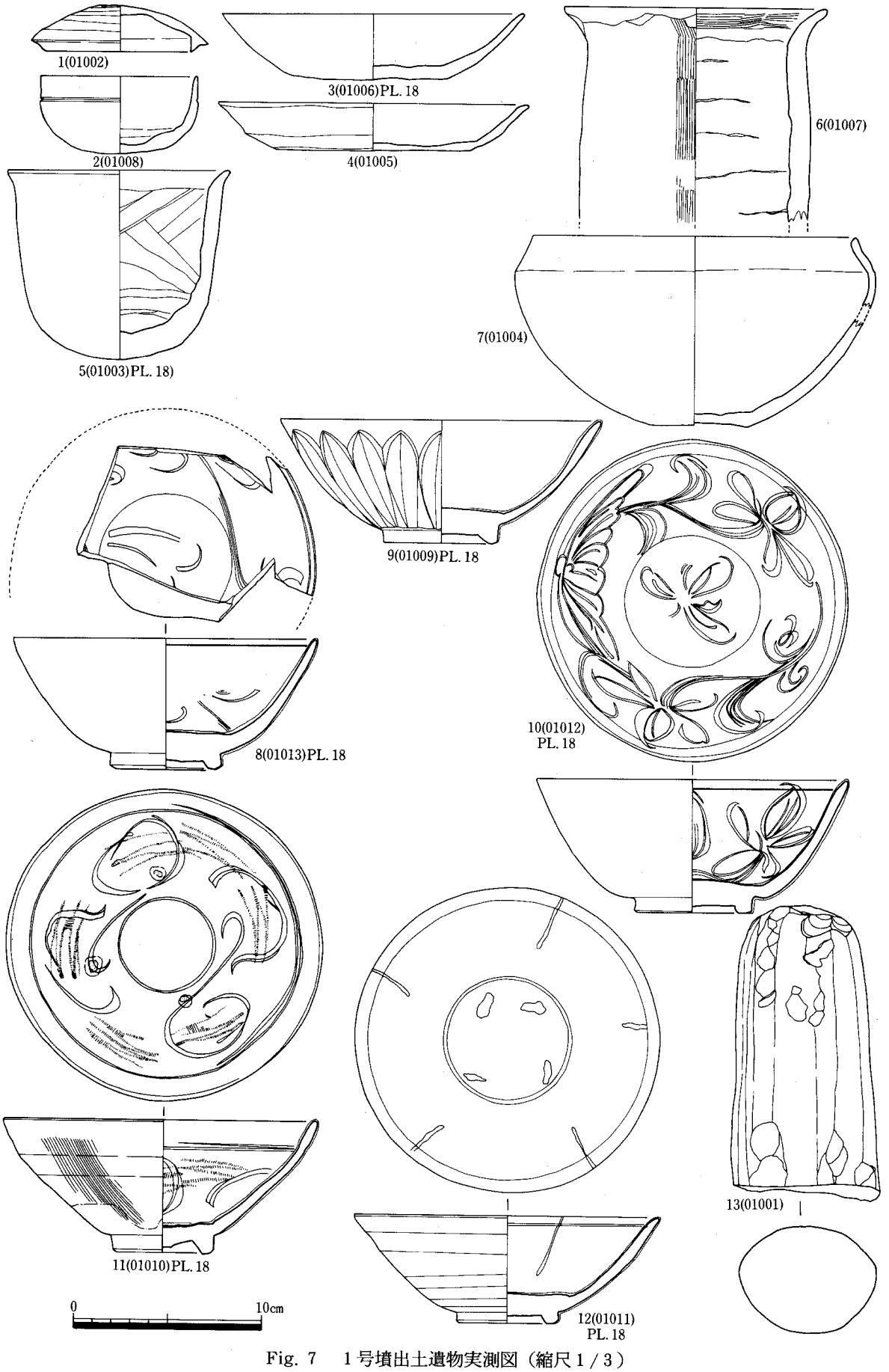


Fig. 7　1号墳出土遺物実測図（縮尺1／3）

測り、外面に縦刷毛目、内面口縁部に横刷毛目を施している。口縁外面には指オサエが残り、器面に凹凸が見られる。内面は指オサエ・ナデ仕上げを行っているが、粘土帯の幅を示す痕跡が認められ、その幅は1.8～2.2cmである。6も5と同様に肉厚で重量感のある土器である。

7は口径17.8cm、器高10cm、底径5.2cmの瓦質土器である。形態は鉢形土器で、底部が僅かに上げ底を呈する。胴部はやや内湾しながら外に開き、肩部で外反しながら内に入り、口縁部は丸く納める。色調は赤褐色を呈し、焼成は良好である。墳丘盛土3区より出土した。

青　磁（Fig.7-8～12　PL.18）

青磁は破片を含めて八個体分出土した。今回調査した古墳の中で八個体も出土した古墳はなくせいぜい二～四個体である。8　**青磁碗**　腰が張るタイプの碗で器底が厚く、高台畳付は角を削る。外面無文、内面は口縁下に一条の沈線を巡らせる。破片であるため全容は知り得ないが、沈線より下方に片切彫による曲線文が施される。見込みも同様の手法による彫刻が施されている。釉は高台畳付まで及ぶ。外面の一部に大きな氷裂が認められる。釉色は黄みがかった緑色を呈し光沢がある。口径16cm、底径6.0cm、器高6.9cmを測る。1号墳墳丘表採。　9　**龍泉窯系青磁碗**　内湾気味に外方に開きながら立ち上がり口縁内面でやや外反する。体部外面に蓮弁紋を施し、弁の中央には鎬が入る。内面は無文である。釉は深青緑の鮮やかな色を呈し、高台まで施釉してあり、器底が厚い。1号墳4区墳丘からの出土で、口径17cm、底径6cm、器高6.45cmを測る。博多遺跡群第6次調査[注1]で出土した青白磁を分類しているが、その分類の碗Ⅱ類に相当し13～14世紀と考えられる。　10　**龍泉窯系青磁碗**　腰部が外に張り出し、屈曲内湾しながら立ち上がり、口縁端部を丸く納める。口縁内端で若干外反する。器底が厚い。釉は深い黄みを帯びた緑色で高台畳付まで施釉。一部は外底にまでおよび、胎土は露体部で黄褐色、口縁の一部が欠けているところでは青灰色を呈する。体外面には文様はなく、内面口縁下に一条の沈線を巡らし、それより下方に蓮花折枝文を施す。内底にも片切彫り蓮花文を一輪施す。全体に力強く、流動性がある。口径16.6cm、底径6.3cm、器高7.1cmを測る。1号墳4区墳丘内出土。碗Ⅰ類に相当し13～14世紀と考えられる。

11　**同安窯系青磁碗**　直線的に外方に開きながら立ち上がり口縁下で屈曲する。器面調整は箆削りで、底部付近は調整が粗雑で一部に削り痕が残る。体部外面は一定間隔で櫛描文を施し、内面は刻花文及び櫛刺突による雷光文で構成される。

口縁下に一条の沈線を施すが、初めと終わりが重ならず二条になる部分が約半周ある。見込みは沈圏線が認められ、見込みよりやや上方に重ね焼きの際の目跡がある。釉はガラス質で光沢があり，外面の下方は露体となり、黄灰色を呈する。口径16.6cm、底径5.4cm、器高7.1cmを測る。碗Ⅱ類に相当し13～14世紀と考えられる。12　**龍泉窯系青磁碗**　器底厚く、外面は丁寧な箆削り調整である。内面口縁下に一条の沈線を巡らせる。体部中央位までの白堆線で器壁を五区分する。高台は低く、内外面とも外側斜めに削り出され、畳付は面取りされている。釉は濃いオリーブ色のガラス質の釉で高台部分まで施釉している。見込みに4ケの目跡が認められる。外面に文様は施されず一部を除いて細かな氷裂が認められる。内面の一部には貫入が認められる。口径8.2cm、底径5.4cm、器高5.7cmを測る。

注1「博多」1986年　福岡市教育委員会刊　福岡市埋蔵文化財調査報告書第126集　折尾　学・池崎譲二他

第2号墳の調査

位置と現状（Fig.8～11　PL.2・3）

2号墳は大きな谷部の南側斜面に位置し、この斜面には5基の古墳（2～4・8・9号墳）がある。2号墳は最も西側に位置し、東に谷一つを挟んで3・4号墳がある。2号墳から3号墳までの距離は約43mで、2号墳から1号墳までの距離は北西に120m、2号墳から4号墳までの距離は北東に45mである。石室主軸はN-25°-Eをとり、南に開口している。。

墳　丘（Fig.9　PL.2・3）

2号墳は標高50～53mに位置し、南側斜面の緩やかな部分に構築され石室主軸N-25°-Eの方向をとる。北側は急勾配の斜面を呈し、南側はやや緩やかな斜面の等高線上に直角に構築している。調査時には天井石は遺存せず、腰石より上二枚目の奥壁石が最も残りがよく、他は腰石だけが殆どで石室部分が陥没しており、かろうじて古墳であることが判明するほど流土によって覆われていた。

墳丘の遺存状態は石室北側の等高線上に段落ちが認められるほか、羨道部・墓道部付近にも段落ちが認められる。南側斜面の急勾配部分に築造していることから上部からの流土が全体を覆う形となっている。

地山整形（Fig.9　PL.2・3）

主軸が等高線に直角に向くため地山整形は三段形成である。北側奥壁部分から北に約2.5m部分から掘込みが行われており、第一段目は浅い窪みで終了している。二段目は馬蹄溝を呈し、左右に分かれる。この部分から墳丘盛土が始まるものと思われる。第三段目は急激な傾斜を持ち石室奥壁腰石まで掘り込まれており、その傾斜角度は64度で、掘り方の深さは2.1mある。腰石部分から羨道部一枚目の石まで平坦面となる。東西部分は広い掘り方が行われ、西側は二段掘り、東側は一段である。裏込め石は奥壁が掘り方ぎりぎりであることから奥壁側に僅かに認められる程度である。両左右は掘り方が緩やかであることから人頭大の円礫を多量に配している。

石　室（Fig.10　PL.2・3）

石室はN-25°-Eに主軸を持ち、長軸2.2m、短軸1.5m、奥壁幅1.15m、石室面積3.3㎡である。石室入り口部1.6m、羨道長1.4m、幅0.82mの菱形を呈する。床面は30～40㎝大の円・角礫の平坦面を上とする配石を行っているが、奥壁側の床石は剝ぎ取られている。奥壁は一枚の花崗岩を配し、右側辺部は三枚、左側辺部は四枚の花崗岩を配列している。石積み方法は重箱積みである。閉塞施設は遺存していない。石室右側辺部隅に完形の須恵器（Fig.12-1・4）が出土した。

土　層（Fig.11）

主軸延長上の墳丘にトレンチを設定し、東西方向にA・Cトレンチ、南北方向にBトレンチの3本を設定し土層観察と地山の検出に努めた。石室横断面と組み合わせているA・Cトレンチでは地山の高さが多少異なりを示し、Aトレンチの地山が高い。A・Cトレンチの土層は第Ⅰ層が表土、第Ⅱ層が粘質のある暗黄褐色土、第Ⅲ層がⅡ層より明るく砂粒を含む暗黄褐色土、第Ⅳ層は砂を含み軟らかく絞まり、下層では若干色調が濃くなり粘質を帯びる暗赤褐色土、第Ⅴ層は突き固めているが、ポロポロした状態の暗茶褐色砂質土、第Ⅵ層が暗褐色砂質土、第Ⅶ層が暗赤褐色粘質土である。地山の最も高い標高は76mで段を有し、第Ⅵ層部分から腰石となるがこの部分が最も狭く地山掘削ギリギリに腰石を配置している。これに対しCトレンチでは地山標高が74.7mで、Aトレンチ地山との比高差は1.3mを測る。

Bトレンチは主軸の長軸方向に入れた。地山の標高は76.6mで、緩やかな傾斜を持ちながら下り一

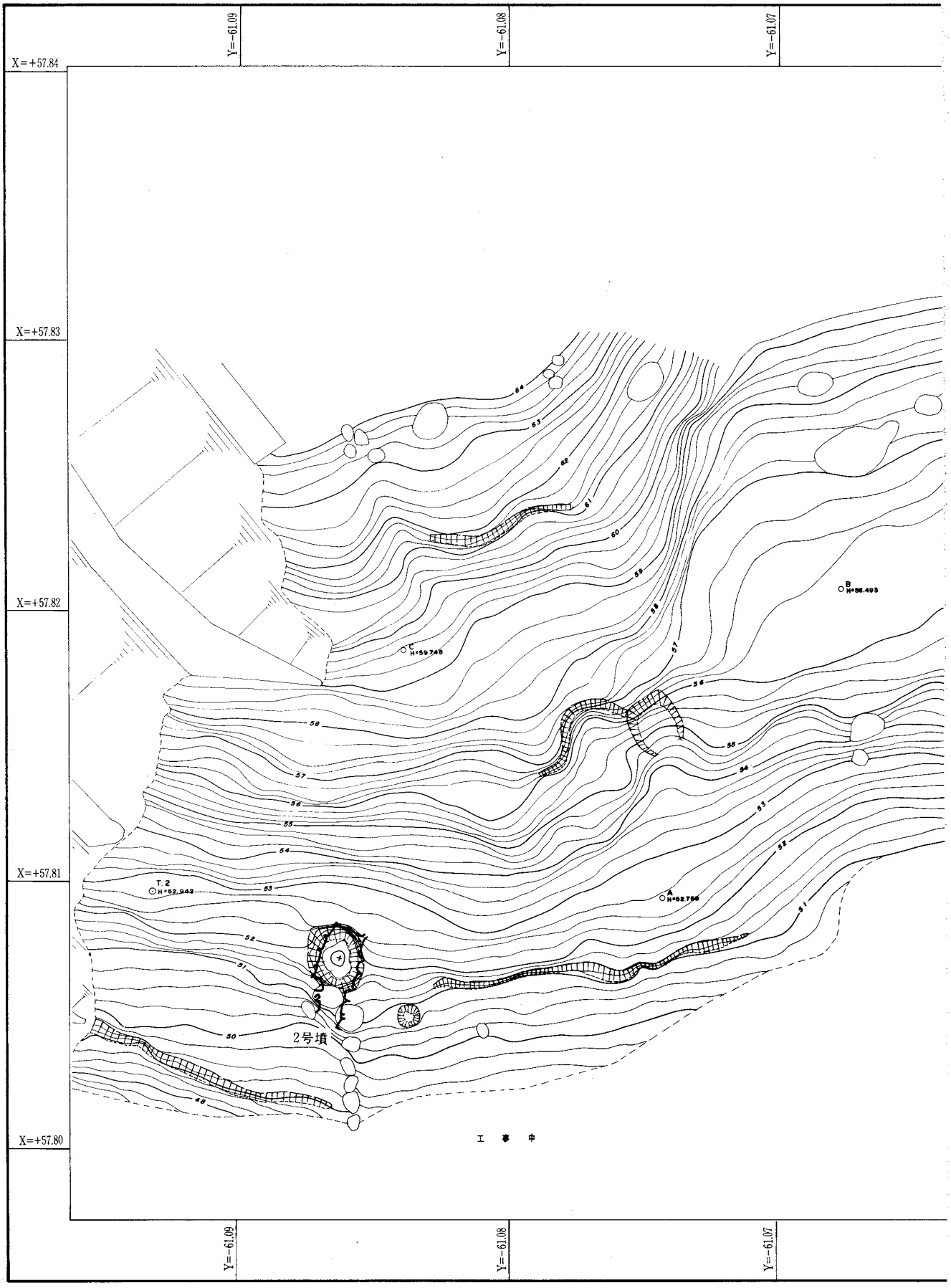


Fig. 8　２・３・４号墳地形測量図（縮尺１/200）

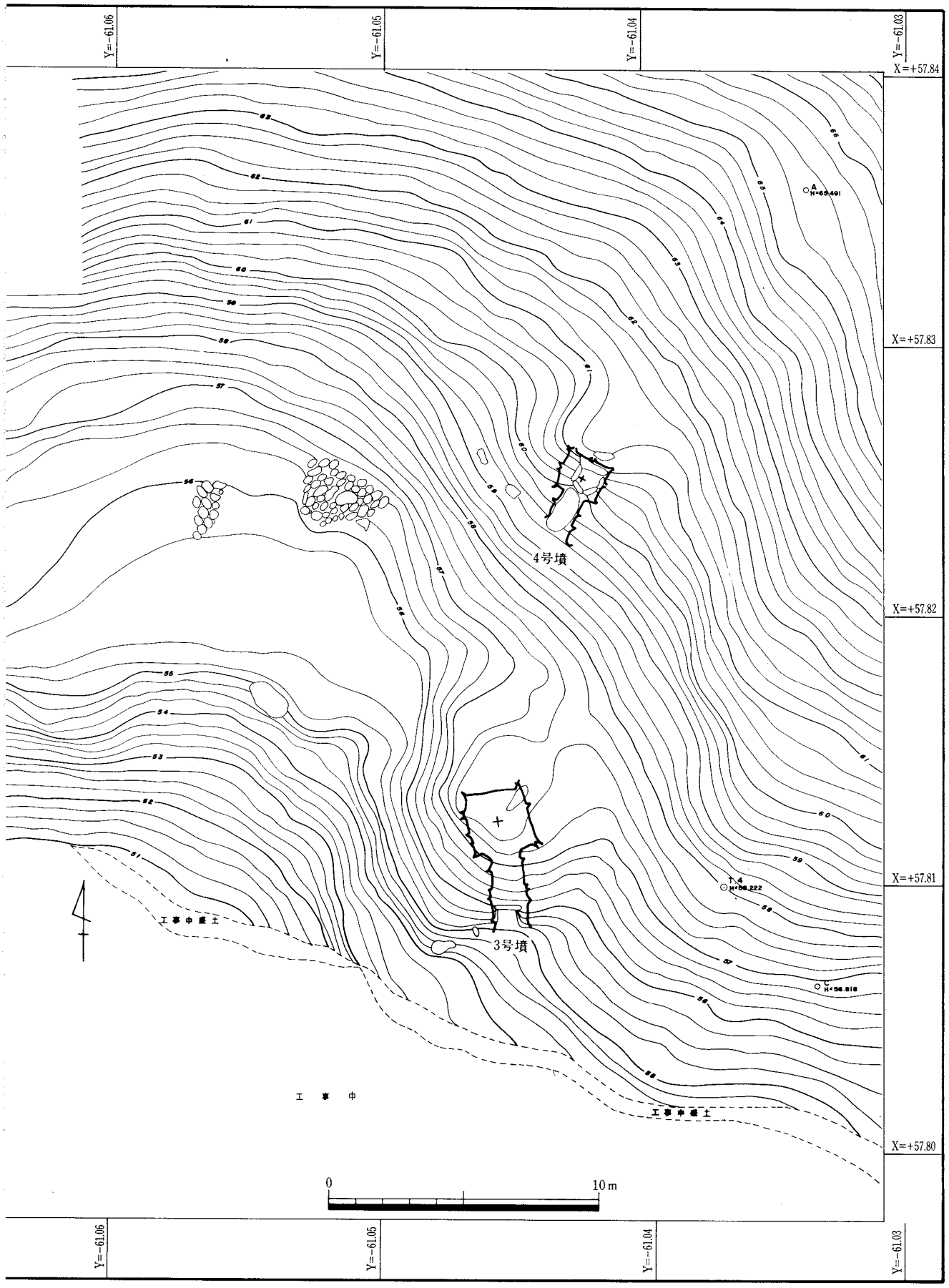


Fig. 8　2・3・4号墳地形測量図（縮尺1/200）

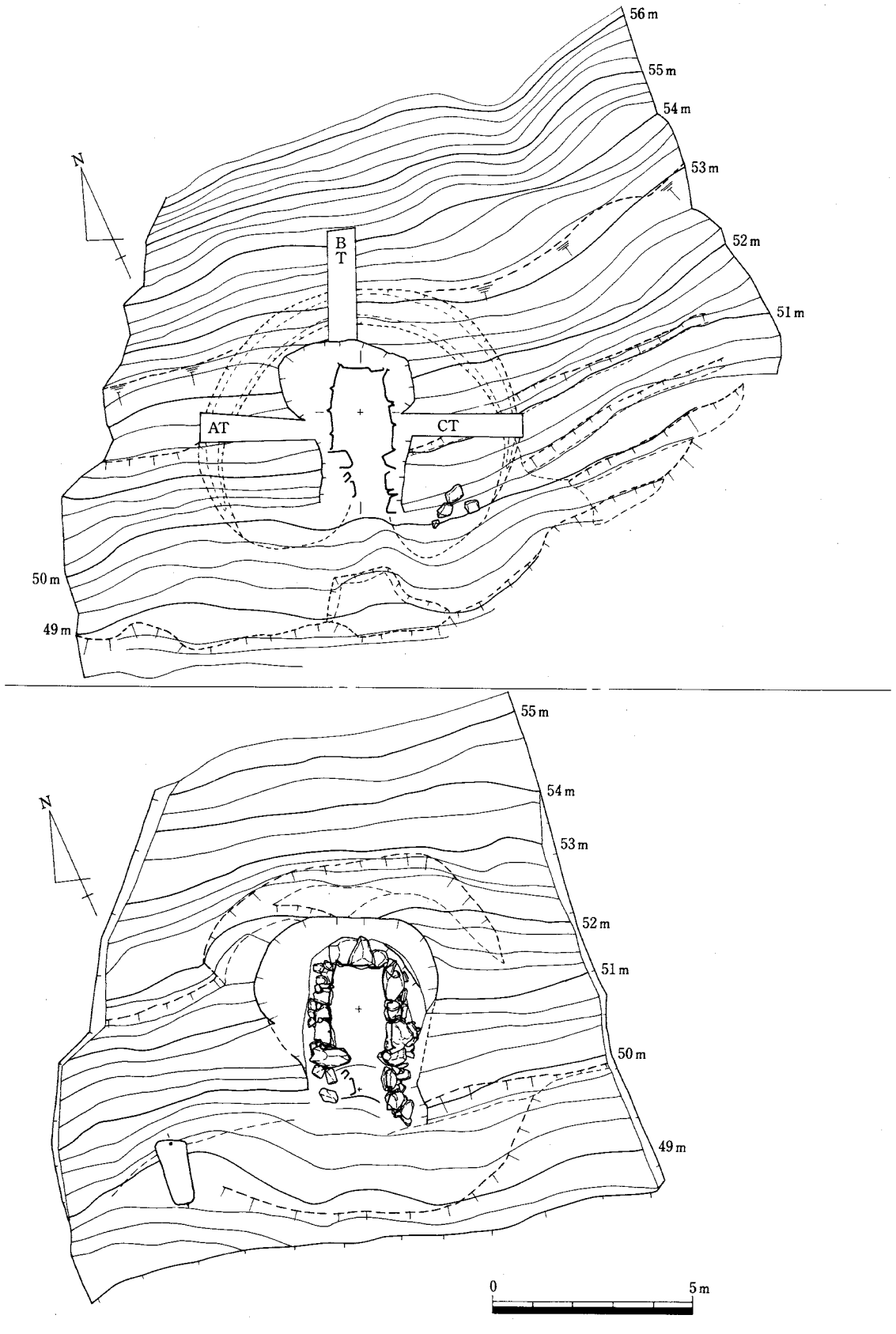


Fig. 9　２号墳墳丘測量図、地山整形図（縮尺１/150）

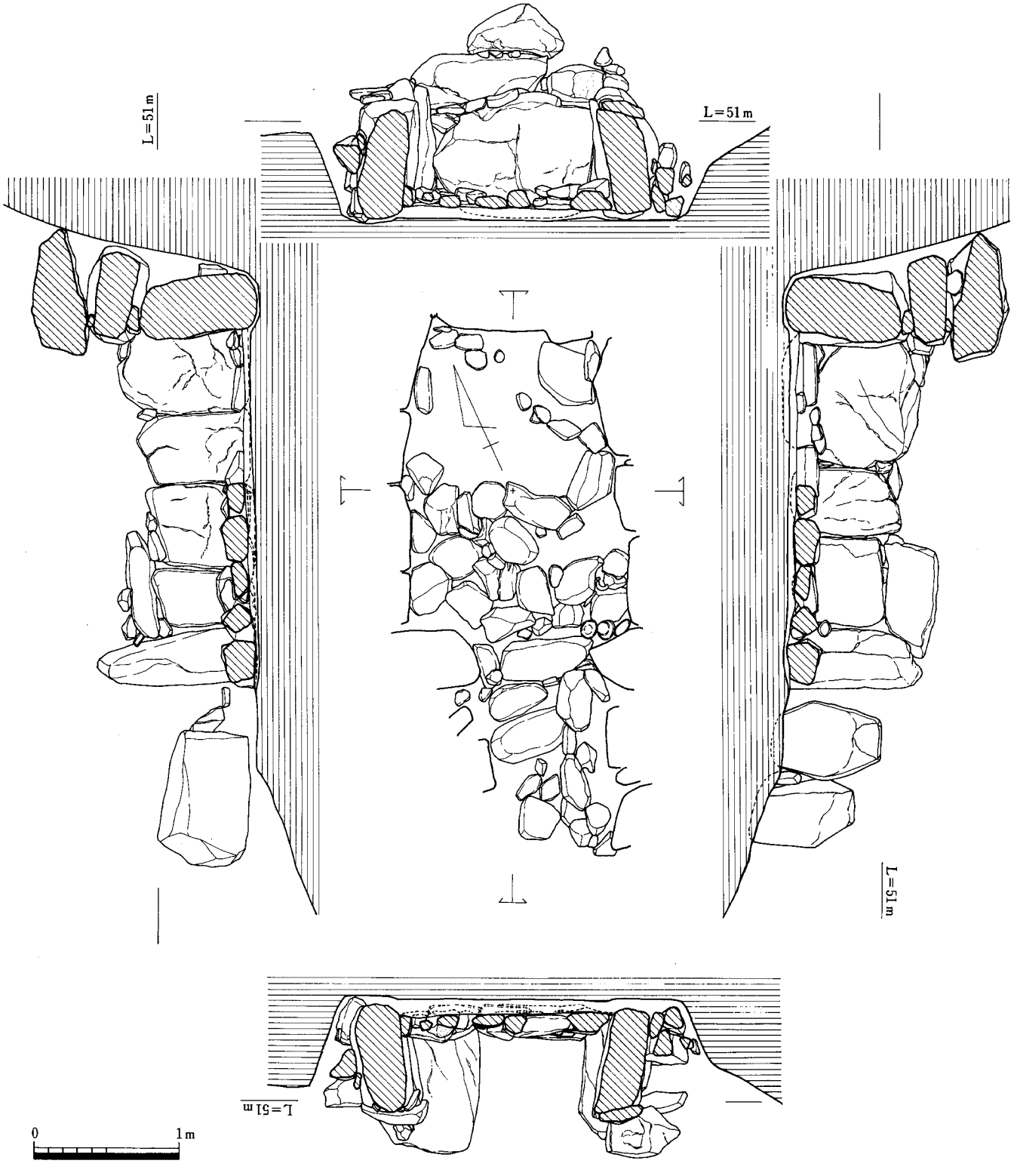


Fig.10　2号墳石室平面・断面図（縮尺1/40）

度平坦面を造り出し、奥壁裏込め付近でほぼ垂直に掘り下げている。腰石掘り方の標高は75mで、その比高差は1.6mである。

Bトレンチの土層は第Ⅰ層が暗黄褐色粘質土で、第Ⅲ層よりも砂粒の混入が多い。第Ⅱ層が砂粒を多く含む淡灰黒土、第Ⅲ層が若干の砂粒混入の暗黄褐色土、第Ⅳ層が黄褐色粘土瘤が混入した暗茶褐色粘質土、第Ⅴ層が粘質が弱く砂粒の混入が多い灰褐色土、第Ⅵ層が若干の砂粒が混入し、締まりが弱い黄褐色粘質土、第Ⅶ層が砂粒が多く混入する赤褐色粘質土、第Ⅷ層が若干の砂粒を含む黄褐色粘質土、第Ⅸ層が第Ⅷ層より粘質があり、良く絞まった暗黄褐色粘質土、第Ⅹ層は粘質に富み締まりがよい暗褐色粘質土、第Ⅺ層は第Ⅹ層よりも砂粒を含む暗黒褐色粘質土である。

土　坑（Fig.11　PL.2・3）

2号墳墓道左側辺部に位置し、長軸方向N−9°−Eに主軸をとる。土坑自体は二段構造を呈するが、西側部分は上段が削平され検出出来なかった。土坑の下面構造は一辺がややいびつな長方形を呈するもので、長軸1.36m、短軸0.17mを測る。上段構造は削平のため定かではないが、その構造を復元すると長軸1.7m、短軸1.1mを測る。出土遺物は02009の完形白磁が出土した。

出土遺物（Fig.12　PL.18）

須恵器（Fig.12−1・2・4・6・7　PL.18）　**杯蓋**　杯蓋は破片を含めて10点出土した。しかしながら盗掘を受けていることからかなりの破砕を受けており、図示できるものは1・2の二点であった。

1は口径13.5cm、器高2.4cmで宝珠形のつまみを有し、受部は返りは低く短い。復元完形であるが、遺存状態は1/3程度である。色調は灰褐色を呈し、焼成は良好、ロクロ回転は時計廻りである。 2は天井部が欠損しているためつまみの有無は定かでない。内側かえり受け部が高いところからつまみの無い形状を考えられる。復元口径13.7cm。色調は灰褐色を呈し、焼成は良好、ロクロ回転は時計廻りである。 4は須恵器の杯身である。口径12.8cm、器高3cmを測り、底部付近だけに回転篦削りを施し、他はナデ仕上げである。色調は灰褐色を呈し、焼成は良好、ロクロ回転は時計廻りである。2と4とがセットと考えられ、蓋と身が逆転する時期のもので、古墳築造年代を決定できる資料である。 6は高坏の脚部とも考えたが、端部の造りから平瓶・提瓶の口縁部として上げておく。口径9.8cm、残存高5.9cmを測り、内外面に捻り痕が認められる。 7　大型甕形土器の口縁部である。

土師器（Fig.12−3・5・8　PL.18）　3・5は土師器碗である。3は無高台、5は高台が付く。3は口径13.4cm、器高3.3cm、底径8cm、色調は赤灰褐色を呈する。内面ナデ仕上げ、外面は底部付近までナデ仕上げで、底部は篦削りを施している。5は遺存状態が1/5程度で辛うじて図化出来た。底径9cm、高台高1cmである。 8は土師器の甕形土器である。胴部はやや内湾しながら立ち上がり、頸部で外側に大きく開く。外面調整は縦に刷毛目と斜め・横刷毛目を施す。内面は口縁部が刷毛目、胴部がナデ仕上げを行っている。口径13.4cm、色調は赤褐色を呈する。羨道部より出土。

白磁（Fig.12−9・10　PL.18）　9は白磁碗である。内湾気味に外側に開きながら立ち上がり体部中央で僅かに稜を有し、口縁下で外反し、端部は平坦面を造り出す。器底が厚く見込みは小さい。体部との境は段を持つ。高台はやや高く、外底のくりは浅い。畳付は平坦な面と角を斜めに削る部分がある。釉は高台脇まで厚めに施し、口縁端は釉を削り取り口ハゲとする。釉色はガラス質の青白色を呈する。露体部は茶褐色を呈する。土坑からの出土で口径15.6cm、器高8.1cm、底径5.4cmを測る。13世紀中頃。 10も9と同じ白磁碗である。高台付根より直線的に外方に開くタイプの碗で、見込みのやや上方で深い削りにより溝を造り出す。高台は幅が広くやや外側に開く。外底のくりは浅い。釉は高台脇までだが、畳付は釉を施した後、削り取った痕跡がその両端に残る。釉色は青白色を呈し、外面に貫入が認められる。高台内は黄褐色、体部は青白色を呈する。底径7.4cmを測り、墳丘からの表採品である。

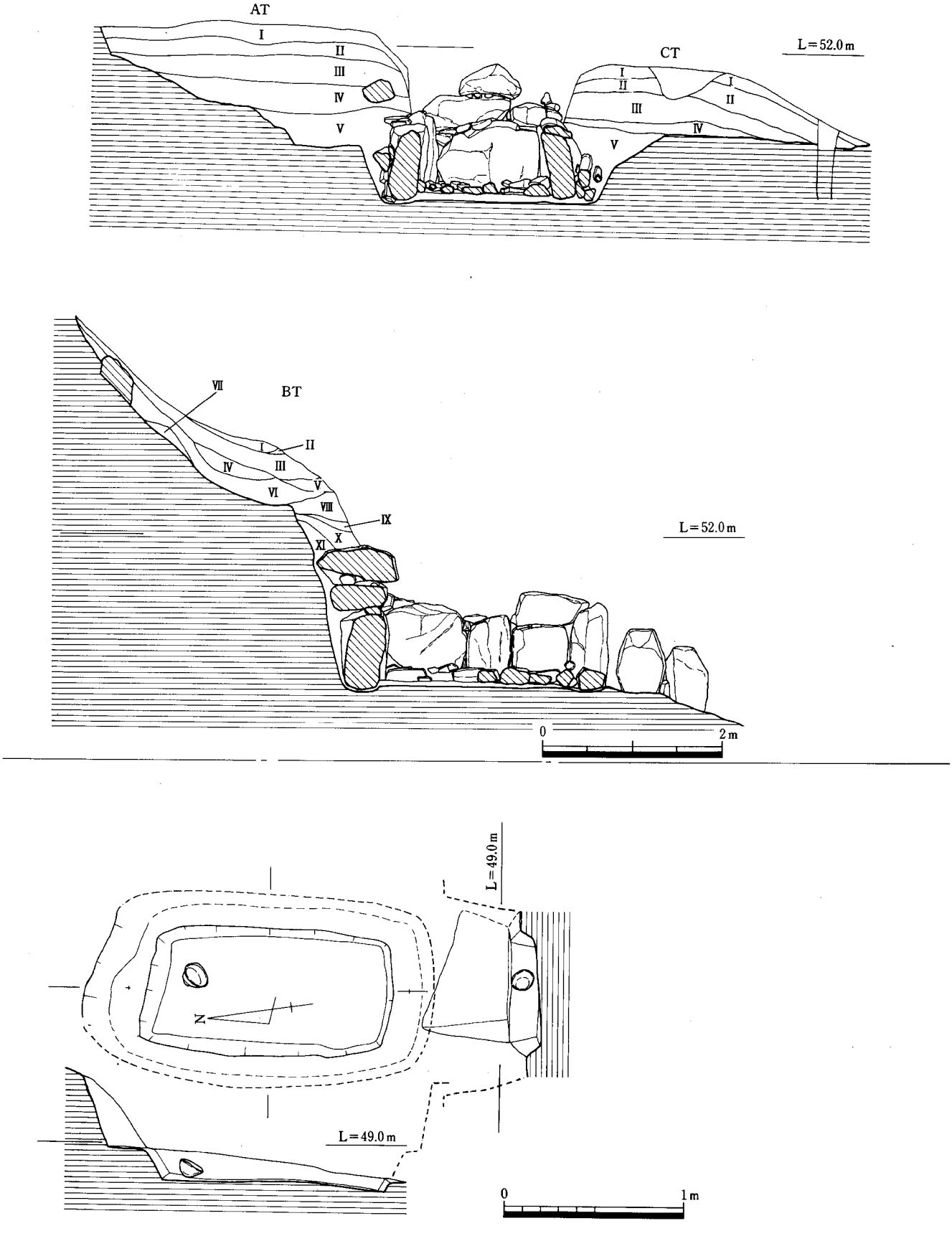


Fig.11　2号墳土層断面図、土坑実測図（縮尺1/30，1/60）

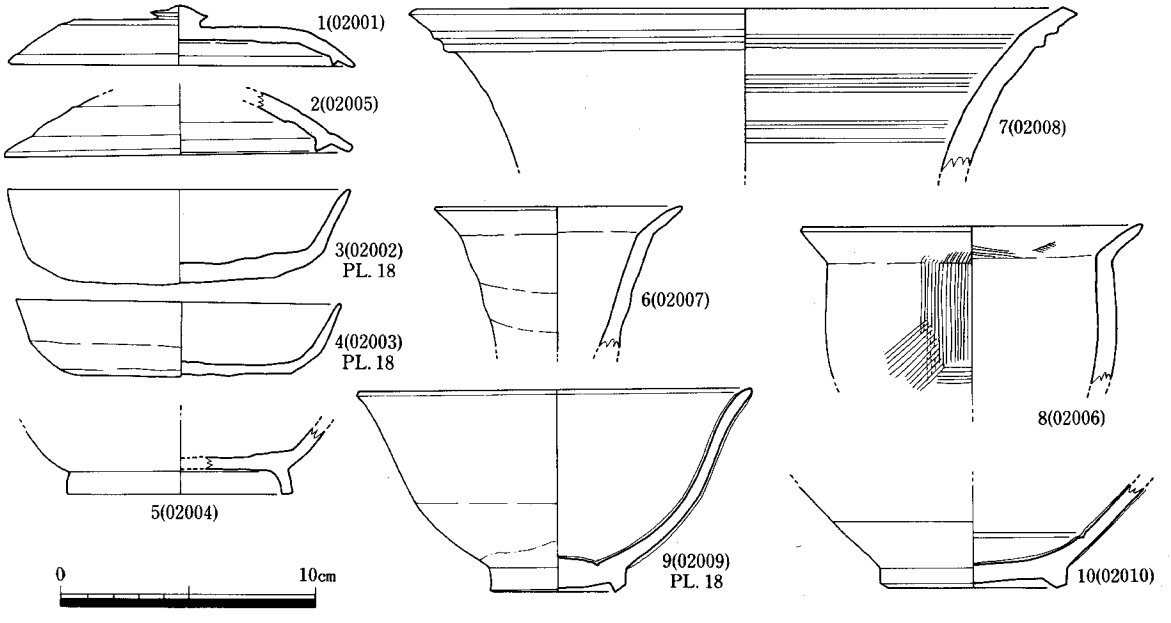


Fig.12　２号墳出土遺物実測図（縮尺１／３）

第３号墳の調査

位置と現状（Fig.８・13～16　PL.４・５）

３号墳はヤツデ状に広がる尾根の南側斜面に位置し間に谷部が広がっている。この南側斜面には３基の古墳（２～４号墳）があり、３・４号墳は２号墳をのせる尾根と谷を挟んだ東側に位置する。２号墳から３号墳までの距離は約43mで、３号墳から４号墳までの距離は北に20mである。同じ尾根上東側120mに８・９号墳が位置し、谷を挟んで南東側340mに６・７号墳がある。

３号墳は標高56～59mに位置し、南側斜面の緩やかな部分に構築され、調査前から羨道天井石が露出し、古墳であることが確認されていた。石室は南に開口しており、石室内部が撹乱されていた。石室構造は天井石まで遺存している古墳で、羨道部天井石が露出していることから上部の墳丘盛土が失われている程度であった。石室主軸はN-30°30′-Eの方向をとる。

墳　丘（Fig.８・　PL.４・５）

墳丘は東から西に流れる等高線に沿って石室を築造していることから東側では緩やかな斜面であるのに対して、左側側辺部では急斜面を呈する。このため墳丘盛土の流出も等高線上にそっており東側部分は天井石のため流出が幾分くい止められている。これに対して羨道部天井石（最も墓道に近い天井石）が露出していたことから、この部分からの土砂の流出が著しかったものと思われる。

石室は主軸をN-30°30′-Eの方向を取る。

地山整形（Fig.13　PL.４・５）

石室構築が等高線（56～59m）と平行に石室掘り方を行っていることから、右側辺部が1.5mの深さで掘削し（地山の高さは標高56.5m、掘り方下面標高55mで比高差は1.5m）、腰石も掘方ギリギリに配置されるのに対して、左側辺部の地山の高さは標高54.75m、掘方下面標高54.15mで比高差は0.6mで浅い。主軸が等高線に平行であるため地山整形は三段形成である。東側側壁部分から東に約5.2m部分から傾斜面に沿って掘込みが行われており、第一段目は浅い窪みで終了している。二段目は半月形の溝を呈し、南北に分かれる。この部分から墳丘盛土が始まるものと思われる。第三段目は急激な傾

斜を持ち石室奥壁腰石まで掘り込まれており、その傾斜角度は79度で、掘方の深さは1.5mある。腰石部分から羨道部一枚目の石まで平坦面となる。北側部分は広い掘り方が行われ平坦面を造り出している。裏込め石は奥壁の掘り方が広いにもかかわらず奥壁側に僅かに認められる程度である。右側は掘り方ギリギリであることから裏込め石は無い。左側は掘り方が緩やかであることから人頭大の円礫を多量に配している。

石　室（Fig.14　PL.4・5）

石室はN-30°30′-Eに主軸を持ち、長軸2.7m、短軸2.35m、奥壁幅2.0m、側壁幅2.1m、石室入り口部幅1.15m、羨道長2.7m、幅1.15mの正方形を呈し、石室面積6.34㎡である。石室と羨道部の長さの比率は1：1である。床面は殆ど剝ぎ取られており、僅かに右側壁部に五石残る程度である。奥壁は二枚の花崗岩を配し、右側辺部は三枚、左側辺部も三枚の花崗岩を配列している。石積み方法は左側辺部が目地の通る重箱積みであるに対して奥壁・右側辺部はレンガ積みである。奥壁腰石は面取りを行っていないが、左右側辺部腰石長方形の切石を使用し、面取りを行っている。腰石から少しずつ競り上がりながら六段で天井石に達している。

天井石（Fig.15　PL.4）

天井石まで遺存している古墳は3号墳と8号墳だけである。3号墳は羨道部に二枚、框石上に一枚の大石を配している。石室天井石は大石で、横・縦とも1.5m、幅0.7mを測る。

閉塞施設（Fig.15　PL.5）

閉塞施設は框石上から羨道部に設置されているが、その長さ2.3m、高さ0.5mで遺存していた。天井高は1.5mであることから約1mが取り除かれていたことになる。閉塞石は長方形の礫を主体で、廻りに小円礫・粘土等で固めている。

土　層（Fig.16　PL.4・）

主軸延長上の墳丘にトレンチを設定し、東西方向にA・Cトレンチ、南北方向にBトレンチの3本を設定し土層観察と地山の検出に努めた。石室横断面と組み合わせているA・Cトレンチでは地山の高さが異なりを示し、Cトレンチの地山が高く等高線と平行に築造したことが窺える。A・Cトレンチの土層は第Ⅰ層が表土層、第Ⅱ層が赤褐色粘質土、第Ⅲ層が赤褐色土、第Ⅳ層が第Ⅱ層より明るい赤褐色粘質土、第Ⅴ層が暗赤褐色粘質土、第Ⅵ層が第Ⅴ層よりやや暗い暗赤褐色粘質土、第Ⅶ層が荒砂を含む赤白褐色粘質土である。第Ⅷ層は小砂粒を含む暗赤褐色粘質土、第Ⅸ層は第Ⅶ層より白い赤白褐色粘質土である。第Ⅹ層は第Ⅱ層より赤味が強い赤褐色粘質土、第Ⅺ層は茶褐色粘質土、第Ⅻ層は第Ⅹ層より赤味の強い赤褐色粘質土、第XⅢ層は小砂混じりの明るい赤褐色粘質土、第XⅣ層は明茶褐色粘質土、第XⅤ層は第XⅣ層よりも暗い茶褐色粘質土、第XⅥ層は赤味の強い明茶褐色粘質土である。Cトレンチの第一段目は溝と考えられる。この部分から墳丘盛土が始まり、平坦面と地山整形端が溝と考えられ、土層の堆積からも溝であったことが窺える。

Bトレンチは主軸の長軸方向に入れた。地山の標高は56.4mで、緩やかな傾斜で掘り方部分までくる。奥壁裏込め付近でほぼ垂直に掘り下げている。腰石掘方の標高は56.5mで、その面の端部より1mの比高差がある。A・Cトレンチの土層と変化はない。第Ⅰ層が表土層、第Ⅱ層が赤褐色粘質土、第Ⅲ層が赤褐色土、第Ⅳ層が第Ⅱ層より明るい赤褐色粘質土、Bトレンチでは第Ⅴ層なく第Ⅳ層の下は第Ⅵ層がくる。第Ⅵ層は第Ⅴ層よりやや暗い暗赤褐色粘質土、第Ⅶ層が荒砂を含む赤白褐色粘質土である。第Ⅷ層は小砂粒を含む暗赤褐色粘質土、第Ⅸ層は第Ⅶ層より白い赤白褐色粘質土である。第Ⅹ層は第Ⅱ層より赤味が強い赤褐色粘質土である。

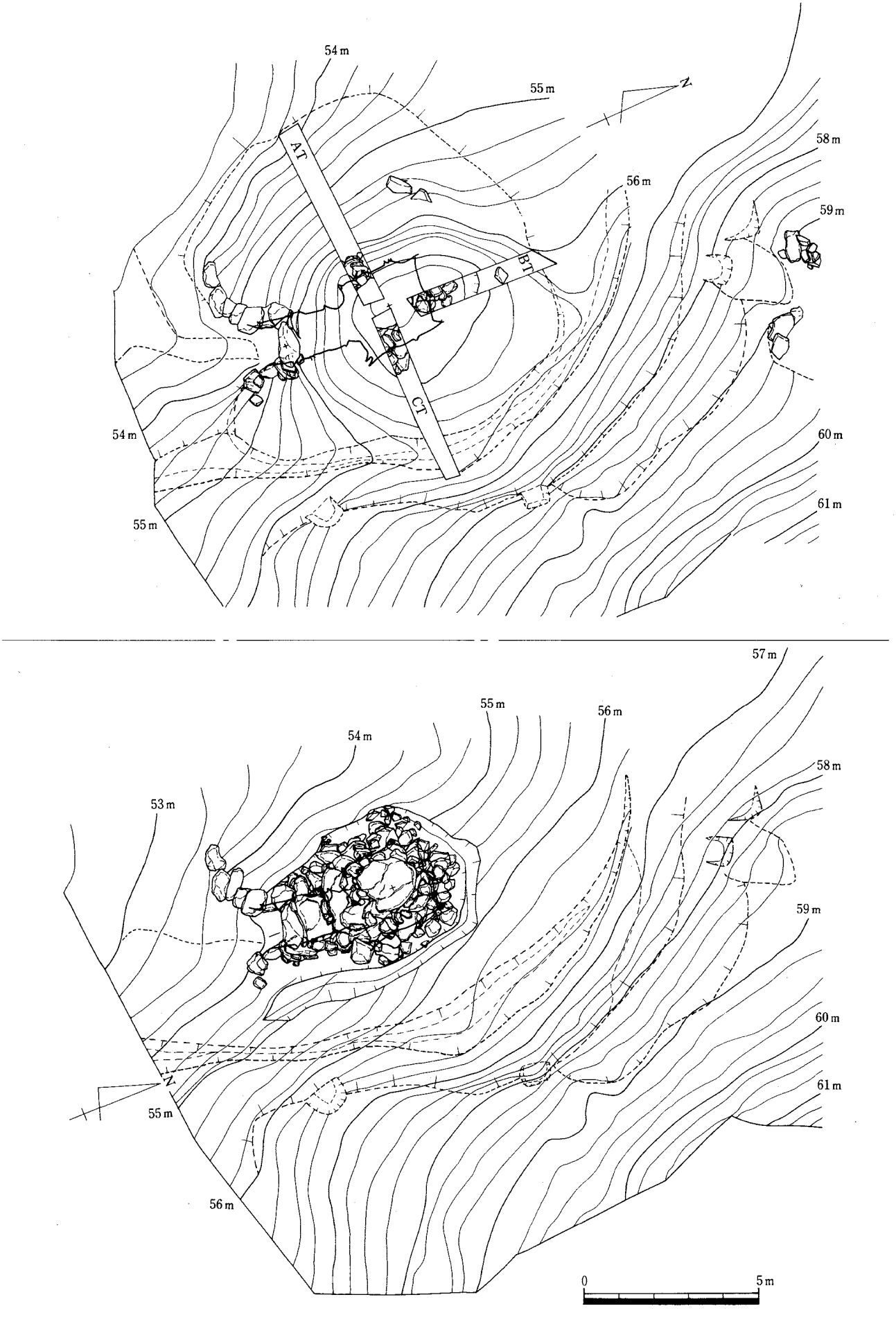


Fig.13　３号墳墳丘測量図、地山整形図（縮尺１/150）

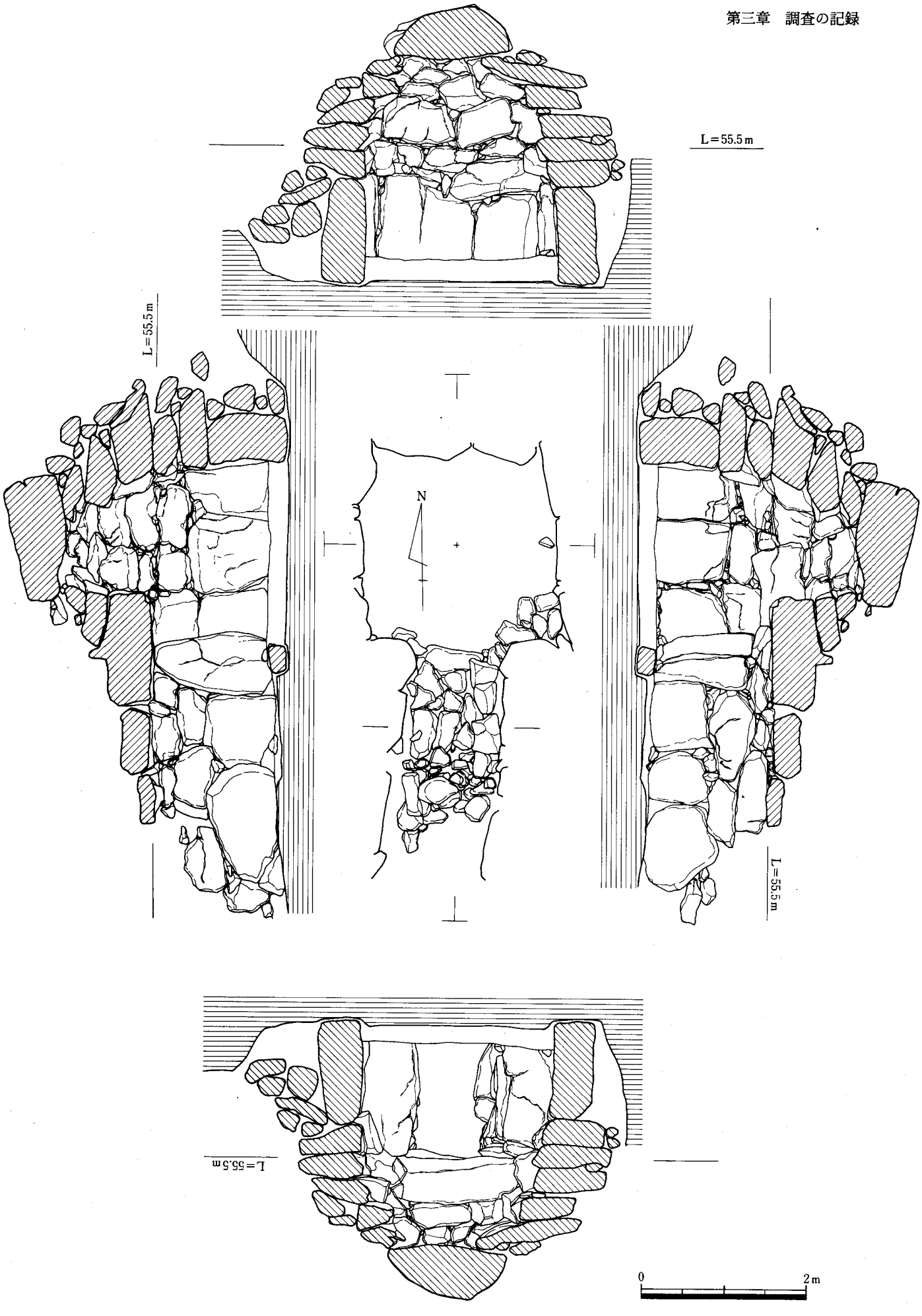


Fig. 14　3号墳石室平面・断面図（縮尺1/60）

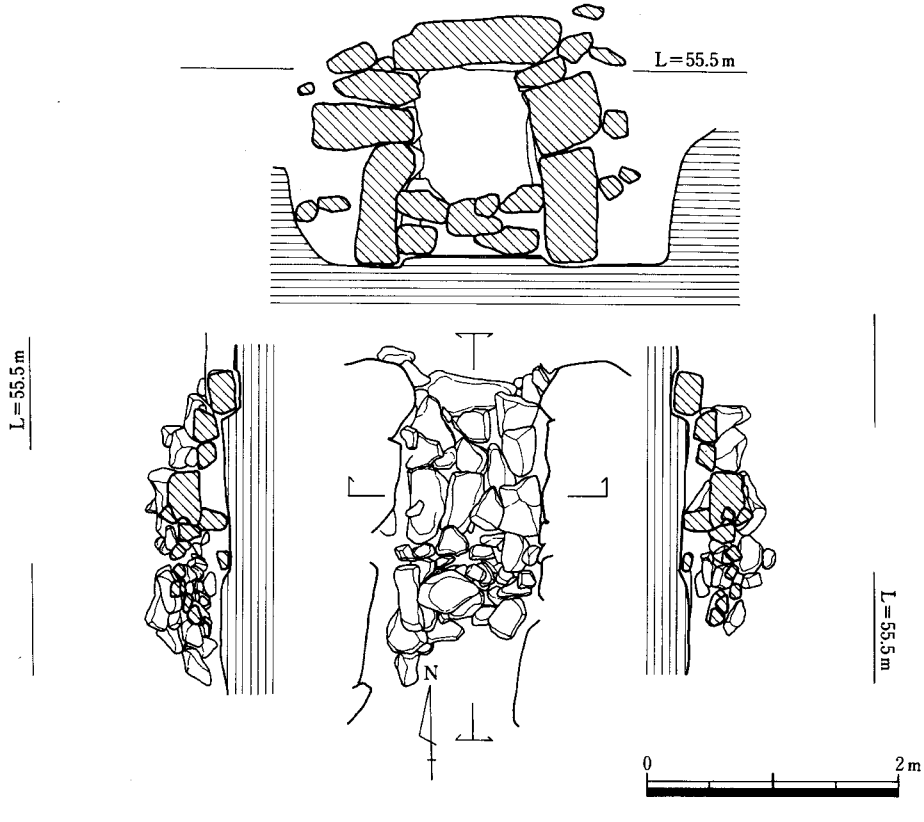


Fig.15　３号墳石室俯瞰図、閉塞施設実測図（縮尺１/60）

出土遺物（Fig.17・18　PL.18）

出土遺物は石室自体が攪乱を受けているにもかかわらず60点ほど出土し、29点図示できた。また、銅銭（寛永通宝・一銭・半銭）も出土した。

須恵器（Fig.17・18-1～10・21　PL.18）

須恵器は85点出土した。その内15点を図示した。石室・羨道内が攪乱を受けていたため、現位置を保つものはない。

甕形土器

1は中型の甕形土器である。底部は欠損するが、最大径を胴部中位に持ち、遺存高21cm、口径14cmを測る。内面胴部は同心円文のタタキ、口縁部はナデ仕上げを行っている。口唇部に「川」状の篦記号がある。外面は縦のタタキとカキ目を施している。 2はこれも胴部下位が欠損しているが、大型の甕形土器である。口径45cmを測る。最大径は胴部上位にあり、球形胴部から外に外反しながら立ち上がり、口縁部端で折曲げ段を有する形態に仕上げている。口縁外面には5本の沈線を巡らしている。胴部外面はナデ仕上げ、内面は同心円文のタタキを施す。1・2とも3区周溝出土である。

杯

杯は10点図示した。1・2、5・6が杯の蓋である。1・2は天井部につまみが付かないもので、受け部の立ち上がりが高い。篦削りは約1/4程度で天井部付近だけである。他は回転ナデ及び水引き仕上げを行っている。内面はナデ仕上げである。1は口径10.4cm、器高1.8cm、2は口径11.2cm、器高2.0cmで、玄室攪乱からの出土である。5は天井部が欠損するため不確定であるが、宝珠状のつまみがつく蓋であろう。口径15.4cm、器高3.9cmで天井部から2/3が回転篦削りを施し、ロクロ回転は逆時計廻りである。内面は回転水引きと停止ナデを施す。色調は外面暗赤褐色を呈する。6は須恵器の生焼の蓋である。口径13.6cm、器高1.8cmである。17も同様に須恵器の生焼であるが、土師器と区別出来る点は、粘土が精製されており色調が淡赤白色を呈している。 杯身3・4とも小型の杯身で、3は口径9.6cm、器高2.6cm、4は口径10.4cm、器高2.2cm7は蓋とも考えたが底部が平坦であること、器高が高いことから杯身としておく。口径13.6cm、器高3.0cm、底径7.5cmを測る。8～10は胴部に一条の沈線を有する杯身である。8・9の底部に「个」の篦記号がある。8は口径10.0cm、器高3.8cm、底径6.6cm、9は口径9.2cm、器高3.0cm、底径6.6cm、10は口径9.0cmを測る。

高台付碗形土器

17は生焼けの高台付碗形土器である。口径16.0cm、器高6.4cm、底径5.4cm、高台高0.4cmを測る。20も高台付碗形土器である。口径13.0cm、器高5.2cm、底径10.4cm、高台高0.8cmを測る。色調は17が淡赤白色、20が暗灰褐色を呈している。

長頸壷

口縁部の破片が出土しているが、これから長頸壷と判断した。接点がないため口縁部は図示しなかった。卵形の胴部に高台を付している。胴部中位に二条の沈線を配するが、この部分が内面では継ぎ目の部分に当たる。この沈線より下方は回転ナデ仕上げを行い、高台部分はナデ仕上げを施す。上部は自然釉がかかる。内面は回転ナデ仕上げを行っている。最大径は胴部中位にあり21cm、底径13.3cm、高台高1.8cmを測る。

土師器（Fig.18-11～20、22、23　PL.18）

碗形土器　11は口径10.5cm、器高2.1cm、底径7.0cm、12は口径9.6cm、器高2.4cm、底径6.8cm、13は底径7.2cm、14は口径12.4cm、器高4.0cm、底径8.6cmを測る。調整はナデ仕上げである。

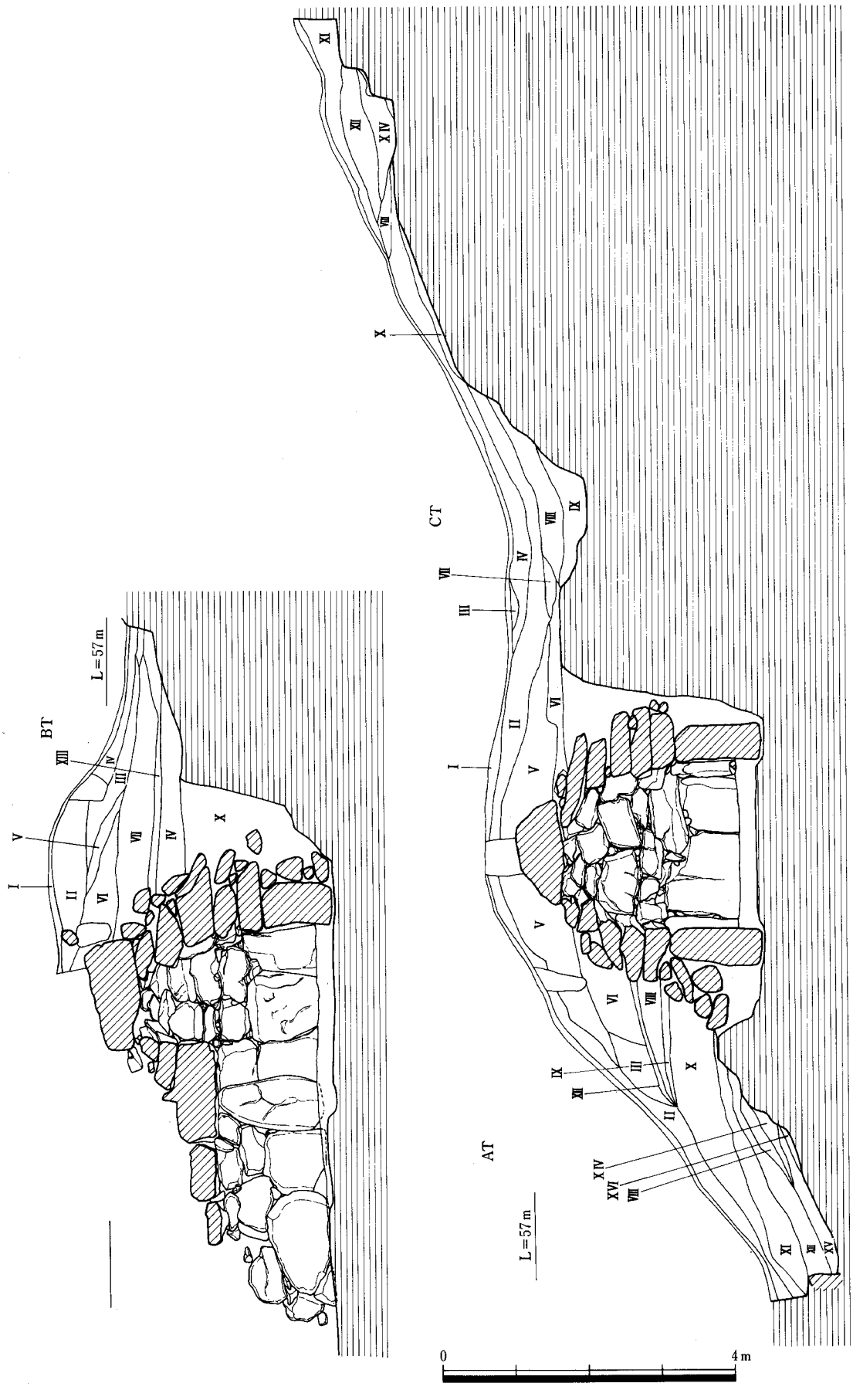


Fig. 16　3号墳土層断面図（縮尺1/80）

高台付碗形土器　15は底部に板目痕が残るもので、底径9.0cm、高台高0.9cmを測る。16は口径14.0cm、器高5.1cm、底径7.8cm、高台高0.8cmを測る。18は底径5.4cm、高台高0.6cm、19底径8.4cm、高台高0.9cmを測る。

22は古式土師器の甕形土器である。底部は欠損しているが、卵状の胴部を有し、口縁部はやや外反しながら端部で丸く納める。口径12.0cmを測り、色調は暗褐色を呈する。

23は土師皿である。口径8cm、底径6.9cm、器高1.2cmで、底部に糸切り痕が残る。内外面ともナデ仕上げである。色調は赤褐色を呈する。

黒色瓦器（Fig.18-24　PL.18）

上部を欠損しているためその構造は不明であるが、恐らくそのまま立ち上がり鉢状を呈するものと思われる。底部に三足を配している。内外面とも黒色を呈するが、外面の一部に赤褐色を呈する部分がある。調整は内外面ともナデ仕上げを行うが、外面底部に篦削りが認められる。

青白磁（Fig.18-25～27　PL.18）

25は龍泉窯系青磁碗である。底部を欠損するが、腰が張るタイプで、口唇部に浅い刻目を入れ輪花を造り出す。外面は文様は施されず、内面に二本の片切彫りによる刻線で器壁を区分し、花びら状の文様を造り出す。区画内は曲線文及び櫛描文で構成される。釉は淡鶯色を呈し、これによって文様が浮きでてくる効果を持たせている。口径17.6cmを測る。3区周溝内より出土した。博多遺跡群の分類ではⅠ類の範疇に入り、13世紀から14世紀に比定出来る。26は同安窯系青磁碗である。高台脇より内湾気味に外方に開きながら立ち上がり口縁端部を丸く納める。外面調整は篦削り後一定間隔で約10本の櫛目による櫛描文を施し、内面は片切彫による刻花文及び櫛刺突文による雷光文を施す。口縁下に一条の沈線が巡り、見込みは段を持つ。釉は黄色味かかった若草色で高台脇まで施釉し、一部は高台までおよぶ。高台内は露体で濃いあずき色を呈する。全体に細かい氷裂が認められ、又摩擦により釉の表面がはぎ取られ白色を呈する部分がある。外底の削りは粗く中央が突出する。3区墳丘より出土。口径15.9cm、底径4.6cm、器高6.15cmを測る。Ⅱ類で13～14世紀。

27は白磁碗である。半球形を呈する小振りの碗で白色の釉を施す。体内面下位横位に一本の青色の線を染付する。口径13.4cmを測る。墓道から出土した。

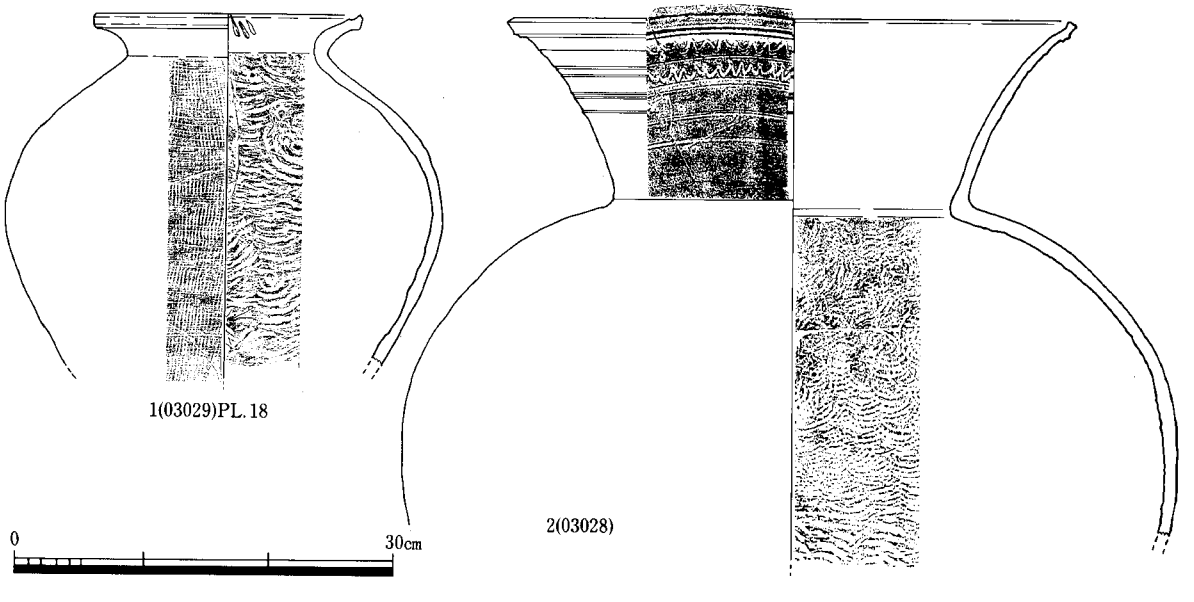


Fig.17　3号墳出土遺物実測図－1（縮尺1/6）

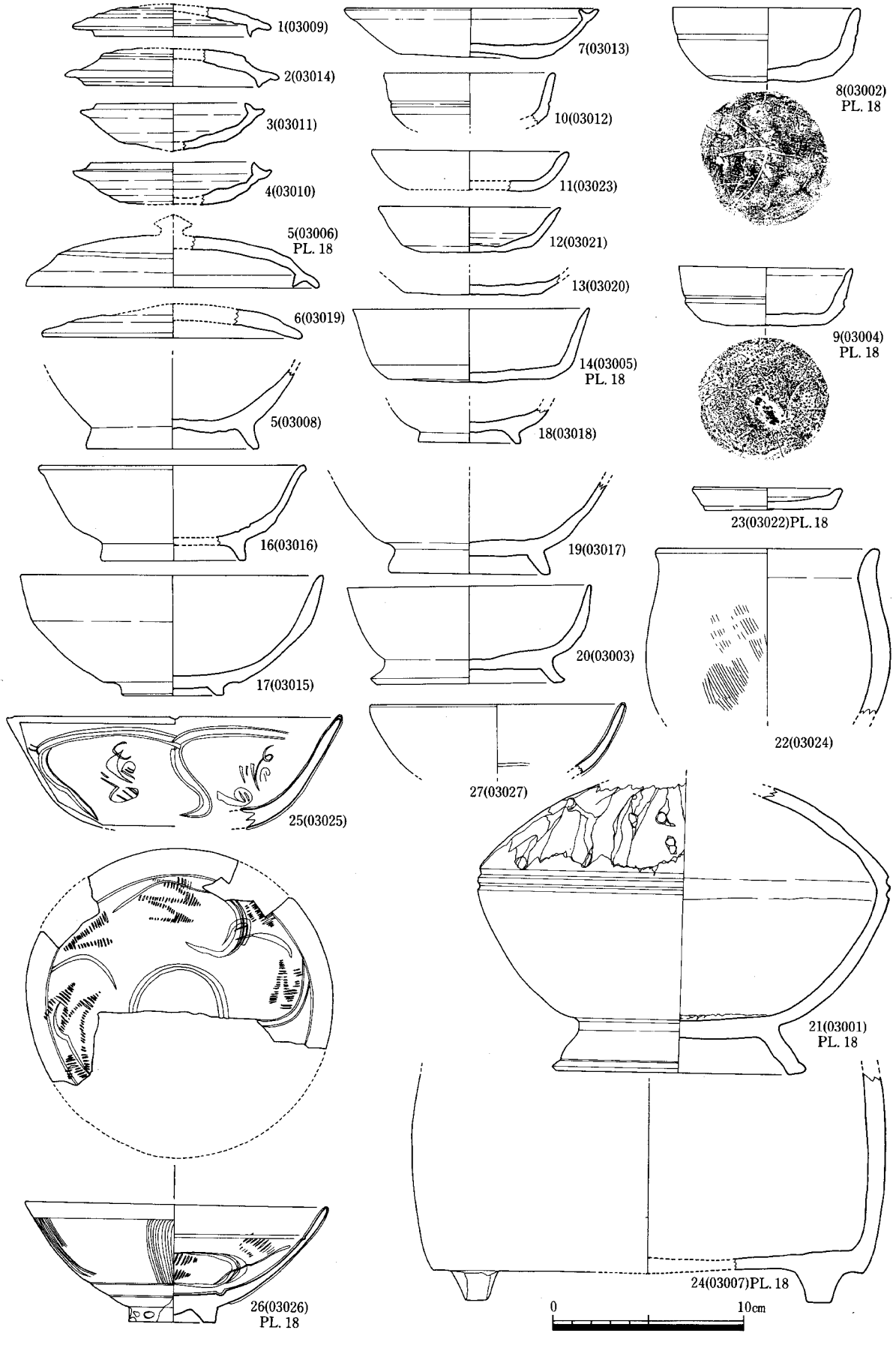


Fig.18　３号墳出土遺物実測図－２（縮尺１／３）

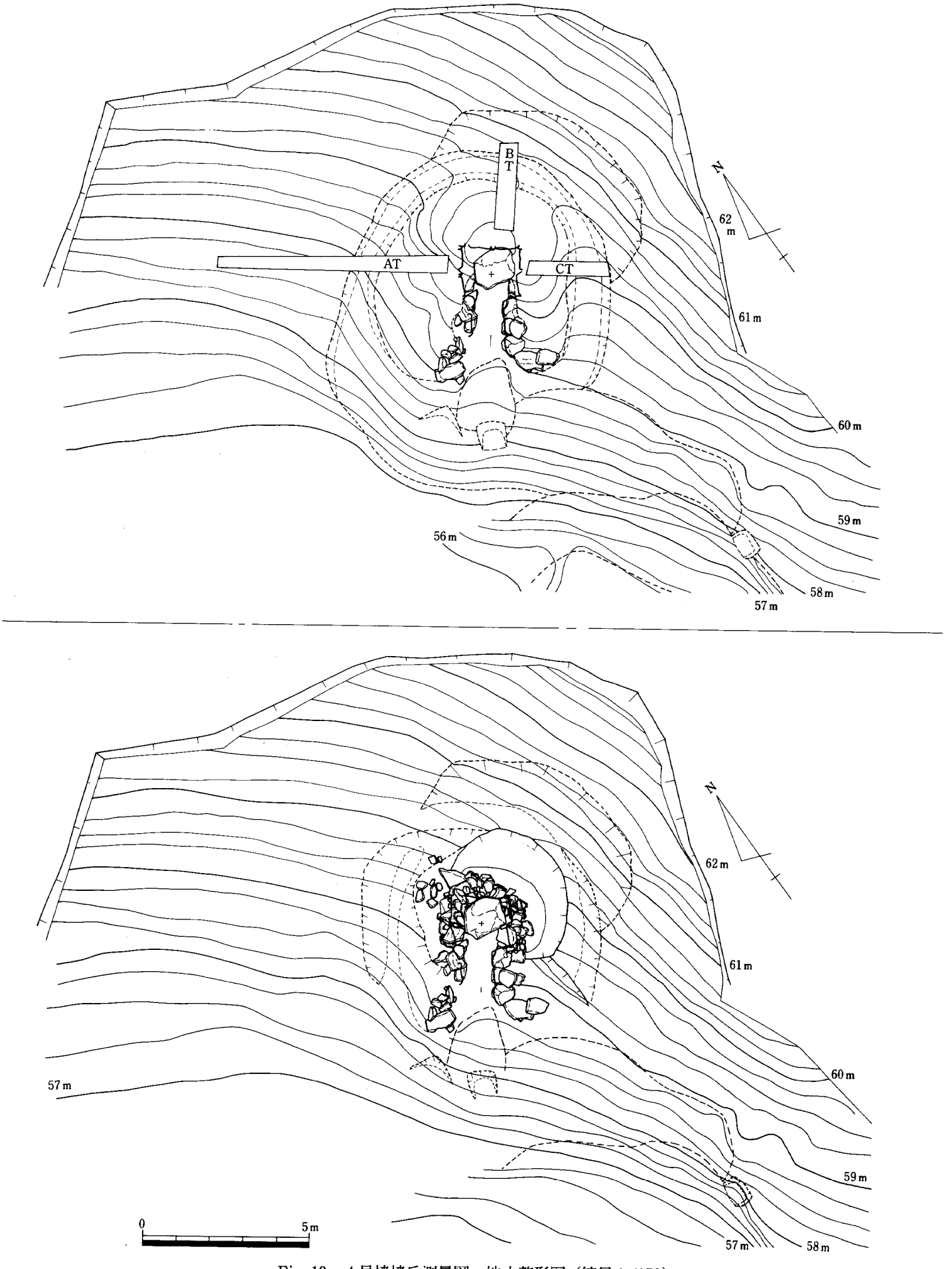


Fig.19　4号墳墳丘測量図、地山整形図（縮尺 1 /150）

第４号墳の調査

位置と現状（Fig.８・19～21　PL.６）

４号墳はヤツデ状に広がる尾根の南側斜面に位置し、間に谷部が広がっている。この南側斜面には３基の古墳（２～４号墳）があり、３・４号墳は２号墳をのせる尾根と谷を挟んで東側に位置する。４号墳から２号墳までの距離は約45mで、４号墳から３号墳までの距離は南に20mである。

４号墳は標高58～62mに位置し、南側斜面の緩やかな部分に構築され、調査前から天井石が露出し古墳であることが確認されていた。石室は南西に開口しており、石室内部は撹乱されていた。石室構造は、石室天井石だけが遺存し羨道部天井石は抜き取られていた。天井石が露出していることから上部の墳丘盛土が失われており、他の天井石は抜き取られていた。石室主軸はN-35°30′-Eの方向をとる。

墳　丘（Fig.８・19　PL.６）

４号墳は標高58～62mに位置し、南西に開口し、石室主軸N-35°30′-Eの方向を取る。北側は急勾配の斜面を呈し、南側はやや緩やかな斜面の等高線上に垂直に構築されている。調査時には石室天井石一枚しか遺存せず、他の天井石は抜き取られていた。墳丘盛土は東側が薄く西側が厚く堆積しており、流土の状況からも傾斜面に沿って流れていた。墳丘の遺存状態は石室北側の等高線上に段落ちが認められるほか羨道部・墓道部付近にも段落ちが認められ、周溝が遺存したことが明らかである。南側斜面に築造していることから上部からの流土が全体を覆う形となっている。

地山整形（Fig.19　PL.６）

主軸が等高線の斜めに位置するため、地山整形は二段形成である。北側奥壁部分から北に約3.5m部分から掘込みが行われており、第一段目は浅い窪みで終了している。この部分から墳丘盛土が始まるものと思われる。第二段目は石室奥壁腰石から1.2mの部分から掘り方を行い、やや緩やかな傾斜を持ち、石室奥壁腰石まで掘り込まれており、その傾斜角度は42度で、掘り方の深さは1.5mある。腰石部分から羨道部三枚目の石まで平坦面となる。東西部分は広い掘り方が行われている。裏込め石は奥壁部にゆとりがあるため数多くの石を配置している。両左右は掘り方が緩やかであることから人頭大の円礫を多量に配している。

石　室（Fig.20　PL.６）

石室はN-35°30′-Eに主軸を持ち、長軸1.55m、短軸1.64m、奥壁幅1.72m、石室入り口部0.84m、羨道長1.73m、幅0.98mの正方形を呈し、石室面積2.55㎡で、天井高1.65m、石室と羨道部との比率は1：1.16の割合である。床面はその殆どが剝ぎ取られ、僅かに左側辺部の三石が残る程度であった。奥壁は二枚の花崗岩を配し、右側辺部も二枚、左側辺部も二枚の花崗岩を配列している。石積み方法は煉瓦積みである。石室左側辺部隅に完形の須恵器（Fig.22-３・５・６）が出土した。

天井石（Fig.21　PL.６）

４号墳は石室に一枚天井石が遺存しているだけである。他は現状では見あたらないところから持ち去られたものと思われる。石室天井石は大石で、横1.0、縦1.3m、幅0.5mを測る。

閉塞施設（Fig.20　PL.６）

閉塞施設は框石から0.5mの羨道部に設置されているが、長さ1.2m、高さ0.65mで遺存していた。天井高が1.2m程度と推定されるところから約0.5mが取り除かれていたことになる。閉塞石は人頭大の礫を主体で、廻りに小円礫・粘土等で固め４段まで遺存している。

土　層（Fig.21　PL.６）

主軸延長上の墳丘にトレンチを設定し、東西方向にA・Cトレンチ、南北方向にBトレンチの３本

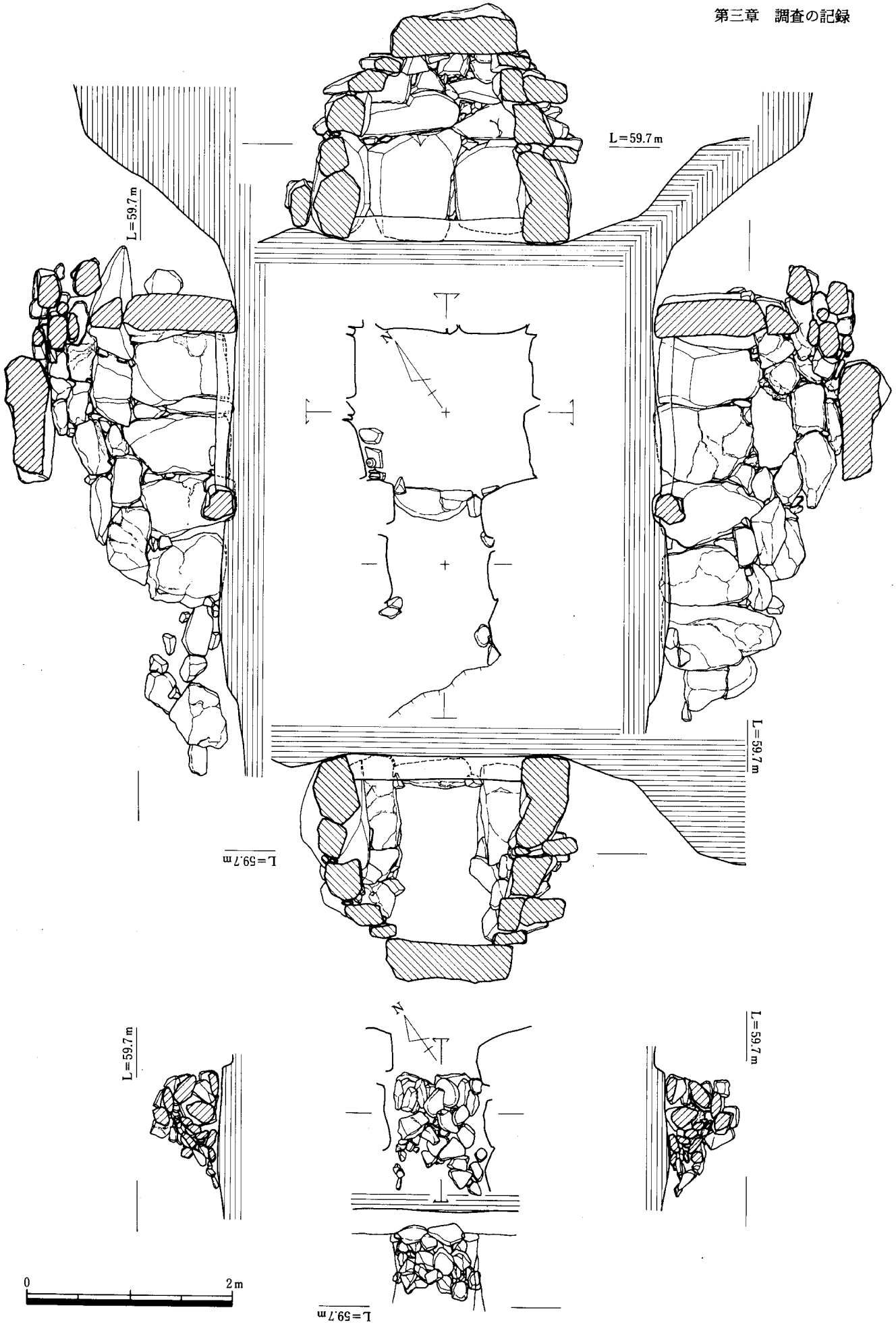


Fig.20　4号墳石室平面・断面図、閉塞施設実測図（縮尺1/50）

を設定し土層観察と地山の検出に努めた。石室横断面と組み合わせているＡ・Ｃトレンチでは地山の高さが異なりを示しＣトレンチの地山が高く等高線の斜めに築造したことが窺える。Ａトレンチの土層は第Ⅰ層が表土層、第Ⅱ層が絞まりが悪くポロポロした褐色粘質土、第Ⅲ層が黄褐色粘質土、第Ⅳ層が第Ⅱ層より濃い褐色粘質土、第Ⅴ層が粘質が強く堅く固められた黄褐色粘質土、第Ⅵ層が堅く締まりの良い暗褐色粘質土、第Ⅶ層が第Ⅵ層より濃い暗褐色粘質土である。第Ⅷ層は粘質が強い暗茶褐色粘質土、第Ⅸ層は絞まりが弱く粘質の強い暗灰褐色粘質土である。第Ｘ層は粘質が弱く若干灰色を帯びる暗褐色粘質土、第Ⅺ層は若干明るい茶色気味の暗褐色粘質土、第Ⅻ層は粘質が弱く絞まりの弱い茶褐色土、第ＸⅢ層は粘質の弱い焦茶色気味の淡灰黒色土、第ＸⅣ層は褐色粘土粒を含む灰褐色土、第ＸⅤ層は灰褐色土、第ＸⅥ層は第ＸⅢ層より粘質の強い淡灰黒色土、第ＸⅦ層は褐色粘質土、第ＸⅧ層はポロポロしており第ＸⅦ層より黒味を帯びる黒褐色粘質土，第ＸⅨ層は粘質に富む明るい色調の褐色粘質土である。

Ｃトレンチの土層は第Ⅰ層が表土層、第Ⅱ層が若干の砂粒を含む暗黄褐色粘質土、第Ⅲ層が第Ⅱ層よりも濃く粘質が強い暗褐色粘質土、第Ⅳ層が第Ⅲ層より灰色を帯び若干の砂粒を含む暗灰褐色土、第Ⅴ層が第Ⅳ層より灰色が強く粘質が強い暗灰黄褐色粘質土、第Ⅵ層が黄褐色粘土粒を若干含む暗黄灰褐色粘質土、第Ⅶ層が灰黄褐色粘質土、第Ⅷ層は灰茶褐色粘質土、第Ⅸ層は第Ⅷ層より濃く強く固められた暗灰茶灰褐色粘質土である。

Ｂトレンチは主軸の長軸方向に入れた。地山の標高は60.25ｍで、緩やかな傾斜で掘り方部分までくる。奥壁裏込め付近では緩やかに掘り下げている。腰石掘り方の標高は58.75ｍで、その面の端部より1.5ｍの比高差がある。Ｃトレンチの土層と変化はない。第Ⅰ層が表土層、第Ⅱ層が暗褐色粘質土、第Ⅲ層が明かるい暗褐色粘質土、第Ⅳ層が暗灰褐色粘質土、第Ⅴ層は淡黒色土、第Ⅵ層は第Ⅴ層よりやや淡い灰色が強い淡灰褐色粘土、第Ⅶ層は暗褐色粘質土、第Ⅷ層は褐色粘質土、第Ⅸ層は暗褐色粘質土、第Ｘ層は茶褐色粘質土、第Ⅺ層は堅く絞まっている暗茶褐色粘質土である。

出土遺物（Fig.22　PL.18）

出土遺物は石室敷石自体が破壊を受けているにもかかわらず、現位置を保った４点の他に35点出土した。図示できたのは須恵器10点・青磁１点である。この他に大甕の破片、土師器片が出土したが、図示にたえるものはない。その殆どが石室玄室内撹乱及び周溝・墓道が主である。

須恵器（Fig.22-1～10　PL.18）

須恵器は10点図示した。**杯蓋**　１から４は杯蓋である。ほぼ同時期のもので、宝珠状のつまみ有する。４が最大径を持ち、**3**・**4**は受け部の立ち上がりが高い。これに対して**1**・**2**は立ち上がりが低く焼成段階で歪みが生じている。**1**は口径10.4㎝、器高3.4㎝のロクロ回転が逆時計廻りの杯蓋で天井部に箆記号「サ」がある。**2**は口径10.0㎝、器高3.0㎝のロクロ回転が逆時計廻りの杯蓋である。１・２とも石室左側辺部に現位置を保っていたものである。**3**は口径10.7㎝、器高3.6㎝のロクロ回転が逆時計廻りの杯蓋である。**4**は口径11.6㎝、器高2.8㎝のロクロ回転が逆時計廻りの杯蓋である。３・４とも墓道から出土した。色調は１～４とも暗灰色を呈する。

杯身　５点出土した。５・８・９の底部に箆記号「千・〆」がある。**5**は蓋とも考えたが底部が平坦で受け部の立ち上がり、箆削りから身とした。箆記号「千」があり、口径10.8㎝、器高2.6㎝、ロクロ回転が逆時計廻り。**6**は口径9.7㎝、器高4.0㎝、ロクロ回転が逆時計廻りで全てナデ仕上げを行っている。10は須恵記の高台付椀で、口縁下に一条の沈線を巡らす。高台は断面三角形を呈し、口径10.4㎝、器高4.2㎝、高台径６㎝を測る。11は青磁碗（Fig.22-11）の底部である。高台は四辺形を呈し、釉は高台外側まで見られ、内面には重ね焼きの後が認められる。底径6.5㎝を測る。

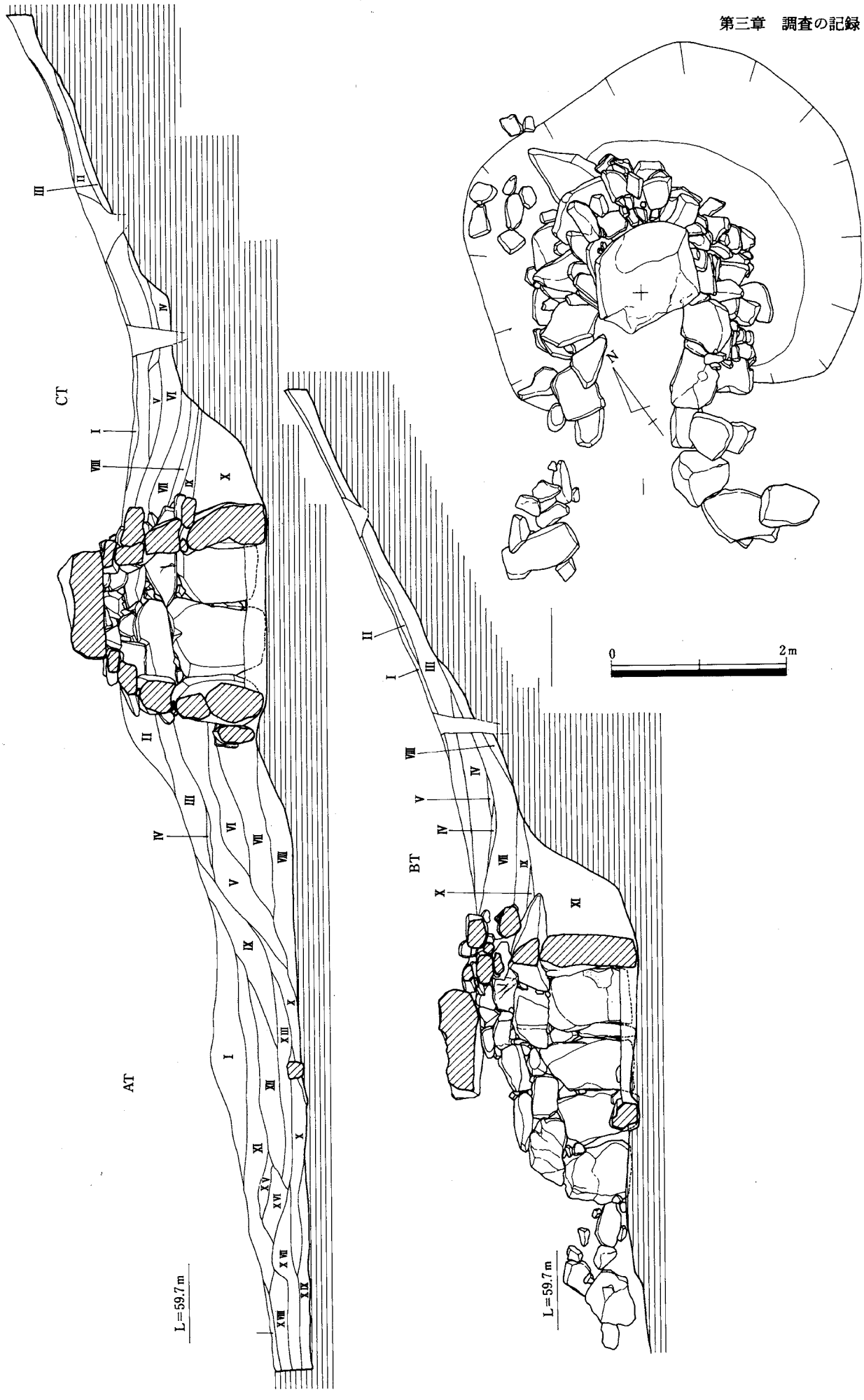


Fig.21　4号墳石室俯瞰図、土層断面図（縮尺1/60）

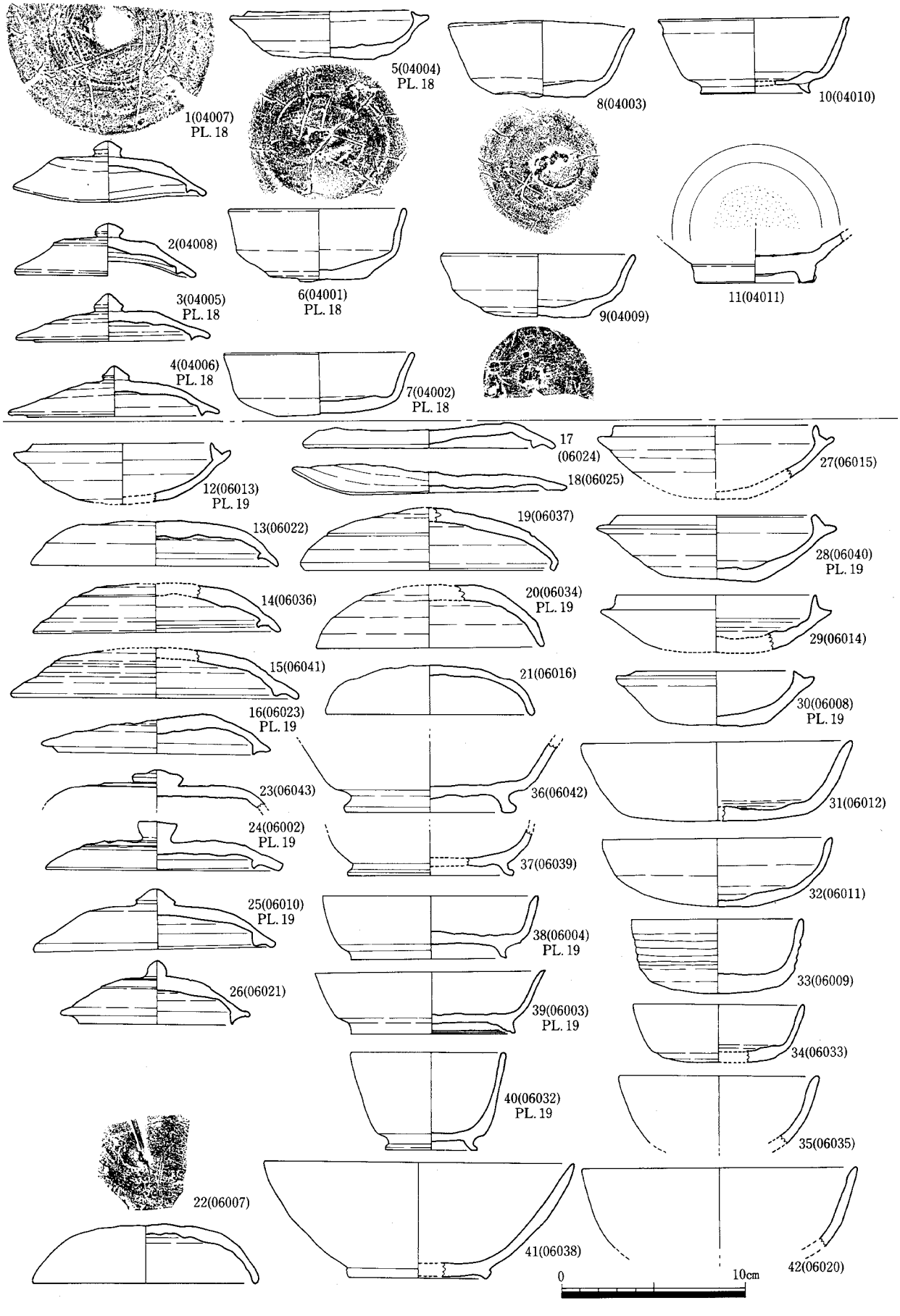


Fig.22　４・６号墳出土遺物実測図（縮尺１/３）

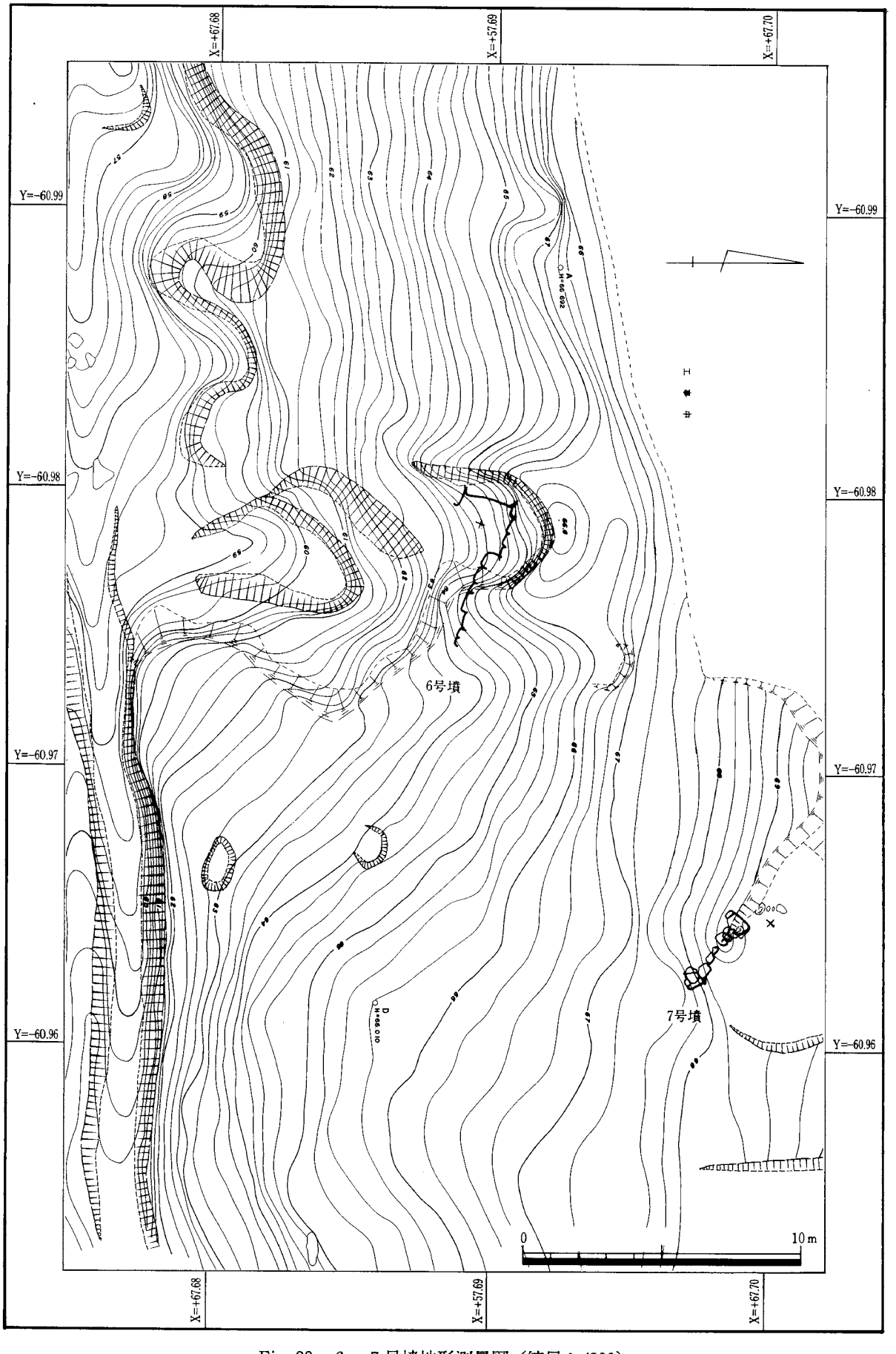


Fig.23　6・7号墳地形測量図（縮尺1/200）

第6号墳の調査

位置と現状（Fig.23～26　PL.7）

6号墳は1～4、8・9号墳の位置する南側斜面と谷を挟んで更に南にある尾根上に位置する。この尾根は調査段階ではかなりの破壊を受けており、北南側斜面の殆どが削平を受け断崖絶壁の状態で10m程の比高差があった。6号墳から7号墳までの距離は約15mで、6号墳から8・9号墳までの距離は北北東に100mで谷一つを挟む。6号墳の現状は南側が石室左測辺部となるが、その部分まで破壊され、左測壁側は石室一枚・羨道部一枚のみで他は遺存していない。

墳　丘（Fig.23・24　PL.7）

6号墳は標高63～67mに位置し、尾根上に構築され、石室主軸N-61°30′-Wの方向を取る。北南側は削平によって急勾配を呈し、現状の地形を残す状態ではなく、かろうじて東西方向に旧地形が残る程度であった。調査時には天井石はなく腰石のみが遺存し、それも左測壁側は石室一枚・羨道部一枚のみで、他は破壊されていた。このため石室内には流土が多量に流れ込み、その土も新しい土流であった。腰石だけが残り石室部分が陥没しており、かろうじて古墳であることが判明するほど、流土によって覆われていた。

墳丘の遺存状態は石室を等高線と平行に築造し、南側斜面に位置している。北側には墳丘が僅かに遺存しているが、南側は削平されている。北側は周溝が廻るが、流土によって埋まり浅い窪み状を呈し、墳丘盛り土は1.4m程ある。羨道部・墓道部付近にも段落ちが認められる。南側斜面の急勾配部分に築造していることから、上部からの流土が全体を覆う形となっている。右羨道部から墳丘に沿って石が四個配列され、このほかにも墳丘内にも列石が認められる。

地山整形（Fig.24　PL.7）

古墳は斜面変換線と平行に石室を構築している。標高63～66mの南側斜面に掘り込みを行い、北側斜面には馬蹄形溝を巡らし、溝底面から平行に地山を削り奥壁部でもう一段掘り込みを行い、石室内部の平坦面を作り出している。

石室構築面は平坦で、奥壁腰石と地山整形面との間は20cmしかない。横断面の掘り方では右側辺部が深く、左側辺部は破壊されているため不明。石室掘り方面積は推定24.12㎡である。

石　室（Fig.25・26　PL.7）

石室は奥壁が二石、右側辺部四石、左側辺部一石で他は破壊されている。奥壁は腰石のみで、二石からなり、石材はすべて花崗岩礫で面取り等は行っていない。石室の形状は、ほぼ正方形である。石室の現存する長さは長軸1.8m、短軸1.88m、面積3.38㎡を測り、羨道部長3.53m、全長5.33mである。石室と羨道部の長さの比率は約1：1.95である。床面は張床が施され、その厚さは0.4m程度である。裏込石は人頭大の石を腰石の下に数多く配置している。

羨道部（Fig.25　PL.7）

羨道部は左側壁側が二石しか無く他は無い。右側辺部は五石あり、羨道部の長さ3.6m、幅1.1mを測り、石室と羨道部の長さの比率は1：1.95である。

閉塞施設（Fig.25　PL.7）

閉塞施設は框石を外し羨道部に設置されているが、長さ2.3m、高さ0.6mで遺存していた。石の内部から杯蓋（Fig.22-13　PL.19）と入り口部分の近くから杯蓋二点、杯身一点（Fig.22-17・37　PL.19）のほぼ完形が出土した。閉塞石は人頭大の礫が主体で、廻りに小円礫・粘土等で固め4段まで遺存している。

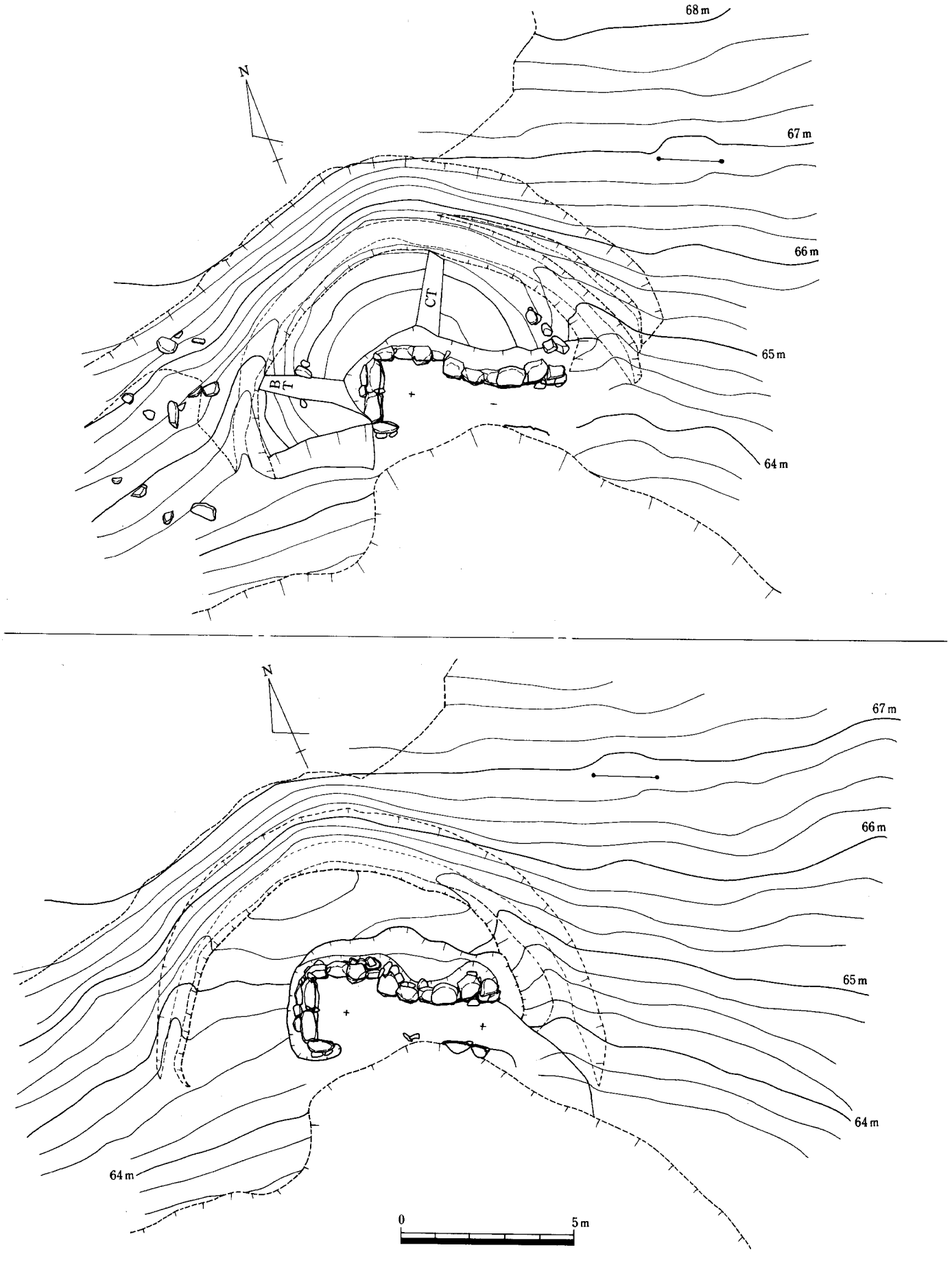


Fig.24　6号墳墳丘測量図、地山整形図（縮尺1/150）

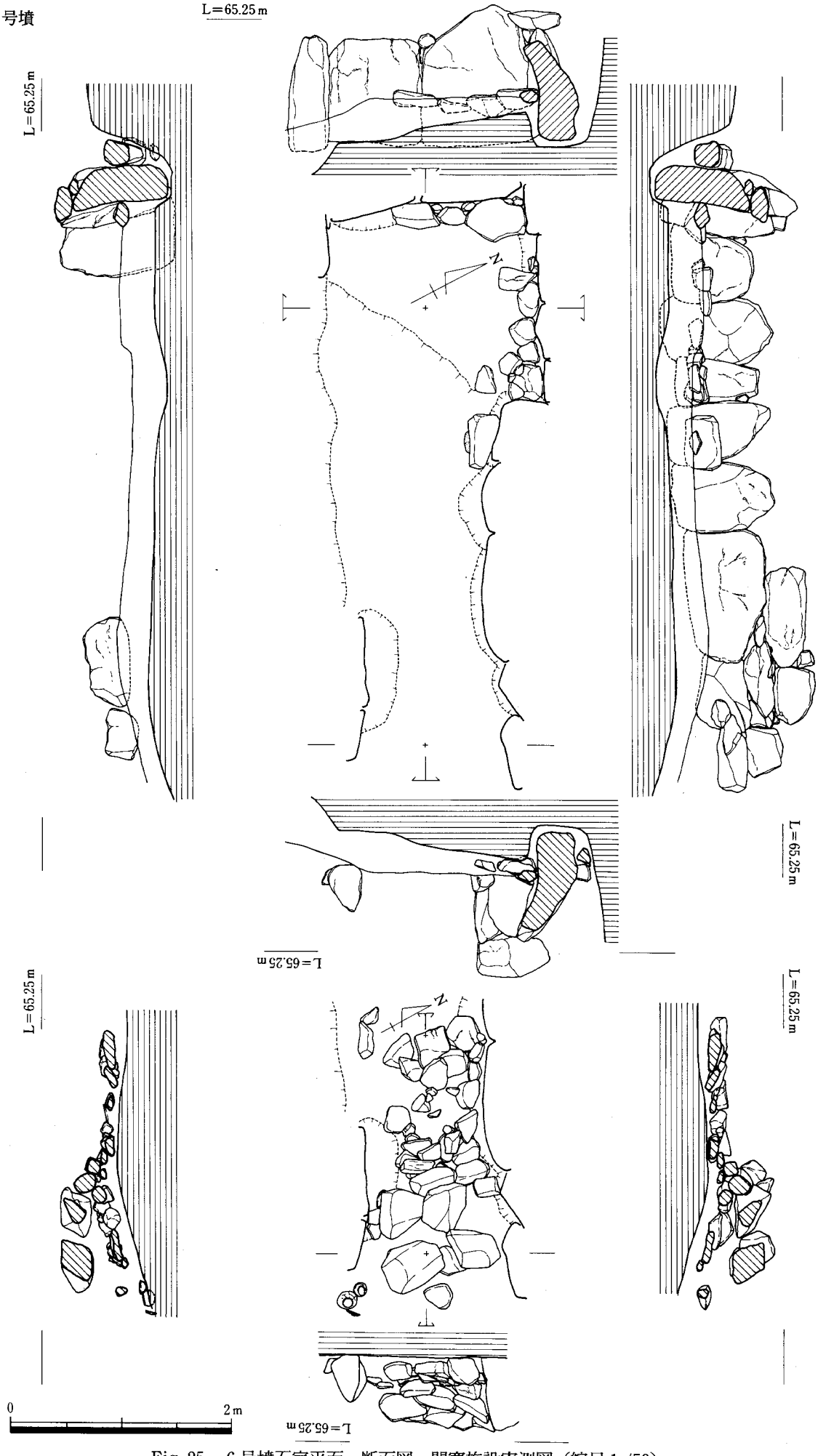


Fig.25　６号墳石室平面・断面図、閉塞施設実測図（縮尺１/50）

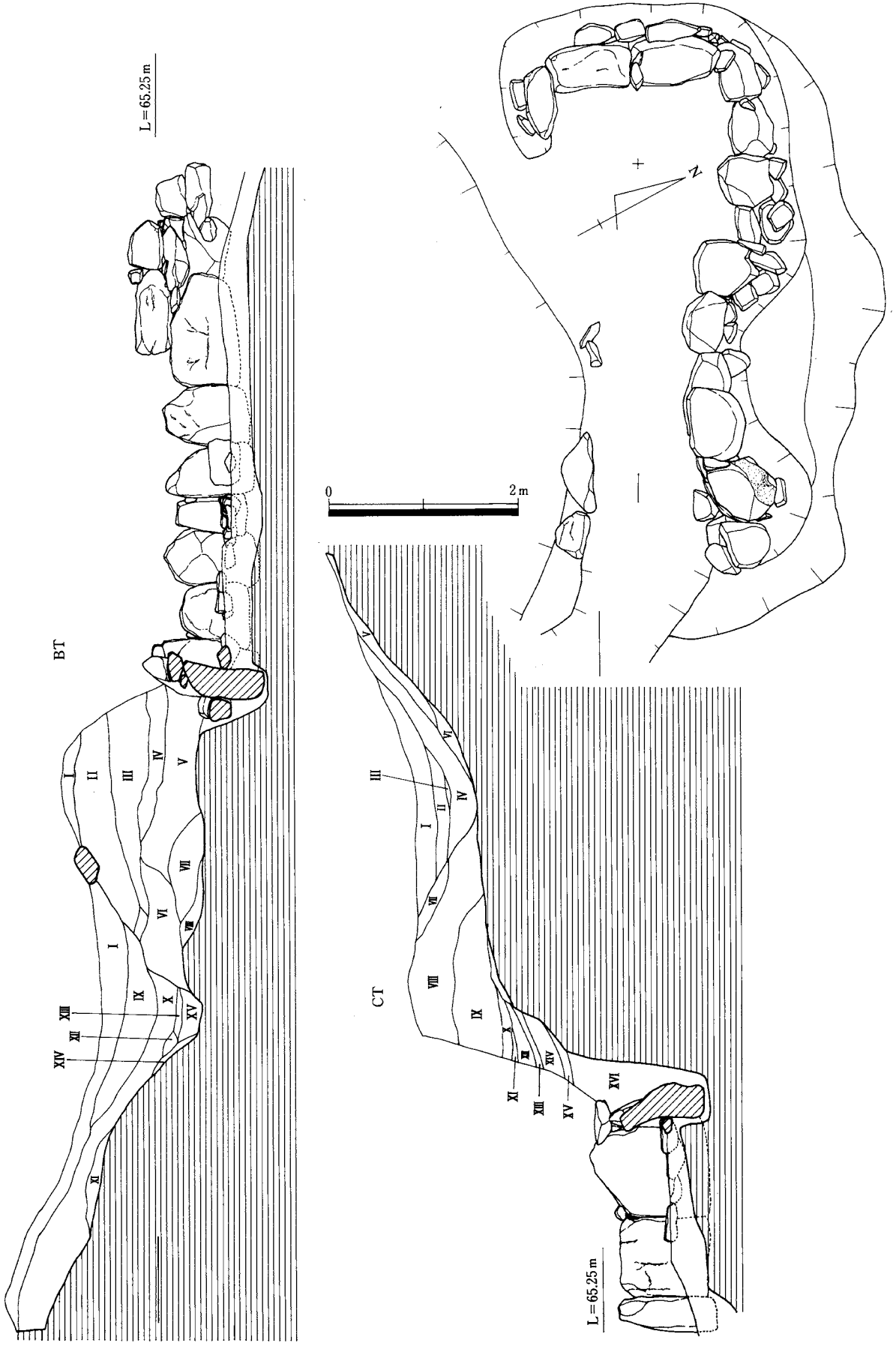


Fig.26　6号墳石室俯瞰図、土層断面図（縮尺1/60）

土　層（Fig.26）

主軸延長上の墳丘にトレンチを設定し、北方向にＣトレンチ、西方向にＢトレンチの２本を設定し土層観察と地山の検出に努めた。南側は削平されていることから土層の観察は出来なかった。石室縦断面と組み合わせているＢトレンチでは溝を巡らし、現在の墳丘でもその比高差は1.4mある。Ｂトレンチの土層は第Ⅰ層が暗黄茶褐色土、第Ⅱ層が砂粒を含む暗黄褐色粘質土、第Ⅲ層が黄褐色粘質土、第Ⅳ層が赤褐色土、第Ⅴ層が締まりが良く砂粒を含む暗黄褐色粘質土、第Ⅵ層が暗赤褐色粘質土、第Ⅶ層が第Ⅴ層より濃く若干の褐色粘土をブロックで含む暗黄褐色粘質土、第Ⅷ層は若干の砂粒を含む赤褐色粘質土、第Ⅸ層は両端部が若干淡く灰色を呈する黒色土、第Ｘ層は砂粒を多く含みポロポロした暗黄褐色粘質土、第Ⅺ層は若干の黄褐色粘土粒を含む暗黄茶褐色土、第Ⅻ層は灰黒色土、第ＸⅢ層は若干の砂粒と黄褐色粘土粒を含む暗赤褐色粘質土、第ＸⅣ層は赤褐色粘土粒を含む茶褐色粘質土、第ＸⅤ層は締まりが良く若干の赤褐色粘土粒を含む黄褐色粘質土である。

Ｃトレンチの土層は第Ⅰ層が黄褐色粘土粒を含み粘質の強い暗黄茶褐色土、第Ⅱ層が暗茶褐色土、第Ⅲ層が粘質の弱い暗黄褐色粘質土、第Ⅳ層が黒色土、第Ⅴ層が地山面の崩落で若干の砂粒を含む暗褐色粘質土、第Ⅵ層が第Ⅱ層より淡く若干の砂粒を含む茶褐色土、第Ⅶ層は第Ⅴ層と同じ色調を呈するが、粘質の強い暗褐色粘質土、第Ⅷ層は若干の砂粒を含み粘質に富む赤褐色粘質土、第Ⅸ層は砂粒を多く含み良く突き固めてある黄褐色粘質土、第Ｘ層は暗赤褐色粘質土、第Ⅺ層は若干の黄褐色粘土粒と砂粒を含む暗赤褐色粘質土、第Ⅻ層は若干の暗赤褐色粘土粒ブロックを含み良く絞まっている暗黄褐色土、第ＸⅢ層は粘質に富む暗赤褐色粘質土、第ＸⅣ層は若干の砂粒を含む暗黄褐色粘質土、第ＸⅤ層は締まりが良く若干の赤褐色粘土粒を含む暗赤褐色粘質土，第ＸⅥ層は粘質に富み堅く絞まった暗黄褐色粘質土である。

地山の最も高い標高は67mで、第８層部分までが溝の土層である。腰石部分にあたる部分は第Ｘ層からで堅く突き固めている。

出土遺物（Fig.22・27・28　PL.19）

盗掘・撹乱を受けているのに関わらず多量の遺物が出土した。図示したのは52点であるが、図示に耐えない須恵器甕形土器・土師器片がある。

杯蓋　**12～26**は杯蓋である。摘みを持つ23～26と持たない12～22に分けられる。又、受部を持つものと持たないものに区別できる。12～18はつまみを持たない受部のあるタイプである。受部が高い12以外は口縁部に内側に受部が入る形状を呈する。12以外はほぼ同時期のものである。19～22は受部が無く、身か蓋か判断しにくい。特に20～22は杯身かもしれない。23～26はつまみを有する杯蓋である。つまみの形状も様々で、先端部が平坦なもの、宝珠状を呈するもの、尖るものがある。受部は26以外は内側に入るもので、端部の造りから26-25-23-24の順が考えられる。

杯身　**27～35**の９点を図示した。形態的に二分できる。口縁部に受部を有する27～30と、受部を持たず口縁部が立ち上がる31～35がある。

高台付碗　**36～40**が高台付碗である。他にも数点出土しているが、高台の形態が異なる５点を図示した。宝珠状のつまみを持つ杯蓋とセットになるもので、26と40はその代表的なものである。

土師器高台付碗　**41・42**は土師器の高台付碗である。41は羨道部入口に須恵器の杯の蓋身（Fig.22-17・37）と供に出土したものである。42は底部が欠損してるが、おそらく高台が付く碗であろう。41の口径は17cm、器高6.4cm、底径7.8cmを測り、42は口径15cmを測る。

高坏（Fig.27-1～6）　**1・5**は完形の高坏で、他は脚部・杯部のみである。1は杯部が大きく脚部が短い。口径16.2cm、器高8.4cm、脚径9.2cm。**2**は脚部端部しかなく、支脚部が欠損しているが、同

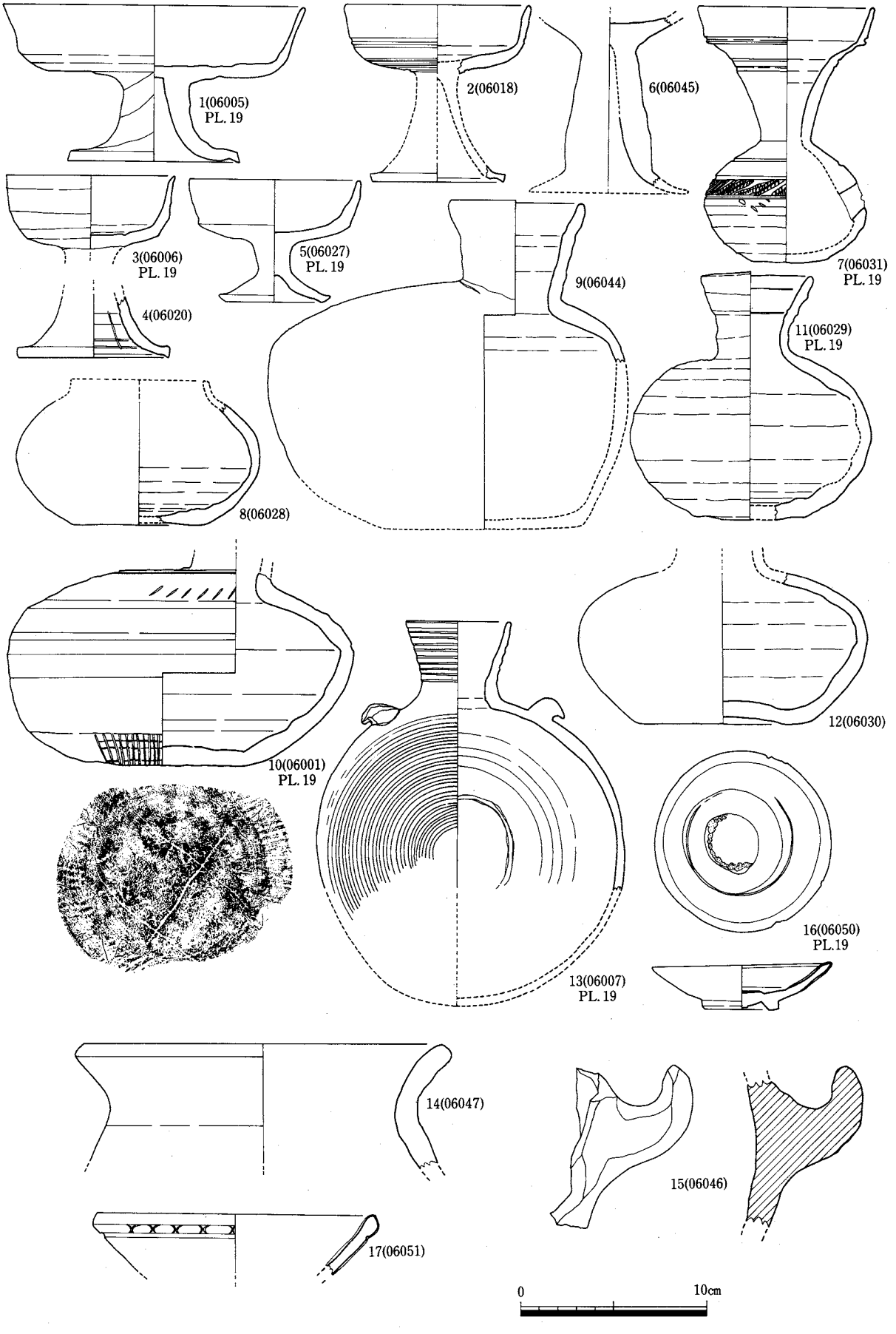


Fig.27　6号墳出土遺物実測図－1（縮尺1/3）

一個体である。杯部は口径10cmで、胴部中位下に二条の沈線を巡らす。**3**は杯部のみで口径9cm、**4**は脚部のみで、**6**は支脚のみである。**5**は小型の高坏で口径9cm、器高6.6cm、脚部径6cm。

瓶（Fig.27-7） 体部中位上に二条の沈線を巡らし、その間を斜めの刻み目を配する。口径9.6cm、器高13.8cmを測る。

壷形土器（Fig.27-8・11・12） **8**は短頸壷で口縁部を欠損する。**11**・**12**は直口壷である。11は底部の一部を欠損、12は口縁部を欠損している。11は口径6cm、最大径は胴部下位にあり13cm、器高13.4cmを測る。

平瓶（Fig.27-9・10） 平瓶は二個体出土した。9は底部を、10は口縁部を欠損する。10は底面に「＃」の箆記号がある。

提瓶（Fig.27-13） 小型の部類に属するもので底部を欠損する。体部の大きさに比べ口縁部が小さい。両肩に「くちばし」状の把手が付く。口径5.4cm、復元推定器高20.4cmを測る。

土師器（Fig.27-14・15） **14**は甕形土器の口縁部である。胴部下位は欠損してない。肉厚で造りが雑である。口径20.2cmを測る。**15**は甑の把手である。

青　磁（Fig.28-1・2　PL.19）

1は青白磁系統碗である。内湾気味に外方に開きながら立ち上がり、口縁端部で外反する。口唇部に浅い抉りを入れ輪花をつくり出す。内面は孤を組み合わせた波状紋と櫛描きの曲線紋で構成され、外面には文様は施されない。釉は淡い青灰白を呈し光沢がある。氷裂は認められない。6号墳玄室からの出土で、口径18.6cmを測る。第Ⅷ類に属する。**2**は同安窯系青磁碗である。鉢状に立ち上がり口縁で内傾する。体部内面は口縁下に一条の沈線を巡らせ、これより下位に片切彫りによる曲線紋と櫛刺突紋による雷光紋を施す。見込みは段を有し、外面は無文である。釉は深青緑を呈し、ガラス質で光沢がある。外面の下半分は施釉されず黄灰色を呈する。内面及び外面の口縁付近は細かな氷裂が認められる。外底は箆削りにより中央が突出する。玄室袖石床面からの出土である。口径15.8cm、底径4.6cm、器高6.1cmを測る。第Ⅰ類に属し、13世紀～14世紀と考えられる。

白　磁（Fig.27-16・17　PL.19）

16は高台付白磁皿である。口縁は内面で外反し、外面にやや肥厚する形態を持つ。釉が青白色で体外面の上半部まで施釉し、一部が高台まで及んでいる。内面では見込みで中央を残し、輪状に削り取る。内底見込みに白い砂が混じる目跡が半周巡る。内面の一部に氷裂が認められる。閉塞部より出土。口径9.6cm、底径4.1cm、器高2.5cmを測る。17は白磁の破片である。玉縁を呈する口縁で、肥厚部に刻みを施す。口縁下に一条の沈線を巡らす。釉は白灰色を呈する。口径15.3cmを測る。

甕形土器（Fig.28-3～6　PL.19）

中型の部類に属する甕形土器で、4個体出土した。**4**は卵形の球形から外反しながら立ち上げ、口唇部で折曲げ口縁外面に段を有する。口径20cm、器高40.5cmであるが、底部の一部が欠損しているため推定器高44cm程度である。**5**も卵形の胴部から口縁部を立ち上げているが、成形自体は4と同様である。口径22cm、器高42.5cm、最大型41.5cmを測る。

3・**6**は同様な形態を呈する。口縁部は肩の張った球形の胴部からほぼ垂直に立ち上げる6と外反する3がある。両方とも口唇部でさらに外反し、端部で折曲げて段を有する。6は口径24.5cm、器高47cm、最大径は胴部上位にあり48cmを測る。3には自然釉が口縁部から底部まであり、底部に他の甕形土器の破片が接合している。口径29.5cm、器高43.5cm、最大径は胴部上位にあり47.5cmを測る。

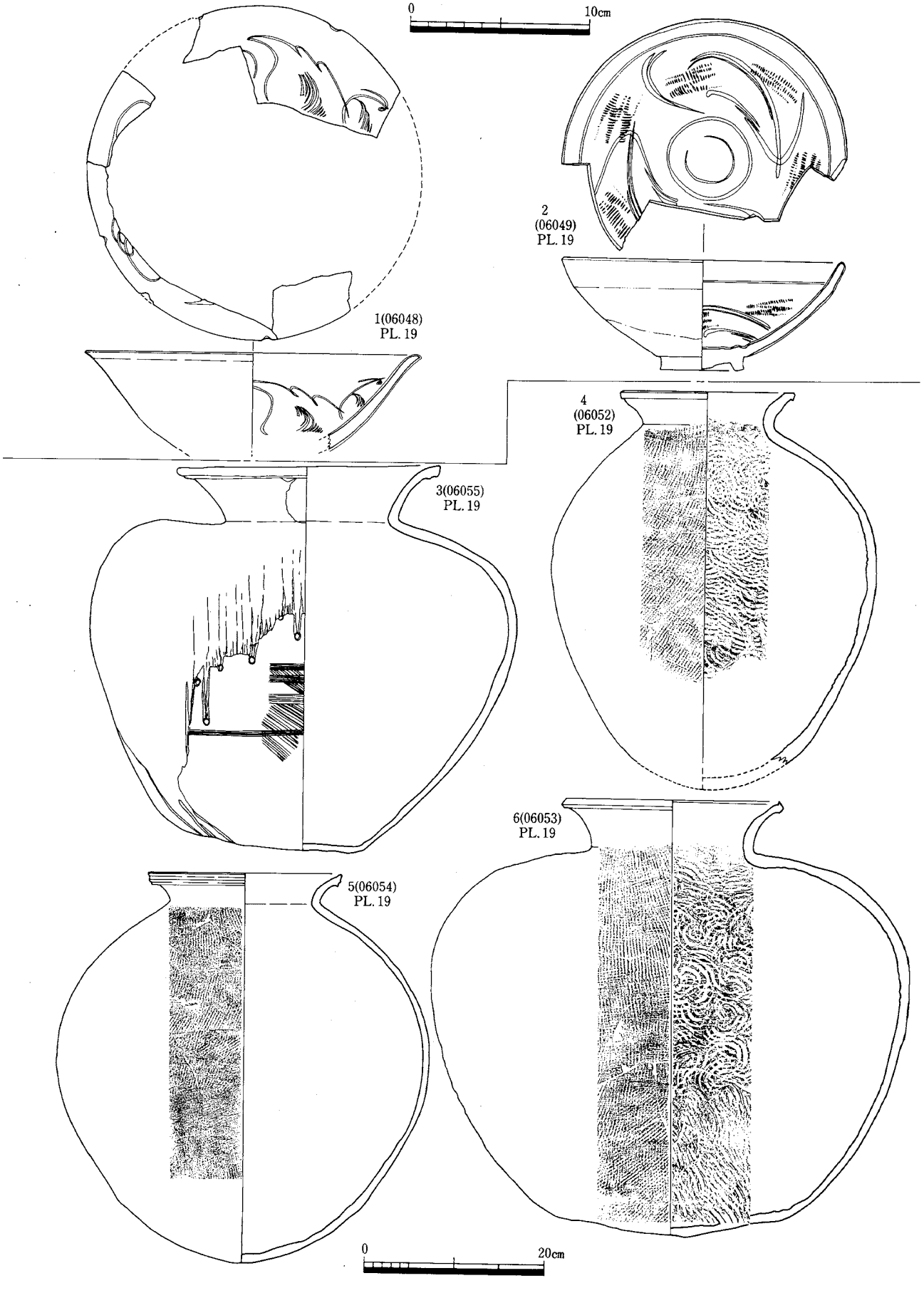


Fig.28　6号墳出土遺物実測図－2（縮尺1/3，1/6）

第７号墳の調査

位置と現状（Fig.23・29・30　PL.８）

７号墳は６号墳の北東に位置し、６号墳より更に北にある尾根上に位置する。この尾根は調査段階ではかなりの破壊を受けており、北南側斜面の殆どが削平を受け、断崖絶壁の状態で10m程の比高差があった。７号墳から６号墳までの距離は約15mで、７号墳から８・９号墳までの距離は北北東に90mで谷一つを挟む。７号墳の現状は石室全体が破壊され、羨道左測辺部のみが遺存するだけで、石室・右側辺部は破壊され、石までも抜き去られた状態であった。

墳　丘（Fig.23　PL.８）

７号墳は標高65～69mに位置し、尾根上に構築され、石室主軸N-37°30′-Wの方向を取る。北側は削平によって急勾配を呈し、現状の地形を全く残さず、辛うじて左側辺部が遺存していたこと、石室掘り方が、認められることから古墳ではないかと判断できる状態であった。調査時には天井石はなく左側辺部のみが遺存し、他は破壊されていた。このため石室内には流土が多量に流れ込み、その土も新しい流土であった。墳丘の遺存状態は、石室を等高線の斜めに築造し、南東側に開口しており、そこから南側に向けて墓道が続く。北側は削平のため断崖絶壁の状態で、南側は約10m程旧地形が残る程度である。墳丘は全く遺存せず、僅かに石室北西にそれらしい土層を確認したにとどまった。墳丘の大きさを推定すると９m程度と考えられる。

地山整形（Fig.29　PL.８）

地山整形は標高65～69mの部分を二段に分け整形している。石室構築面は平坦面を造り出しているが、羨道・墓道部分は傾斜面に設置している。石室構築面から北側の溝の部分までは2.5mの段差を持つ。北側平坦地からややなだらかに段落ちし、平坦面を造りだし、石室築造のための掘り方を行っている。石室掘り方の大きさは長軸2.17m、短軸2.65m、面積5.7505㎡を測り、隅丸方形を呈し、羨道の長さは2.72m、幅0.9mを呈する。羨道部では第一石までが地山掘削を施しており、それより下方は盛土上に配石する。羨道からつづく列石は、盛土上に配石され孤状を呈する。右側辺部において羨道部端に巨石を配し、羨道部の終わりを明確にし、その端から列石を巡らす。

石室・羨道部・墓道・土坑（Fig.29・30　PL.８）

石　室

石室内の石はその殆どが抜かれ遺存していない。辛うじて腰石の抜き後から石室の平面プランを知ることが出来る。石室は長軸2.0m、短軸2.0m、面積4.0㎡の正方形を呈すると推定される。

羨道部

羨道部は左羨道部の石組しか遺存しておらず、左袖石から2.5mの長さを有しするだけである。石組は二段まで辛うじて遺存しており、石の積み方は重箱積みである。

閉塞施設

閉塞施設も全く遺存していない。

墓　道

墓道は羨道部から南配置されており、僅かに窪みを持たせ標高66m付近で消滅する。その長さは約６mあり、深さ0.30mを測る。

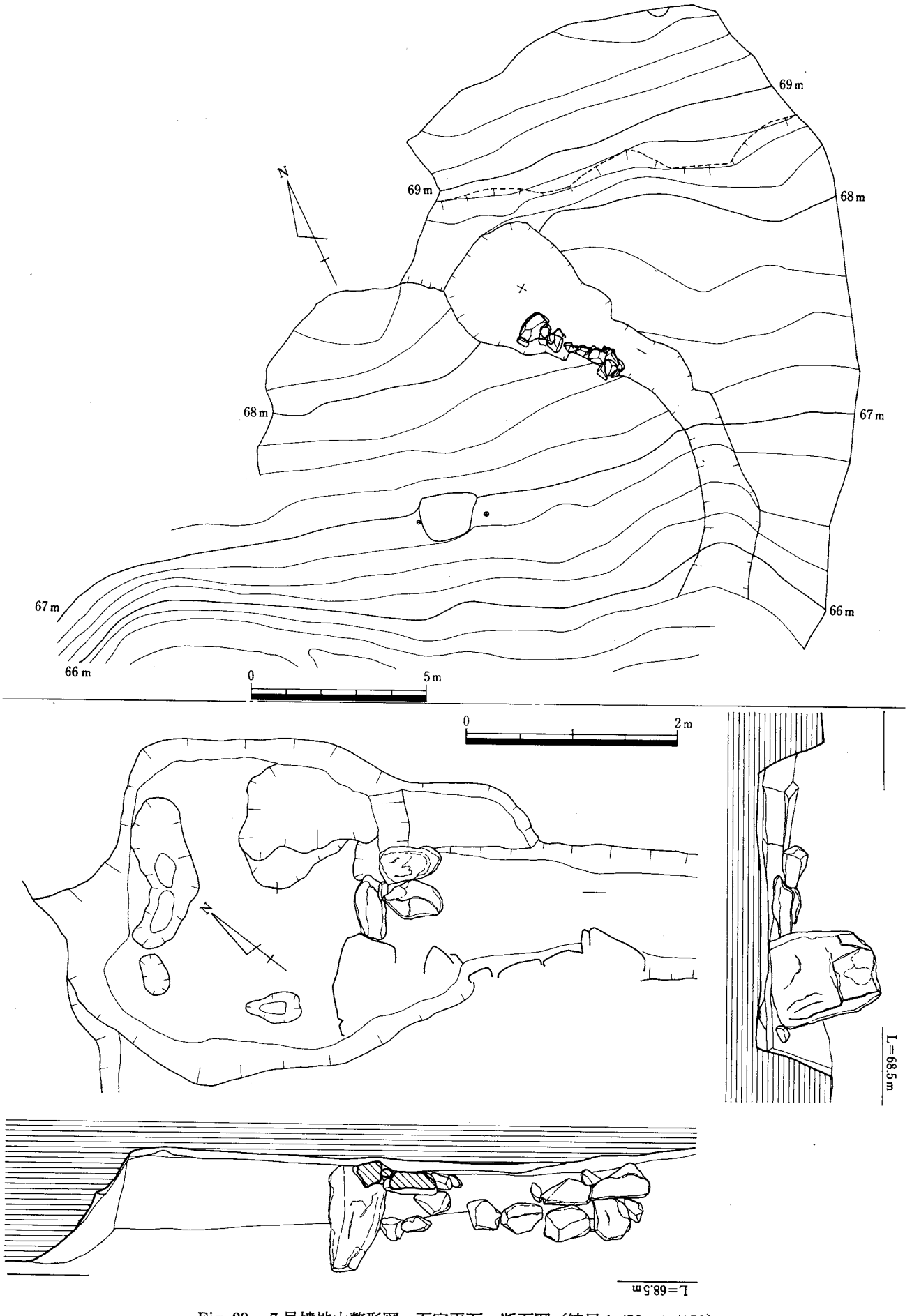


Fig.29　7号墳地山整形図、石室平面・断面図（縮尺1/50, 1/150）

土　坑（Fig.30）

土坑は地山整形検出時に検出された。墳丘と推定される範囲外からの検出である。大きさは1.50m×1.45m×0.45mの不整形の土坑である。主軸はN-23°-Wをとる。この土坑は周辺部が焼けており、炭化物も検出された。土層は第Ⅰ層が黒褐色粘質土、第Ⅱ層が黄褐色粘質土、第Ⅲ層が炭化物、第Ⅳ層が濃い黄褐色粘質土である。

土　層（Fig.30）

攪乱がひどく最近石を運び出した状況で表面もかなり荒らされていた。主軸延長上の墳丘にトレンチを設定し、東西方向にＡ・Ｃトレンチ、南北方向にＢトレンチの３本を設定し土層観察と地山の検出に努めた。石室横断面と組み合わせているＡ・Ｃトレンチでは、地山の高さが異なりを示しＣトレンチの地山が高く、等高線上に築造（主軸は北西～南東にあり、南西斜面に築造しているため、右側辺部高く、左側辺部は緩やかに傾斜している）したことが窺える。Ａトレンチの土層は第Ⅰ層が赤褐色粘質土，第Ⅱ層が黄褐色砂質土、第Ⅲ層が黄褐色粘質土、第Ⅳ層が淡黄褐色粘質土、第Ⅴ層が赤褐色土である。地山の最も低い標高は67mである。これに対しＣトレンチでは地山標高が69.5mで、Ａトレンチ地山との比高差は2.5mを測る。Ｃトレンチの土層は第Ⅰ層が攪乱層、第Ⅱ層が表土層、第Ⅲ層が黄褐色砂質土，第Ⅳ層が黄褐色粘質土である。

Ｂトレンチは主軸の長軸方向に入れた。墳丘盛土は削除されており、表面に僅かに攪乱土があるだけで、その下層は地山である赤褐色粘質土が露出していた。地山の標高は68.4mで、緩やかな傾斜を持ちながら下る。腰石掘り方の標高は67.5mでその比高差は0.9mである。

出土遺物（Fig.31　PL.20）

盗掘・攪乱を受けている事から遺物の出土数は少ない。図示した19点であるが、図化に耐えない甕形土器片・土師器片がある。

須恵器（Fig.31-1～3、5～17　PL.20）

杯　蓋

1～3、6・7は杯蓋である。宝珠状のつまみを持つ6・7と、つまみの無い1～3に区分できる。1～3は5とセット、6・7は8～12とセットであろう。1は口径10cm、器高1.8cm、2は口径9.6cm、器高1.8cm、3は口径14.6cm、器高1.4cmである。6は口径10.6cm、器高2.8cm、7は口径14.4cm、器高推定3.4cmである。

杯　身

5・8～12が杯身である。高台のある8～12と無高台の5に分けられる。8は体部外面に波状の箆記号が認められ、高台の位置も底部内部から張り付けられる。これに対して12は底部と体部との境に張り付けられている。器高2.6cm、5は口径12cm、器高3.4cm、8は口径13.8cm、器高4cm、9は口径13cm、器高4cm、10は底径9.2cm、11は底径9.6cm、12は底径10cmである。

高　坏

13・14は高坏である。13は完形で口径8cm、器高8.4cm、脚径7cmである。14は脚部のみで、脚径9.8cmである。

脚付壷

15は脚付壷の脚部である。脚径25cmを測る。

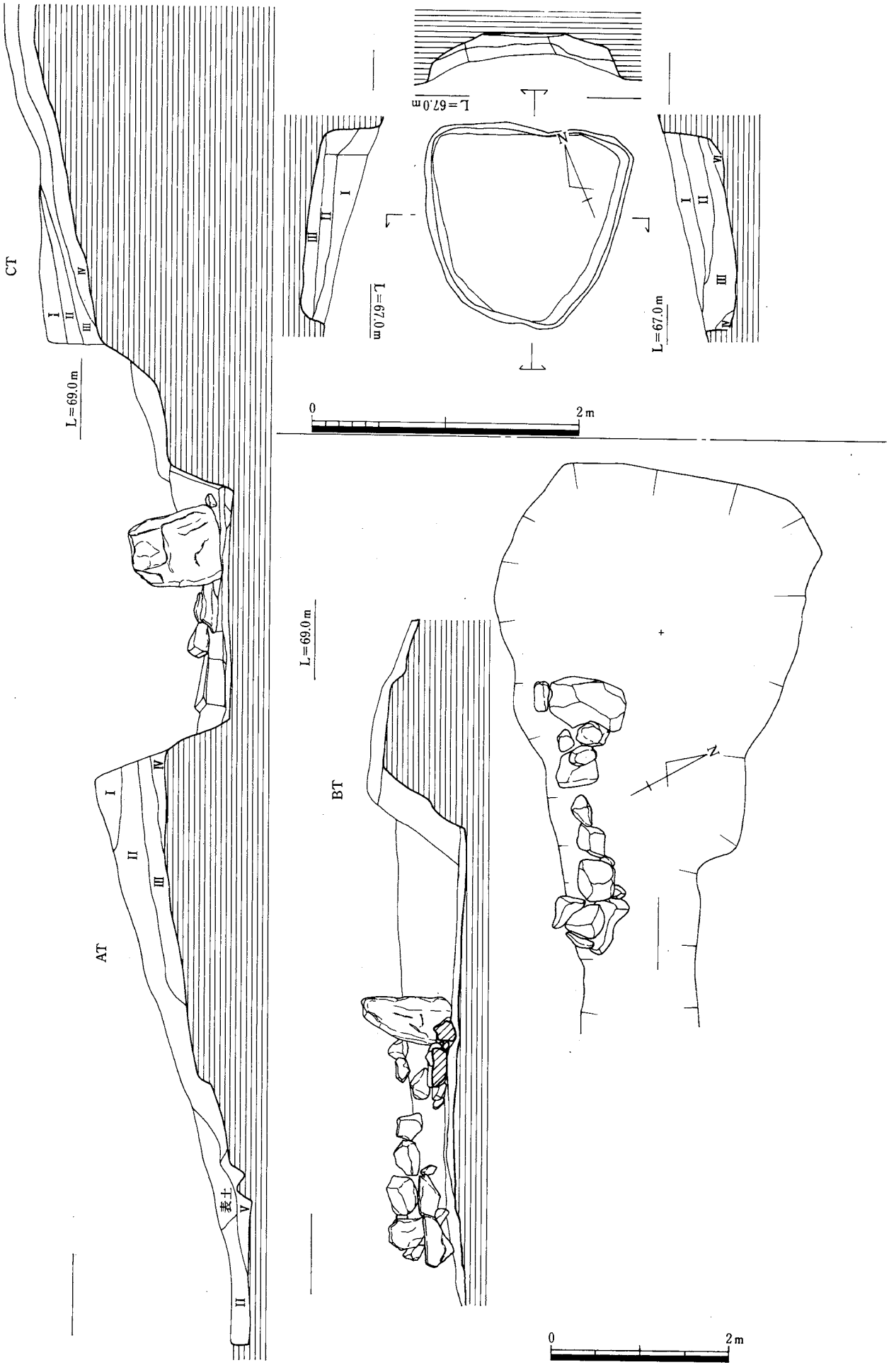


Fig.30　7号墳石室俯瞰図、土層断面図、土坑実測図（縮尺1/40，1/60）

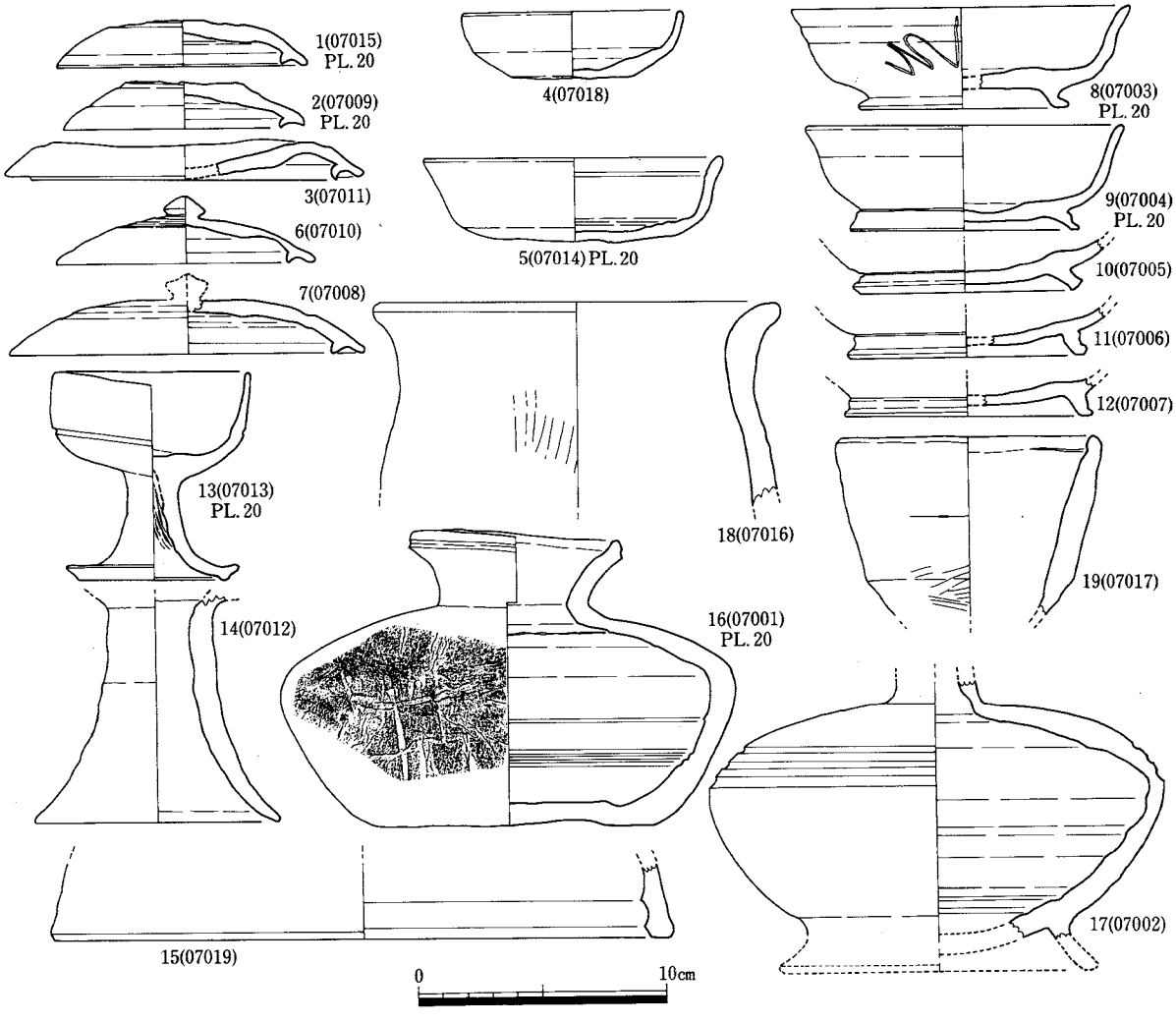


Fig.31　７号墳出土遺物実測図（縮尺１/３）

平　瓶

16は平瓶である。口径8.6cm、器高12cm、最大径は胴部中位にあり18.2cm、底径11.6cmを測る完形品である。

脚付直口壷

17は脚付直口壷で、口縁部・脚部が欠損している。胴部中央上部に三条の沈線を巡らす。脚部は「八」字状に開く形状を呈し、復元推定13cmを測る。現器高11.6cm、最大径は胴部中位にあり18.4cmを測る。

土師器（Fig.31-4、18・19）

４は椀形土器である。口径8.7cm、器高2.6cm、18・19は土師器の甕形土器と鉢形土器である。両方とも肉厚の粗い造りで底部を欠損する。18は口径16.4cm、19は口径10.6cmを測る。

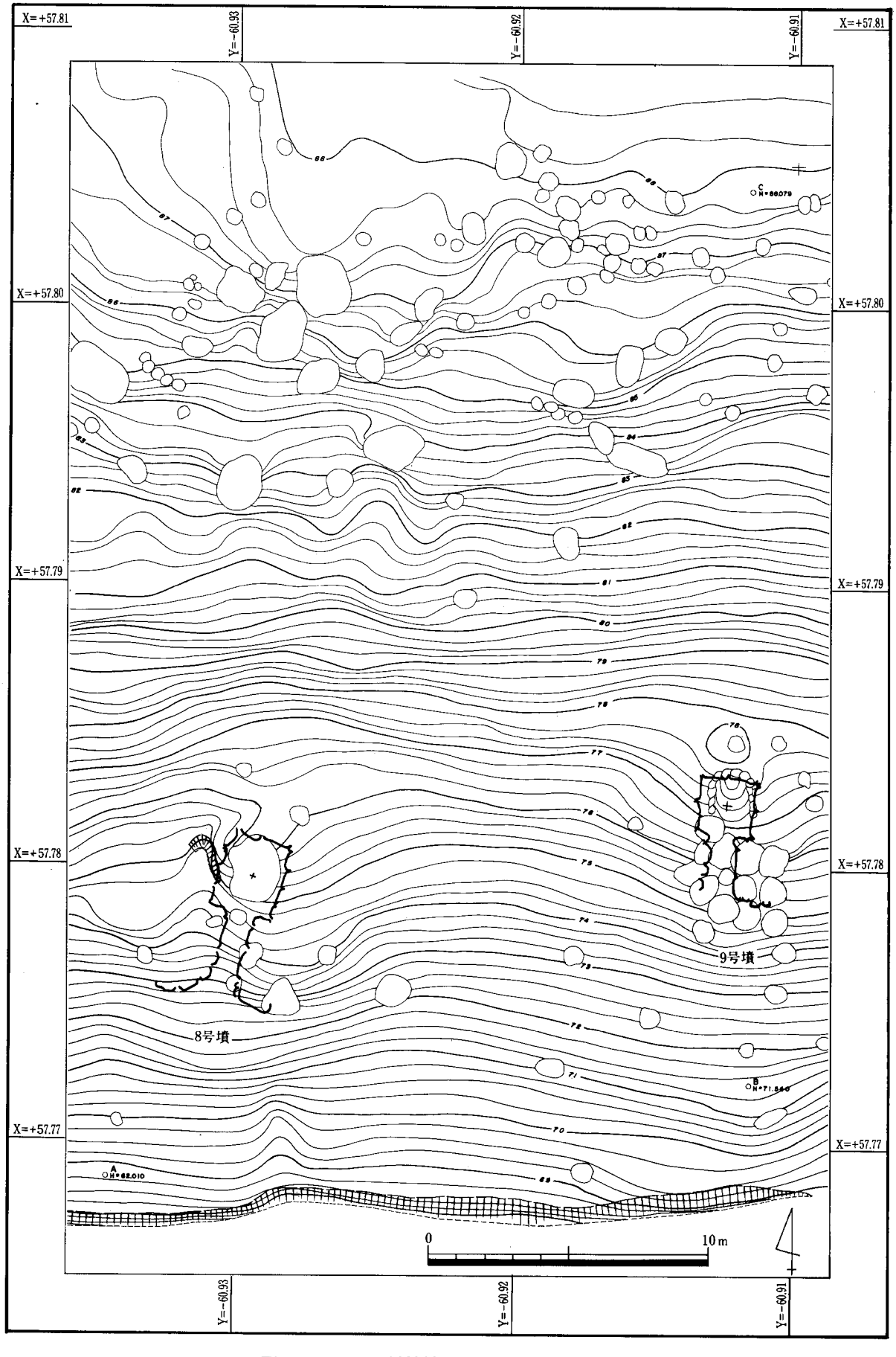


Fig.32　8・9号墳地形測量図（縮尺1/200）

第８号墳の調査

位置と現状（Fig.32～36　PL.８～10）

８号墳はヤツデ状に広がる尾根の南側急勾配に９号墳と共にあり、東に15mの距離に９号墳、南に谷を挟んで６・７号墳がある。標高73～77m間に位置し、石室主軸方向をN-30°-Eにとり、南側に開口している。現況は３号墳と同様に非常に残りの良い古墳であり、羨道部入口が開口しているだけで天井石まで残っている。昭和53年度から開始した分布調査時に確認された古墳である。

墳　丘（Fig.32・33　PL.８～10）

墳丘は等高線に垂直に築造されており、墳丘周辺部だけが緩やかで、他の部分は密で急斜面上に構築されている。墳丘は表土排除段階で東西94m、南北92mの円墳であり、溝は馬蹄形状に廻る形状を呈する。墳丘裾部両左右に列石を巡らすが、全周はせず羨道部から5.5mが確認できたにすぎない。墳丘盛土は厚く天井石付近まで覆っている。

土層からみると自然堆積部分が表面を覆っていることから墳丘盛土が流れ出した部分が多いと考えられ、列石自体も崩壊し流されたものと考え等れる。

地山整形（Fig.33　PL.９）

地山整形は標高72～78mの部分を二段に分け整形している。石室構築面は平坦面を造り出しているが羨道・墓道部分は傾斜面に設置している。石室構築面から北側の溝の部分までは2.5mの段差を持つ。北側平坦地からややなだらかに段落ちし、平坦面を造りだし石室築造のための掘り方を行っている。掘り方の大きさは長軸5.5m、短軸3.5m、面積19.25㎡を測り、奥室側は深さ1.8m、右側辺部0.6m、左側辺部１mの隅丸方形を呈する。羨道部では第一石までが地山掘削を施しており、それより下方は盛土上に配石する。羨道からつづく列石は盛土上に配石され孤状を呈する。右側辺部において羨道部端に巨石を配し、羨道部の終わりを明確にしその端から列石を巡らしている。

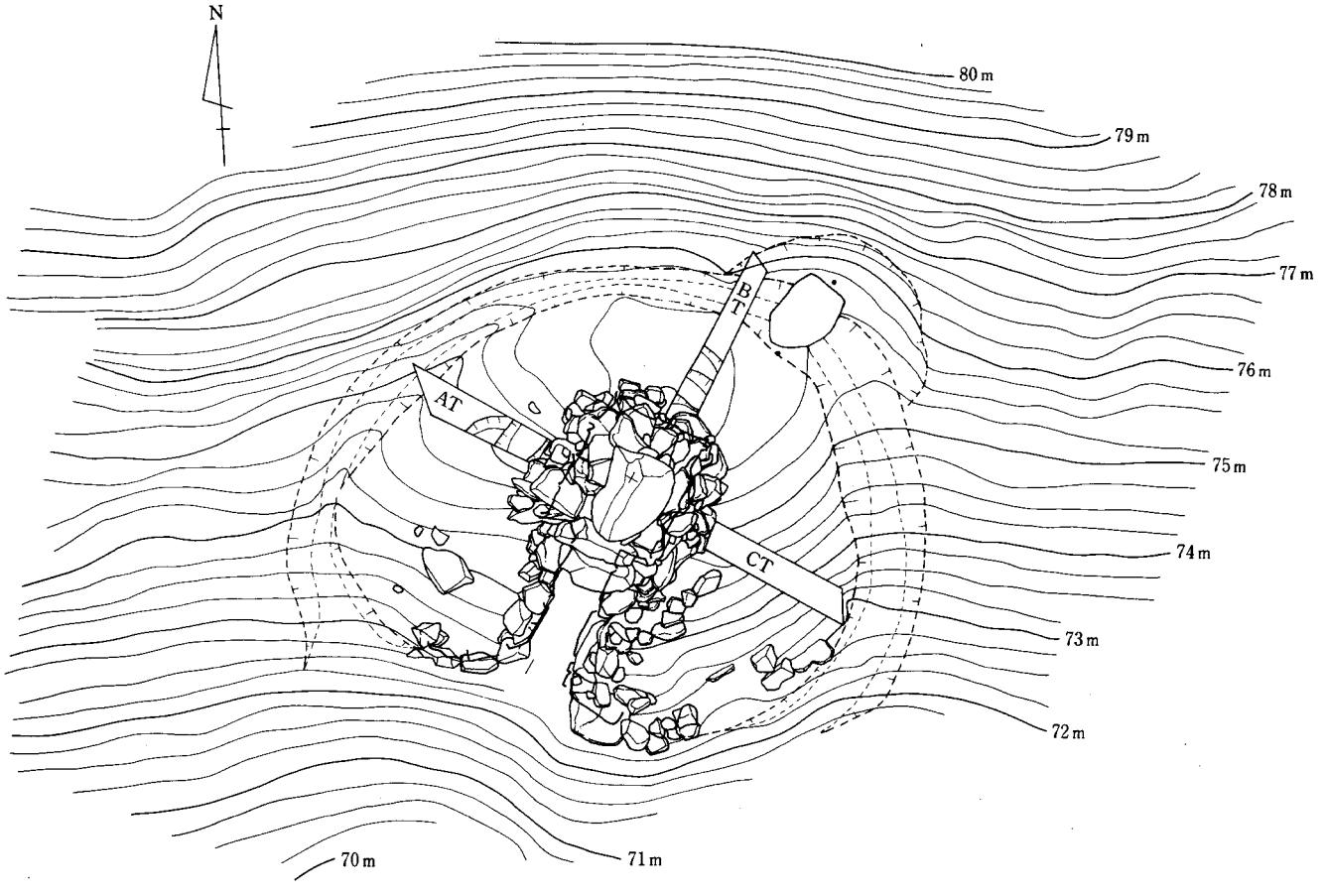
石室・羨道・墓道（Fig.34　PL.８・９）

石室の平面プランは長軸2.7m、短軸2.35m、面積6.34㎡の長方形を呈する。奥壁の腰石は二枚で構成され、床面下25cmまで掘り込んで設置されている。上部は基本的には煉瓦積みで、大小の石材を使用している。天井石までの高さ（床面から）2.4mを有する。右側辺部は大石四枚を縦に立てほぼ直線的に面を形成している。上部構造は石を横に配置し、交互に目地が入る煉瓦積み技法を用いている。天井石が一枚の大石を配置していることから奥壁・左右側辺部から迫り上げられ、ドーム状の石室構造を呈する。床面はかまち石付近だけに敷石が認められ、他は撹乱を受けている。

左側辺部は右側辺部と同様に四枚の立石によって面を揃えながら配置されている。上部構造は右側辺部と同様に煉瓦積によって迫り上げ天井石に達する。

羨道部　羨道部は石室袖石から2.9mの長さを有し、框石上部に天井石が覆う。右羨道部は五枚の立石を配し、三段の石組を有する。羨道端に巨石を配し、羨道部と列石との区別を行っている。列石はこの巨石から弧を描きながら墳丘周辺部に巡る七列の石を配置する。一列が２～３個の石を積み重ねる方法をとる。又墳丘上部にも列石が配置されている。左羨道部も五枚の石で形成されているが、端部では弧状を描きながら列石へと続く。石室から二石までに上部配石が見られ２段で構成されている。列石は羨道部の続きと墳丘中央部に三列認められるだけである。

閉塞施設　閉塞はかまち石の上に配置され、現存する施設は四段の石と粘土によって形成されている。天井石までは40cmの空間があることから上部の石を排除された状態と考えられる。かまち石の上



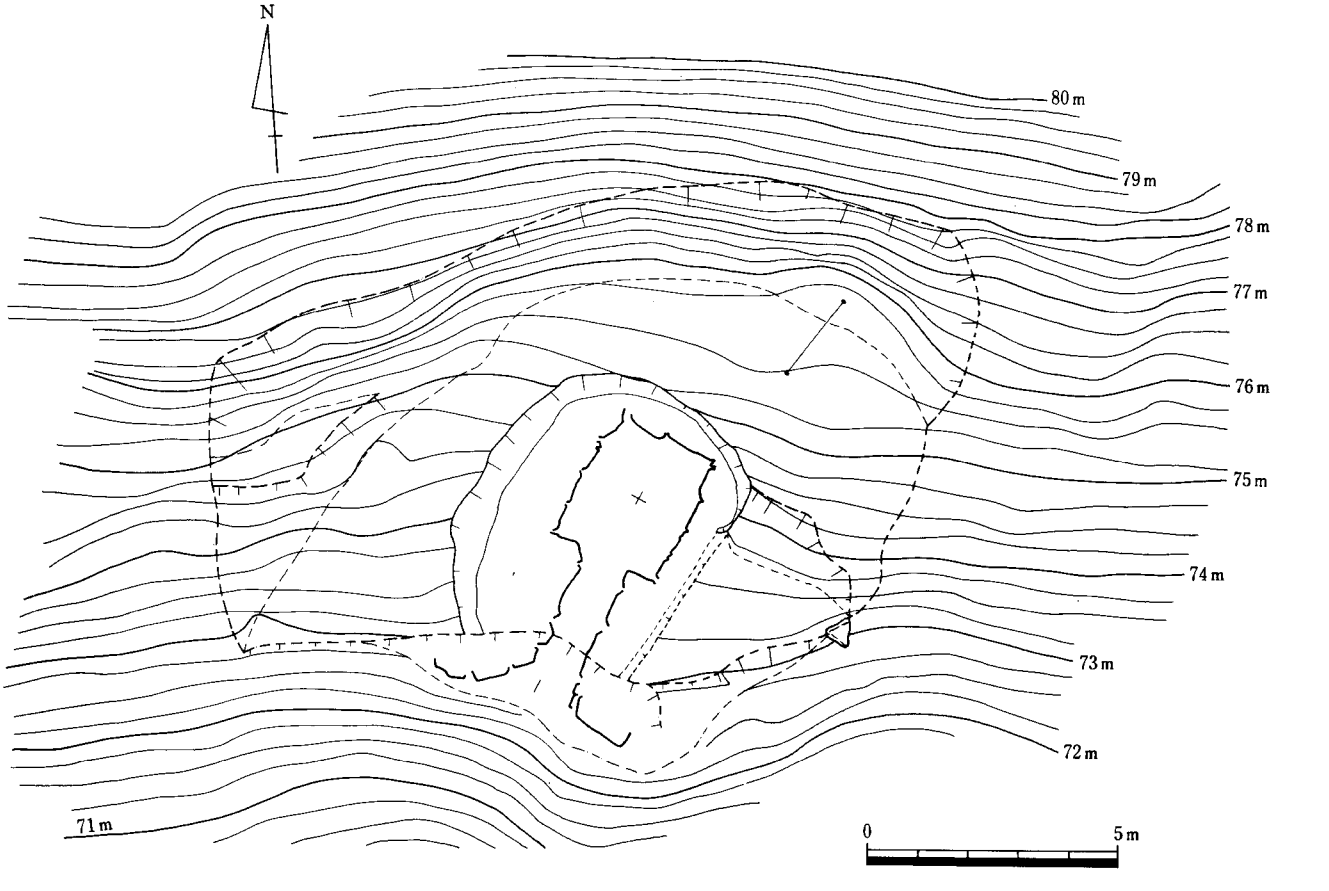


Fig.33　8号墳墳丘測量図、地山整形図（縮尺1/150）

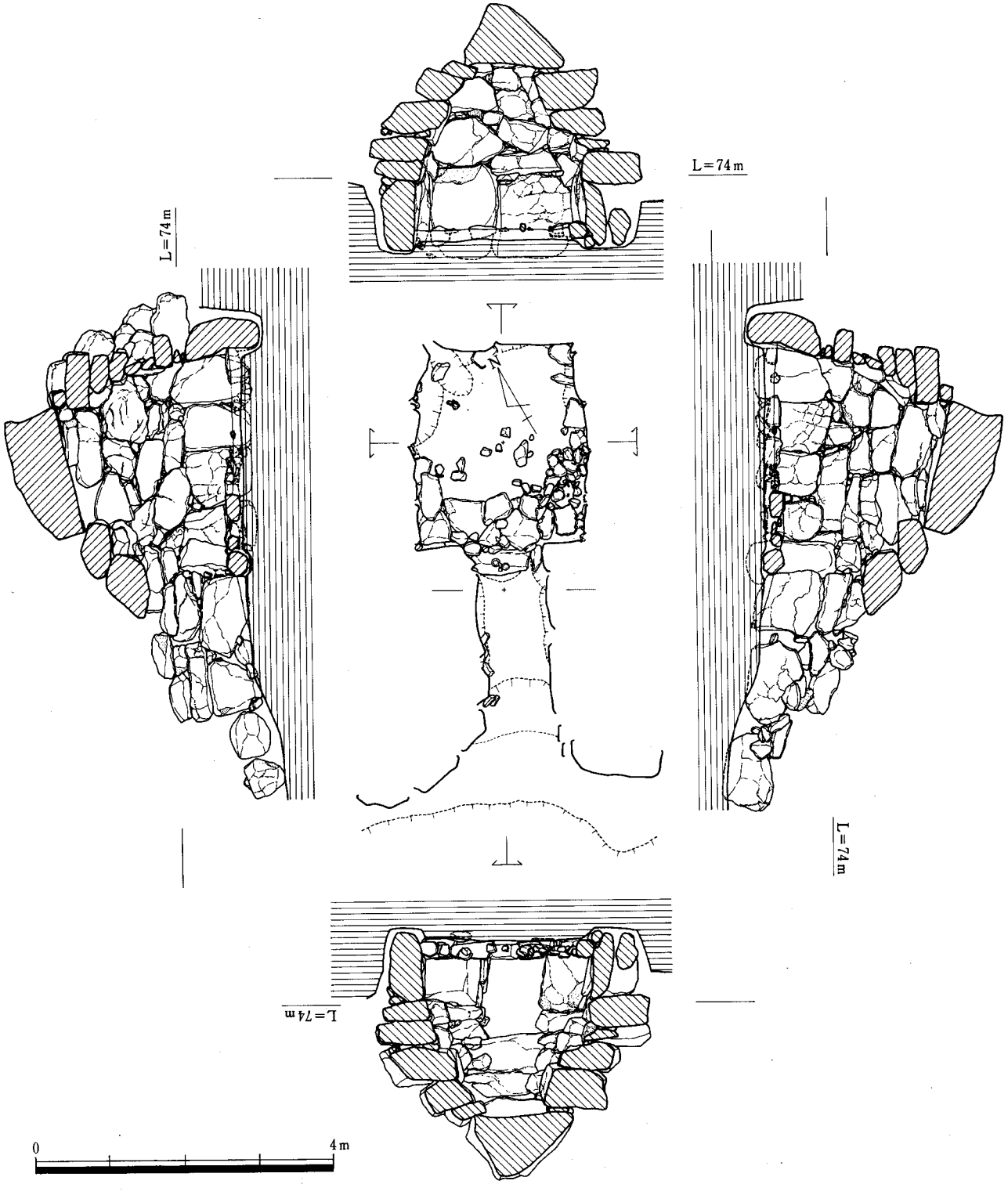


Fig.34　8号墳石室平面・断面図（縮尺1/80）

にFig.37−1・7の二点が据えられており、閉塞施設を設置した時期を示す資料であろう。

土　層（Fig.35）

主軸延長上の墳丘にトレンチを設定し、東西方向にA・Cトレンチ、南北方向にBトレンチの3本を設定し土層観察と地山の検出に努めた。石室横断面と組み合わせているA・Cトレンチでは地山の高さが異なりを示しAトレンチの地山が高く等高線の斜めに築造したことが窺える。Aトレンチの土層は第Ⅰ層が黒褐色土、第Ⅱ層が黄褐色土、第Ⅲ層が赤褐色土、第Ⅳ層が赤褐色土と黄褐色土の互層、第Ⅴ層が赤味の強い赤褐色粘質土、第Ⅵ層が黄褐色粘質土、第Ⅶ層が褐色粘質土である。地山の最も高い標高は76mで段を有し、第Ⅵ層部分から腰石となるがこの部分が最も狭く地山掘削ギリギリに腰石を配置している。これに対しCトレンチでは地山標高が74.7mで、Aトレンチ地山との比高差は1.3mを測る。Cトレンチの土層は第Ⅰ層が赤味の強い赤褐色土、第Ⅱ層が赤褐色土と黄褐色土の互層、第Ⅲ層が褐色土、第Ⅳ層が白灰色粘質土、第Ⅴ層が黄褐色土、第Ⅵ層が赤味の強い赤褐色土、第Ⅶ層が黄褐色粘質土、第Ⅷ層が褐色粘質土である。

Bトレンチは主軸の長軸方向に入れた。地山の標高は76.6mで、緩やかな傾斜を持ちながら下り一度平坦面を有し、奥壁裏込め付近でほぼ垂直に掘り下げている。腰石掘り方の標高は75mでその比高差は1.6mである。Bトレンチの土層は第Ⅰ層が赤褐色土、第Ⅱ層が赤味の強い赤褐色土、第Ⅲ層が赤褐色土と黄褐色土の互層褐色土、第Ⅳ層が黄褐色粘質土、第Ⅴ層が黄褐色土、第Ⅵ層が褐色粘質土、第Ⅶ層が赤褐色粘質土、第Ⅷ層が黄褐色粘質土、第Ⅸ層が褐色粘質土である。

土　坑（Fig.35　PL.10）

土坑は地山整形検出時に石室北東部の平坦地に造られているもので長軸1.6m、短軸1.1mの一辺が方形、一辺が隅丸を呈する不整形土坑である。深さは0.9mで、出土遺物はないが焼土・炭等が検出された。

出土遺物（Fig.37　PL.20・21）

盗掘・撹乱を受けているので出土した遺物は多くない。しかしながら撹乱されているにもかかわらず金属器の出土は他の古墳をしのぐものがあり、33点の鉄製品・鉄滓5点が出土している。

特に閉塞框石上や右側辺部隅の敷石に集中して出土した。框石からはFig.37−1・7の他須恵器片が数点据えられた状態で出土した。また、框石部分と右側辺部隅敷石は撹乱は受けておらずこの敷石間に土器・鉄製品が出土したが、特に鉄製品はTab.2に見るごとく34点出土しており三郎丸古墳群から出土した鉄製品の半分以上を占める。鉄釘は多数出土したが、この他に直刀・鞘金具・鍔等が一括出土した。

須恵器（Fig.37−1〜12・14〜19　PL.20）

図示した以外に大型甕形土器・杯蓋身の破片が出土したが、細片のため図示できなかった。

杯蓋　宝珠状のつまみの付く4〜6とつまみを持たない1〜3に分けられる。

1は受部が立ち上がり体部より外に出るタイプである。杯身の7とセットになるタイプで、羨道框石上に配置されており、この古墳の時期を決定する資料である。2は受部が内に入り造りも雑である。3は受部が辛うじて認められるのもで、2と同様に雑な造りである。4は宝珠状のつまみが大きくシャープさに欠けるが受部が外に出るタイプで、篦削りも4が1/3程度に対して5は約1/2程度まで行われている。6はつまみが変形の宝珠状を呈する。受部はシャープさにかける。

1は口径10cm、器高2.4cm、2は口径10.4cm、器高2.2cm、3は口径10cm、器高2.4cm、4は口径15cm、器高3.6cm、5は口径16.2cm、器高3.8cm、6は口径10.2cm、器高2.7cmである。

杯身　受部を持つ7・8と碗形を呈する9.10、高台を持つ11・12に分けられる。

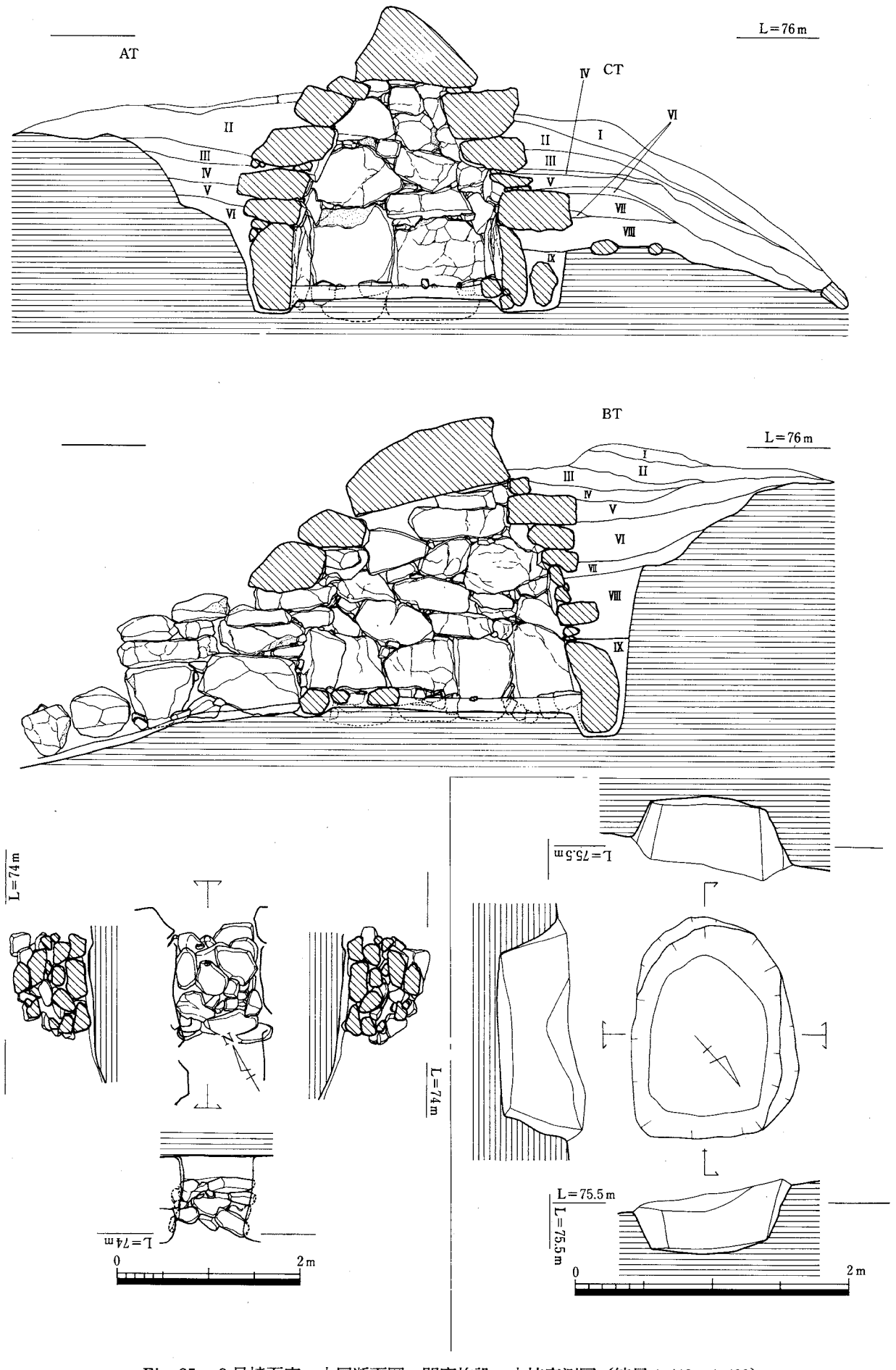


Fig. 35　８号墳石室・土層断面図、閉塞施設、土坑実測図（縮尺１/40，１/60）

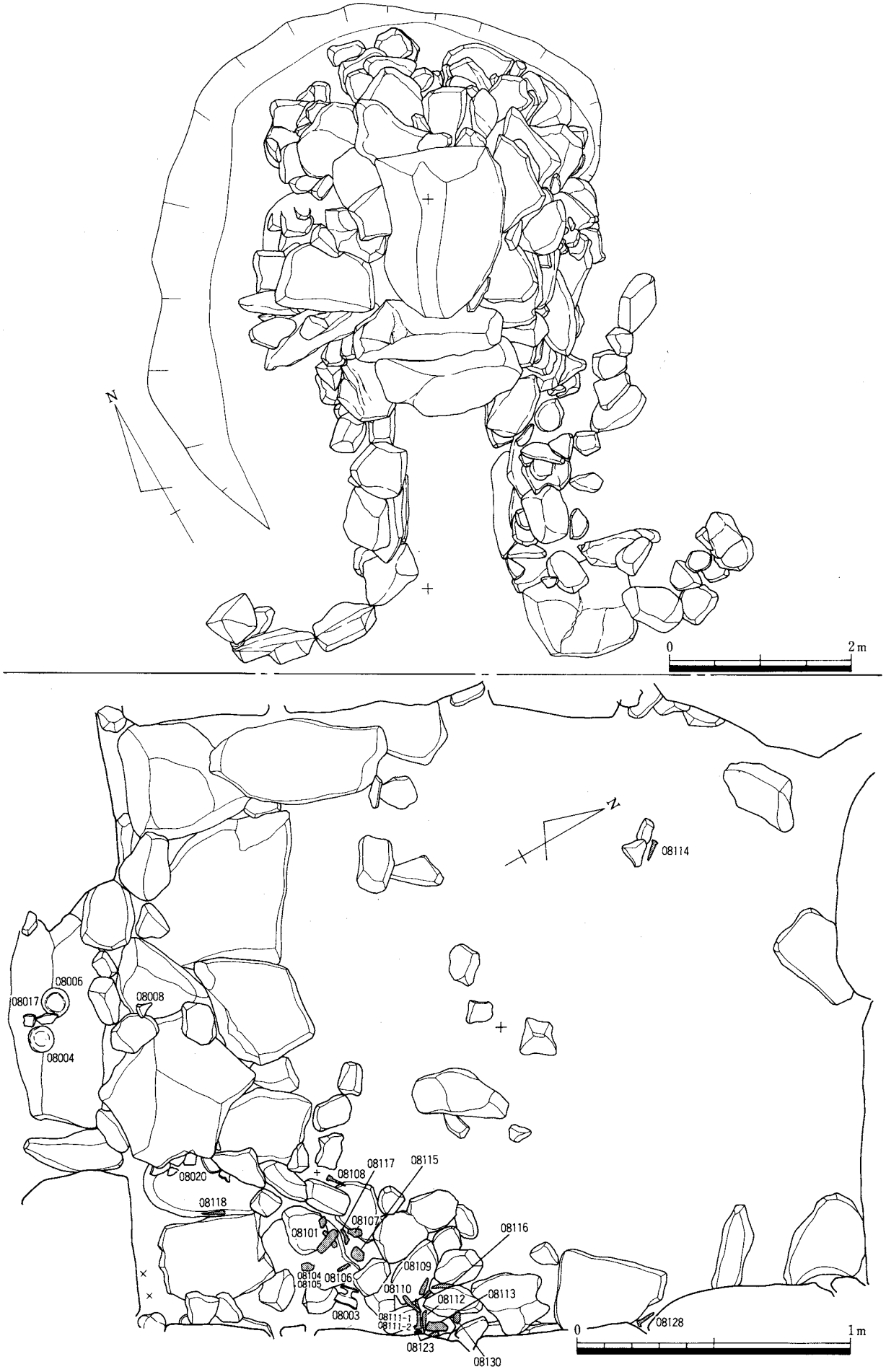


Fig.36　8号墳石室俯瞰図、石室平面図（縮尺1/20, 1/60）

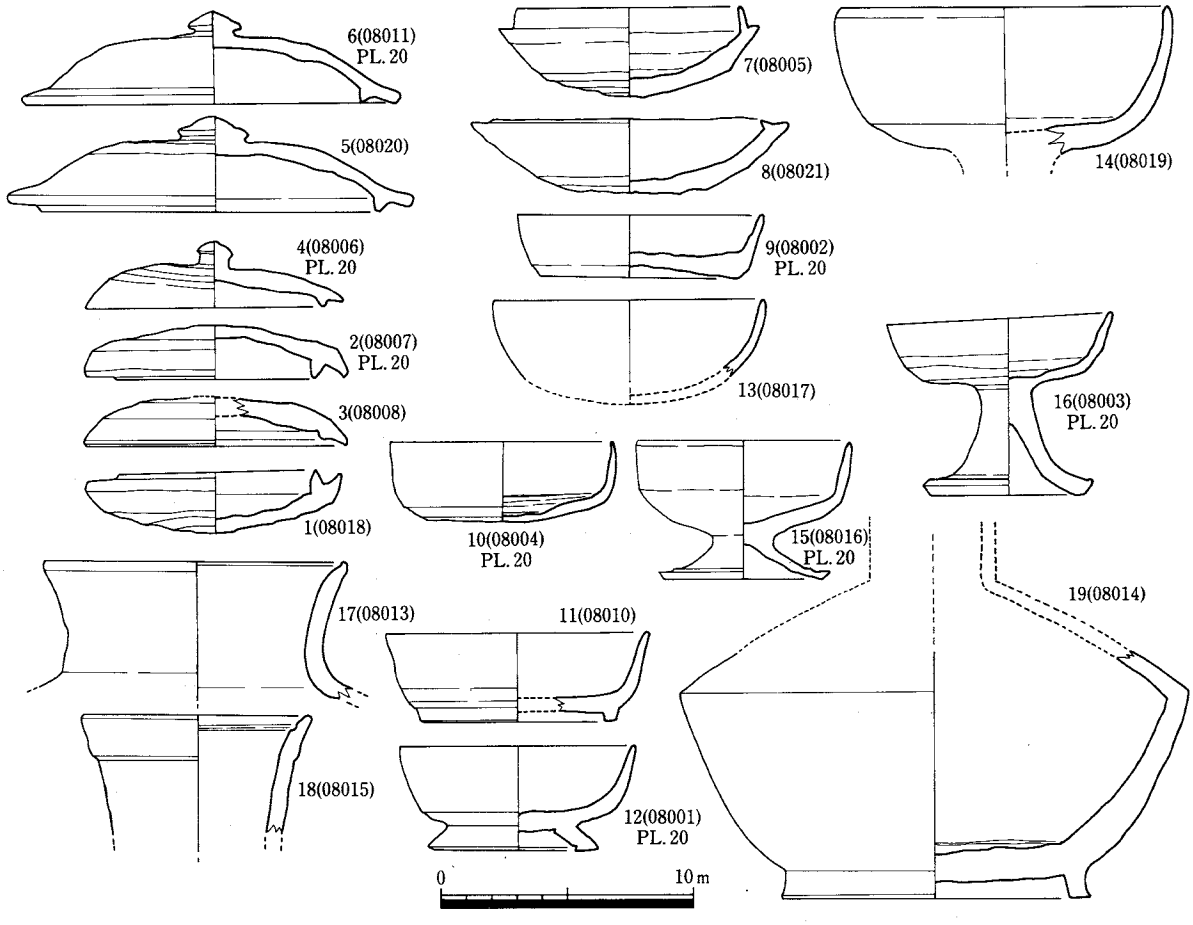


Fig.37　8号墳出土遺物実測図（縮尺1/3）

7は1と同じく框石上に配置されたものである。受部の立ち上がりが高く内湾しながらほぼ垂直に立ち上がる。口径9㎝、受部高0.9㎝、器高3.5㎝を測る。8は受部が横に引き伸ばされた形状を呈し、篦削りも底部だけに施す。口径12.7㎝、受部高0.1㎝、器高2.9㎝を測る。9はやや上げ底の平底を呈する碗形で、口径9.8㎝、器高2.8㎝、底径8㎝である。10は底部からやや内湾ぎみに膨らみながら立ち上がり、篦削りは底部のみに施されている。口径8.9㎝、器高3.2㎝、底径6㎝である。11・12は高台付碗で、高台の接合が底部より内に付けられている11と体部と底部の境につけられる12がある。11は口径9.4㎝、器高4.2㎝、底径8㎝、12は口径10.5㎝、器高3.4㎝、底径7.8㎝である。

14～16は高坏である。14は大型であるが杯部だけである。口径13.2㎝、15は小型の高坏で口径8.2㎝、器高5.6㎝、脚径6.9㎝、16は中型の高坏で口径9.2㎝、器高7㎝、脚径6.7㎝である。

17は甕形土器の口縁部で口径11.8㎝、18は直口壷の口縁部で口径9㎝である。19は高台付直口壷である。胴部上位から口縁部にかけて欠損している。

土師器

13は土師器の碗である。底部を欠損するが丸底の底部が付くもので、口径10.8㎝を測る。

第９号墳の調査

位置と現状（Fig.32・38～40　PL.11・12）

９号墳はヤツデ状に広がる尾根の南側急勾配に８号墳と共にあり、西に15mの距離に９号墳、南に谷を挟んで６・７号墳がある。標高75～78m間に位置し、石室主軸方向をN−10°−Eにとり、南側に開口している。周辺部に18号墳が分布調査の時点では確認されていたが、調査時にはすでに破壊されていた。また周辺に花崗岩円礫・角礫が散存していたためボーリング・試掘調査を行ったが古墳ではなかった。

墳　丘（Fig.32・38　PL.11）

石室が等高線に垂直に築造されており、墳丘周辺部だけが緩やかで、他の部分は密で急斜面上に構築されている。墳丘は表土排除段階で東西8.1m、南北９mの円墳であり、天井石だけがが遺存していない状態であった。墳丘裾部両左右に列石を巡らすが、全周はせず羨道部から３mが確認できたにすぎない。周溝は北側から東西にあり、馬蹄形を呈する。

土層からみると自然堆積部分が表面を覆っていることから、墳丘盛土が流れ出した部分が多いと考えられ、列石自体も崩壊し流されたものと考えられる。

地山整形（Fig.39　PL.11）

地山整形は標高75～78mの部分を二段に分け整形している。石室構築面は、平坦面を造り出しているが、羨道・墓道部分は傾斜面に設置している。石室構築面から北側の溝の部分までは2.5mの段差を持つ。北側平坦地からややなだらかに段落ちし、平坦面を造りだし、石室築造のための掘り方を行っている。掘り方の大きさは長軸５m、短軸3.6m、面積18㎡、深さ1.5mの隅丸方形を呈する。羨道部では第一石までが地山掘削を施しており、それより下方は盛土上に配石する。羨道からつづく列石は、盛土上に配石され孤状を呈する。右側辺部において羨道部端に巨石を配し、羨道部の終わりを明確にし、その端から列石を巡らしている。

石室・羨道・墓道（Fig.39　PL.11・12）

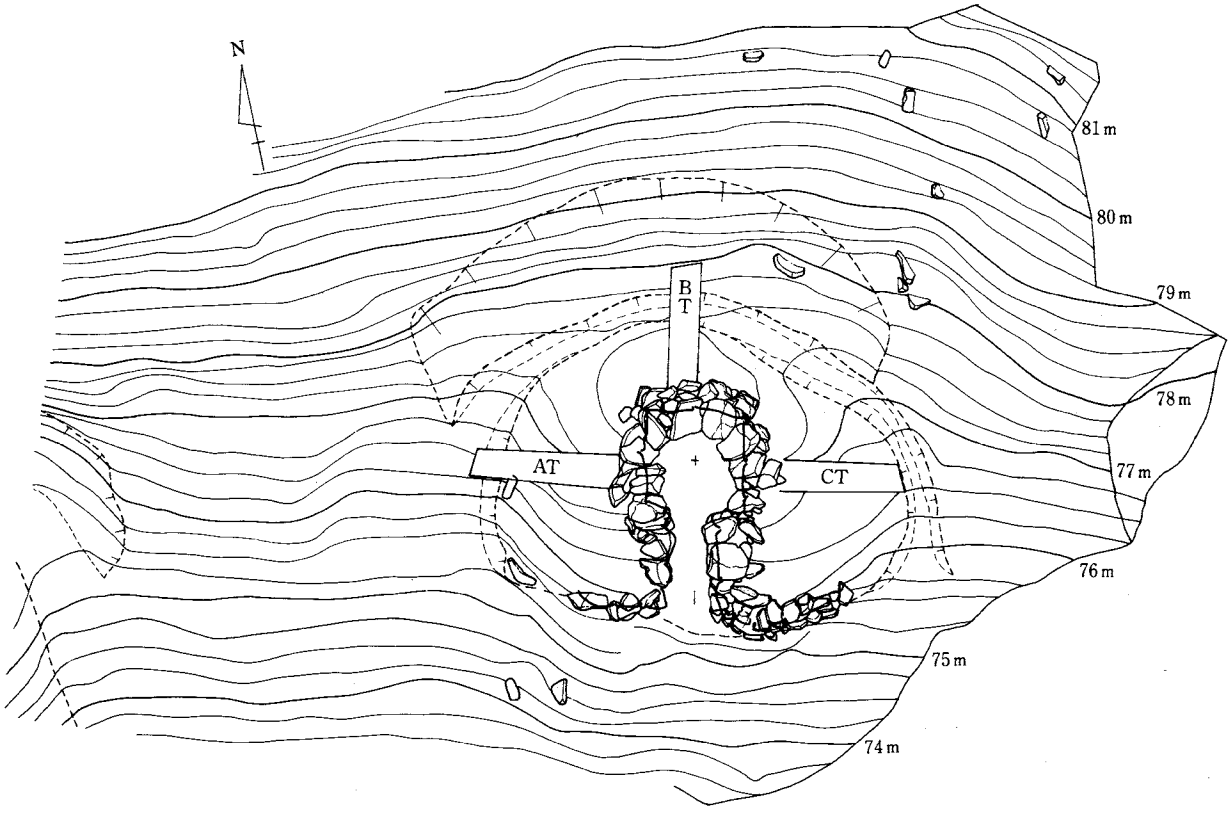
石室の平面プランは長軸2.15m、短軸２m、面積4.3㎡の正方形を呈する。奥壁の腰石は二枚で構成され、床面下20㎝まで掘り込んで設置されている。上部は基本的には煉瓦積みで、大小の石材を使用している。天井石までの高さ（床面から）２mを有する。右側辺部は大石三枚を横に立てほぼ直線的に面を形成している。上部構造は石を横に配置し、交互に目地が入る煉瓦積み技法を用いている。天井石は無いが、奥壁・左右側辺部から迫り上げられドーム状の石室構造を呈する。床面は右中央部に一部抜き取られているが、他は人頭大の敷石を配している。

左側辺部は右側辺部と同様に、二枚の立石によって面を揃えながら配置されている。上部構造は右側辺部と同様に煉瓦積によって迫り上げている。

羨道部　羨道部は石室袖石から2.1mの長さを有する。右羨道部は二枚の立石を配し、三段の石組を有する。羨道からほぼ直角に列石を巡らし、羨道部との区別を行う。列石は弧を描きながら墳丘周辺部に巡る九個の石を配置する。一列が２～３個の石を積み重ねる方法を採る。左羨道部も四枚の石で形成されている。羨道部は両左右とも二石の腰石であり、その上に右側辺部は二石、左側辺部は一石の石が遺存している。羨道部と玄室の長さの比較は1：１の比率である。

閉塞施設（Fig.39　PL.12）　閉塞は框石から始まり1.3mまで遺存する。現存する施設は四段の石と粘土によって形成されている。

土　層（Fig.40　PL.11）



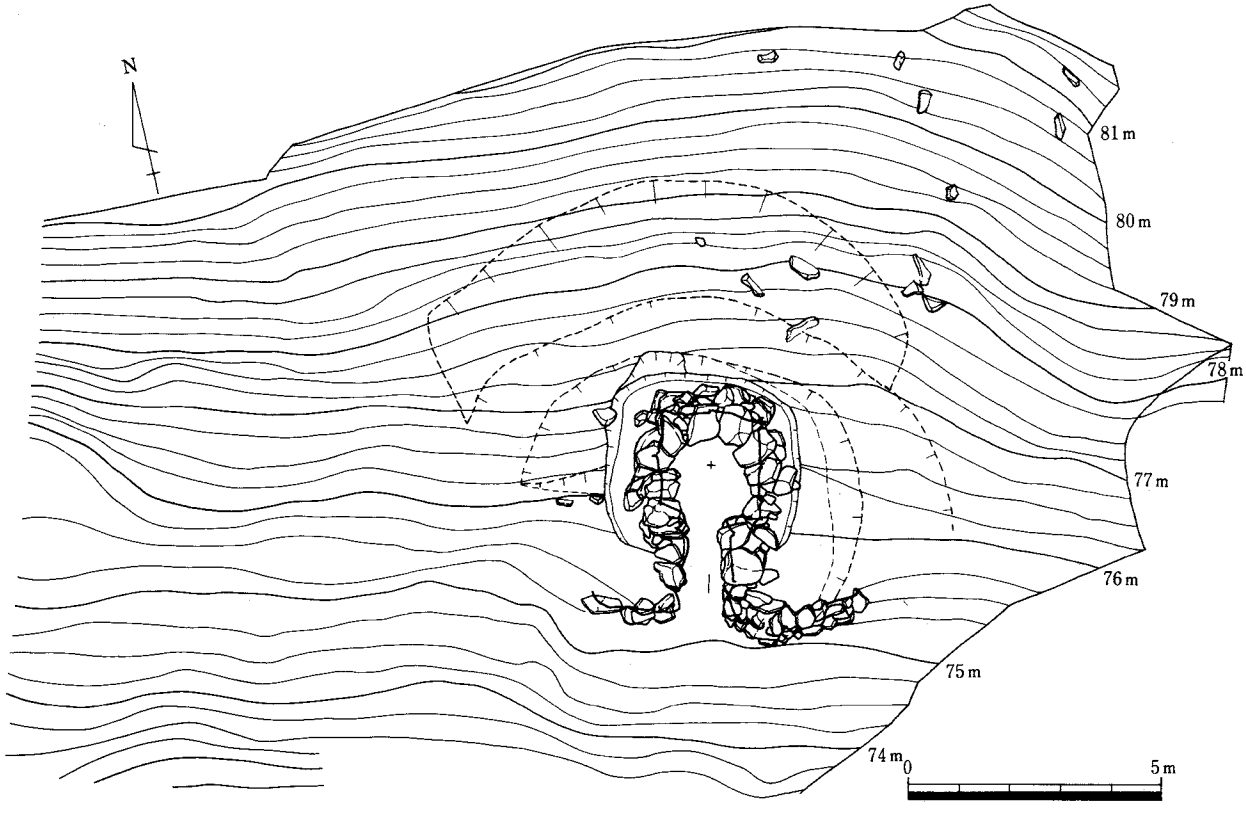


Fig.38　９号墳墳丘測量図、地山整形図（縮尺１/150）

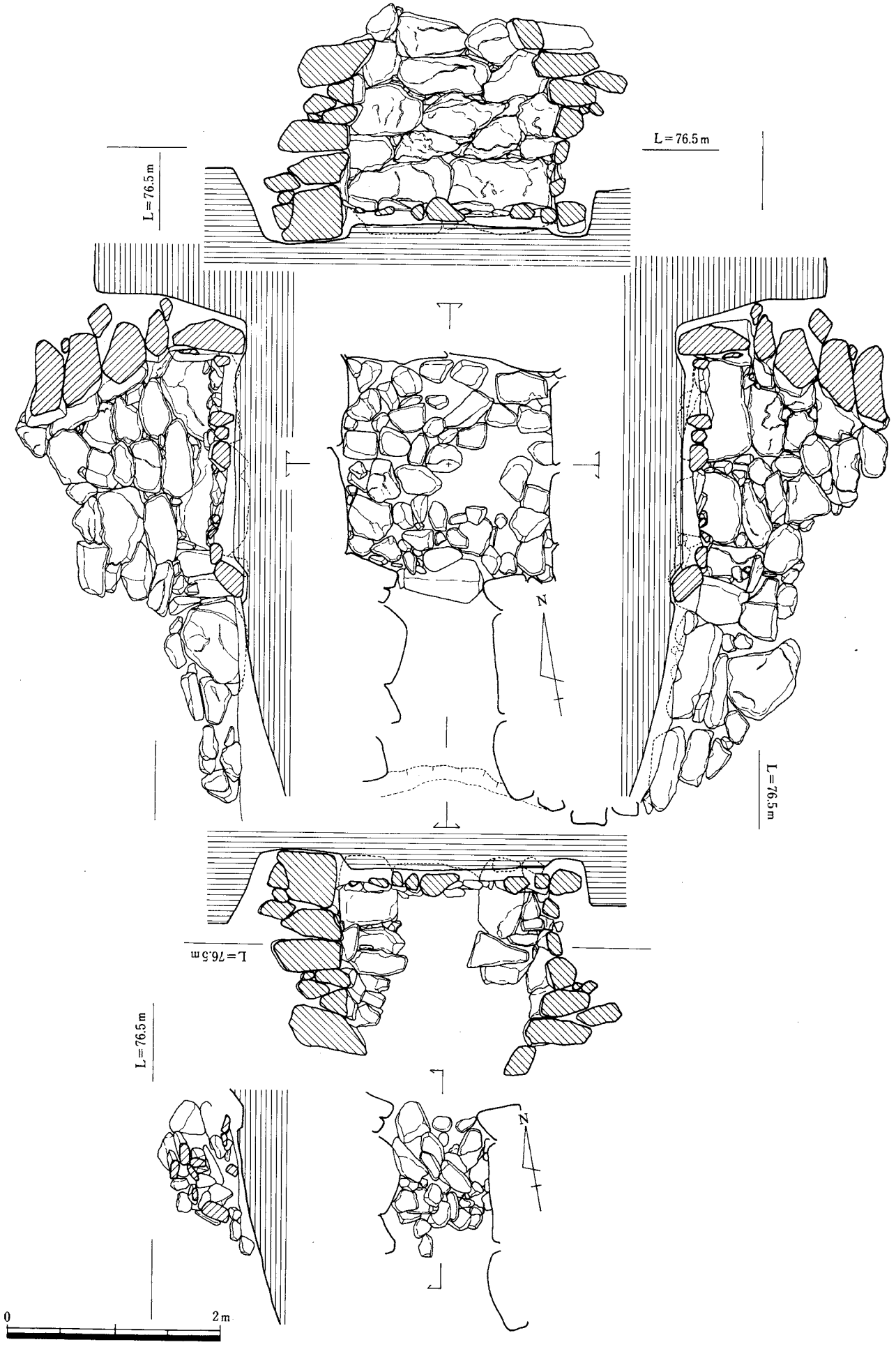


Fig.39　9号墳石室平面・断面図、閉塞施設実測図（縮尺1/50）

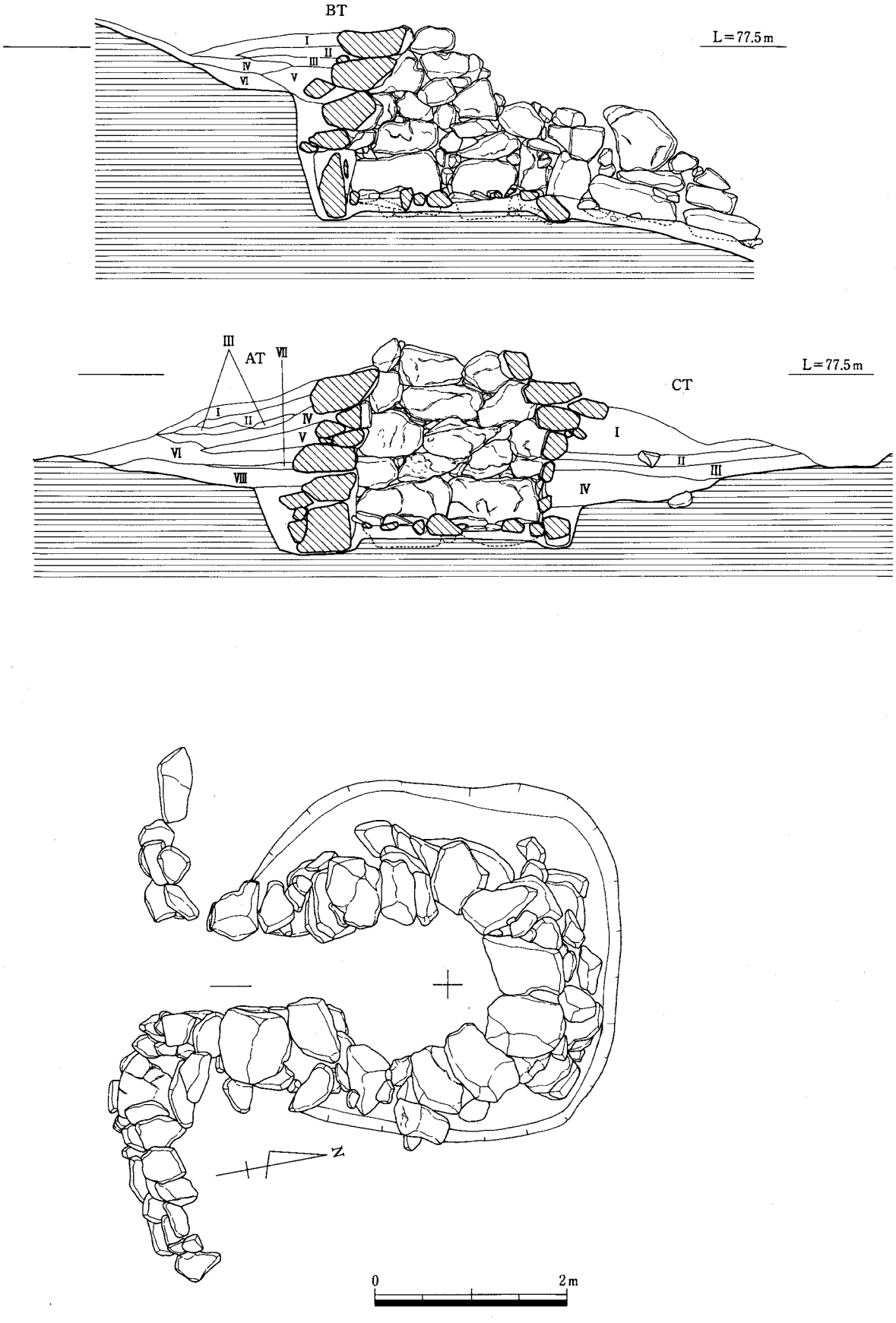


Fig. 40　９号墳石室俯瞰図、土層断面図（縮尺１/60）

主軸延長上の墳丘にトレンチを設定し、東西方向にA・Cトレンチ、南北方向にBトレンチの3本を設定し、土層観察と地山の検出に努めた。石室横断面と組み合わせているA・Cトレンチでは地山の高さがほぼ一定である。Cトレンチの墳丘盛土の端から約1mの幅で周溝が巡り、地山掘削を行っているが、Aトレンチではその痕跡が検出出来なかった。Aトレンチの土層は第Ⅰ層が黄褐色土、第Ⅱ層が灰褐色土混じりの褐色土、第Ⅲ層がブロック状に認められる赤褐色土、第Ⅳ層が灰褐色土と赤褐色土の互層、第Ⅴ層が灰褐色土、第Ⅵ層が褐色土、第Ⅶ層が赤褐色土、第Ⅷ層が暗黄褐色土である。この部分が腰石から第二石目の部分に当たり、これから石室掘方部分となる。この掘方には人頭大の石と赤褐色粘質土・褐色粘質土（交互に堅く締められており版築状を呈する）がある。Cトレンチの土層は第Ⅰ層黄褐色土、第Ⅱ層が灰褐色土と褐色土の互層、第Ⅲ層が褐色土、第Ⅳ層が暗褐色土、第Ⅴ層が赤褐色土と褐色粘質土の互層である。これから下層は石室掘方で、土層はAトレンチと同じ土層が版築状態となっている。

Bトレンチは主軸の長軸方向に入れた。地山の標高は78.5mで、緩やかな傾斜を持ちながら下り一度平坦面を有し、奥壁裏込め付近でほぼ垂直に掘り下げている。腰石掘り方の標高は77mで、その比高差は1.5mである。Bトレンチの土層は第Ⅰ層が褐色土、第Ⅱ層が赤褐色土、第Ⅲ層が灰褐色土と褐色土の互層、第Ⅳ層が黄褐色土、第Ⅴ層が褐色土、第Ⅵ層が暗黄褐色土である。この下は石室掘方部分で、赤褐色粘質土と黄褐色粘質土の互層であり、かなり強く叩き締められている。

出土遺物（Fig.48-1～9　PL.20）

須恵器（Fig.48-1～8　PL.20）

杯蓋　1　胎土に含まれる石英粒の突出及び鉄錆の付着等で器面が荒れている。天井部は篦削り、体部内面は回転ナデを施す。口縁端は丸くおさめ、重ね焼き時の他の遺物片の付着及び剝取された部分がある。かえりの受部は内傾外反し短い。口径12.9cm、器高2.2cmを測る。

杯身　2～4で3点とも蓋受部を持たない。3は平底を呈し、外反しながら立ち上がり口縁端を丸くおさめる。2は底部に篦記号「—」を記し、体部中央で稜をもち、口縁との間に一条の沈線を巡らす。4は内湾気味に立ち上がり、口縁端を丸くおさめる。底部にカキ目を施す。口径は2が9.6cm、3が12.2cm、4が13.6cmを測る。3は1とセットになるものと思われる。

高坏　6　口径22cm、器高8.6cmを測り、いびつな形状を呈する。体部は外傾し口縁端を丸くおさめる。杯底部は篦削りで、ロクロ回転は逆時計廻りである。脚は裾で大きく開く。逆時計廻りのネジリ成形、ナデ調整後杯身部分と接合させる。裾内面で僅かな窪みをもつ。

平瓶　7・8　平底を呈し、体部中央より緩やかに湾曲する。体部下位から底部にかけて篦削りを行い、中央より上位にカキ目を施す。7は8より一回り大きい。いずれも口縁は体部中心よりずらして付けている。7の肩部に篦記号「∀」がある。

盤　5　底部片で立ち上がり部分が僅かに残る。底部外面に指頭痕・爪痕が多く残る。内面調整は中央で静止ナデ、外側で回転ナデを行い、外周に僅かな窪みをもつ。転用硯の可能性の考えられる。

8が羨道部、2が表採、他は玄室からの出土である。

土師器（Fig.48-9）　9　壷形土器の口縁部片で端部は丸くおさめ、外側でやや肥厚する。口径16.2cmを測る。玄室から出土した。

青磁碗　図示しなかったが見込みに蓮花紋の刻線がある青磁碗底部片を墳丘から表採した。

第11号墳の調査

位置と現状（Fig.41～44　PL.13）

11号墳は分布調査（昭和53年度実施）の段階では、南東方向に10号墳と北西側に12号墳の三基からなる支群であったが、調査を行った段階では、10号墳は消滅していた。11・12号墳は調査区の南東隅、8・9号墳から東に尾根を越えた東側斜面に位置し、9号墳から直線で120m離れた位置にある。又、11号墳は12号墳から北西に27mの距離にある。11号墳は標高93～95m間に位置し、石室主軸方向をS-80°-Wにとり、東側に開口している。墳丘をのせる斜面は東側斜面のやや緩やかな部分に構築し、羨道部より下は急勾配となっている。現状は数個の花崗岩が認められ、中央部に窪みが見られる状態であった。

墳　丘（Fig.41・42　PL.13）

石室が等高線に垂直に築造されており、墳丘周辺部だけが緩やかでその下方は急斜面である。墳丘は表土排除段階で東西7.5m、南北9mの円墳であり、溝は全周を巡り、幅は広いところで2m、狭い所で0.9m程残っている。深さは0.5m程度である。墳丘右側に列石を巡らすが、全周はせず恐らく二段に設けられたものと考えられる。土層からみると自然堆積部分が表面を覆っていることから盛土が流れ出した部分が多いと考えられ、列石自体も崩壊し流されたものと考えられる。

地山整形（Fig.42　PL.13）

地山整形は標高93～95m部分の緩やかな面に周溝部分と石室掘り方を二段に分け整形している。石室構築面は平坦面を造り出しているが、羨道部分は傾斜面に設置している。西側平坦地からややなだらかに段落ちし、平坦面を造りだし石室築造のための掘り方を行っている。掘り方の大きさは長軸3m、短軸3m、面積9㎡、深さ0.75mの正方形を呈する。羨道部では盛土上に配石する。

石室・羨道（Fig.43　PL.13）

石室の平面プランは長軸1.7m、短軸1.8m、面積3.06㎡の正方形を呈する。奥壁の腰石は二枚で構成され、床面下20㎝まで掘り込んで設置されている。上部は基本的には重箱積みで、大小の石材を使用している。右側辺部は大石二枚を横に立て、石の接する部分ではやや外に開き、上部構造は腰石及び一石しかないため不明確であるが、積み方を見ると重箱積みを用いている。床面は攪乱を受け、敷石はまったくない。左側辺部は右側辺部と同様に二枚の立石を配置しているが、面を揃える意識が無く雑な造りである。

羨道部　羨道部は玄室袖石から長さ1.7m、幅0.7mを有する。玄室長との比率は1：1である。右羨道部は二枚の立石を配し、二段の石組を有する。左羨道部は三枚の石で形成されている。

閉塞施設（Fig.43　PL.13）　閉塞は羨道入口部分に1.2mの長さで認められ、現存する施設は三段の石と粘土によって形成されている。玄室入口部分より0.8mの空間を造り出している。

土　層（Fig.44）

南北方向にA・Cトレンチ、東西方向にBトレンチの3本を設定し、土層観察と地山の検出に努めた。Aトレンチの土層は第Ⅰ層が表土、第Ⅱ層が褐色砂質土、第Ⅲ層が赤褐色砂質土、Cトレンチの土層は第Ⅰ層表土、第Ⅱ層が褐色土、第Ⅲ層が褐色砂質土である。Bトレンチは主軸の長軸方向に入れた。緩やかな傾斜を持ちながら下り一度平坦面を有し、奥壁裏込め付近でほぼ垂直に掘り下げている。腰石掘り方の標高は95.2mでその比高差は0.75mである。Bトレンチの土層は第Ⅰ層が表土、第Ⅱ層が黒色土、第Ⅲ層が褐色砂質土、第Ⅳ層が褐色土である。

出土遺物（Fig.48-10）

須恵器　杯蓋　10　口縁部破片で時計まわりの回転ナデを行う。玄室攪乱からの出土である。

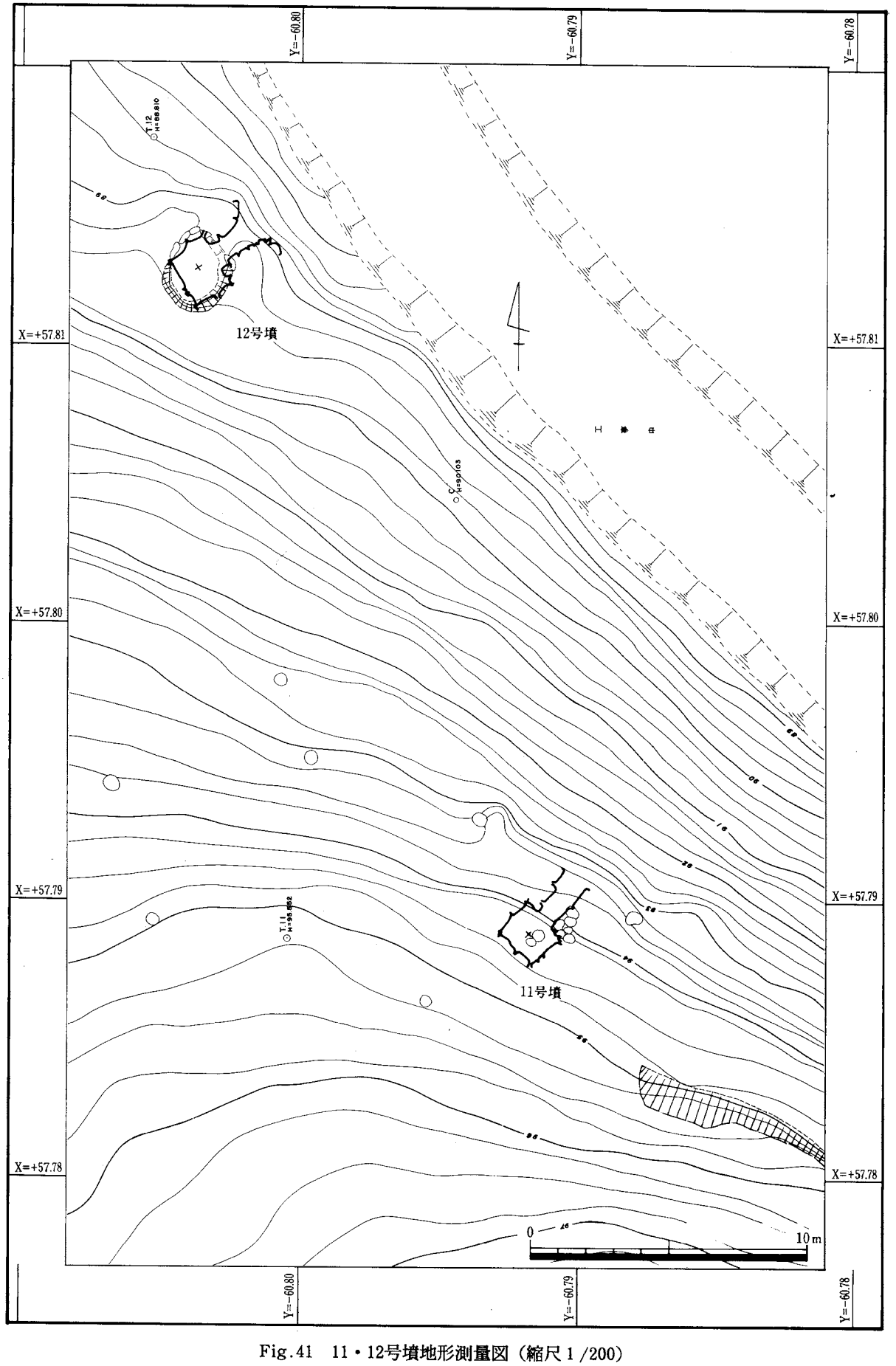
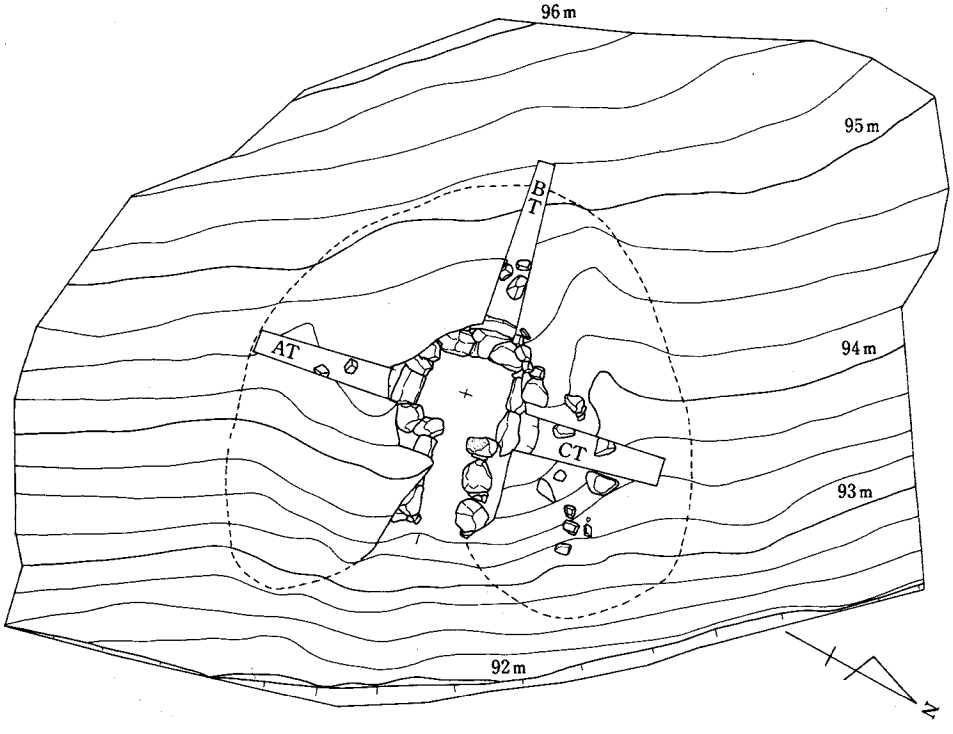


Fig.41　11・12号墳地形測量図（縮尺1/200）



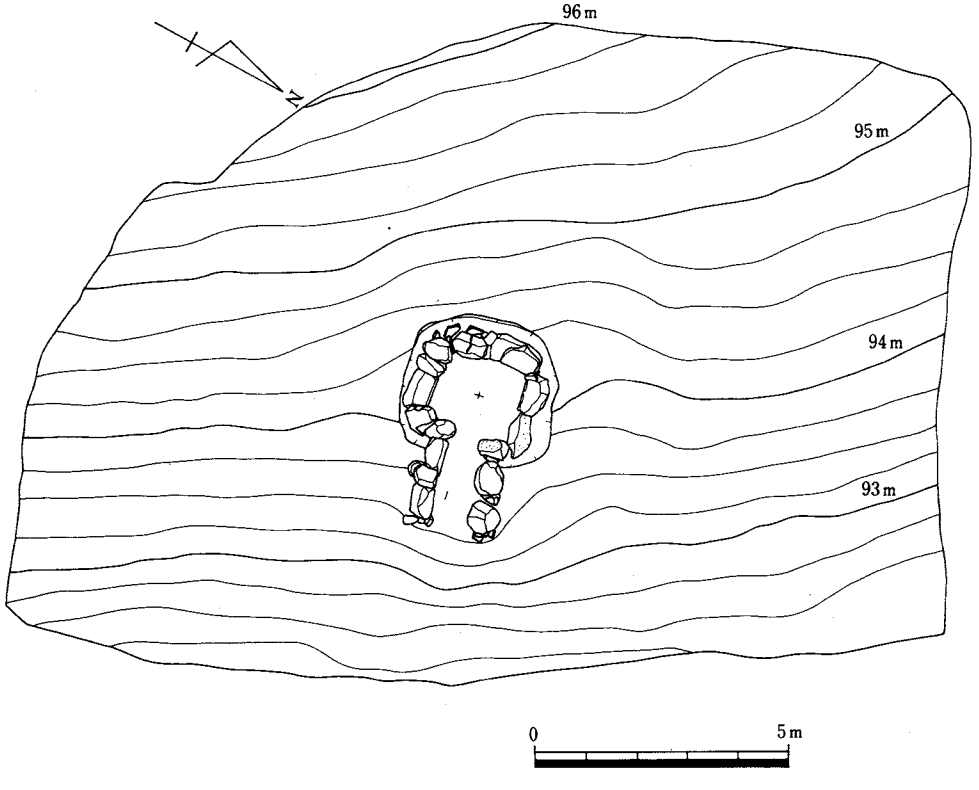


Fig.42　11号墳墳丘測量図、地山整形図（縮尺 1 /150）

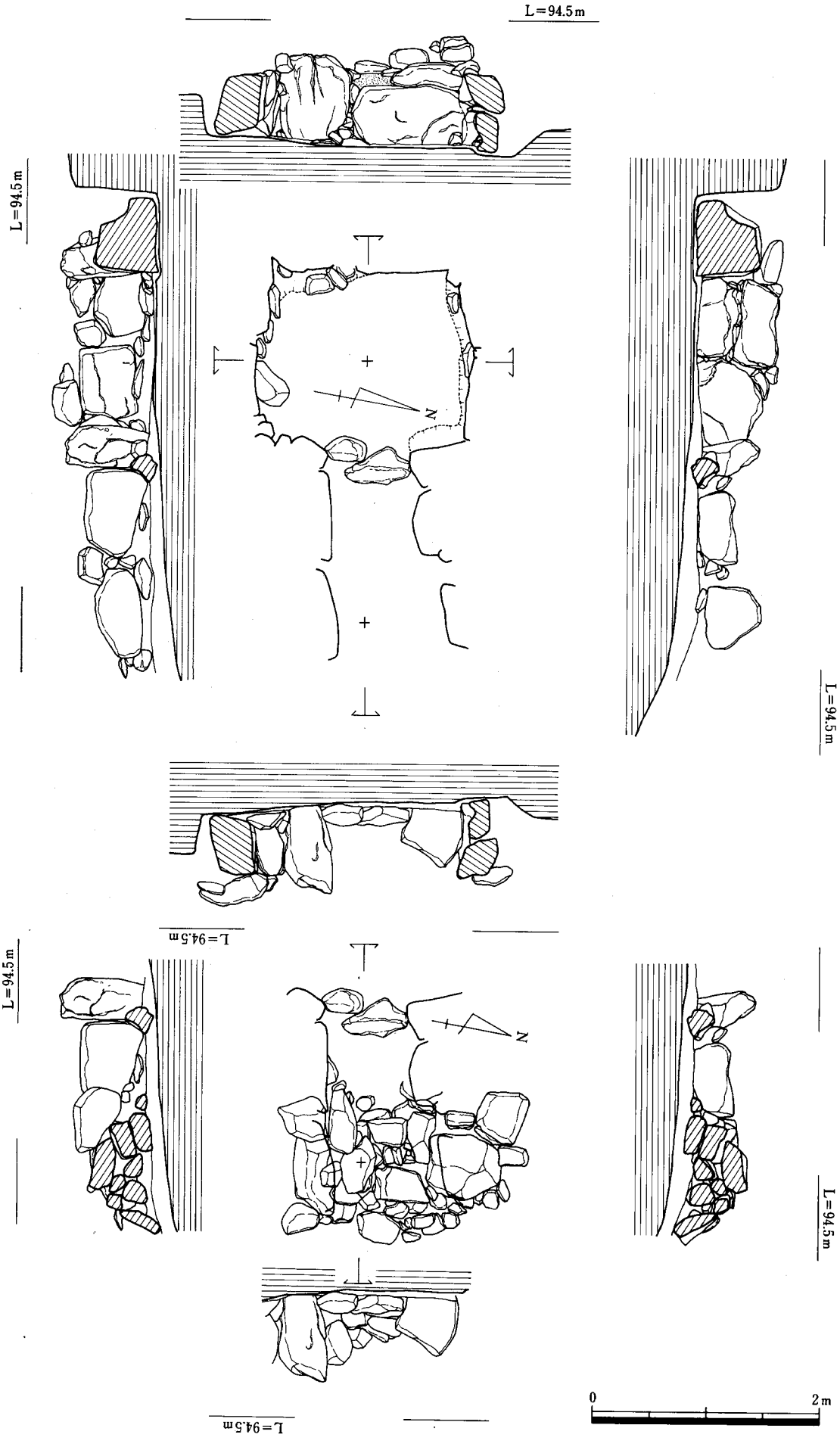


Fig.43　11号墳石室平面・断面図、閉塞施設実測図（縮尺1/50）

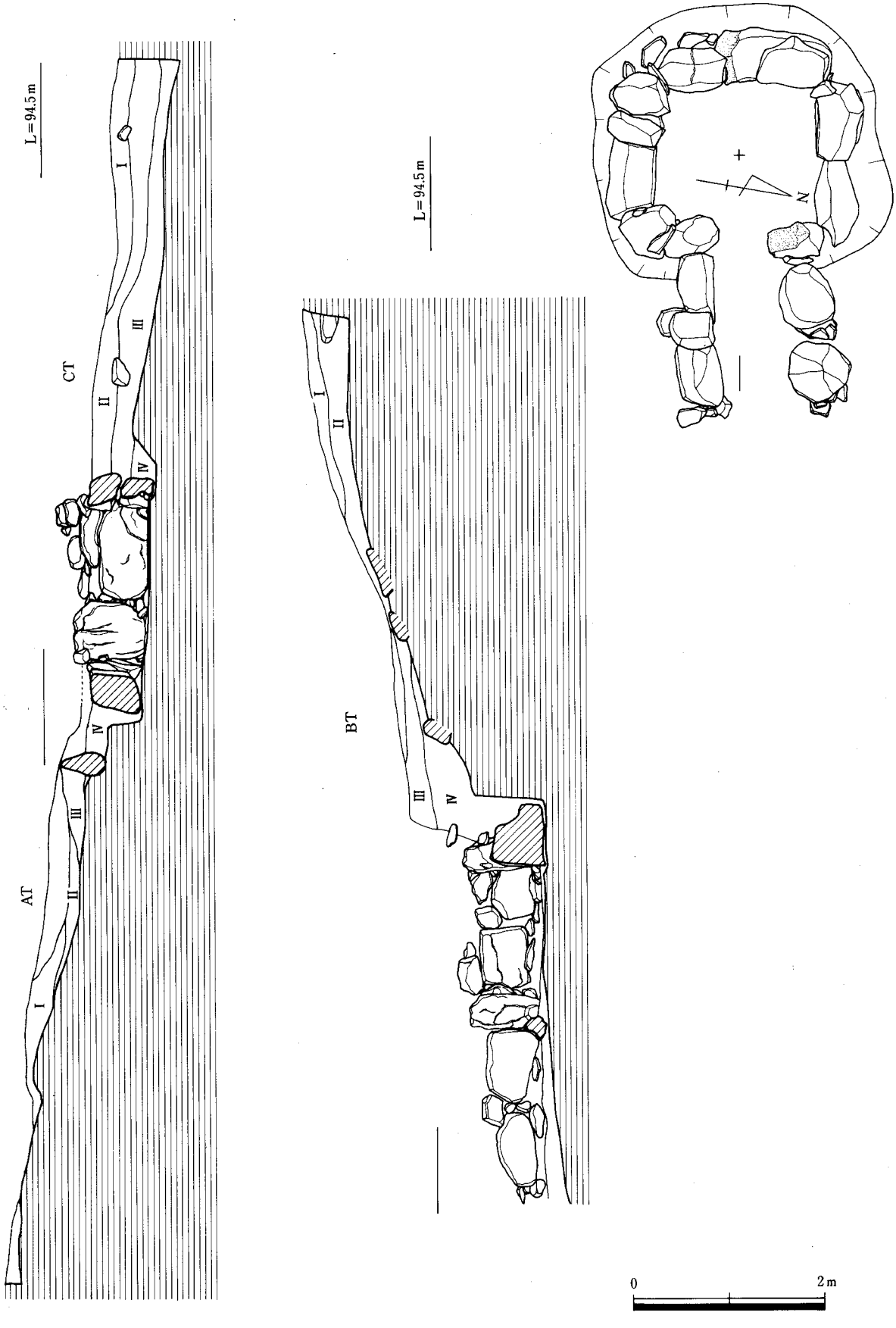


Fig.44　11号墳石室俯瞰図、土層断面図（縮尺1/60）

第12号墳の調査

位置と現状（Fig.41・45～47　PL.14）

12号墳は標高88～90m間に位置し、石室主軸方向をS-80°-Wにとり、東側に開口している。11・12号墳は調査区の南東隅、8・9号墳から東に尾根を越えた東側斜面に位置し、9号墳から直線で120m離れた位置にある。又、12号墳は11号墳から南東に27mの距離にある。13号墳は12号墳から北西に130m離れた位置にある。墳丘をのせる斜面は東側斜面のやや緩やかな部分に構築し、墓道は削平されている。現状は数個の花崗岩が認められ、中央部に窪みが見られる状態であった。

墳　丘（Fig.41・45　PL.14）

石室が等高線やや斜めに築造されており、墳丘周辺部だけを造成している。墳丘は表土排除段階で東西7.5m、南北7.5mの円墳であり、溝は馬蹄形を呈する。墳丘は周溝の端部から始まるが、西側では周溝をV字形に造り、墳丘盛土を急激に立ち上げる。南側も西側と同様にV字形の溝を巡らせ、その端部から墳丘盛土を立上げている。これに対して北側は周溝が緩やかであるが、墳丘は西・南と同様である。土層からみると自然堆積部分が表面を覆っていることから盛土が流れ出した部分が多いと考えられ、列石自体も崩壊し流されたものと考えられる。

地山整形（Fig.45　PL.14）

地山整形は標高88～90m部分の緩やかな面に石室掘り方を行っているが、南側では二段に分け整形している。又、石室掘り方も同レベルに仕上げている。北側は急激に削平し、3.5m程の溝を造り出している。石室構築面は平坦面であるが、羨道部分は地山をそのまま利用し、石室内部より高く造られている。掘り方の大きさは長軸4.5m、短軸3.3m、面積14.85㎡、深さ0.6mの長方形を呈する。

石室・羨道部・閉塞施設（Fig.46　PL.14）

石室の平面プランは長軸1.8m、短軸1.8m、面積3.24㎡の不整形な方形を呈する。奥壁の腰石は二枚で構成され、床面下20㎝まで掘り込んで設置されている。右側辺部は大石二枚を横に立て、石の接する部分ではやや外に開き、上部構造は腰石及び一石しかないため不明確であるが、積み方を見るとレンガ積みを用いている。床面は攪乱を受け、敷石はまったくない。左側辺部は右側辺部と同様に二枚の立石を配置しているが、面を揃える意識が無く雑な造りである。

羨道部　羨道部は玄室袖石から長さ1.7m・幅0.7mを有する。玄室長との比率は1：1である。右羨道部は三枚の立石を配し、端部は丸みを持たせている。左羨道部は小振りな石を六枚使用し、これも右側辺部と同様に丸く仕上げている。

閉塞施設　閉塞は羨道入口部分に1.2mの長さで認められ、現存する施設は三段の石と粘土によって形成されている。玄室入口部分より0.8mの空間を造り出している。これは11号墳にも認められるもので、11・12号墳の築造年代が同時期であることが窺える。

土　坑（Fig.47　PL.14）

土坑は地山整形検出時に石室西側8.4m、標高90.5m部分に検出された。東側が削平されているため不明であるが、現状では長軸0.96m、短軸0.7＋αm、深さ0.16mの不整形土坑である。出土遺物は無いが焼土・炭等が検出された。

土　層（Fig.47）

墳丘に３本のトレンチを設定した。南北方向にＡ・Ｃ、東西方向にＢトレンチを入れ、土層観察と地山検出に努めた。Ａトレンチの土層は第Ⅰ層が茶褐色粘土粒を含み黄茶褐色土、第Ⅱ層が絞まりの悪い暗茶褐色土、第Ⅲ層が粘質の弱い黒色土、第Ⅳ層が暗黄褐色粘質土、第Ⅴ層が赤味の強い暗赤褐色粘質土、第Ⅵ層が赤褐色粘質土である。この第Ⅰ層から第Ⅵ層までは周溝の土層である。第Ⅶ層から第Ⅻ層が墳丘盛土の土層である。第Ⅶ層は暗赤褐色粘質土、第Ⅷ層は粘質に富堅く絞まった暗黄褐色粘質土、第Ⅸ層は第Ⅷ層より赤味のある黄褐色粘質土、第Ⅹ層は黄褐色粘土粒を含む暗赤褐色粘質土、第Ⅺ層は若干の赤褐色粘土粒と暗黄褐色粘質土、第Ⅻ層は粘質に富堅く絞まった暗黄褐色粘質土である。

Ｃトレンチの土層は第Ⅰ層が黄茶褐色土、第Ⅱ層が黒茶褐色土、第Ⅲ層が暗褐色土、第Ⅳ層が暗褐色土、第Ⅴ層が暗黄褐色粘質土、第Ⅵ層が暗褐色土である。これまでの層位が周溝の土層である。墳丘盛土は第Ⅶ層から第Ⅻ層までである。第Ⅶ層は暗黄褐色粘質土、第Ⅷ層は暗赤褐色粘質土、第Ⅸ層は淡茶褐色土、第Ⅹ層は淡赤褐色土、第Ⅺ層は黄褐色粘質土、第Ⅻ層は黄赤褐色粘質土である。

Ｂトレンチは石室長軸延長上に入れた。土層は第Ⅰ層が暗茶褐色土、第Ⅱ層が黒色土、第Ⅲ層が暗褐色土である。これまでが周溝の土層である。第Ⅳ層から第Ⅹ層までが墳丘盛土である。第Ⅳ層が茶褐色土、第Ⅴ層が暗茶褐色粘質土、第Ⅵ層が暗褐色粘質土、第Ⅶ層が暗赤褐色粘質土、第Ⅷ層は暗褐色粘質土、第Ⅸ層が暗赤褐色粘質土、第Ⅹ層が赤褐色粘質土で堅く絞まり版築状に固めている。

出土遺物（Fig.48-11～16　PL.20）

盗掘・撹乱を受けているため出土遺物が少なかった。図示したのは６点であるが、図示に耐えない須恵器甕形土器・土師器片がある。

須恵器（Fig.48-11・14～16　PL.20）

杯身　11は高台付の杯身で、口縁部を欠損、高台は直線的に下がり端部で外反屈曲する。底径8.4cmを測る。

平瓶　14は平瓶で、平底を呈する底部より直線的に外反し、体部中央よりやや上位で内湾屈曲する。口縁は中心よりずらして張り付ける。底部付近を篦削り、体部は回転ナデを施す。口径7.2cm、器高13.2cm、底部径12cm、最大径20cmである。

高坏　15は高坏で口径13.2cm、器高8.2cmを測る。杯底部と体部の境に篦削りを施し稜を持つ。他は回転ナデで、内面の底部に沈線を有する。脚はラッパ状に開き、裾でさらに大きく開く。裾の内側で窪みを持つ。焼成は甘く汚黄褐色を呈する。16は高坏の脚部で八ノ字状に開き、裾で外反屈曲する。刷毛状工具で時計廻りの回転ナデを施す。内外面にネジリ痕を残す。一部に自然釉がかかり黒褐色を呈する。何れも玄室攪乱からの出土である。

土師器（Fig.48-12・13　PL.20）

土師器高台付碗　12・13は土師器の高台付碗である。いずれも底部が厚く体部が薄い。12は口径12.9cm、底径8.6cm、器高3.7cm、13は底径9.6cmを測る。茶褐色を呈し、焼成はやや甘い。墓道からの出土である。

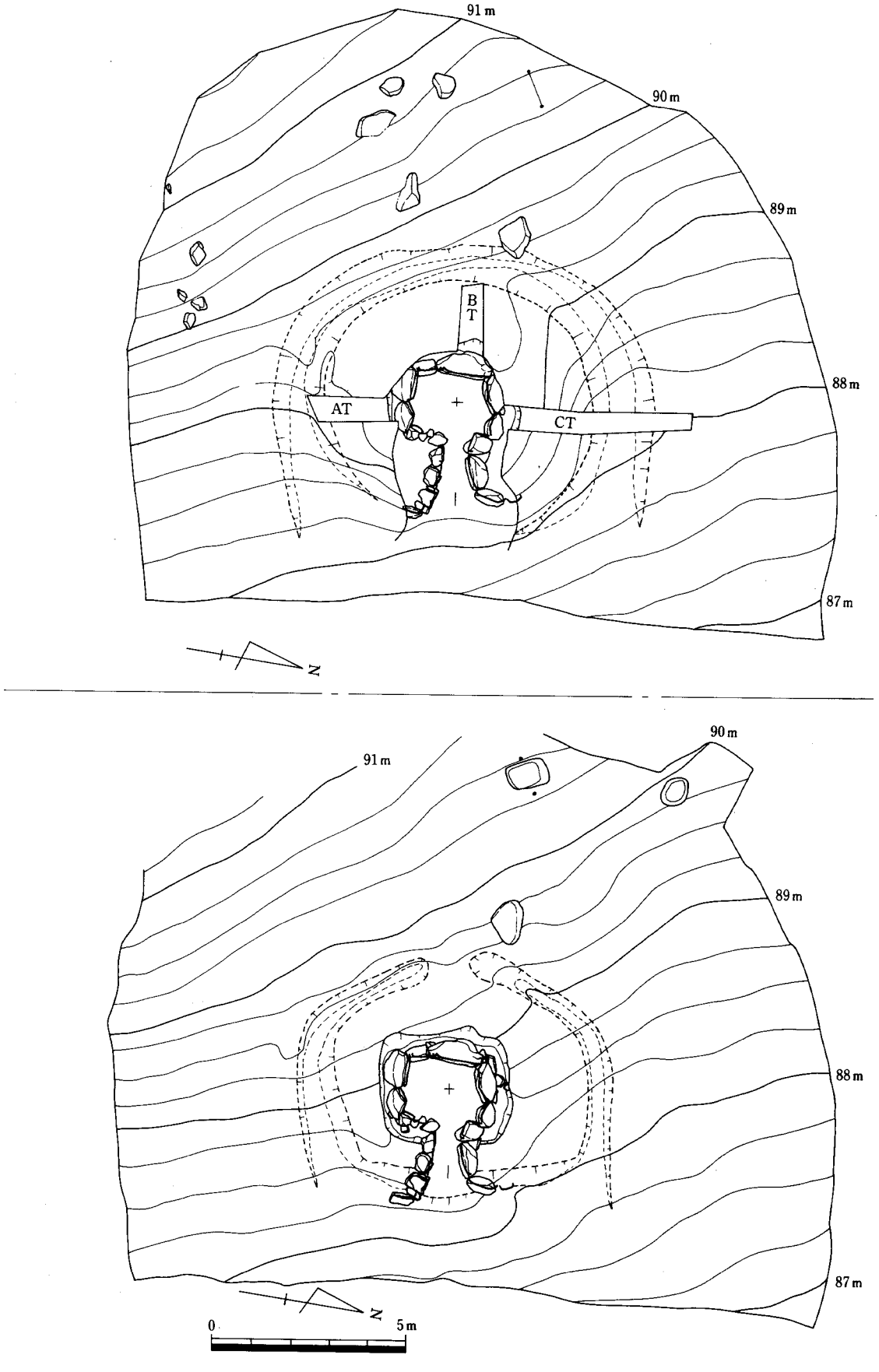


Fig.45　12号墳墳丘測量図、地山整形図（縮尺 1 /150）

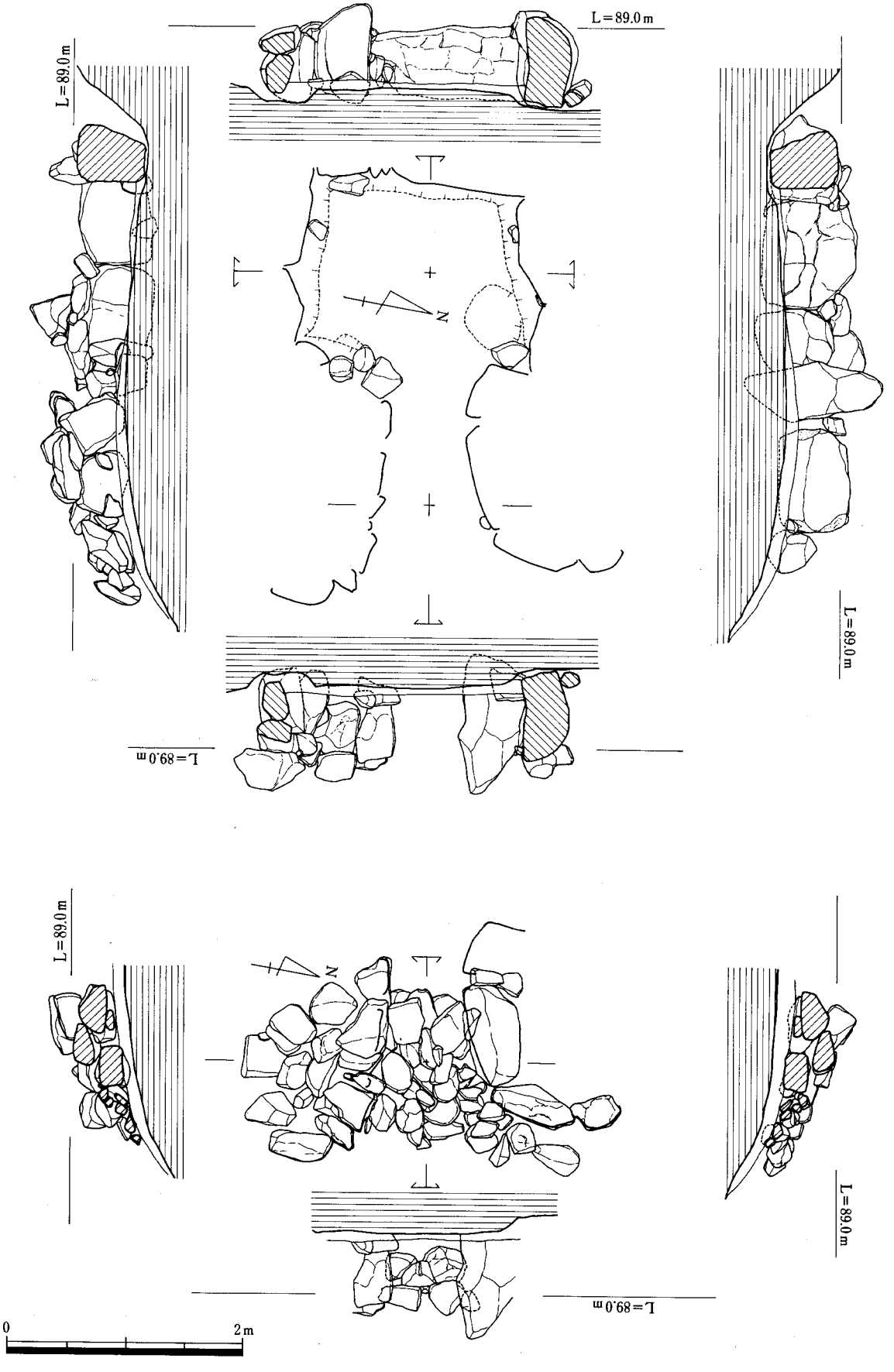


Fig.46　12号墳石室平面・断面図、閉塞施設実測図（縮尺1/50）

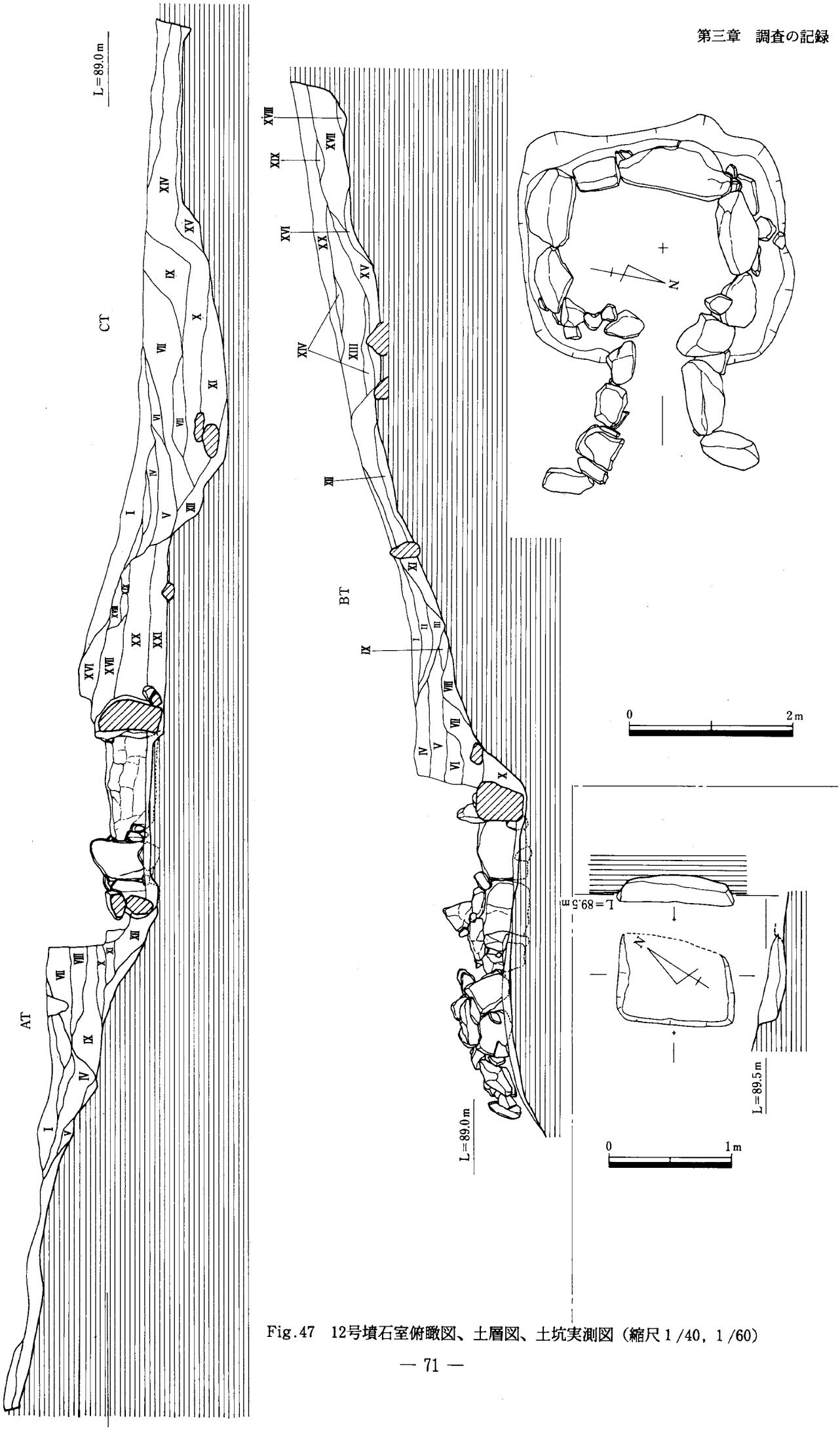


Fig.47　12号墳石室俯瞰図、土層図、土坑実測図（縮尺1/40，1/60）

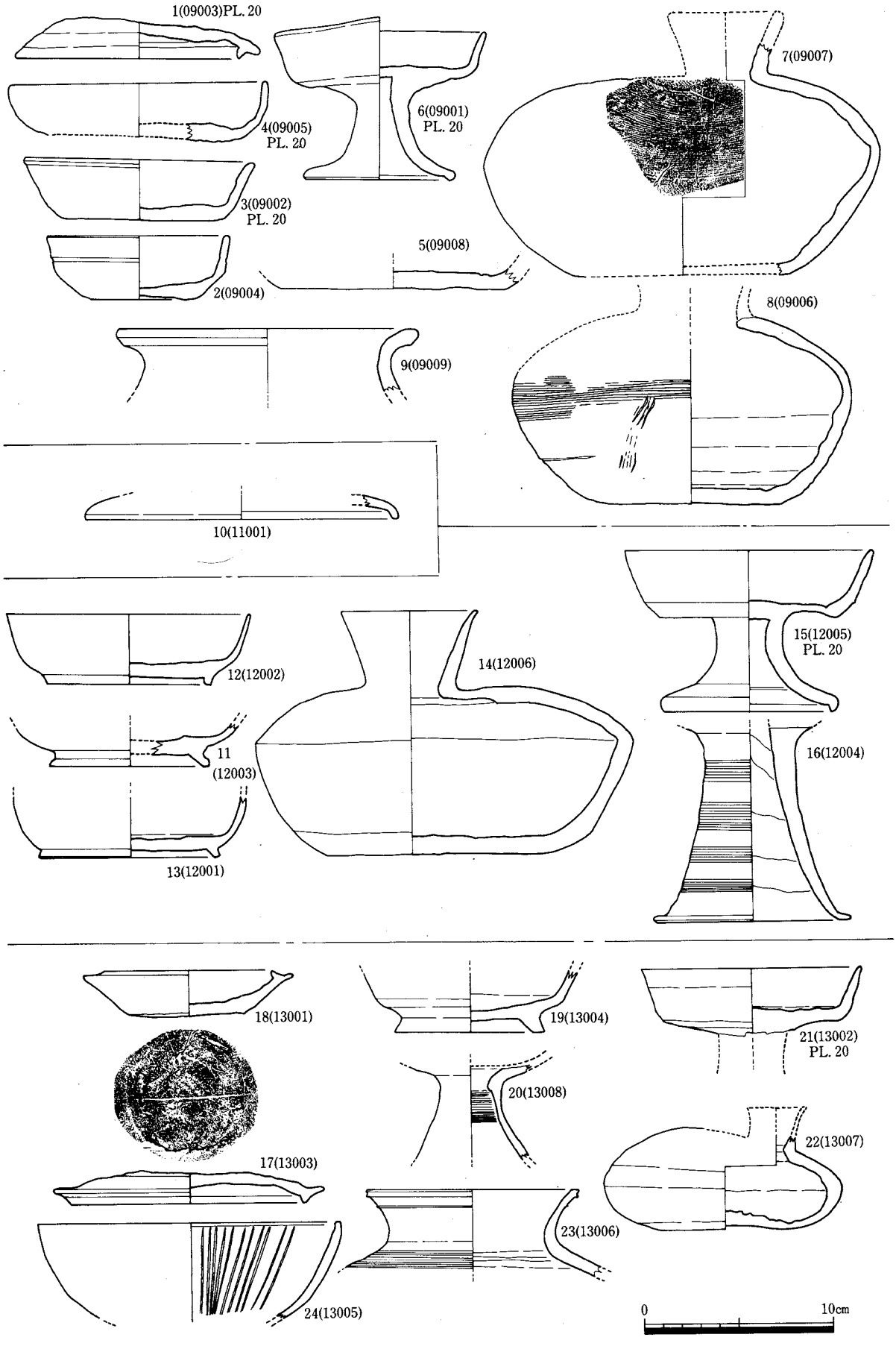


Fig.48　9・11～13号墳出土遺物実測図（縮尺１／３）

第13号墳の調査

位置と現状（Fig.49～52　PL.15）

13号墳は調査区西側にヤツデ状に広がる丘陵の北側斜面と東に広がる丘陵との分岐点のやや下方標高78.5mに位置し、東側には谷部を挟む。同じ尾根上の120m北側には14・15号墳があり、又、丘陵を挟む反対側の尾根南側斜面には８・９号墳が構築されている。本古墳群は２～３基の単位で構築されているが、本古墳と１号墳は１基からなる。石室主軸はN-54°30′-Wの方向をとり、等高線の斜め方向に構築され南東に開口する。石室は腰石を含み２段、羨道部は腰石だけの遺存で、天井石は破壊されていた。閉塞施設は一部が遺存していた。

墳　丘（Fig.49・50　PL.15）

13号墳は、調査区西側の丘陵と東側谷部の間の尾根上に、等高線の斜め方向に築造されている。天井石等は遺存せず、石室は流土により覆われ、中央がわずかに窪んだ状態であった。したがって墳丘の遺存状態は極めて悪く、遺存する墳丘及び石室構造から造営時の規模を考えると直径10.5m、墳高3.5mと想定でき、小高い丘状を成していたと思われ、墳丘は1.5mも削り取られた状態である。石室中央より南西に５m、北西に4.7m、北東に4.25mの位置に浅い溝状の窪みがあり、これは全周を巡る周溝と考えられ、この部分より墳丘盛土が始まる。墳丘北側には土の流失を防ぐ為の列石が認められ、造営時は二列で全周を巡っていたものと考えられる。

地山整形（Fig.50　PL.15）

地山整形は標高77～78.8m部分の緩やかな面に周溝部分と石室掘り方の二段に分け整形している。石室構築面は平坦面を造り出しているが、羨道・墓道部分は傾斜面に設置している。一段目は北側奥壁部分から北に約4.9mの位置から掘り込みが行われる。この部分が周溝の端部にあたり、これより緩やかな傾斜で石室方向に掘り込まれている。二段目は石室掘り方であるが、一度中程まで掘り下げた後、急激な傾斜で石室奥壁腰石設置面まで掘り込まれており、その傾斜角度は80度で、掘り方の深さは1.1mである。左側壁側では、中程まで掘り込まれた後、テラス状に平坦面を造り出し、その後急激な傾斜で掘り込まれる。石室構築面からテラスまでの高さは0.5mを測り、北側にある一段目の周溝端部と石室構造面までの深さは1.36mを測る。石室構築面は平坦であるが、羨道部分は地山をそのまま利用し、石室内部より高く造られている。石室掘り方の大きさは長軸３m、短軸３m、面積９㎡、深さ1.2mの長方形を呈する。

石室・羨道部・閉塞施設（Fig.51　PL.15）

石室はN-54°30′-Wに主軸を持ち、長軸1.8m、短軸1.75m、奥壁幅1.3m、玄門側幅1.4m、ややいびつな方形を呈し、石室面積3.24㎡である。左側壁はやや開き気味に三枚の腰石を配列し袖石に至る。右側壁は逆に内傾気味に三枚の腰石を配列し、袖石と思われる四枚目の巨石も石室と羨道を区切ることなく直線的に羨道に続く、いわゆる片袖型の石室である。奥壁は幅1.6m、高さ1.35mの花崗岩巨石を一枚配し、二段目に三枚の花崗岩を面を整え垂直に積み上げる。両側壁は三枚の大きさの違う花崗岩を配列し、二段目にこれよりやや小型の割石の尖った部分を全面に出し積み上げ、隙間には小型の転石を埋め込み空間を塞ぐ。石室は二段目までしか遺存しないが、煉瓦積みの方法を用いている。

羨道部　羨道部は長さ2.5m・幅１mを測る。左側辺部は五個の花崗岩を配列するが、袖石より三枚目からは盛土上に配石されている。又、右側辺部でも二枚目からは盛土上に配石される。右側の一枚目は、石室奥壁に次ぐ巨石で、縦方向に配置された事を思えば明らかに袖石としての使用の意図が窺える。石室の両側壁の長さが0.35mの差があり、左袖石と均整がとれない為、石室より直線的に配列

したものと考えられる。

閉塞施設　石室中央より１ｍの位置に設けられ、長さ1.4m、幅0.8m、高さ0.6mが遺存する。下段に比較的大振り（60×40～30×40cm程度）の割石を配し、これより上段に人頭大及び拳大の円礫を配する。最も遺存状態の良い所は主軸線より左側で高さ0.6m位まである。

土　坑（Fig.52）

石室の北側約8.2mの地山部分に土坑状遺構を検出した。長軸方向はN−54°30′−Wの方向を取り、標高78.38mに位置する。長軸1.3m、短軸1.1m、深さ0.45mの隅丸方形を呈する。底面は平坦をなし、遺物は出土しなかった。土坑内は炭化物が多く、壁は赤く焼けていた。

土　層（Fig.52）

主軸延長線上に３本のトレンチを設定し、東西方向をＡ・Ｃトレンチ、南北方向をＢトレンチとし、土層観察と地山検出に努めたが墳丘の遺存状態が悪いため全容は知り得なかった。石室横断面と組み合わせているＡ・Ｃトレンチでは地山の高さが異なりを示しＡトレンチ側が高い。又、これによりＢトレンチ側が約10cm程高くなっておりこれは等高線を斜めに築造したことに要因がある。Ａ・Ｃトレンチの土層は第Ｉ層が黒褐色土、第Ⅱ層が暗褐色土で、このＩ・Ⅱ層が周溝の土層である。第Ⅲ層は黄褐色土、第Ⅳ層が赤褐色土、第Ｖ層が暗褐色土、第Ⅵ層が赤褐色粘質土である。墳丘盛土の土層は第ⅢからⅣ層までで全体に強く突き固めている。又、第Ｖ層はＣトレンチ側では暗褐色土に赤褐色土のブロックが多く入り版築状を呈しており、斜面の下方にあたるＣトレンチ側の腰石の安定に、より力を注いでいたことが窺える。

Ｂトレンチの土層は第Ｉ層が黒褐色土、第Ⅱ層が暗褐色土である。これまでが周溝の土層である。第Ⅲ層が暗褐色土、第Ⅳ層が茶褐色土、第Ｖ層が暗灰褐色粘質土、第Ⅵ層が赤褐色粘質土である。第Ⅲ層から第Ⅳ層までが墳丘盛土である。Ａトレンチでの墳丘盛土である第Ⅲ層より上段、又、Ｂ・ＣトレンチのⅣ層より上段は破壊のため遺存しない。

出土遺物（Fig.48−17～24　PL.20）

図示したのは８点であるが、図示に耐えない須恵器甕形土器・土師器片がある。

須恵器（Fig.48−17～23　PL.20）

杯　蓋　17は杯蓋で、口縁部は上方に外反屈曲し端部を丸く納める。かえりは僅かに外に開く。回転篦削り後篦ナデを施す。羨道前黒色土より出土する。

杯　身　18は杯身で外底に篦記号「−」を付す。蓋受けの立ち上がりは短く、僅かに内傾外反する。底部は静止ナデ、他は逆時計廻りの回転ナデである。青灰褐色を呈し焼成はやや甘い。

高台付碗　19は高台付碗で底部付近に稜を有する。高台はシャープな造りで外側に開く。内面底部は静止状態でのナデを施す。外面に自然釉がかかり底部に爪形痕が認められる。

高　坏　20は高坏の脚部で一部に自然釉がかかる。筒部内は一部にカキ目を施す。21は高杯の杯部で脚部を欠損している。回転ナデを施す。

平　瓶　22は小型の平瓶で内面底部は回転篦削りで渦巻状を呈する。外面底部はナデと指押さえ痕が認められる。底部と体部の境は篦削り、他は回転ナデを施し、口縁は中心をずらして付ける。黒褐色を呈し焼成堅緻。

壷形土器　23は小型の壷形土器で頸部から胴部までカキ目を施す。口縁は外反し上面で僅かに窪む。外側に一条の突帯を巡らす。黒褐色を呈し焼成堅緻。20・22・23が羨道出土。

土師器（Fig.48−24）　**碗**　24は碗形土器で底部を欠損。外面は篦研磨後丹塗りを施す。内面は暗文が認められる。口縁端は平坦を呈し口径16cmを測る。玄室攪乱。

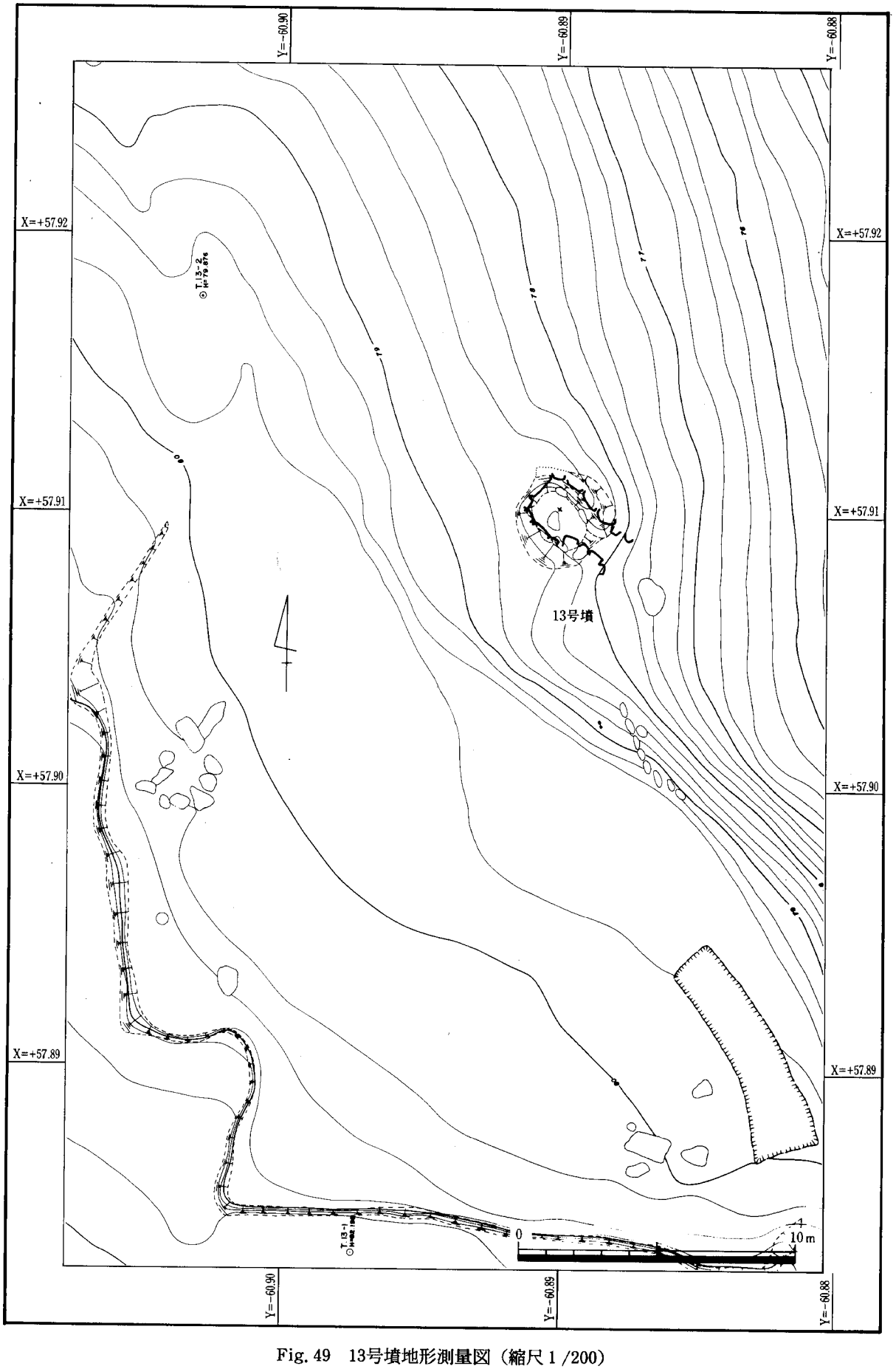


Fig. 49　13号墳地形測量図（縮尺 1 /200）

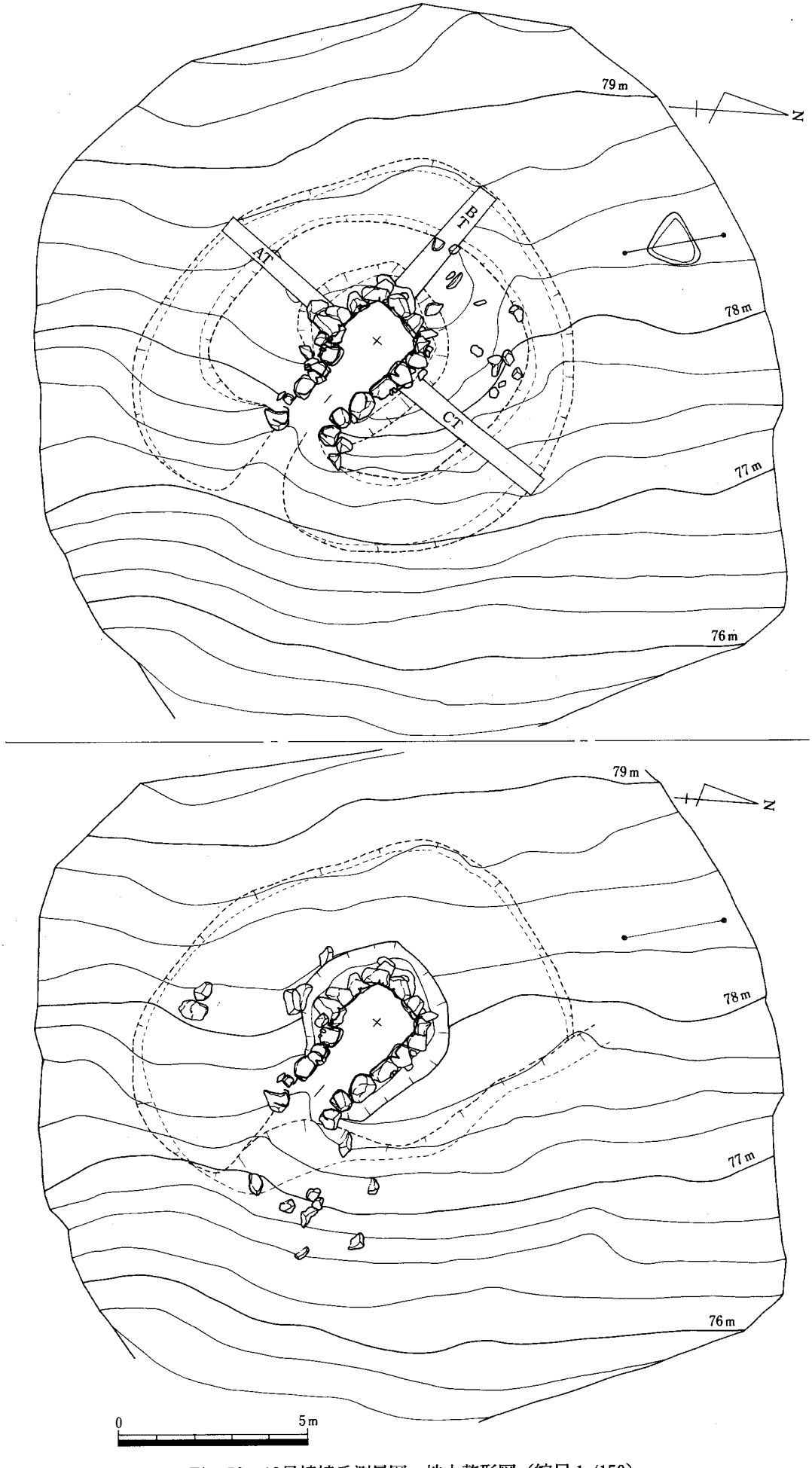


Fig.50　13号墳墳丘測量図、地山整形図（縮尺 1 /150）

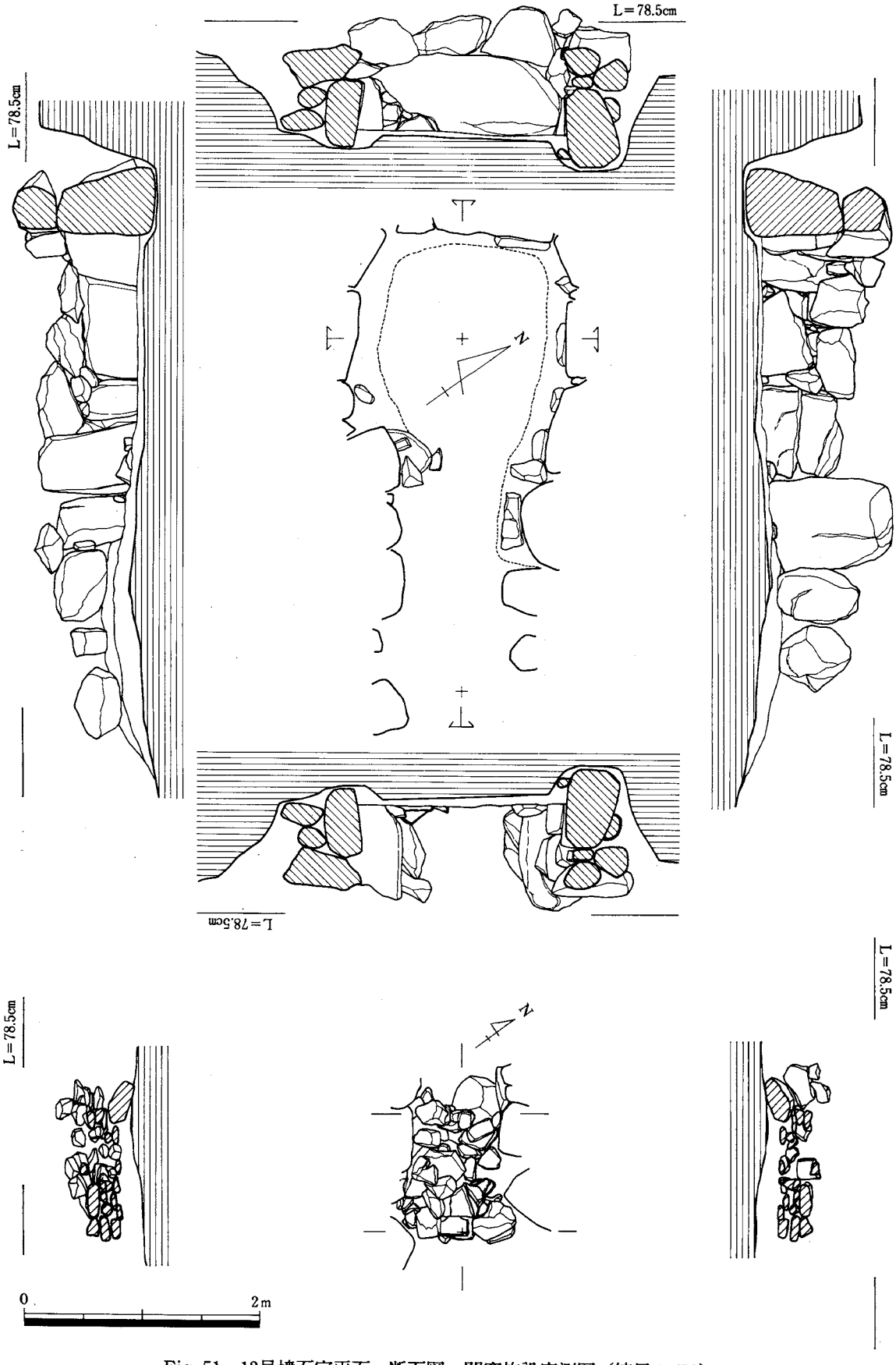


Fig.51　13号墳石室平面・断面図、閉塞施設実測図（縮尺1/50）

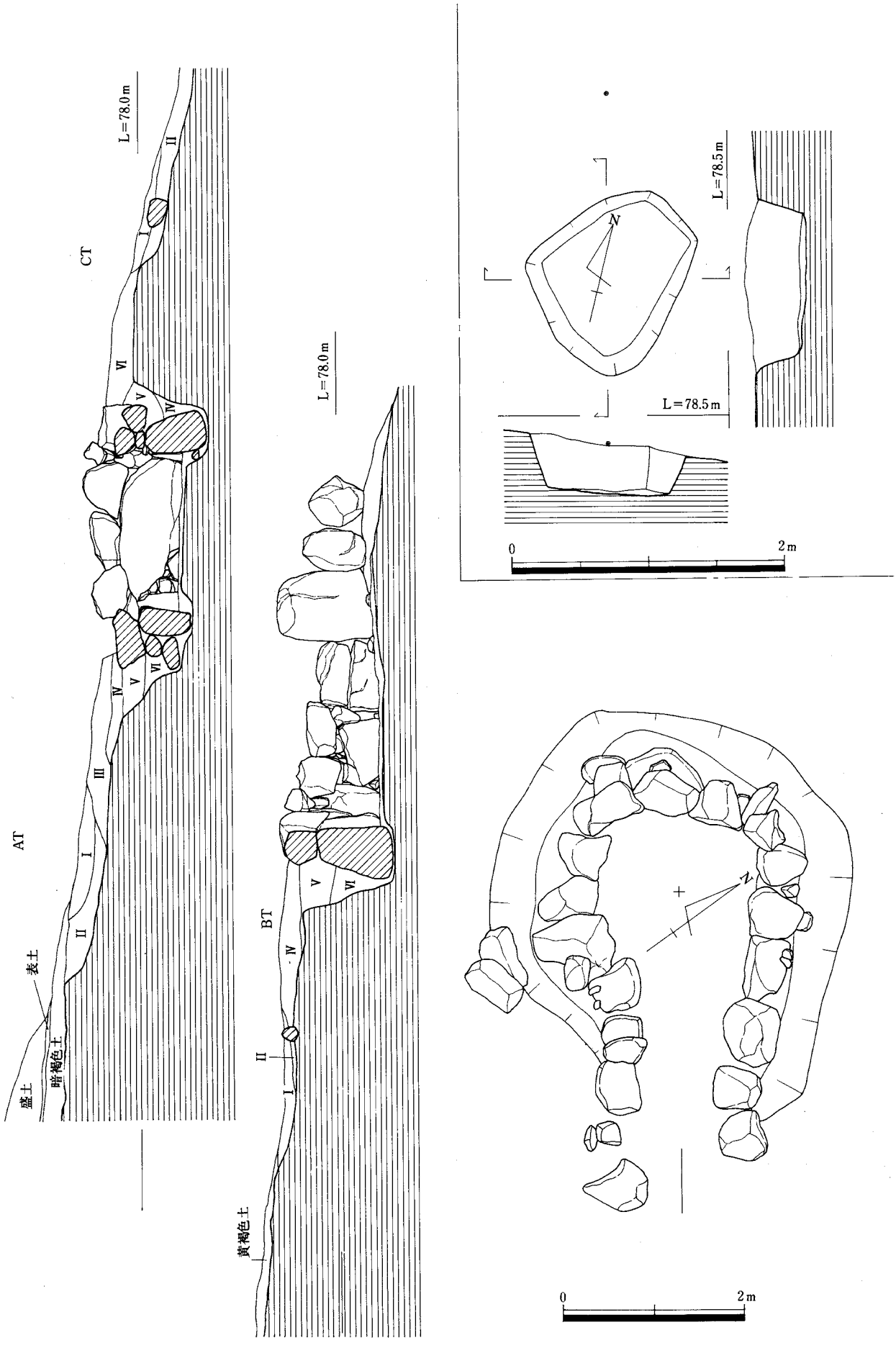


Fig.52　13号墳石室俯瞰図、土層断面図、土坑実測図（縮尺1/40，1/60）

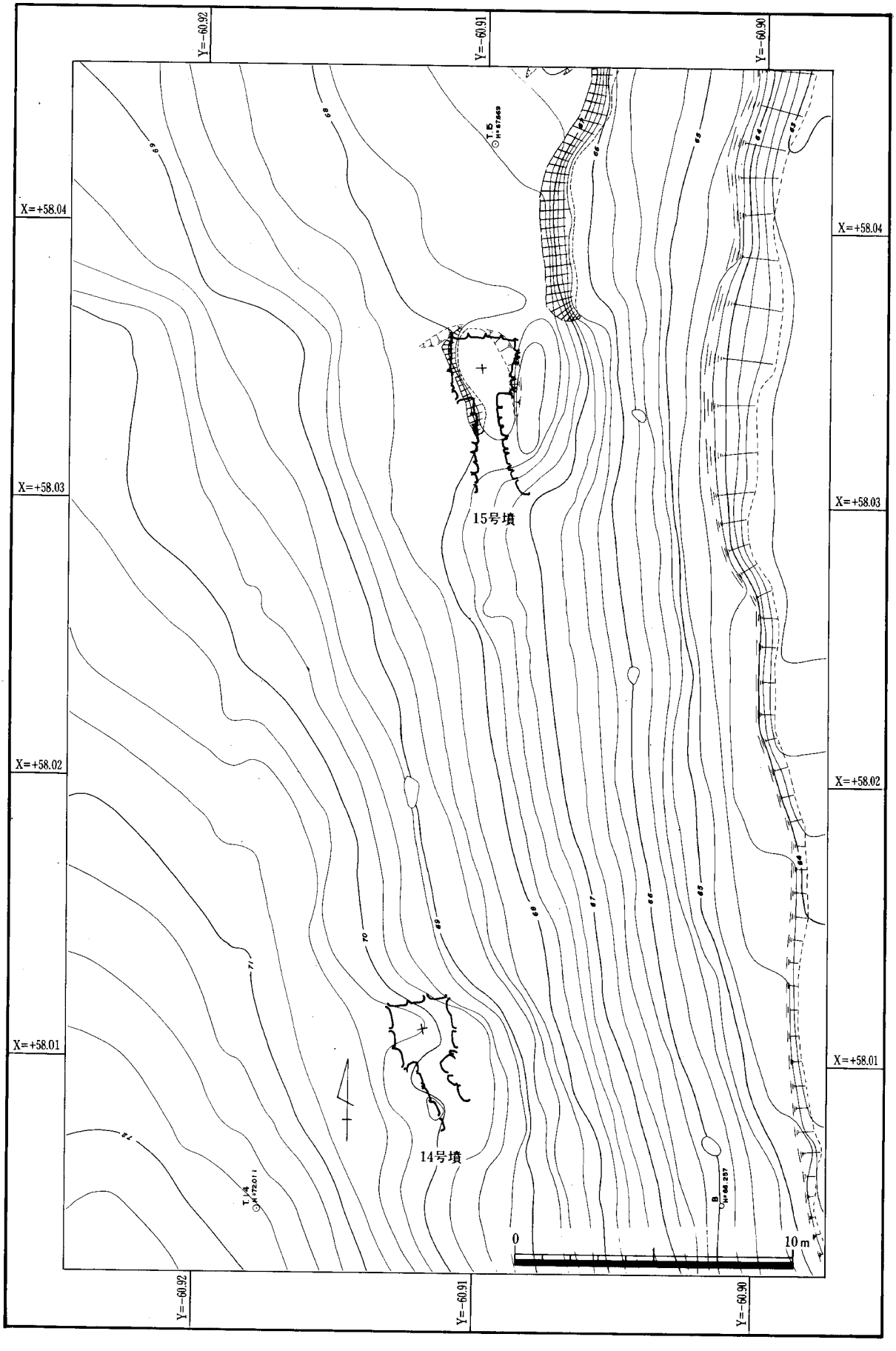


Fig.53　14・15号墳地形測量図（縮尺 1 /200）

第14号墳の調査

位置と現状（Fig.53～56　PL.16）

14号墳は標高68～71m間に位置し、石室主軸方向をN-14°-Wにとり、南南東に開口している。14・15号墳は調査区の北側に延びる尾根と南側に延びる尾根との間に位置し、西側尾根の東斜面にある。南側が14号墳、北側が15号墳である。13号墳から北に100m、15号墳から直線で南に25m離れた位置にある。14号墳の南には谷部に造られた貯水池があり、等高線が蜜であることから急斜面に構築されている。墳丘周辺部の西側は緩やかであるが、東側は急勾配となっている。周辺には大きな花崗岩が露出しており、当初はこの岩が古墳の天井石と考えていた。ボーリング・試掘調査の結果、岩は自然石であり、古墳は僅かな墳丘と窪みの部分であることが判明した。

墳　丘（Fig.53・54　PL.16）

石室が等高線と平行に築造されており、墳丘周辺部だけを造成している。墳丘は表土排除段階で東西7.6m、南北7.5mの円墳であり、溝は馬蹄形を呈する。墳丘は周溝の端部から始まるが、西側では周溝をV字形に造り墳丘盛土を急激に立ち上げる。これに対して東側では斜面が急に落ちていることから周溝は確認出来なかった。北側は溝はU字形を呈し、その端部から墳丘盛土を立上げている。土層からみると自然堆積部分が表面を覆っていることから盛土が流出したと考えられる。

地山整形（Fig.54　PL.16）

地山整形は標高68～71m部分を削平し、緩やかな面に全体を仕上げているが、東側は急勾配のため69m付近で中断している。北側からは周溝の掘り込みを行い、一段高く仕上げ、石室に向かって緩やかに削平して石室面を形成し、石室・羨道部を平坦としている。東西では西側が高いためまず周溝のV字形を掘り下げ、次に石室まで約0.5mの段を付けている。石室面では平坦面を造り東側は急斜面であることからそのままの状態で盛土を行っている。周溝は北側で2.8m、西側で1.8mを測る。掘り方の大きさは長軸３m、短軸３m、面積９㎡、深さ0.5mの正方形を呈する。

石室・羨道部・閉塞施設（Fig.55　PL.16）

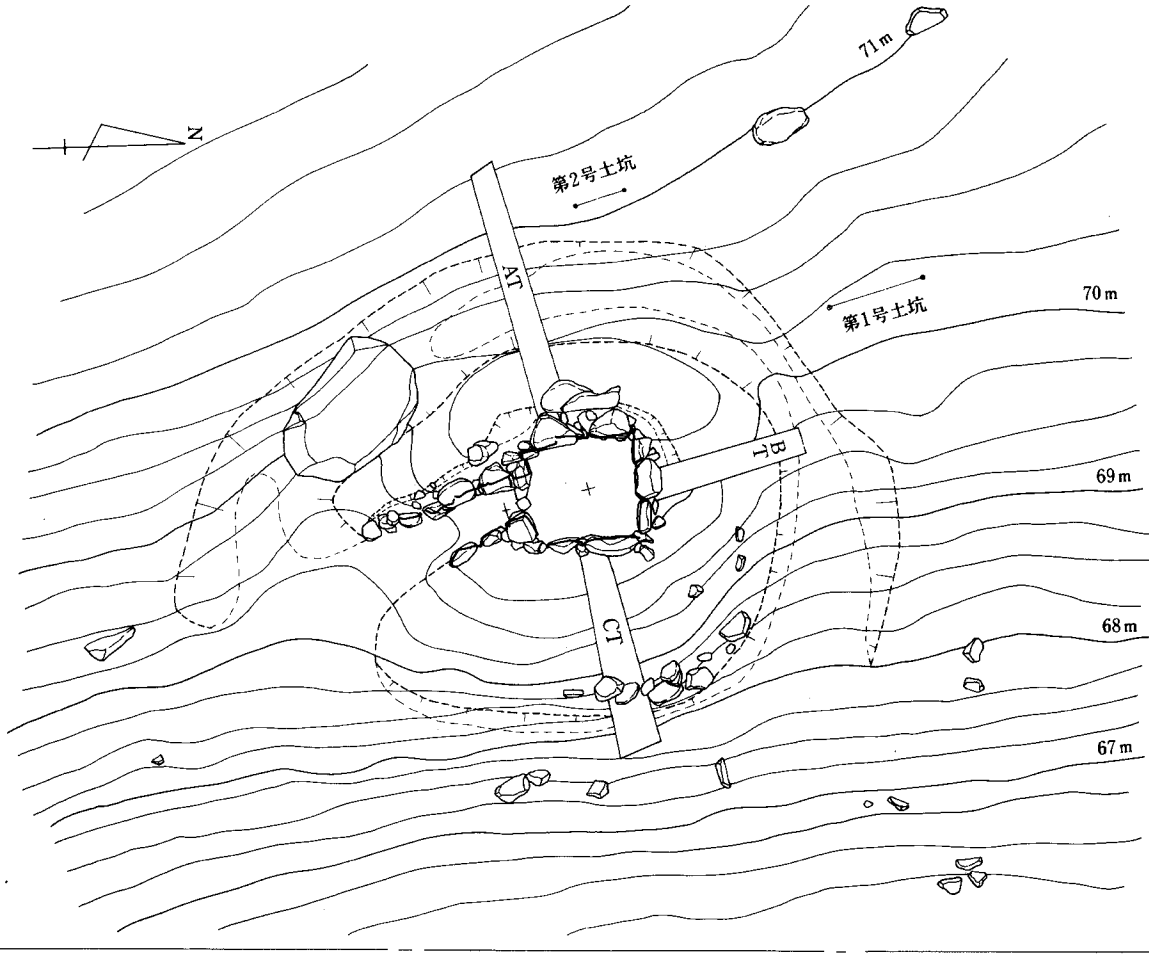
石室の平面プランは長軸2.2m、短軸２m、面積4.4㎡の不整形な方形を呈する。奥壁の腰石は三枚で構成され、床面下20㎝まで掘り込んで設置されている。右側辺部は大石二枚を横に立て、石の接する部分ではやや外に開き、上部構造は腰石及び一石しかないため不明確であるが、積み方を見ると煉瓦積みを用いている。床面は攪乱を受け、敷石はまったくない。左側辺部は右側辺部と同様に三枚の立石を配置しているが、面を揃える意識が無く雑な造りである。石室構造は玄室の中心線（長軸）と羨道部の中心線が合わない。これは左墳丘内にある巨大な花崗岩により羨道部の中心線をずらす必要性が生じたものと思われる。玄室は右方向、羨道は左方向に傾く形態をとる。

羨道部　左方向に傾く形態を取る羨道部は石の配列でも異なる。右側辺部は二石、左側辺部は五石を配する。羨道の長さは2.5m・幅が中央部で0.8mを測る。玄室長との比率は1：1.13である。

閉塞施設　閉塞は羨道中央部に長さ１m、幅0.8m、高さ0.65mで検出された。現存する施設は四段の石と粘土によって形成されている。玄室入口部分より0.6mの空間を造り出している。これは11・12号墳にも認められ、14号墳と11・12号墳の築造年代が同時期であることが窺える。

土　坑（Fig.56）

土坑は地山整形検出時に石室北側7.2m、標高70.25m部分に隅丸長方形が一基、石室北西側６m、標高71mに円形土坑が検出された。１号土坑は主軸をN-17°30′-Wにとり、長軸1.7m、短軸0.72m、深さ0.13m。肩からFig.60-１の杯蓋が出土した。第２土坑は0.8mの円形で深さ0.4m。



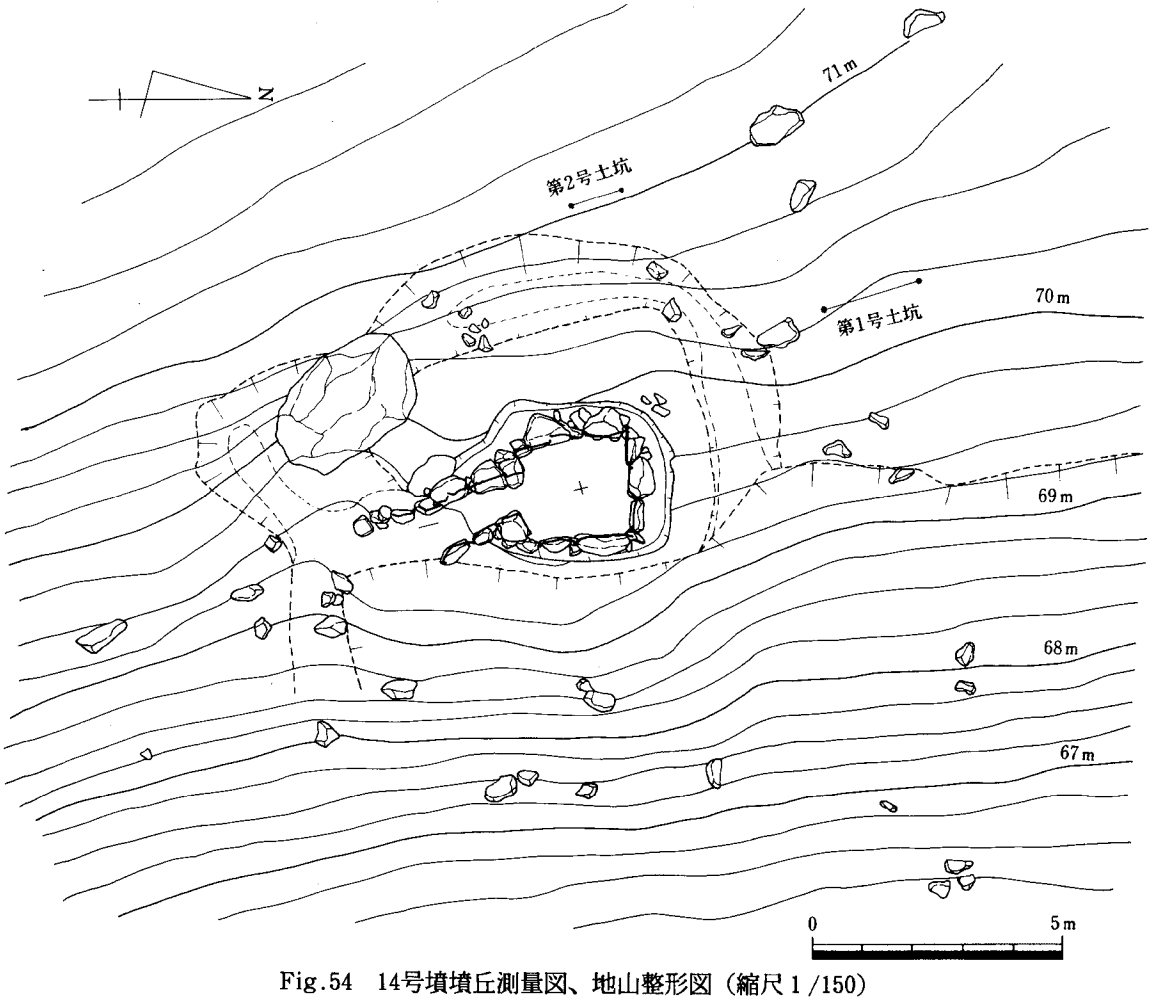


Fig.54　14号墳墳丘測量図、地山整形図（縮尺1/150）

第14号墳

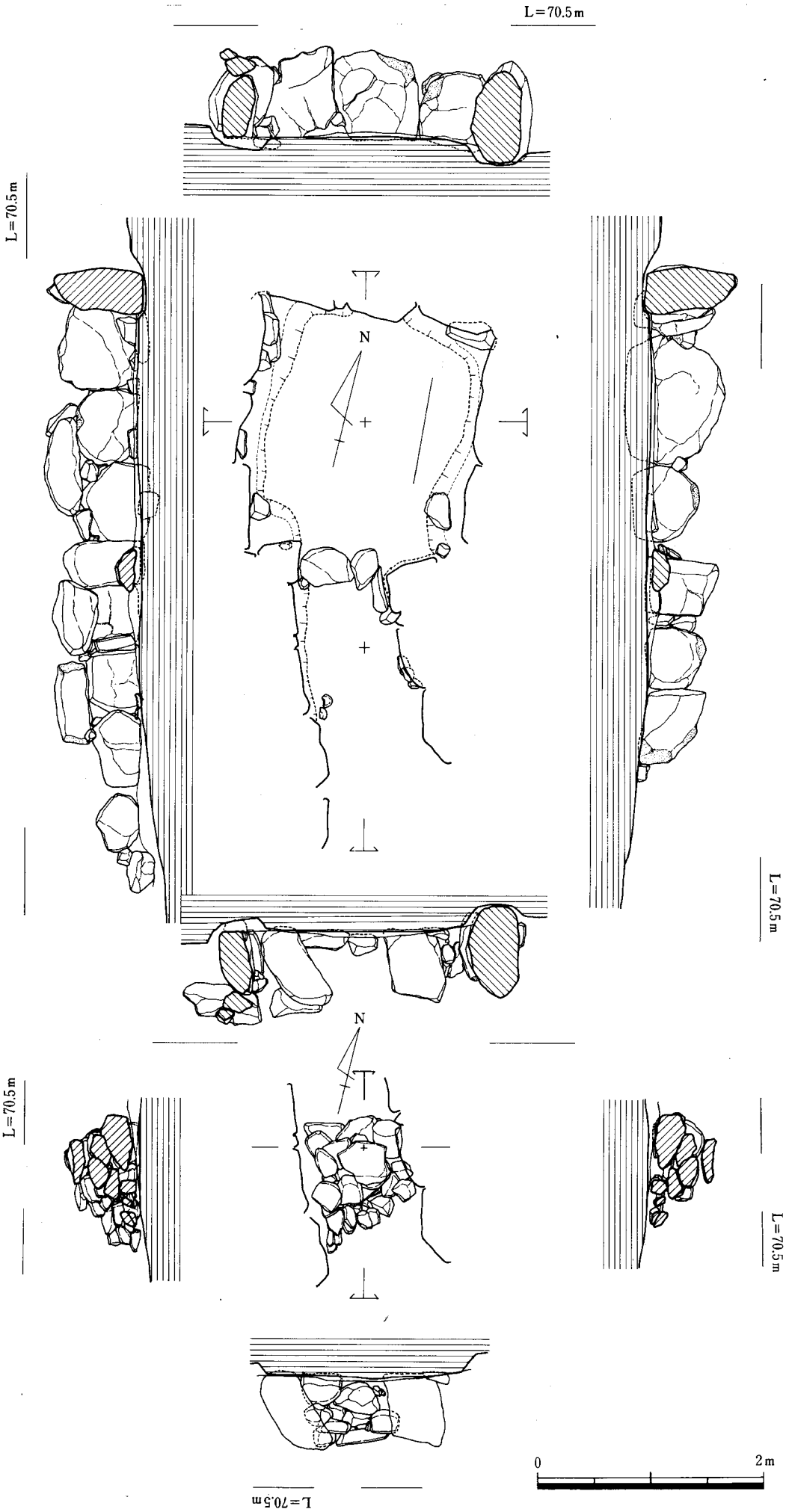


Fig.55　14号墳石室平面・断面図、閉塞施設実測図（縮尺1/50）

土　層（Fig.56）

墳丘に３本のトレンチを設定した。東西方向にＡ・Ｃ、南北方向にＢトレンチを入れ、土層観察と地山検出に努めた。Ａトレンチの土層は第Ⅰ層が黒色土、第Ⅱ層が暗茶褐色土であり、このⅠ・Ⅱ層が周溝の土層である。第Ⅲ層が茶褐色土、第Ⅳ層が淡赤褐色粘質土、第Ｖ層が赤味の強い赤褐色粘質土である。第Ⅲ層から第Ｖ層が墳丘盛土の土層である。

Ｃトレンチの土層は第Ⅰ層が暗灰褐色土、第Ⅱ層が灰褐色土、第Ⅲ層が暗黄赤褐色土、第Ⅳ層が赤褐色土、第Ｖ層が淡灰褐色粘質土、第Ⅵ層が赤褐色土である。

Ｂトレンチは石室長軸延長上に入れた。土層は第Ⅰ層が暗赤褐色土で周溝の土層である。第Ⅱ層が赤褐色粘質で周溝を造る際に壁面とした土層である。第Ⅲ層が赤褐色土と灰褐色土の互層、第Ⅳ層が灰褐色土、第Ｖ層が赤褐色粘質土である。

出土遺物（Fig.60-1～16　PL.20）

図示したのは16点であるが、図示に耐えない須恵器甕形土器・土師器片がある。

須恵器（Fig.60-1～14　PL.20）

杯　蓋　1～6は杯蓋で、天井部を回転篦削り、体部を回転ナデを施す。1の内面は静止ナデを施し、立ち上がりは低く外反する。外面の天井と体部の境は段を有す。3の内面には10個前後の指頭痕が残る。立ち上がりは内傾する。4の内面は回転ナデ。立ち上がりは低く内傾外反する。2の天井は静止篦削り、体部は回転ナデを施す。境は段を有する。内面は回転ナデを施し、中央で窪みを持つ。立ち上がりは低く内傾する。1の口径11.4cm、2は10.6cm、3は12.2cm、4は13.5cmを測る。5は焼成が甘く、明黄茶褐色を呈する。立ち上がりは若干内傾し浅い。6は扁平な宝珠のつまみが付く。内面は回転ナデ後静止ナデを施す。立ち上がりは短くやや外反する。口径15cmを測る。

1が土坑1、2が玄室、3が羨道前黒色土、4が土坑2、5・6が1区周溝より出土。

杯　身　7～10は蓋受部を持つ杯身で、浅い形態をなす。7は天井中央で静止篦削り、体部1/2まで回転篦削り、口縁部を回転ナデで仕上げている。内面静止ナデ、受部は内傾する。いずれも焼成が甘く鶯色を呈す。9の天井部に見られる凹線は回転ナデの際、長石によるものである。10は天井部篦削り、体部回転ナデ。受部は低く内傾する。焼成堅緻。7の口径が10.8cm、8が13.6cm、9が13cm、10が14cmでいずれも土坑1からの出土である。11は蓋受部を持たない杯身で全体に自然釉がかかり黒褐色を呈する。体部は回転ナデ、底部篦削りを施す。いびつな形状を呈し、底部は窪む。口径10.2cm、器高3.5cmを測る。羨道部より出土。

円面硯　14は破片であるが形状から円面硯と思われる。脚の透かしは方形で段が付く。硯面部は僅かしか残らず、内提も残存する中ではその形状を見いだせない。縁は外傾して立ち上がり上面は平坦をなす。脚台部と縁との中程に上方に外湾する鰭状の突帯が巡る。外面に黒色の自然釉がかかる。4区墓道出土。

壷形土器　13は小型壷形土器の口縁部である。外反しながら立ち上がり上部で内湾屈曲する。内面で僅かに窪む。調整は回転ナデ。

高台付杯身　12は高台付杯身で高台部は粘土継ぎ目より欠失。底部は直線的に立ち上がり口縁端部を丸く納める。底部は篦削り、体部は回転ナデを施す。口径14cm、底径9.6cmを測る。12は1区周溝、13は土坑1より出土した。

土師器（Fig.60-15・16）　15は高坏で脚部を欠損。器面調整は摩耗のため不明。口径13.6cmを測る。16はⅢで底部内面に指押え痕、外底に板目痕が観察できる。口径9.6cm、器高1.2cmを測る。15が墳丘裾の盛土内より、16が玄室攪乱出土。

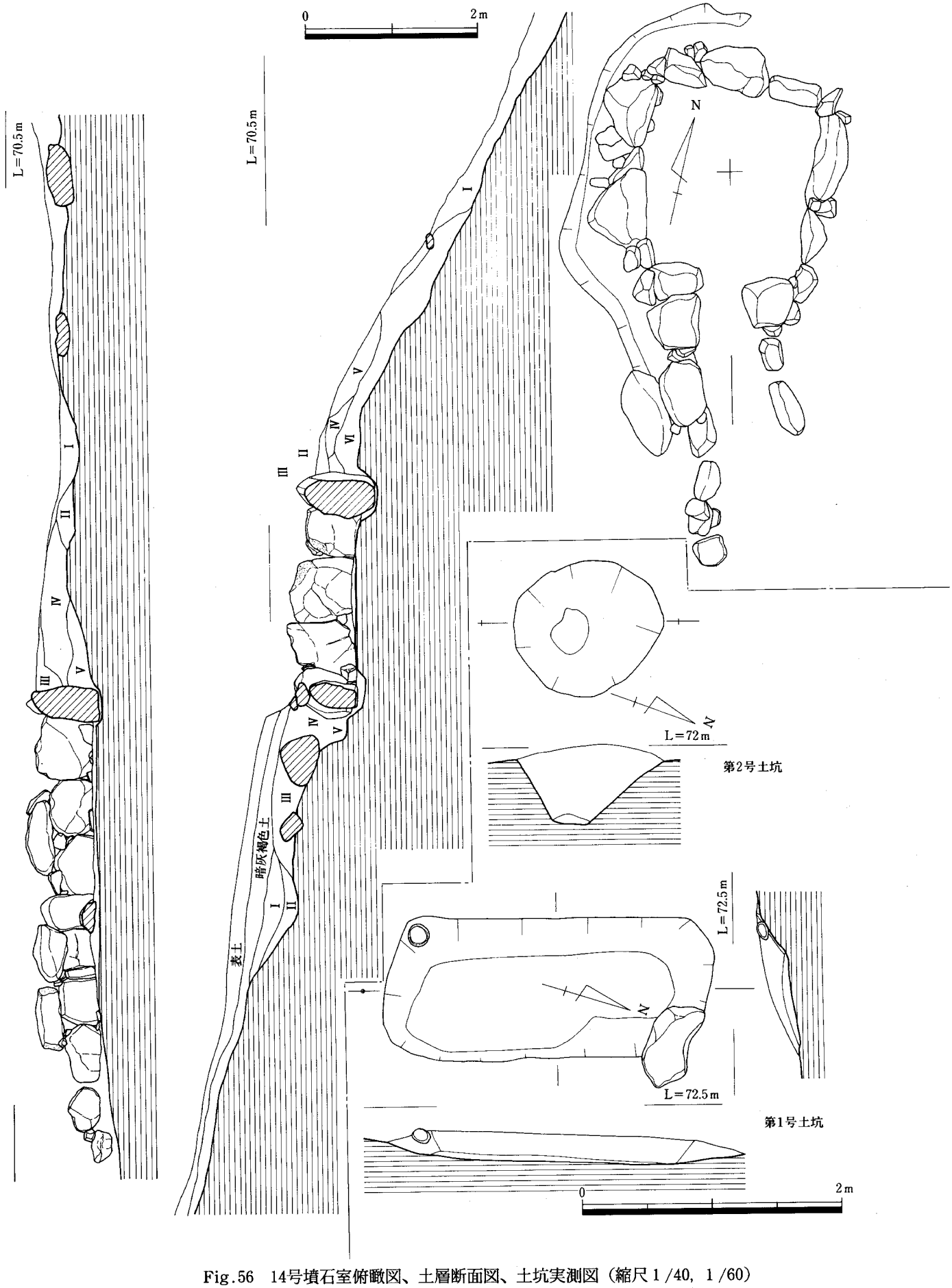


Fig.56　14号墳石室俯瞰図、土層断面図、土坑実測図（縮尺1/40, 1/60）

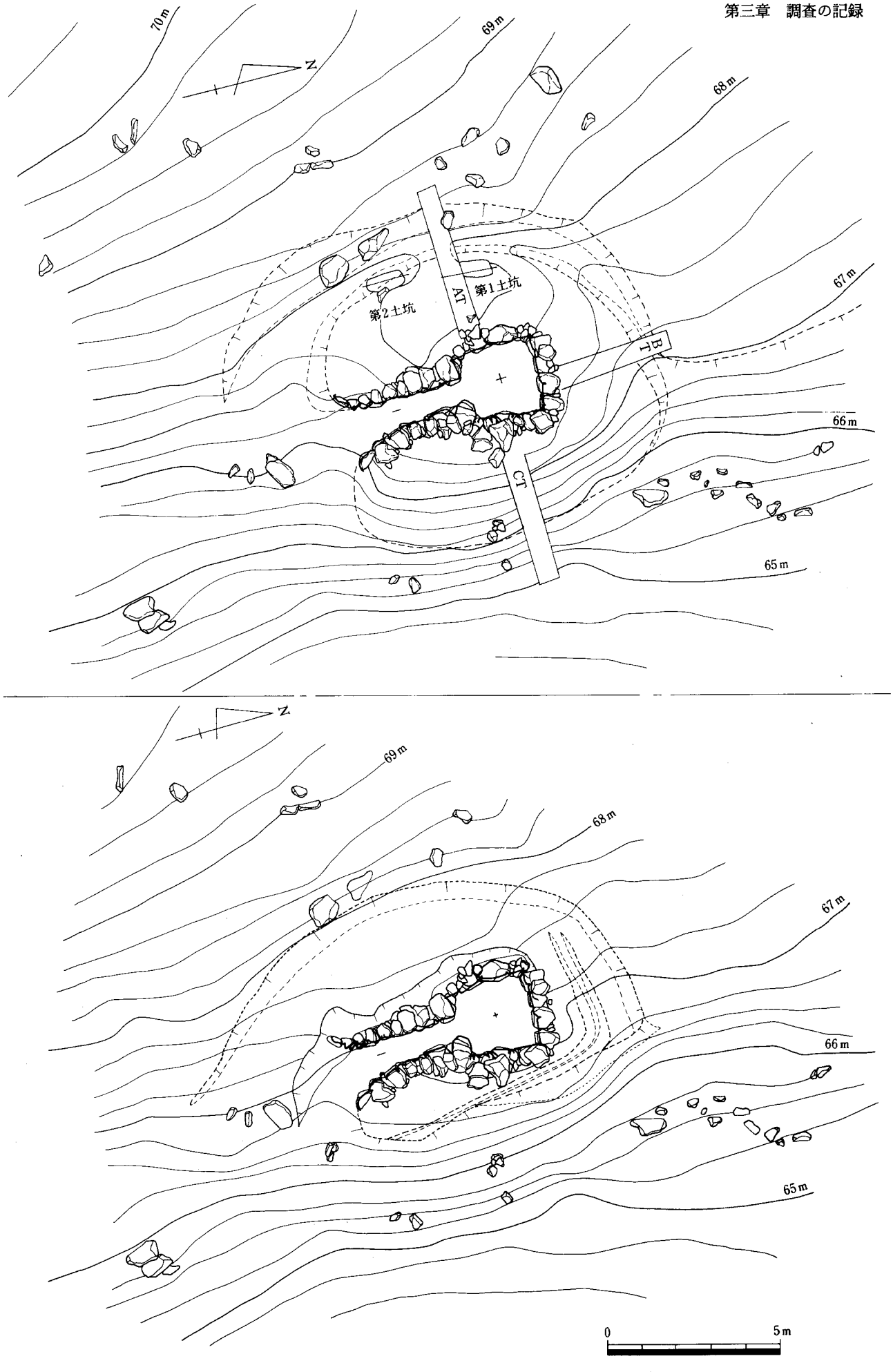


Fig.57　15号墳墳丘測量図、地山整形図（縮尺1/150）

第15号墳の調査

位置と現状（Fig.53・57～59　PL.17）

15号墳は標高66.5～68.5m間に位置し、石室主軸方向をN-3°20′-Wにとり、南に開口している。調査区の最も北側に位置し、25m南側には14号墳があり、又、さらに100m南側には13号墳がある。14・15号墳は調査区の北側に延びる尾根との間に位置し、西側尾根の東斜面に構築されている。東側には、北に広がる丘陵があり、間に谷部を挟む。

墳　丘（Fig.53・57　PL.17）

石室が等高線と平行に築造されており、墳丘周辺部だけの造成にとどまる。墳丘は表土排除段階で東西9.5m、南北12mの円墳で、溝は馬蹄形を呈する。墳丘は周溝の端部から始まるが、東側では斜面が急激に落ち周溝は確認できなかった。北側溝はV字形を呈し、幅1.4m、深さ0.28mを測る。西側は北側に比べ幅が広く2.5m、深さ0.23mを測る。土層からみると自然堆積が表面を覆っていることから盛土が流出した部分が多い。周辺は花崗岩が露出しており、石室崩壊時の落石及び、列石とも考えたが、調査が進むにつれ自然石であることが判明。墳丘上には土坑状遺構が二基検出された。

地山整形（Fig.57　PL.17）

地山整形は標高66.5～68.5m部分を削平し、緩やかな面に全体を仕上げているが、東側は急勾配のため 66m付近で中断している。北側は石室より4.5mの位置から掘り込みを行い周溝端部を造り出す。周溝部分より石室に向かって掘り込み、中央で若干窪み、石室掘り方端部では約0.2m程高い。この地点より急激な傾斜で石室構造面まで掘り下げる。石室掘り方傾斜角度は68度で、深さ0.4mを測る。西側では周溝から緩やか傾斜で掘り込まれ、石室掘り方に至る。石室掘り方傾斜角度は北側に比べ緩やかで62度を測る。深さ0.9mを測り北側より0.5m深い。これは等高線に平行に構築されたことに要因がある。東側の傾斜角度は67度で、深さは0.24mを測る。東側は急斜面から掘り込まれ、間で一段高い。これは、この高さで掘り進んでいけば石室床面より低くなることから一段高く整形している。石室は平坦面を造り出し、腰石設置面は約0.2m程掘り下げる。羨道部は石室より若干高く、奥壁側端部と羨道端部では0.12mの差がある。掘り方の大きさは長軸2.5m、短軸2.9m、面積7.25㎡。

石室・羨道部・閉塞施設（Fig.58　PL.17）

石　室　石室の平面プランは長軸2.2m、短軸2.15m、面積4.73㎡の不整形な方形を呈し、石室主軸はN-3°20′-Wをとる。奥壁の腰石は三枚で構成され、床面下10㎝まで掘り込んで設置されている。二段目は腰石の上面が平坦を成していない為、人頭大及び拳大の円礫を用い平坦面にした後、四枚の花崗岩をやや内側に傾斜するように積み上げる。石室中央より北に0.75mの位置から腰石設置の為の掘り込みが行われ、これと腰石の間に30×40～20×30㎝位の円礫を設置し腰石の安定を図る。右側壁は、奥壁側の腰石一枚目だけが比較的大きな花崗岩を使用するが、二・三枚目は40×50、20×30㎝位の小さな割石を用い、二段目で同じ高さに達する。一・二段目は比較的小さな石材を使用しているのに対し、三段目は70×50㎝と大きな石材を用いる。左側壁は四枚の腰石を設置し、二段目もほぼ同じ大きな花崗岩を用い、隙間には拳大の円礫を埋め込む。右側壁は三段の遺存でほぼ垂直に積み上げられ、左側壁は二段目までが遺存し、やや内側に傾斜する様に積み上げられる。右側壁幅は２mを測り、内傾気味に設置される。左側壁幅は2.4mを測り、右側壁より0.4mも長い。

羨道部　羨道部は玄室袖石から長さ3.6m、幅 0.9mを測り、玄室との境には二枚で構成される框石が設置されている。右羨道部は六枚の立石を配し、三段の石組を有す。左羨道部は八枚の立石で構成され三段の石組を有する。両側壁とも三枚までは直線的に配置され、これより孤状を描く様に外側に

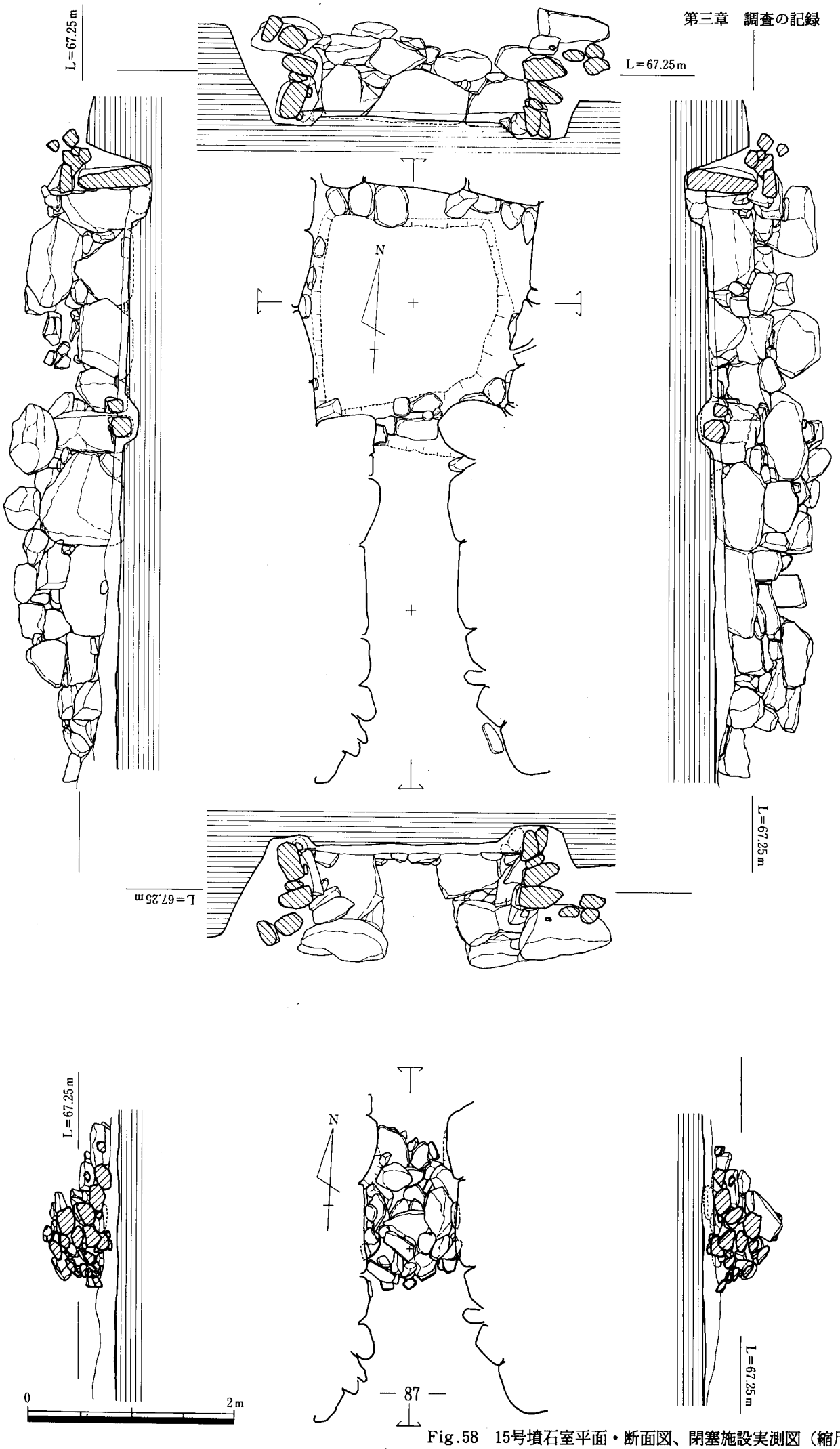


Fig.58　15号墳石室平面・断面図、閉塞施設実測図（縮尺 1 /50）

開く。四枚目からは盛土上に設置されている。

閉塞施設　閉塞施設は框石より0.45mの位置より始まり2.05mの位置で終了する。長さ1.6m、幅0.95m、高さ0.75mを測る。閉塞施設は人頭大の礫が主体で、廻りに小円礫・粘土等で固め六段まで遺存する。閉塞施設床面より少量の鉄滓が出土した。

土　坑（Fig.59　PL.17）

墳丘盛土上に二基の土坑状遺構を検出した。石室中心より西に3.1m、標高68mに位置する第1号土坑とこれより2.5m南に位置する第2号土坑がある。第1号土坑は長軸0.85m、短軸0.55mを測り、横に長い隅丸方形を呈する。主軸はN-1°-Eをとる。底面は平坦をなし、南側はトレンチにより削られる。第2号土坑は楕円形を呈し、長軸1.08m、短軸0.55mを測る。主軸はN-2°-Eにとる。二基とも底面に二個の花崗岩を配し、壁面は焼けている。第2号土坑の最も良く焼けている壁面からは獣骨と思われる骨片が出土した。

土　層（Fig.59）

墳丘に3本のトレンチを設定し、東西方向をA・C、南北方向をBトレンチとし、土層観察と地山検出に努めたが、墳丘の遺存状態が悪いため全容は知り得なっかた。石室横断面と組み合わせているA・Cトレンチでは地山の高さが異なりを示しAトレンチ側が高い。これは等高線に沿って築造したことに要因がある。A・Cトレンチの土層は第Ⅰ層が暗褐色土、第Ⅱ層が黒褐色土、第Ⅲ層が黒色であり、周溝の土層は第Ⅱ・Ⅲである。第Ⅳ層が黄褐色土、第Ⅴ層が褐色土、第Ⅵ層が赤褐色粘質土と黄褐色土の互層で強く突き固められている。Bトレンチは石室長軸延長上に入れた。土層は第Ⅰ層が暗褐色土、第Ⅱ層が黒褐色土、第Ⅲ層が赤褐色土、第Ⅳ層が赤身の強い赤褐色粘質土、第Ⅴ層が褐色粘質土、第Ⅵ層が赤褐色粘質土と黄褐色土の互層で強く突き固められている。

出土遺物（Fig.60-17～28　PL.20）

図示したのは12点であるが、図示に耐えない須恵器甕形土器・土師器片がある。

須恵器（Fig.60-17～26　PL.20）

杯　蓋　20・21は杯蓋で、20には宝珠状のつまみが付く。いずれも天井部を回転篦削り、体部は時計廻りの回転ナデを施す。内面のかえりは短く直線的である。20の胎土に4～5㎜大の石英粒が含まれ、口径14.2㎝、器高2.9㎝を測る。墓道より出土。21は焼成が甘く暗茶褐色を呈する。精製された粘土を使用している。口径17.4㎝を測り、玄室攪乱からの出土である。**杯　身**　17～19は杯身でいずれも蓋受部を持つ。立ち上がりが内傾するもの17と直線的なもの18・19でいずれも短い。天井部の篦削りは静止状態18・19と回転篦削り17がある。体部は3点とも時計廻りの回転ナデを施す。17の焼成はやや甘い。19は黒色の自然釉がかかる。いずれも玄室からの出土で、口径は17が10.9㎝、18が10.1㎝、19が9.8㎝を測る。**高台付碗**　22は高台付碗で口縁部が外反する。高台外側が篦削り、体部は逆時計まわりの回転ナデを施す。底部は両側からの篦切り離しによる。高台は「八」字状に開く。口径14㎝、器高4.2㎝、底径8.8㎝を測る。羨道部より出土。**壷形土器**　23・24は壷形土器である。23は壷形土器の口縁部破片で黒色の自然釉がかかる。胴部よりまっすぐ立ち上がり、口縁上方で外反し、一条の突体を設け端部は平坦に仕上げる。玄室敷石下より出土。24は壷形土器の口縁で端部は肥厚し玉縁状を呈する。口縁直下に山形の篦記号を記す。1区周溝からの出土で口径25.4㎝を測る。**高坏**　25は高坏の脚部で胎土は濃いあずき色を呈する。緩やかに開く脚部は裾で大きく開く。内外面にネジリ痕が認められ、調整は刷毛状工具での回転ナデを施す。外面に黒色の自然釉がかかる。墓道からの出土で、13.2㎝を測る。**脚付直口壷**　26は脚付直口壷で口縁部は欠損する。胴部中央に間隔をあけて二条の沈線を巡らし、その空間に櫛による細長い斜線状の文様を施す。胴部下位より脚の付根までを篦削り

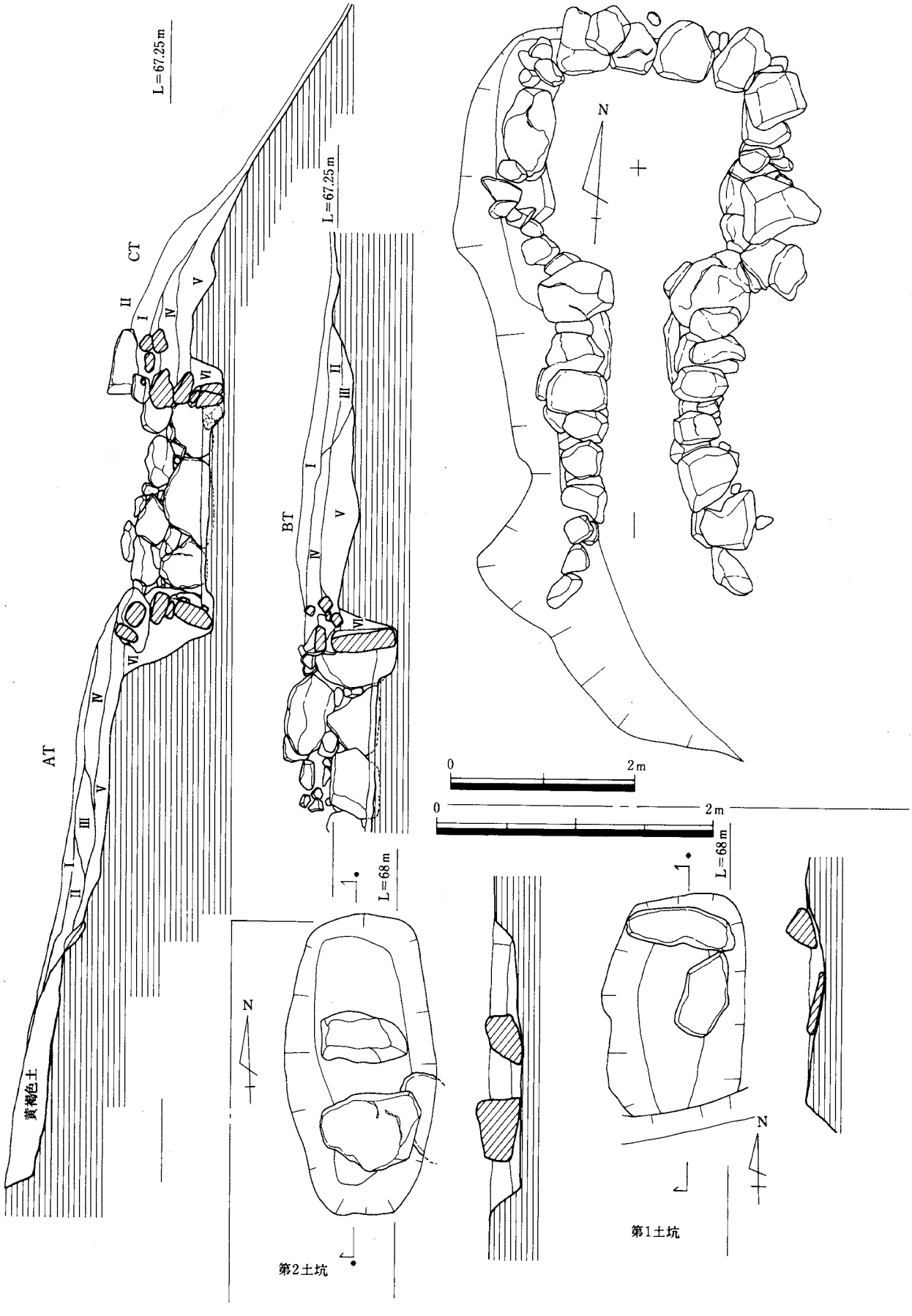


Fig.59　15号墳石室俯瞰図、土層断面図、土坑実測図（縮尺1/40, 1/60）

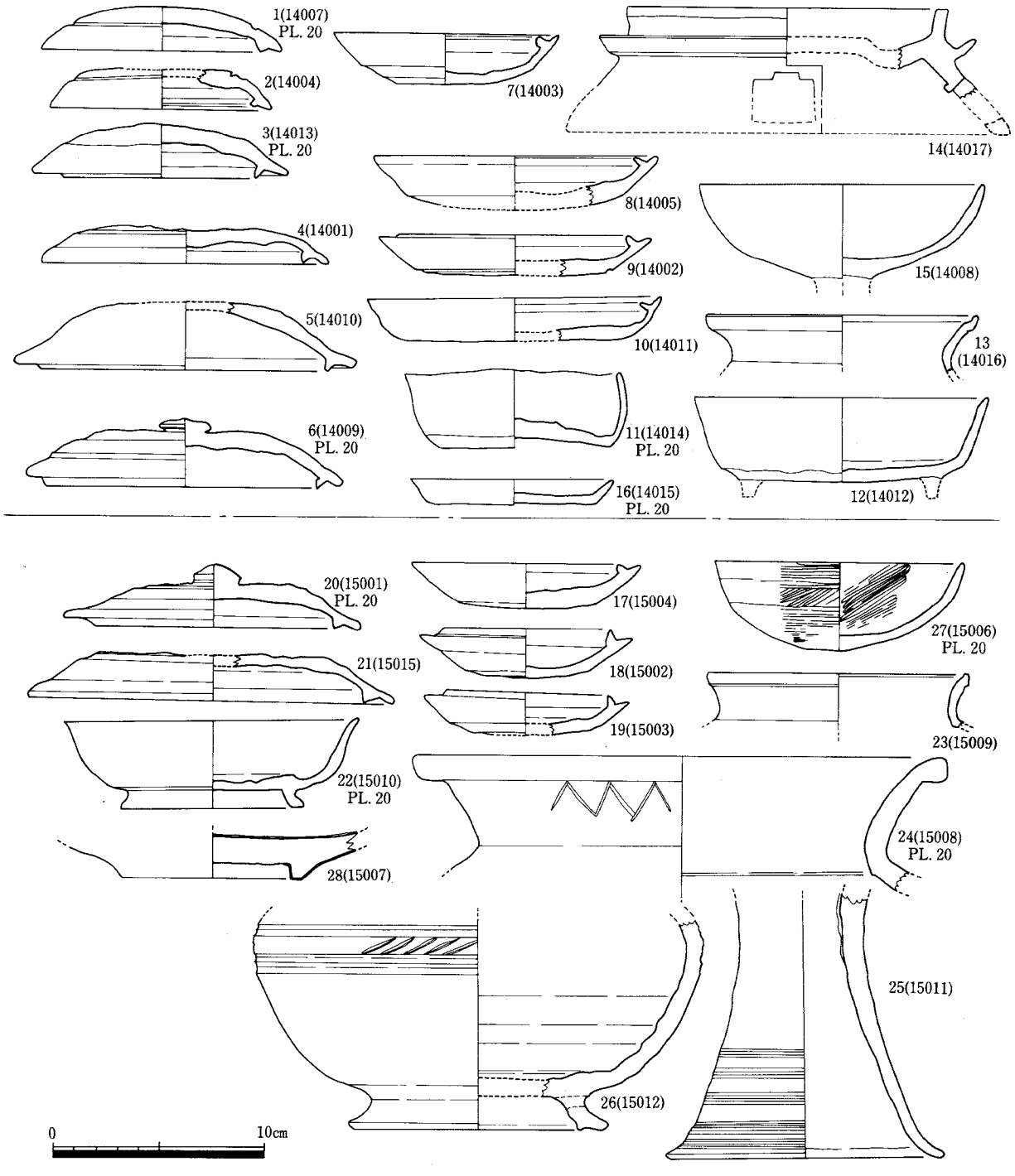


Fig.60　14・15号墳出土遺物実測図（縮尺1/3）

を施す。底部より「八」字状に開く脚部は端部で丸く納め、底面で僅かな窪みをもつ。内面回転ナデ、外面刷毛状工具で逆時計廻りの回転ナデを施す。内面は灰褐色を呈し、外面は濃いあずき色に黒色の自然釉がかかる。墓道・羨道部からの出土で、復元底径12.6cmを測る。 **土師器**（Fig.60-27） **碗**　27は土師器の碗である。内面は斜め、外面は横方向の篦研磨を施す。口径12cm、器高4.2cmを測り、明茶褐色を呈する。玄室より出土。

青磁（Fig.60-28） **碗**　28は青磁碗である。体部と高台の境は明瞭な稜をもたずなだらかである。底部は篦切り離しによるもので二次整形は行われない。釉はガラス質で濃い草色を呈し、高台内側・外底の外側までおよび氷裂が認められる。羨道部より出土した。

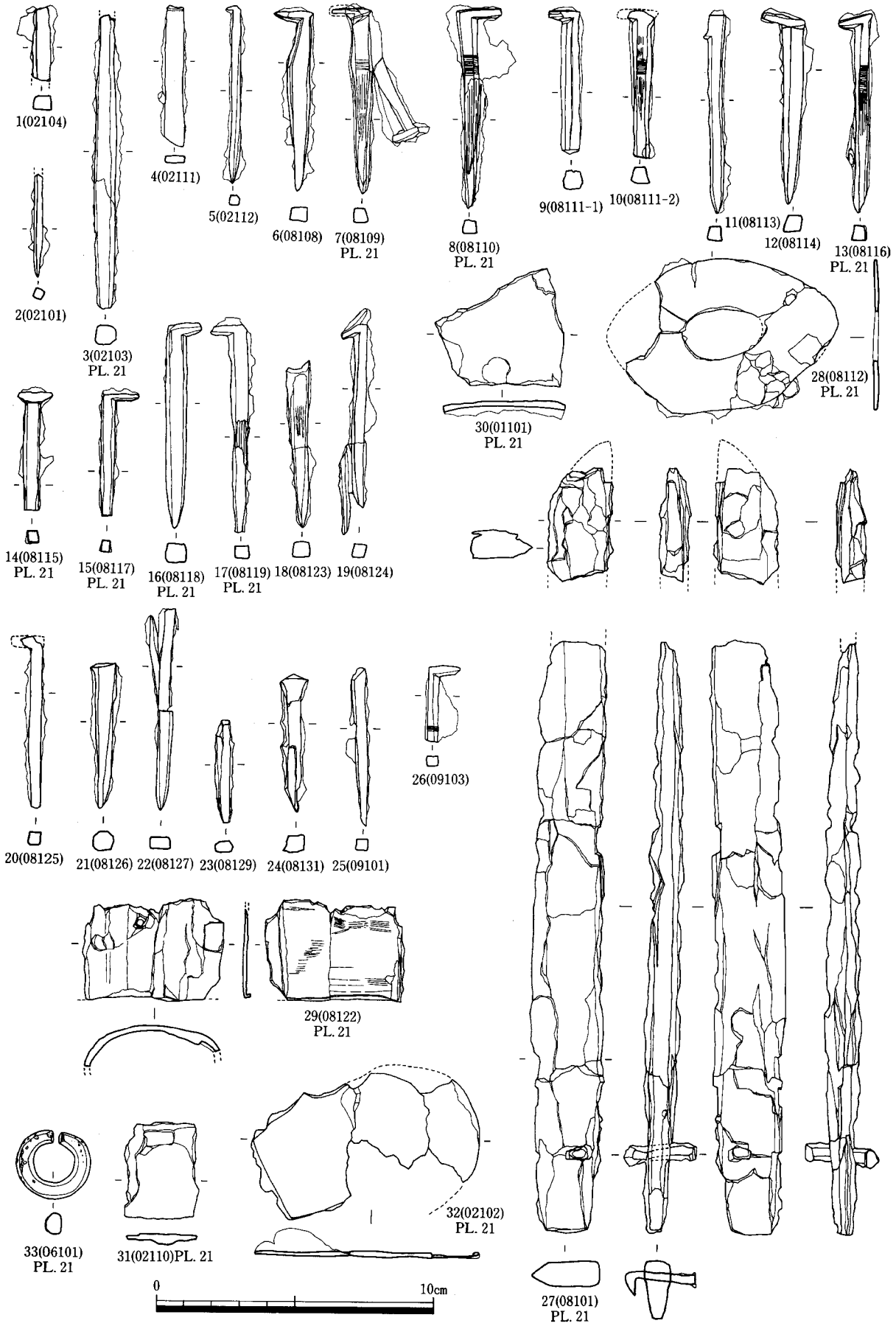


Fig.61　三郎丸古墳群出土金属器遺物実測図（縮尺１／２）

第四章　三郎丸古墳群出土金属器

三郎丸古墳群からは約60点の金属器が出土した。その内容はTab.2に示す通りである。また主要なものについてFig.61に図示し、以下若干の説明を行う。

出土した金属器の内の多くは木棺の棺材固定に使用された鉄釘で、2号墳、8号墳、9号墳から出土している。その本数は破片が多く正確につかめないが頭部の破片で数えて、2号墳6本、8号墳13本、9号墳1本、計20本以上存在したと考えられる。完形品は全体の半数にも満たないが、これらは断面方形で頭部をL字形に折り曲げ偏平に加工しており、折曲げ部分は明瞭に角が見られる。全長は7～8㎝の間に収まる。一部を除いて形態的な差異は乏しく、いずれも同じタイプに属すると考えてよいと思われる。ただし3は完形でないにもかかわらず残存長11㎝と飛び抜けて長く、また他の釘が上が太く下が細いのに対して、上下が細く中心部が膨らんだ形状となっている等、異質な印象を受ける。同様に4は極端な板状を呈しており、これらは釘以外のものである可能性もある。完形品の中では特に7、8、13において木質が明瞭に残り、違った方向の木目があることが観察できる。福岡市内での棺釘の出土例は少なく、後期群集墳では大牟田古墳群[1]、堤ケ浦古墳群[2]、金武古墳群等[3]、数例が知られる程度である。これらは何れも三郎丸古墳群出土のものとほぼ同様の大きさを呈しているが、頭部の折曲げ方に違いが見られる。

27は鉄刀である。現存長25㎝、刀身の幅2.7㎝を計る。茎を含む刀身部分と、切先の破片、さらに別に刀身の破片が数点ある。いずれも直接接合しないが、同一個体と考えて差し支えない。茎の背に近い部分に目釘が1本残っているが、峰側から見て右から通し、左側の先端をたたき曲げて固定した様子が観察できる。茎部分に若干木質が遺存する。それ以外に有機質は認められない。

28は鍔金具である。無窓で、やや歪んだ倒卵形を呈し、長径8㎝、短径5.3㎝、刀身を通す孔の長径3㎝、厚さ現状で約2㎜を計る。

29はその形態から鞘金具と考えられる。29、30の刀装具は27の刀身とセットになるものであろう。

耳環が6号墳から1点出土している（33）。断面楕円形の銅芯に金箔を被せたもので、直径2.5㎜、太さ8㎜（長径）、開き部の幅1.5mを計る。表面の金は比較的良好に遺存しているが、純度が低いと考えられる暗い色調を呈する。開き部の断面には金箔を絞った様子が観察できる。

32は板状の鉄器である。その用途は不明である。

この他8号墳、9号墳、12号墳から鉄滓が、また3号墳からは後世の混入品である江戸から明治期にかけての銅銭がそれぞれ出土している。

以上出土金属器について概観したが、全体的な特徴として鉄釘のまとまった出土が挙げられる。これら棺釘は前にも触れたとおり福岡市内でも類例の少ないものであり、この地域では特種な葬法と言える。更に全金属器約60点の中に、後期群集墳の副葬品として普遍的な鉄鏃が1片も見られないことも、もう一つの特徴として挙げることができる。盗掘の有無を考慮しなければならないことは言うまでもないが、他の鉄器が残っている中に全く無いというのは、最初から存在しなかったものとして差し支えないであろう。この事が釘を用いた木棺に葬られた被葬者と関連があるのか無いのか現段階では分からないが、近いところでは柏原古墳群[4]等、ほぼ同時期で馬具や武器といった副葬品を豊富に持つ被葬者と同じ範疇で捉えることは出来ないと考えられる。埋葬されてから千数百年を経てから目にするものをもって全てと考えることは出来ず、増してや生前の被葬者像にまで言及することは難しい

が、ここでは、この違いを貧富等の上下関係ではなく、職能分野等同一平面上の違いとして考えたい。（比佐陽一郎）

註

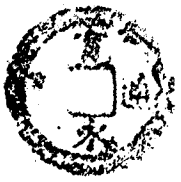
(1) 佐田茂・松本肇・三島格編『大牟田15号・43号発掘調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第14集 福岡市教育委員会 1971年

(2) 吉留秀敏編『堤ケ浦古墳群発掘調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第151集　福岡市教育委員会 1987年

(3) 塩屋勝利編『四箇周辺遺跡調査報告書（3）『夫婦塚古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第51集　福岡市教育委員会1980年なお、夫婦塚1号墳からは鉄釘と共に棺座金具が、2号墳からは銅釘が出土している。

(4) 山崎純男編『柏原遺跡群Ⅱ』－柏原古墳群の調査－福岡市埋蔵文化財調査報告第125集　福岡市教育委員会 1986年

03101



07101

07102

Fig.62　三郎丸古墳群出土銅銭拓影図（縮尺1/1）

Tab.2　三郎丸古墳群出土金属器一覧

通番号	遺物登録番号	出土古墳	出土遺構	器種名	Fig.	PL.
1	801602101	2号墳	Ⅰ区墳丘内	鉄釘	61-2	
2	801602102	2号墳	玄室（左側壁）	鉄片2片	61-32	21
3	801602103	2号墳	玄室内	鉄釘	61-3	21
4	801602104	2号墳	玄室内	鉄釘	61-1	
5	801602105	2号墳	玄室内	鉄釘	61-3	21
6	801602106	2号墳	玄室内	鉄釘		
7	801602107	2号墳	玄室内	鉄釘		
8	801602108	2号墳	玄室内	鉄釘		
9	801602109	2号墳	玄室内	鉄片4片		
10	801602110	2号墳	玄室床面	鉄片2片	61-31	21
11	801602111	2号墳	玄室床面	鉄釘	61-4	
12	801602112	2号墳	玄室床面	鉄釘	61-5	
13	801602113	2号墳	玄室床面	鉄釘		
14	801603101	3号墳	玄室（右側壁）	寛永通寶		
15	801603102	3号墳	羨道埋土	一銭		
16	801603103	3号墳	羨道埋土	一銭		
17	801603104	3号墳	羨道埋土	半銭		
18	801608101	8号墳	玄室床面	直刀3片	61-27	21
19	801608102	8号墳	玄室床面	直刀2片	61-27	21
20	801608103	8号墳	玄室床面	直刀2片	61-27	21
21	801608104	8号墳	玄室床面	直刀2片	61-27	21
22	801608105	8号墳	玄室床面	直刀	61-27	21
23	801608106	8号墳	玄室床面		61-29	
24	801608107	8号墳	玄室床面		61-29	
25	801608108	8号墳	玄室床面	鉄釘	61-6	21
26	801608109	8号墳	玄室床面	鉄釘2片	61-7	21
27	801608110	8号墳	玄室床面	鉄釘1片	61-8	21
28	801608111	8号墳	玄室床面	鉄釘2片	61-9.10	
29	801608112	8号墳	玄室床直上	飾金具3片	61-28	21
30	801608113	8号墳	玄室床面	鉄釘1片	61-11	
31	801608114	8号墳	玄室床面	鉄釘1片	61-12	
32	801608115	8号墳	玄室床面	鉄釘2片	61-14	21
33	801608116	8号墳	玄室床面	鉄釘1片	61-13	21
34	801608117	8号墳	玄室床面	鉄釘1片	61-15	21
35	801608118	8号墳	玄室床面	鉄釘1片	61-16	
36	801608119	8号墳	玄室床面	鉄釘1片	61-19	21
37	801608120	8号墳	玄室床面	鉄釘4片		
38	801608121	8号墳	玄室床面	鉄片8片		
39	801608122	8号墳	玄室床面	鉄片2片	61-29	21
40	801608123	8号墳	玄室床面	鉄釘1片		
41	801608124	8号墳	玄室床面	鉄釘1片		
42	801608125	8号墳	玄室床面	鉄釘1片	61-20	
43	801608126	8号墳	玄室床面	鉄釘1片	61-21	
44	801608127	8号墳	玄室床面	鉄釘1片	61-22	
45	801608128	8号墳	玄室床面	鉄釘1片		
46	801608129	8号墳	玄室床面	鉄釘1片	61-23	
47	801608130	8号墳	玄室床面	鉄釘2片		
48	801608131	8号墳	玄室床面	鉄釘1片	61-24	
49	801608132	8号墳	玄室床面	鉄滓1		
50	801608133	8号墳	玄室床面	鉄滓2		
51	801608134	8号墳	玄室床面	鉄滓1		
52	801609101	9号墳	玄室敷石下	鉄釘1片	61-25	
53	801609102	9号墳	玄室敷石下	鉄釘1片		
54	801609103	9号墳	羨道閉塞石	鉄釘1片	61-26	
55	801609104	9号墳	玄室床面	鉄滓1		
56	801609105	9号墳	表採	鉄滓1		
57	801612101	12号墳	玄室床面	鉄片1片		
58	801612102	12号墳	玄室床面	鉄滓1		
59	801615101	15号墳	墓道黒色土	鉄片1片		
60	801601101	1号墳	四区攪乱	鉄片1片	61-30	21
61	801606101	6号墳		金環	61-33	21
62	801603101	3号墳		寛永通寶	62-1	21

第五章　調査のまとめ

三郎丸古墳群は分布地図番号0347の三郎丸古墳群Ｂ群である。三郎丸古墳群にはＡ群からＤ群まであり、その数28基で構成される。その内の19基が三郎丸古墳群Ｂ群で今回調査対象とした範囲にある。三郎丸古墳群は１～３基を一つの単位とする７群19基で構成されている（第１号墳と第13号墳は単独)。その中で５・10・18・19号墳は破壊され遺存していなかった。現状は７群15基で、第16・17号墳の２基は公園の中に組み込まれ保存することが明かとなったため調査対象から除外し、13基を調査対象とした。破壊された５・10・18・19号墳の号数はそのままとし、その位置を付図に記した。

13基の内、天井石まで遺存していたのは３・８号墳の２基だけで他は、調査前の破壊及び調査直前の破壊によって遺存状態がかなり悪く、特に６・７号墳に関しては調査直前に破壊されていた。

古墳の築造は尾根上の斜面に形成されているが、石室の開口は南の方向を主とする。しかしながら11・12号墳だけは東に開口している。これは立地によるもので、傾斜面が東に落ちるために生じたものと考察できる。

下記に調査を行った13基の形態・法量を記した。

Tab.3　三郎丸古墳群形態・法量等一覧

号墳	墳丘の大きさ	周溝の形態	周溝を含む大きさ	形態	石室の大きさ		形態	羨道部の大きさ	全体の長さ	石室と羨道の比	石組	閉塞施設
					長軸×短軸	面積		長さ×幅				
1	6ｍ	馬蹄形	8ｍ	円墳	2.25×2.05m	4.61㎡	正方形	—	—	—	—	—
2	6ｍ	馬蹄形	7.5m	円墳	2.2×1.5m	3.3㎡	菱形	1.4×0.82m	3.6	1:0.64	重箱積	無
3	10m	馬蹄形	15m	円墳	2.7×2.35m	6.34㎡	長方形	2.7×1.15m	5.4	1:1	煉瓦積	有
4	7.2m	馬蹄形	12m	円墳	1.55×1.64m	2.55㎡	正方形	1.73×0.98m	3.28	1:1.16	煉瓦積	有
6	9ｍ	馬蹄形	11.5m	円墳	1.8×1.88m	3.28㎡	正方形	3.53×1.1m	5.33	1:1.95	煉瓦積	有
7	7.5m	馬蹄形	12m	円墳	2.0×2.0m	4.0㎡	正方形	2.72×0.9m	4.72	1:1.36	重箱積	—
8	9ｍ	馬蹄形	12m	円墳	2.7×2.35m	6.34㎡	長方形	2.9×1.0m	5.6	1:1.08	煉瓦積	有
9	6.6m	馬蹄形	9.6m	円墳	2.15×2.0m	4.3㎡	正方形	2.1×0.8m	4.25	1:1	煉瓦積	有
11	6.6m	全周	9ｍ	円墳	1.7×1.8m	3.06㎡	正方形	1.7×0.7m	3.4	1:1	重箱積	有
12	7.2m	全周	7.5m	円墳	1.8×1.8m	3.24㎡	正方形	1.7×0.7m	3.5	1:1	重箱積	有
13	9ｍ	全周	10.5m	円墳	1.8×1.75m	3.24㎡	片袖正方形	2.5×1.0m	4.3	1:1.39	煉瓦積	有
14	7.5m	馬蹄形	12m	円墳	2.2×2.0m	4.4㎡	不整方形	2.5×0.8m	4.7	1:1.13	煉瓦積	有
15	8.1m	馬蹄形	9.6m	円墳	2.2×2.15m	4.73㎡	正方形	3.6×0.9m	5.8	1:1.64	煉瓦積	有

この一覧表より最大の古墳は第３・８号墳であり、最小は第１・２号墳である。石室の形状は正方形が８基と主流で、長方形が２基、片袖が１基、菱形が１基、不整方形が１基となっている。玄室面積が最大のものは第３・８号墳で、最小は第11号墳である。石組は第２・７・11・12号墳が重箱積で、他は煉瓦積である。

出土した土器から第１号墳は７・８世紀と13～14世紀、第２号墳は７世紀と13～14世紀、第３号墳は７・８世紀と13～14世紀、第４号墳は７世紀と13～14世紀、第６号墳は６・７世紀と13～14世紀、第７号墳は７世紀後半から８世紀、第８号墳６～８世紀、第９号墳は７世紀、第11号墳は不明、第12号墳から第15号墳は７世紀の範疇に納まる。

この結果、追葬が行われた古墳は第１・３・６・８号墳の４基であるが、ただ13～14世紀にかけて石室内外に青磁・白磁の出土が見られこれを追葬の遺物とするか、祭祀の遺物とするかによって追葬の回数が異なる。

出土遺物から見れば第６・８号墳が最も古く６世紀代に築造され、他は７世紀に築造されている。ただ攪乱が著しいため出土遺物では一概には判断出来ない。古墳の形態等から第３・６・８号墳が６世紀、他は７世紀に築造され、その中でも第11～13号墳が最も新しい時期と考えられる。

写 真 図 版

1. 1号墳調査前遠景（南）　写真番号(147)

2. 1号墳調査前近景（南西）　写真番号(145)

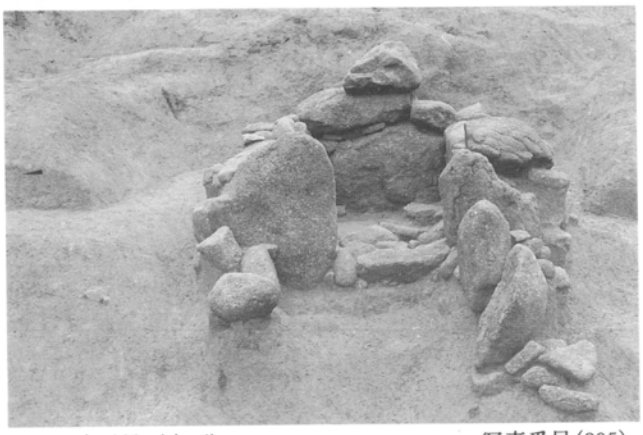
3. 地山整形と石室（南西）　写真番号(277)

4. 地山整形と石室（南東）　写真番号(281)

1. 2号墳調査前近景（東）　写真番号(627)

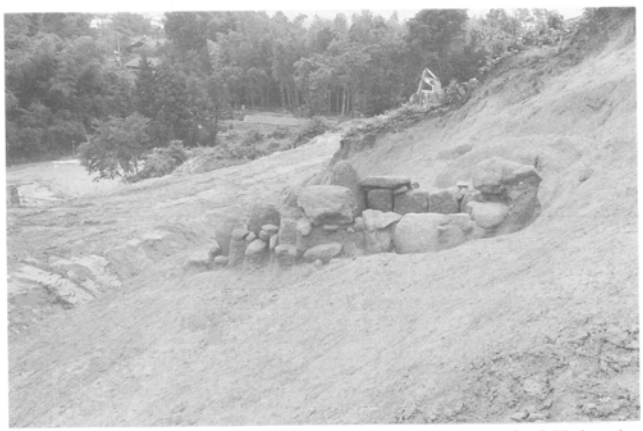
2. 調査前近景（北）　写真番号(620)

3. 墳丘と石室（南西）　写真番号(283)



4. 石室近景（南西）　写真番号(295)

5. 墳丘と石室近景（南西）　写真番号(284)

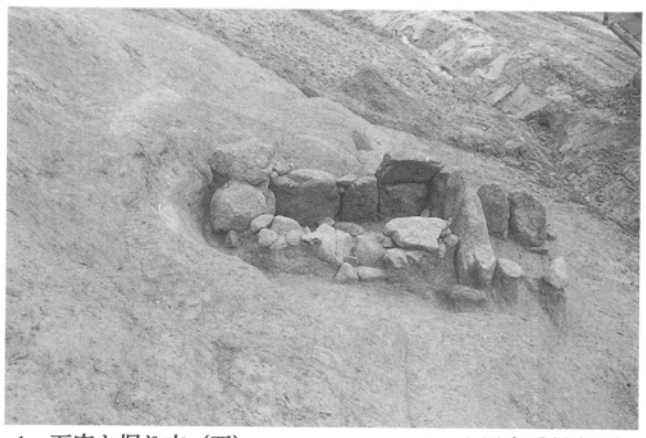


6. 地山整形と石室（東）　写真番号(301)

7. 地山整形と石室（北）　写真番号(297)

8. 羨道閉塞石（南西）　写真番号(285)

2号墳の調査



1. 石室と掘り方（西）　写真番号(300)

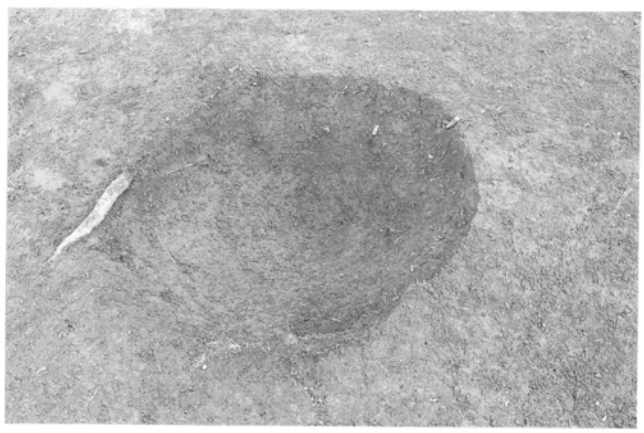
2. 石室と掘り方（東）　写真番号(302)

3. 石室西壁（東）　写真番号(299)

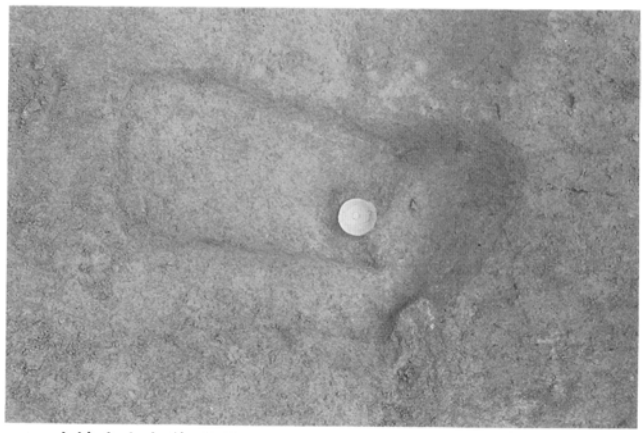
4. 石室東壁（西）　写真番号(291)

5. 遺物出土状態（西）　写真番号(290)

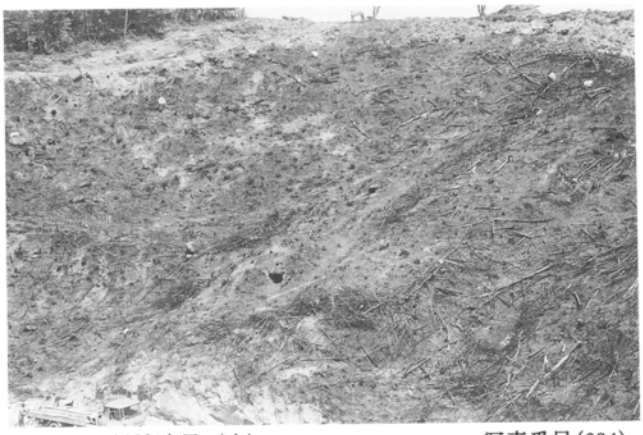
6. 土坑（東）　写真番号(155)



7. 土坑状遺構（東）　写真番号(22)



8. 土坑出土白磁（西）　写真番号(294)



1. 3・4号墳遠景（南）　写真番号(624)

2. 3・4号墳近景（北）　写真番号(619)

3. 3号墳調査前近景（南）　写真番号(621)

4. 3・4号墳墳丘遠景（西）　写真番号(357)

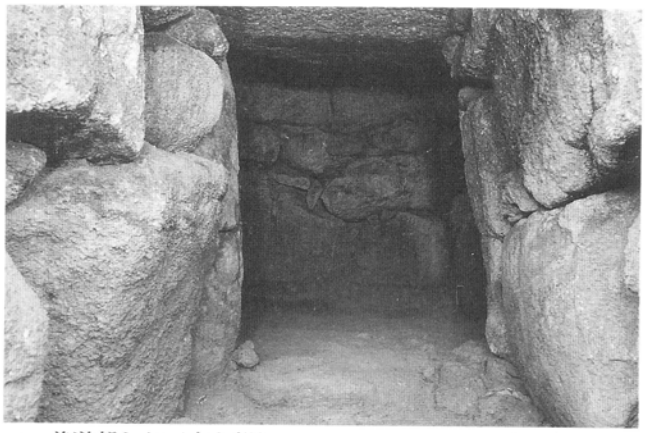
5. 3号墳墳丘遠景（北東）　写真番号(312)

6. 地山整形と石室全景（南）　写真番号(361)

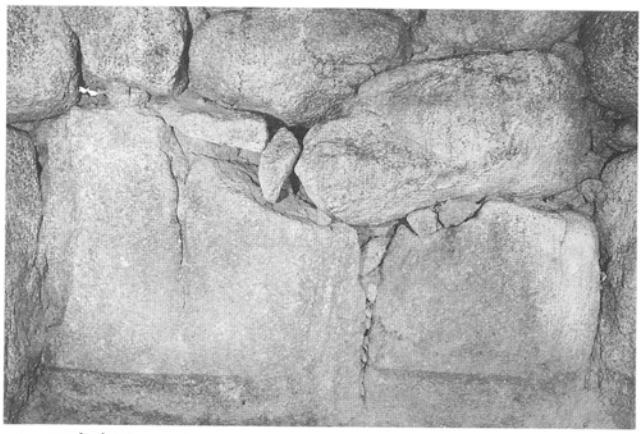
7. 地山整形と石室全景（西）　写真番号(362)

8. 石室俯瞰（北）　写真番号(364)

3号墳の調査



1. 羨道部から石室を望む　　写真番号(320)

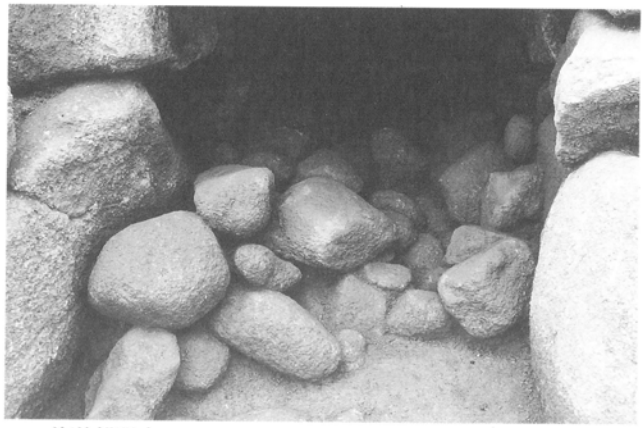


2. 石室奥壁　　写真番号(345)

3. 奥壁と右側辺部　　写真番号(322)

4. 右側辺部　　写真番号(311)

5. 天井石　　写真番号(333)



6. 羨道部閉塞石　　写真番号(306)

7. 奥壁細部　　写真番号(346)

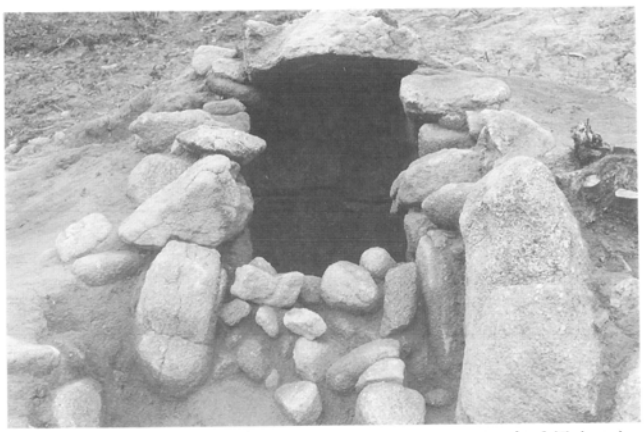
8. 右側辺部石組状態　　写真番号(347)

1. ４号墳調査前近景（南）　写真番号(623)

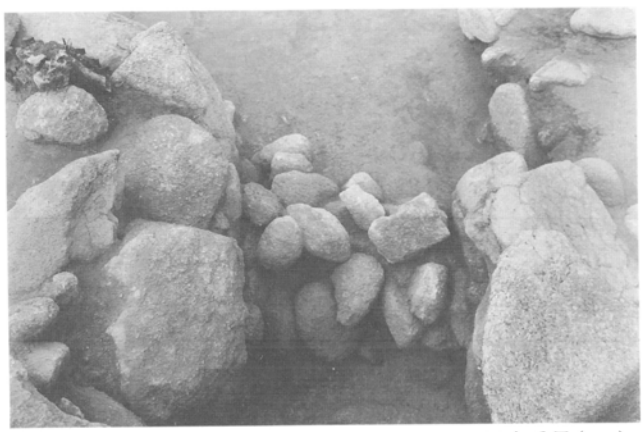
2. ４号墳全景（南）　写真番号(377)

3. ４号墳全景（西）　写真番号(372)

4. 石室奥壁　写真番号(368)

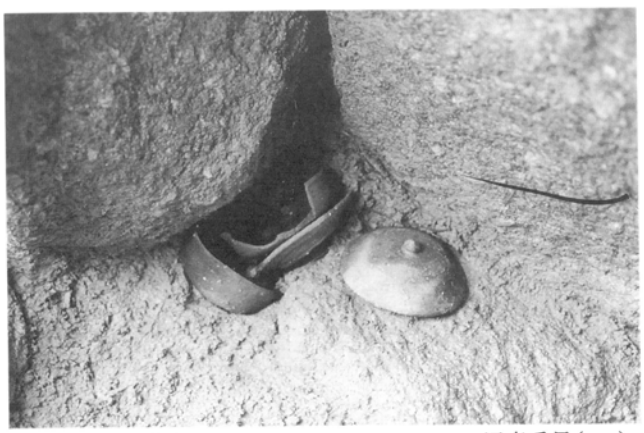


5. 羨道閉塞施設（南）　写真番号(385)



6. 羨道閉塞施設　写真番号(383)

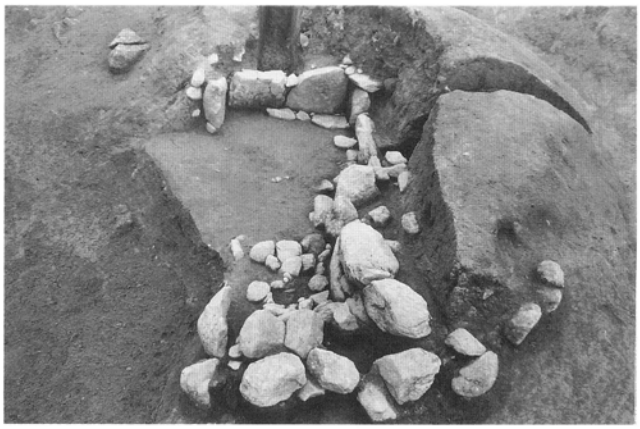
7. 羨道左側辺部と閉塞施設（東）　写真番号(387)



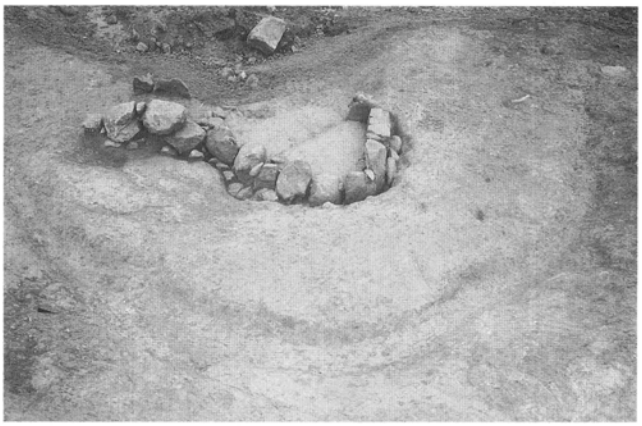
8. 遺物出土状態　写真番号(394)

４号墳の調査

1. 6号墳全景（東）　写真番号(396)



2. 墳丘近景（東）　写真番号(397)

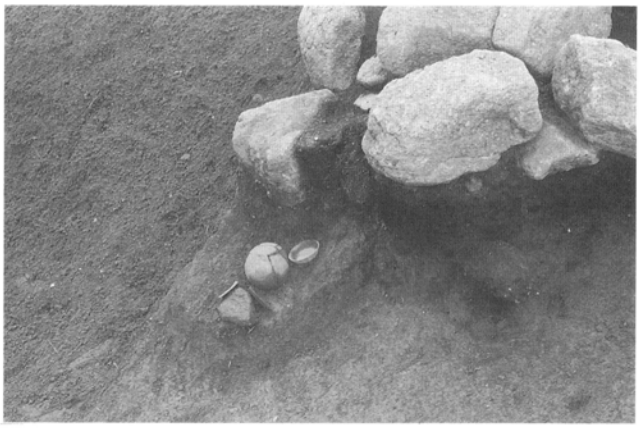


3. 6号墳掘り方と石室全景（北）　写真番号(413)

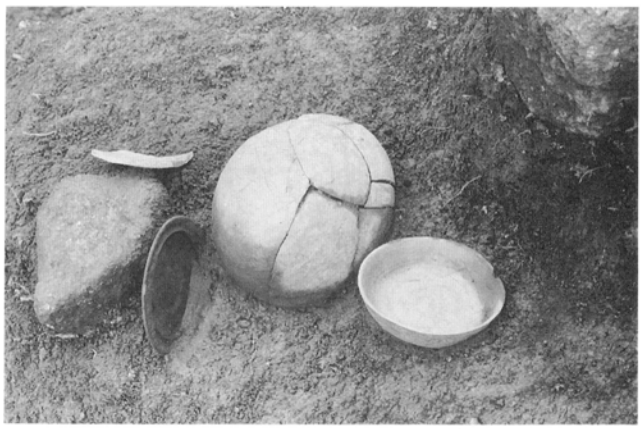
4. 石室全景（北）　写真番号(422)

5. 右側辺部腰石（南）　写真番号(433)

6. 奥壁腰石（東）　写真番号(432)



7. 遺物出土状態　写真番号(398)



8. 遺物出土近景　写真番号(409)

6号墳の調査

1. 7号墳調査前全景（北）　写真番号(125)

2. 6・7号墳全景（東）　写真番号(437)

3. 7号墳全景（東）　写真番号(420)

4. 石室全景（北）　写真番号(442)

5. 石室と土坑（南）　写真番号(444)

6. 石室と掘り方（南）　写真番号(440)

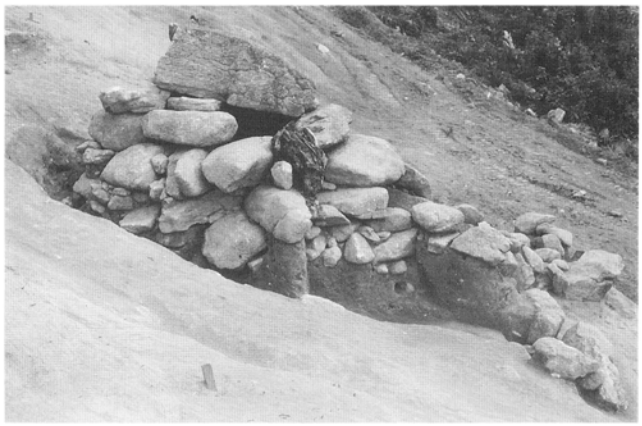
7. 8号墳調査前遠景（南）　写真番号(133)

8. 調査前近景（南）　写真番号(135)

6・7号墳の調査

1. 8・9号墳遠景（南）　写真番号(484)

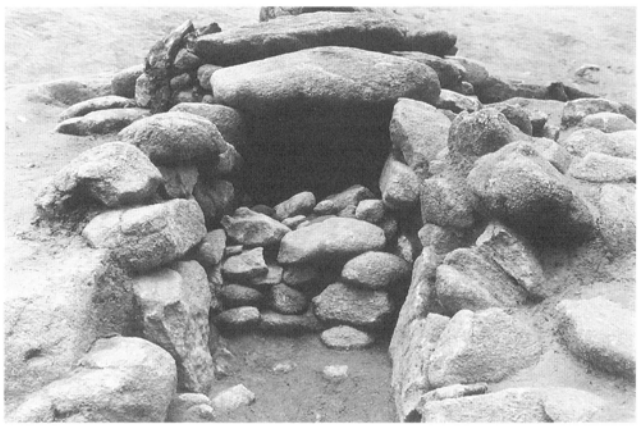
2. 8号墳石室俯瞰（北）　写真番号(149)



3. 石室俯瞰（西）　写真番号(226)

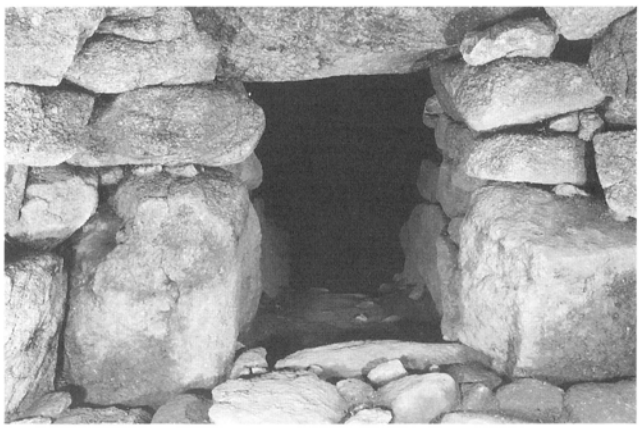
4. 地山整形と石室俯瞰（東）　写真番号(195)

5. 墳丘と石室全景（南）　写真番号(168)



6. 石室全景（南）　写真番号(774)

7. 墳丘と石室全景（南）　写真番号(459)

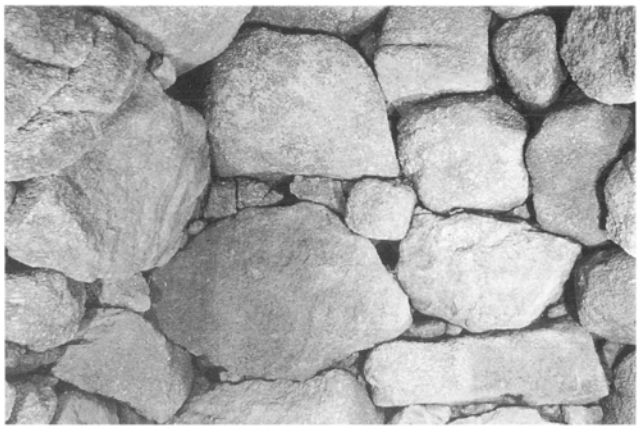


8. 石室内部（奥壁から）　写真番号(191)

8号墳の調査

1. 石室内部（奥壁）　写真番号(81)

2. 石室内部（右側辺部）　写真番号(27)



3. 石室内部（奥壁上部）　写真番号(82)

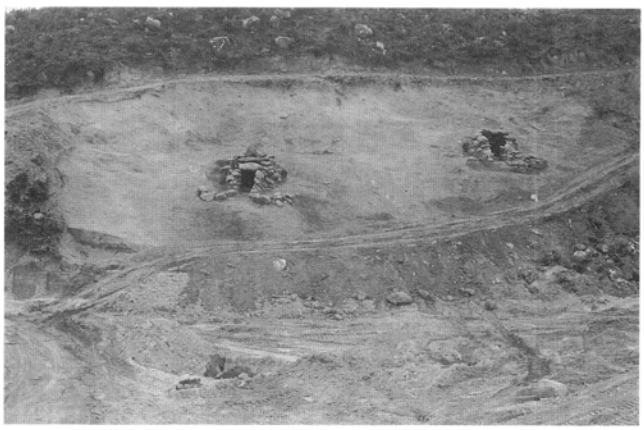
4. 遺物出土状態　写真番号(475)

5. 遺物出土状態　写真番号(465)

6. 遺物出土状態　写真番号(468)

7. 遺物出土状態　写真番号(474)

8. 墳丘と土坑（北）　写真番号(462)



1. 8・9号墳遠景（南）　写真番号(217)

2. 8・9号墳遠景（東）　写真番号(193)

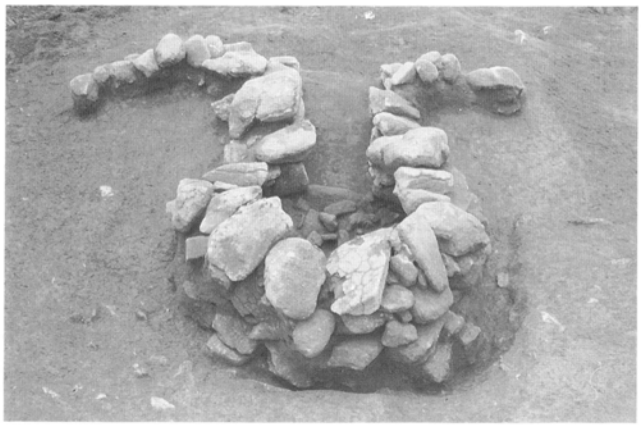
3. 9号墳全景（南）　写真番号(491)

4. 9号墳近景（南）　写真番号(489)

5. 石室俯瞰（南）　写真番号(509)

6. 石室俯瞰（北）　写真番号(106)

7. 石室俯瞰（東）　写真番号(194)

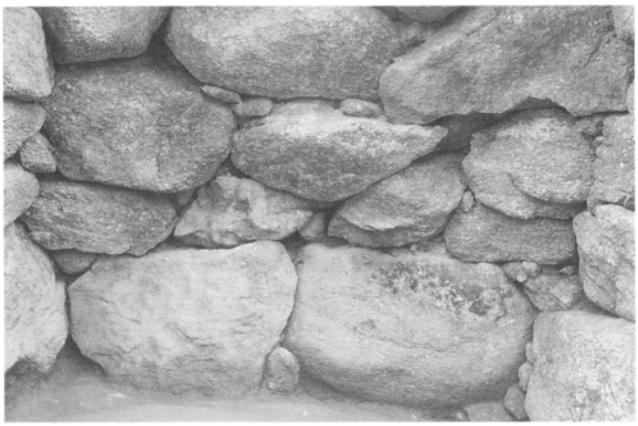


8. 石室俯瞰（北）　写真番号(107)

1. 石室内部（羨道部右側辺部）　写真番号(232)

2. 石室内部（右側辺部）　写真番号(500)

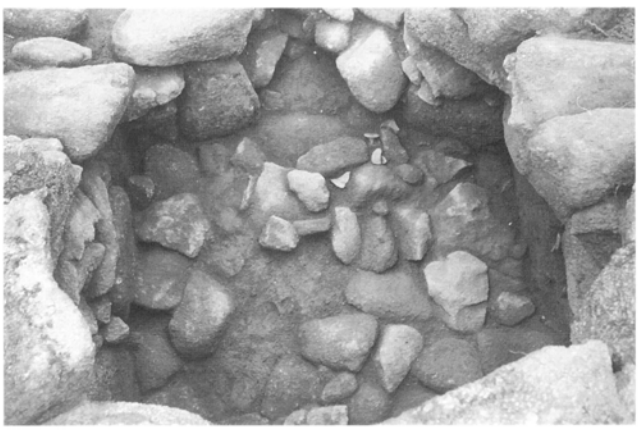
3. 石室内部（羨道部）　写真番号(236)



4. 石室内部（奥壁）　写真番号(198)

5. 羨道部と閉塞施設　写真番号(504)

6. 遺物出土状態　写真番号(494)



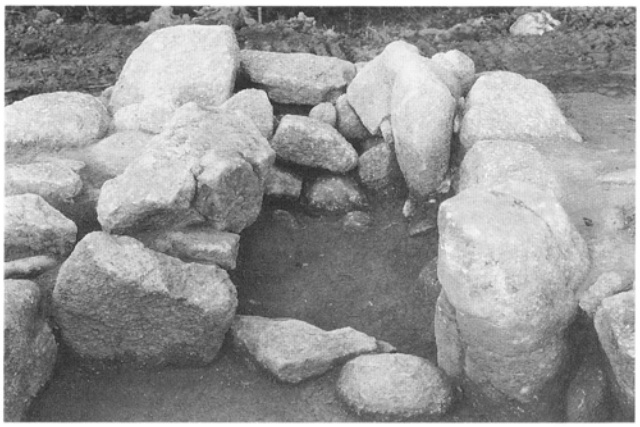
7. 遺物出土状態　写真番号(495)

8. 遺物出土状態　写真番号(503)

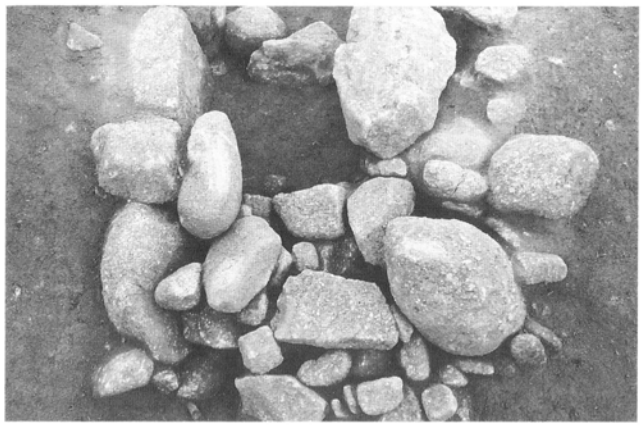
1. 11号墳調査前全景（南）　写真番号(142)

2. 11号墳全景（東）　写真番号(528)

3. 石室全景（東）　写真番号(542)

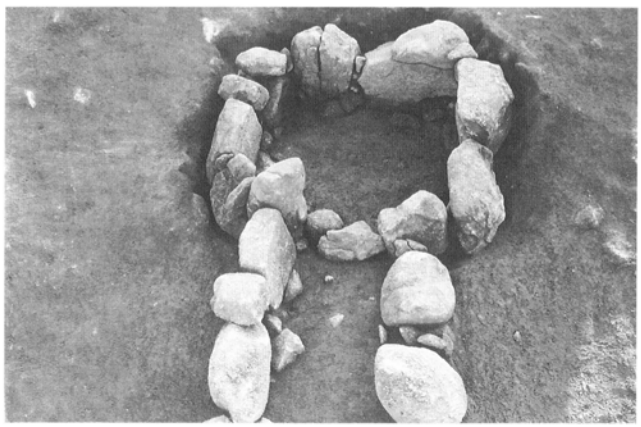


4. 羨道から石室を望む（西）　写真番号(527)



5. 閉塞施設（東）　写真番号(549)

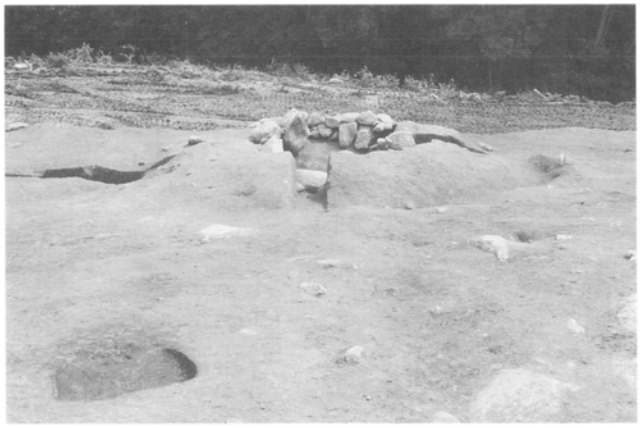
6. 石室内部（北）　写真番号(524)



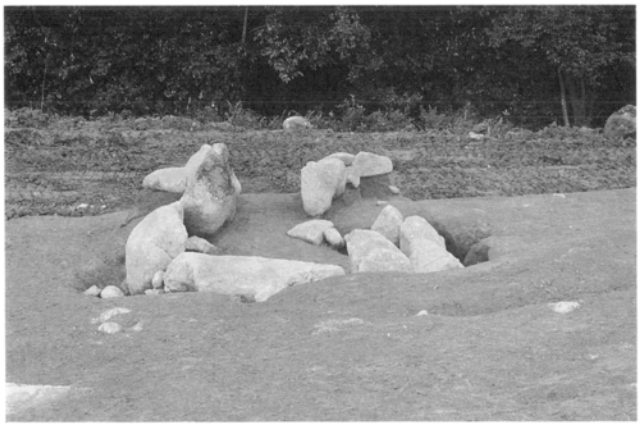
7. 石室掘り方と石室腰石（東）　写真番号(546)

8. 石室内部（奥壁）　写真番号(530)

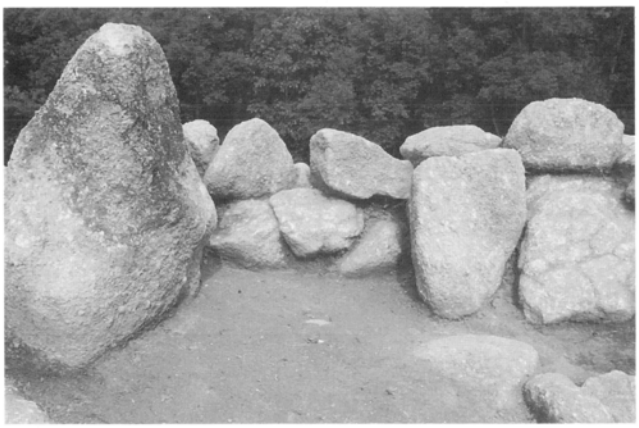
1. 12号墳全景（東）　写真番号(552)



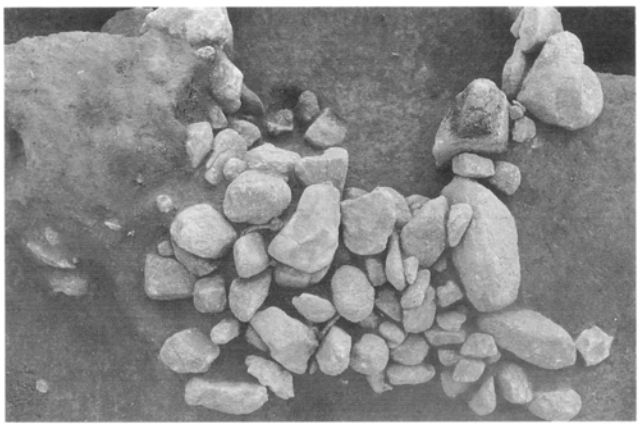
2. 12号墳全景（西）　写真番号(564)



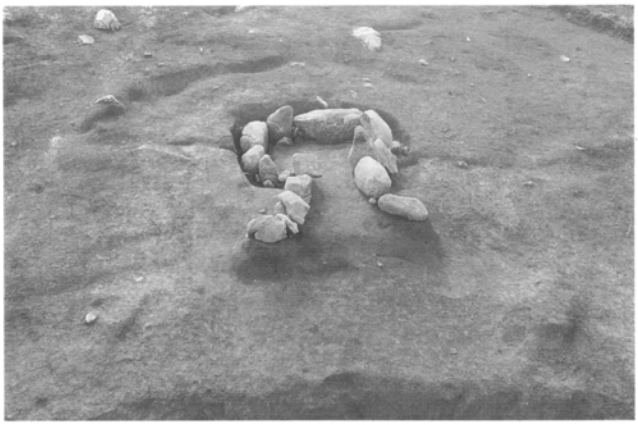
3. 石室掘り方（西）　写真番号(576)



4. 石室内部から閉塞施設を望む（西）　写真番号(554)

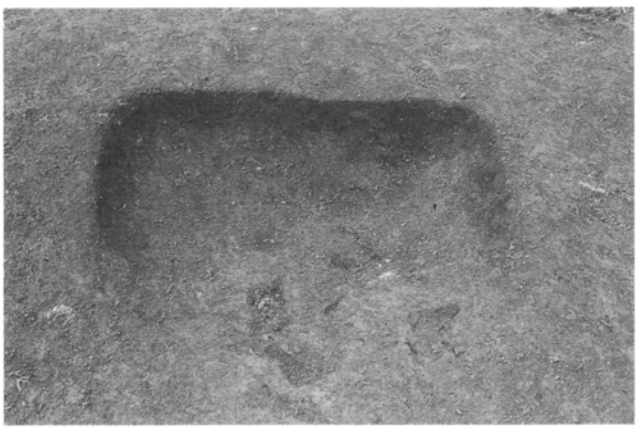


5. 閉塞施設（東）　写真番号(555)



6. 石室腰石と地山整形（東）　写真番号(585)

7. 石室掘り方と石室腰石（東）　写真番号(587)

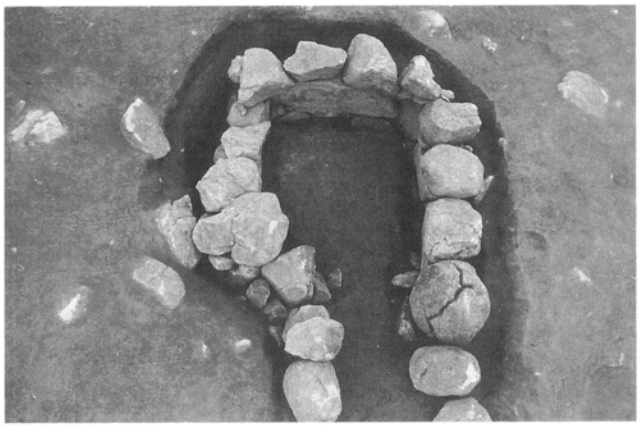


8. 土坑　写真番号(588)

1. 13号墳全景（南東）　写真番号(590)

2. 13号墳近景（南東）　写真番号(604)

3. 石室近景（南）　写真番号(594)

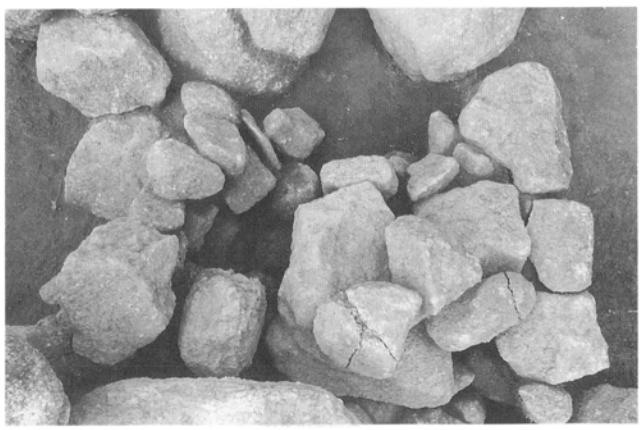


4. 石室掘り方と石室腰石（南東）　写真番号(93)

5. 石室と地山整形（南東）　写真番号(274)

6. 石室内部（奥壁）（南東）　写真番号(95)

7. 閉塞施設近景（南東）　写真番号(598)



8. 閉塞施設（上）　写真番号(600)

1. 14・15号墳遠景（東）　写真番号(154)

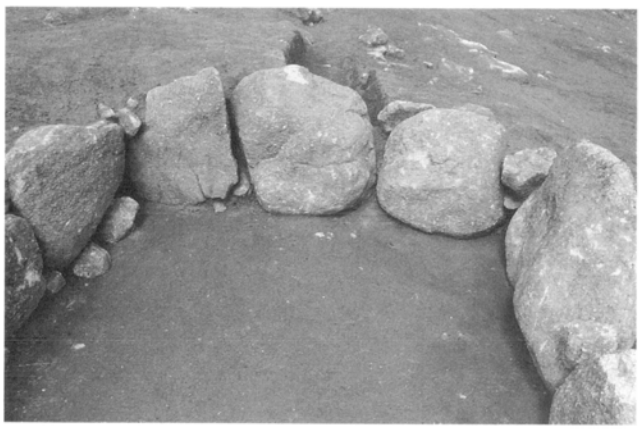
2. 14号墳全景（南）　写真番号(64)

3. 墳丘全景（南）　写真番号(64)

4. 閉塞施設（南）　写真番号(88)

5. 石室と地山整形（南）　写真番号(241)

6. 石室と地山整形（西）　写真番号(1)



7. 石室内部（奥壁）　写真番号(84)

8. 石室内部（左側辺部）　写真番号(7)

1. 15号墳遠景（東）　写真番号(45)

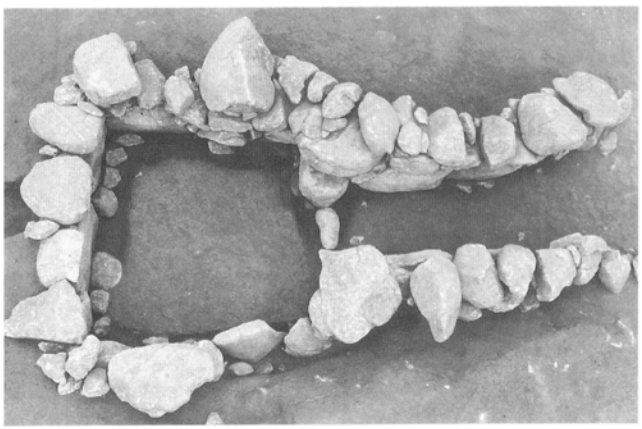
2. 15号墳全景（南）　写真番号(70)

3. 墳丘近景（南）　写真番号(71)

4. 閉塞施設（北）　写真番号(100)

5. 石室と地山整形全景（南）　写真番号(56)

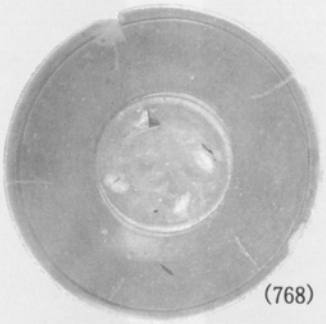
6. 石室と地山整形（西）　写真番号(54)

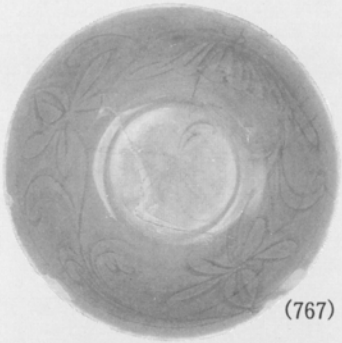


7. 石室俯瞰（上）　写真番号(61)

8. 石室内部（右側辺部）（西から）　写真番号(246)

(766)


(768)


(767)

01010(697) Fig. 7-11

01011(695) Fig. 7-12

01012(693) Fig. 7-10

01009(696) Fig. 7-9

01013(694) Fig. 7-8

01003(681) Fig. 7-5

01006(651) Fig. 7-3

02009(698) Fig. 12-9

02002(667) Fig. 12-3

02003(659) Fig. 12-4

03026(769) Fig. 18-26

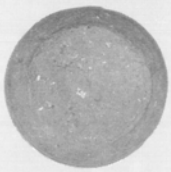
(690)

(709)

03005(763) Fig. 18-14

03022(683)
Fig. 18-23

03029(740) Fig. 17-1


03002(732) Fig. 18-8

03004(725) Fig. 18-9

03006(692) Fig. 18-5

03001(759) Fig. 18-21

04001(762) Fig. 22-6

04002(761) Fig. 22-7

04005(670) Fig. 22-3

(677)

(731)

04006(754)
Fig. 22-4

03007(760) Fig. 18-24

04004(730) Fig. 22-5

04007(687) Fig. 22-1

04008(755) Fig. 22-2

出土遺物（土器）

06010(753) Fig. 22-25

06013(715) Fig. 22-12

06023(721) Fig. 22-16

06040(746) Fig. 22-28

06002(663) Fig. 22-24

06034(674) Fig. 22-20

06008(665) Fig. 22-30

06050(699) Fig. 27-16

06006(668) Fig. 27-3

06027(757) Fig. 27-5

06031(712) Fig. 27-7

06048(701) Fig. 28-1

06004(662) Fig. 22-38

06003(666) Fig. 22-39

06005(758) Fig. 27-1

06049(770) Fig. 28-2

06032(708) Fig. 22-40

06029(722) Fig. 27-11

(680)

06055(657) Fig. 28-3

06007(723) Fig. 27-13

06001(734) Fig. 27-10

06054(737) Fig. 28-5

06052
(738)
Fig. 28-4

06053(739) Fig. 28-6

出土遺物（土器）

(727)

(728)

07003(717) Fig. 31-8

07014(654) Fig. 31-5

07009(714) Fig. 31-2

07015(713) Fig. 31-1

07004(656) Fig. 31-9

07013(710) Fig. 31-13

08001(704) Fig. 37-12

08004(689) Fig. 37-10

07001(703) Fig. 31-16

08016(707) Fig. 37-15

08002(688) Fig. 37-9

08003(706) Fig. 37-16

08011(686) Fig. 37-6

08007(675) Fig. 37-2

08006(671) Fig. 37-4

09001(705) Fig. 48-6

09005(752) Fig. 48-4

09002(650) Fig. 48-3

09003(655) Fig. 48-1

12005(711) Fig. 48-15

13002(685) Fig. 48-21

14014(716) Fig. 60-11

14015(652) Fig. 60-16

15001(676) Fig. 60-20

14009(653) Fig. 60-6

14007(718) Fig. 60-1

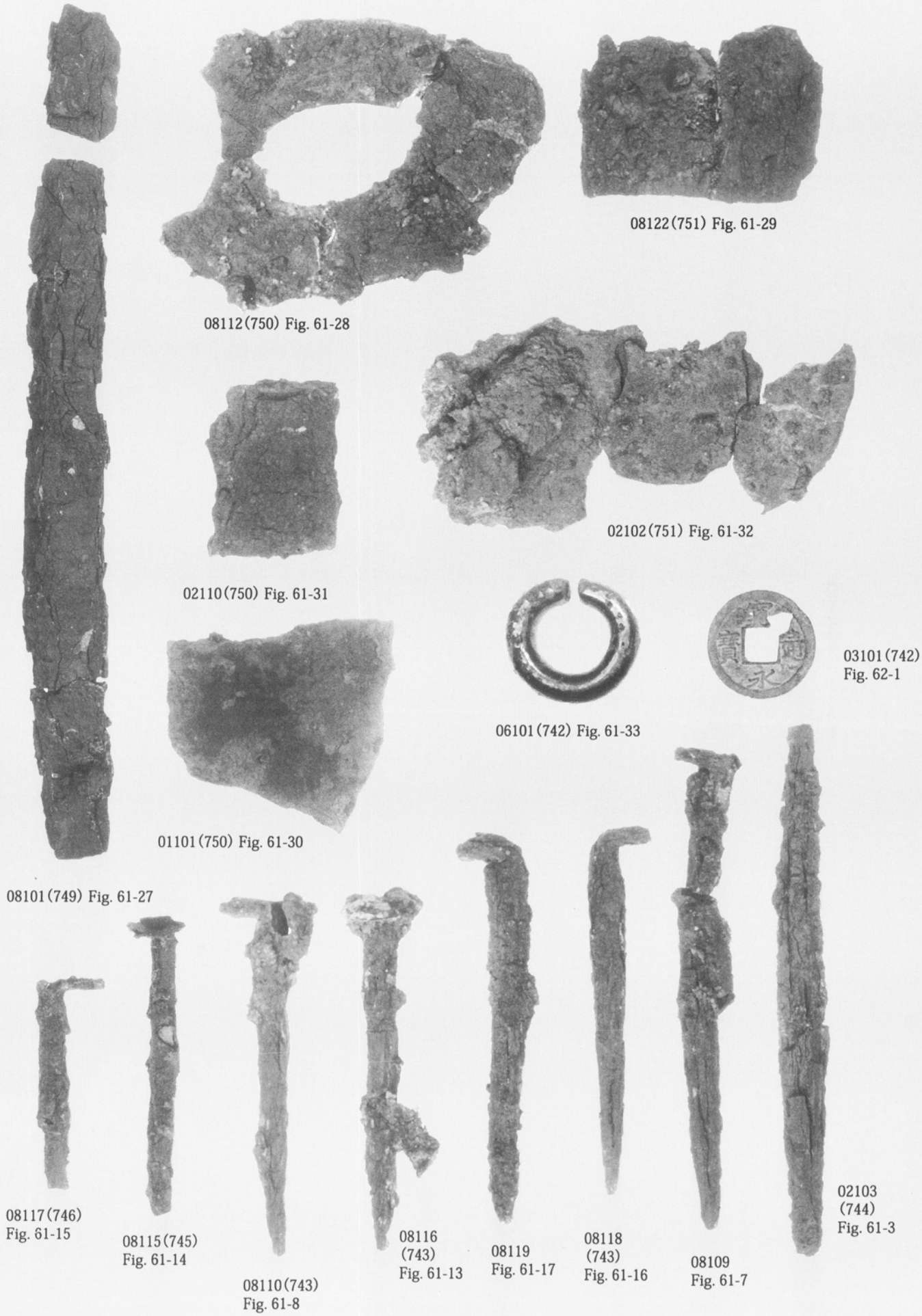
14013(649) Fig. 60-3

15006(660) Fig. 60-27

15010(724) Fig. 60-22

15008(726) Fig. 60-24

出土遺物（土器）


08122(751) Fig. 61-29
08112(750) Fig. 61-28
02102(751) Fig. 61-32
02110(750) Fig. 61-31
03101(742)
Fig. 62-1
06101(742) Fig. 61-33
01101(750) Fig. 61-30
08101(749) Fig. 61-27
08117(746)
Fig. 61-15
08115(745)
Fig. 61-14
08110(743)
Fig. 61-8
08116
(743)
Fig. 61-13
08119
Fig. 61-17
08118
(743)
Fig. 61-16
08109
Fig. 61-7
02103
(744)
Fig. 61-3

出土遺物（金属器）

福岡市早良区
三 郎 丸 古 墳 群

福岡市埋蔵文化財調査報告書第495集
発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8－1
1996年（平成8）年12月26日
印刷　㈱川島弘文社